

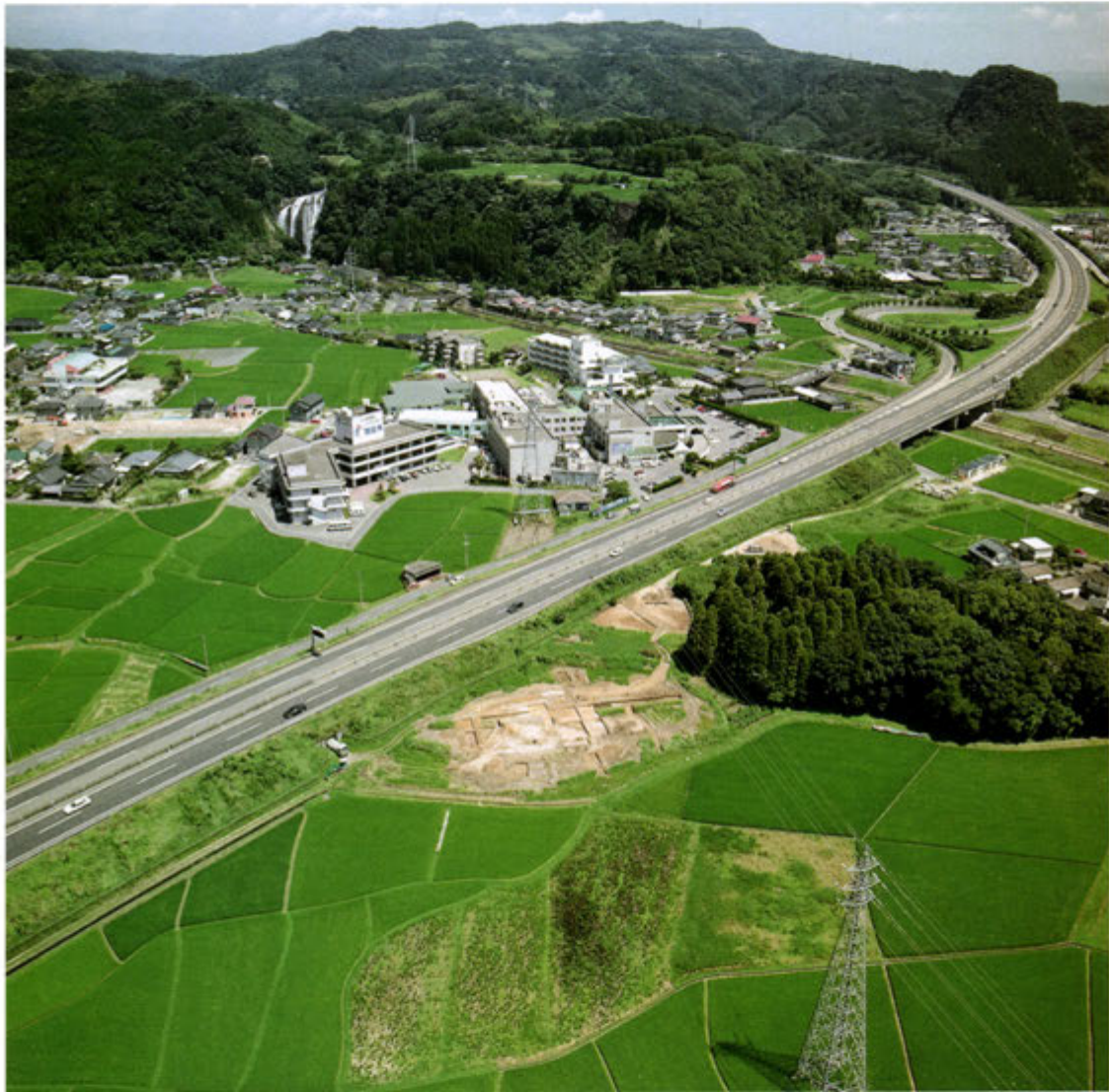
— 国道10号加治木バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —  
始良郡加治木町

たか い だ  
高 井 田 遺 跡



2002年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



高井田遺跡遠景（西から）



礫敷溝状遺構近景（古代）



礫集中遺構 1（中世～近世）

## 序 文

鹿児島県立埋蔵文化財センターでは、国道10号加治木バイパスの建設に伴い、平成11年度および平成12年度に高井田遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

高井田遺跡では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見されました。中でも掘立柱建物跡や礫敷溝状遺構、礫集中遺構などが検出された古代から中・近世にかけての調査成果は、須恵器や土師器、陶磁器などの出土遺物と合わせ、遺跡が立地する加治木地方の当時の様子を知る大きな手がかりとなりました。貴重な郷土の文化遺産として、今後、文化財の保護や学術研究のための資料として活用していただければ幸いです。

終わりに、調査にあたりご協力いただいた国土交通省九州建設局鹿児島国道工事事務所や関係者の方々ならびに地元の皆様に心から感謝いたします。

平成14年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たかいだ いせき							
書名	高井田遺跡							
副書名	国道10号加治木バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	35							
編著者名	前迫亮一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 Tel 0995-65-8787							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査起因
		市町村	遺跡番号					
たかいだ いせき 高井田遺跡	かごしまけんあいらぐん 鹿児島県始良郡 かじきちょうきだ 加治木町木田 4676番地	464414	52-80	31°44′	130°39′	19990705 ～ 19990827 ・ 20000508 ～ 20000728	3,500	国道10号 加治木バ イパス建 設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高井田遺跡	集落	縄文時代前～晩期 弥生時代 古墳時代 古代  中世 中世～近世 近世		掘立柱建物跡5棟 礫敷溝状遺構, 土坑  掘立柱建物跡1棟 礫集中遺構		市来式土器, 石鏃 弥生土器 成川式土器 土師器, 須恵器  土師器, 磁器 軽石加工品 陶磁器類		縄文時代遺物の多くは流堆積中からの出土である



鹿 児 島 湾  
( 錦 江 湾 )

第1図 高井田遺跡の位置 (★印)

## 例 言

- 1 本報告書は、平成11年度および12年度に鹿児島県教育委員会が建設省（現国土交通省）鹿児島国道工事事務所の受託事業として実施した国道10号加治木バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査の組織は、第I章「発掘調査の経過」の中に記した。
- 3 本書に用いたレベル数値は、建設省鹿児島国道工事事務所の作成した図面の数値に基づく。
- 4 本書に掲載した遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真図版の番号はそれぞれ一致する。
- 5 本書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示したスケールを参照されたい。
- 6 遺構・遺物の実測や製図は、主として前迫亮一（鹿児島県立埋蔵文化財センター，以下県埋文センターと記す）が行った。ただし，(株)エーティックに遺構実測図の一部，(株)文化財環境整備研究所に石器や陶磁器類の実測図・製図の一部をそれぞれ委託した。
- 7 遺物の拓本は小山君子・永田よしえ，復元は東志津子，図面レイアウトは岩爪美津子（いずれも県埋文センター）が主に行った。
- 8 本書に使用した写真図版のうち，現場での写真撮影を橋口勝嗣（県埋文センター）・前迫が行い，遺物撮影については鶴田静彦・横手浩二郎（ともに県埋文センター）が行った。また，現場での空中写真は(株)サポートシステムに依頼し，その一部を本書に掲載した。
- 9 出土した遺物は，報告書作成後，県埋文センターで保管し，活用する予定である。
- 10 遺物について，以下の方々から多くのご教示をいただいた。（順不同・敬称略）  
石器・胎土内鉾物～宮田栄二（県埋文センター），胎土内鉾物～成尾英仁（鹿児島県立博物館）  
古代・中世の遺物～池畑耕一・中村和美・三垣恵一・上床 真（ともに県埋文センター）  
陶磁器全般～関 一之（加治木町教育委員会）・下鶴 弘（始良町教育委員会）・橋口 亘（県埋文センター），  
焼物全般～四元 誠（陶芸家），新納家墓石～柚木利文・宮下健二郎（いずれも埋文友の会）
- 11 第IV章では本遺跡の歴史的な位置付けについて指導をいただいた永山修一氏（ラサール学園），松尾千歳氏（尚古集成館）にそれぞれ玉稿をいただいた。また上床真氏（県埋文センター）には，掘立柱建物の柱穴内埋納品についての論考をいただいた。
- 12 樹種同定については，(株)古環境研究所に依頼し，第IV章にその分析結果を掲載した。
- 13 遺物にみられる赤色塗彩については，大久保浩二氏（県埋文センター）が分析し，第IV章にその分析結果を掲載した。
- 14 英文要約は雨宮瑞生氏（南九州縄文研究会）によるものである。
- 15 本書の執筆・編集は前迫が行った。

# 目次

序文  
報告書抄録  
例言

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 確認調査の経緯	1
第2節 本調査の経緯	5
第3節 報告書作成事業の経緯	8
第4節 発掘調査および報告書作成事業従事者	8
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第Ⅲ章 発掘調査の概要	18
第1節 発掘調査の方法	18
第2節 層序	19
第3節 発掘調査の成果	23
1 縄文時代	23
(1) 土器・土製加工品	23
(2) 石器	33
2 弥生時代	45
3 古墳時代	46
4 古代	47
(1) 遺構	47
① 掘立柱建物跡	47
② 土坑	54
③ 溝状遺構	54
④ 磔敷溝状遺構	59
(2) 遺物	64
① 須恵器	64
② 土師器	78
③ 黒色土器	78
④ その他の遺物	83
5 中世～近世	84
(1) 遺構	84
① 掘立柱建物跡	84
② 磔集中遺構	86
(2) 遺物	98
① 土師器	98
② 滑石製品	98
③ 青磁	98
④ 染付	98
⑤ 陶器	101
⑥ その他の遺物	101
第4節 遺跡の残存状況	107
第Ⅳ章 研究・分析・同定	
1 高井田遺跡の古代における歴史的位置	永山修一 108
2 高井田遺跡の中世～近世における歴史的位置	松尾千歳 114
3 掘立柱建物の柱穴内埋納品に関する若干の考察	上床真 119
4 赤色塗彩資料の分析	125
5 高井田遺跡における樹種同定	(株)古環境研究所 128
出土遺物観察表	130
第Ⅴ章 発掘調査のまとめ	143
Summary	149
写真図版	151
あとがき	



## 挿図目次

第1図	高井田遺跡の位置	
第2図	確認調査トレンチ配置図	3
第3図	本調査範囲図	6
第4図	遺跡の位置及び周辺遺跡図	10
第5図	三代寺遺跡の主な遺構と遺物	12
第6図	千迫遺跡の主な遺構と遺物	13
第7図	千迫遺跡の主な遺物	14
第8図	山元窯跡の主な遺物	16
第9図	グリッド配置図	18
第10図	基本土層図	19
第11図	土層断面図(1)	20
第12図	土層断面図(2)	21
第13図	土層断面図(3)	22
第14図	縄文土器(1)	24
第15図	縄文土器(2)	25
第16図	縄文土器(3)	27
第17図	縄文土器(4)	28
第18図	縄文土器(5)	29
第19図	縄文土器(6)	31
第20図	縄文土器(7)	32
第21図	縄文土器(8)	34
第22図	第2トレンチ遺物出土状況図	35
第23図	石器(1)	36
第24図	石器(2)	37
第25図	石器(3)	38
第26図	石器(4)	39
第27図	石器(5)	40
第28図	石器(6)	41
第29図	石器(7)	42
第30図	縄文土器の出土状況図	43~44
第31図	縄文時代の石器ほかの出土状況図	43~44
第32図	弥生時代の土器	45
第33図	古墳時代の土器	46
第34図	古代の遺構配置図(1)	48
第35図	掘立柱建物跡1	50
第36図	掘立柱建物跡2	51
第37図	掘立柱建物跡3	52
第38図	掘立柱建物跡4	53
第39図	掘立柱建物跡5	53
第40図	土坑1	55
第41図	土坑2(上)・土坑3(下)	56
第42図	溝状遺構1~4	57
第43図	古代の遺構配置図(2)	58
第44図	古代の遺構内出土遺物	60
第45図	礫敷溝状遺構(1)	61~62
第46図	礫敷溝状遺構(2)	63
第47図	須恵器出土状況図	65
第48図	須恵器(1)	66
第49図	須恵器(2)	67
第50図	須恵器(3)	68
第51図	須恵器(4)	69
第52図	須恵器(5)	70
第53図	須恵器(6)	72
第54図	須恵器(7)	73
第55図	須恵器(8)	74
第56図	須恵器(9)	75
第57図	須恵器(10)	76
第58図	須恵器(11)	77
第59図	土師器出土状況図	79
第60図	土師器(1)	80
第61図	土師器(2)	81
第62図	黒色土器出土状況図	82
第63図	黒色土器ほか	83
第64図	掘立柱建物跡6	84
第65図	柱穴内出土の土師器	84
第66図	中世~近世の遺構配置図	85
第67図	礫集中遺構1	87~88
第68図	礫集中遺構2	89
第69図	礫集中遺構内出土遺物(1)	91
第70図	礫集中遺構内出土遺物(2)	92
第71図	礫集中遺構内出土遺物(3)	93
第72図	礫集中遺構内出土遺物(4)	94
第73図	礫集中遺構内出土遺物(5)	95
第74図	礫集中遺構内出土遺物(6)	96
第75図	礫集中遺構内出土遺物(7)	97

第76図	土師器・滑石製品	98	7	確認調査風景	157
第77図	青磁・染付	99	8	確認調査風景	158
第78図	染付	100	9	掘立柱建物跡検出状況	159
第79図	陶器	102	10	掘立柱建物跡検出状況ほか	160
第80図	陶器ほか	103	11	礫敷溝状遺構検出状況1	161
第81図	墓石塔身(近世)	104	12	礫敷溝状遺構検出状況2	162
第82図	墓石塔身拓影図	105	13	礫集中遺構2の上段部(左)と下段部(右)	163
第83図	遺物出土状況全体図	106	14	礫集中遺構1検出状況	164
第84図	遺跡残存状況図	107	15	春日神社境内の様子	165
第85図	高井田遺跡周辺の史跡配置図	115	16	長年寺墓地の古石塔群ほか	166
第86図	鹿児島市上町地区の史跡配置図	117	17	礫集中遺構実測風景ほか	167
第87図	仙巖園の曲水庭園	117	18	縄文土器1	168
第88図	柱穴内埋納品資料(1)	121	19	縄文土器2	169
第89図	柱穴内埋納品資料(2)	122	20	縄文土器3	170
第90図	X線分析によるスペクトル図(1)	125	21	石器1	171
第91図	X線分析によるスペクトル図(2)	126	22	石器2	172
第92図	『三国名勝図会』にみる春日神社	148	23	弥生土器・成川式土器	173
			24	礫集中遺構1内出土遺物	174
			25	土師器・黒色土器・陶器	175
			26	須恵器1	176
			27	須恵器2	177
			28	須恵器3	178
			29	須恵器4	179
			30	青磁・染付	180
			31	薩摩焼	181
			32	墓石塔身：「新納仲右衛門」銘	182

## 表目次

第1表	周辺遺跡及び史跡地名表	10
第2～14表	出土遺物観察表(1)～(13)	130～142

## 図版目次

巻頭図版1	高井田遺跡遠景	
2	礫敷溝状遺構近景ほか	
SEM写真	SEMによる観察像	126
分析写真1	木材の顕微鏡写真	129
2	高井田遺跡出土の木材	129
資料写真	帖佐人形(狛犬)	148
図版1	礫集中遺構ほか	151
2	高井田遺跡遠景ほか	152
3	礫敷溝状遺構近景ほか	153
4	土師器出土状況ほか	154
5	高井田遺跡遠景	155
6	確認調査風景	156

# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 確認調査の経緯

### 1 確認調査に至るまでの経過

建設省鹿児島国道工事事務所は、一般国道10号加治木バイパスの建設を計画し、事業区内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課）に照会した。これを受け県文化課は、平成3年6月に事業区内の分布調査を実施した。その結果、加治木町高井田において遺物の散布が認められたため、工事着手前に遺跡の性格を把握するための確認調査を実施することとなった。

確認調査は鹿児島県教育委員会が建設省鹿児島国道工事事務所からの受託事業として実施した。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが責任者となり、平成11年7月5日から同年8月27日まで（実働26日間）実施した。

調査対象面積は約6,000m<sup>2</sup>（うち用地買収済面積が約3,400m<sup>2</sup>）で、1～11まで設定したトレンチの調査総面積は約660m<sup>2</sup>、調査対象面積に占める割合は約11%であった。

### 2 確認調査の組織

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所
調査主体者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 吉 永 和 人
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 黒 木 友 幸
	〃 調 査 課 長 戸 崎 勝 洋
	〃 課長補佐兼第一調査係長 新 東 晃 一
	〃 第三調査係長 青 崎 和 憲
	〃 総 務 係 長 有 村 貢
	〃 主 査 今 村 孝一郎
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 前 迫 亮 一
	〃 文化財主事 森 田 郁 朗

### 3 確認調査の経過

確認調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

平成11年 7月5日（月）～7月9日（金）

- ・調査開始。発掘機材搬入。遺跡周辺的环境整備，安全対策。
- ・1～4トレンチ設定および掘り下げ。1，2トレンチで縄文土器，3，4トレンチで古代～近世の遺物出土。一部遺物取り上げ。

7月12日（月）～7月16日（金）

- ・ 1トレンチ終了。2～4トレンチ掘り下げ。5, 6トレンチ設定および掘り下げ。
- ・ 3トレンチで礫群検出（時代, 性格共に不明）。2, 3トレンチ遺物取り上げ。

7月21日（水）～7月27日（火）

- ・ 2～6トレンチ掘り下げ。7トレンチ設定および掘り下げ。2, 3トレンチ遺物取り上げ。
- ・ 月末は雨天が多く調査停滞。調査区およびその周辺の雨水の流路チェック実施。

8月2日（月）～8月6日（金）

- ・ 2～4, 7トレンチ掘り下げ。4トレンチ遺構（ピット）検出。
- ・ 雨天が多く調査難航。雨水の流路対策に追われる。

8月9日（月）～8月12日（木）

- ・ 2～7トレンチ掘り下げおよび遺物掘り下げ。4トレンチ遺構検出および写真撮影。

8月16日（月）～8月20日（金）

- ・ 3, 6, 7, 9トレンチ掘り下げ。遺物取り上げ。遺構検出。
- ・ 雨天が多く調査難航。雨水の流路対策に追われる。

8月23日（月）～8月27日（金）

- ・ 2～9トレンチ掘り下げ。遺物取り上げ。遺構検出。終了後埋め戻し。
- ・ 10, 11トレンチ設定。掘り下げ。遺物取り上げ。終了後埋め戻し。
- ・ トレンチ配置図作成。空中写真撮影実施。

#### 4 確認調査の概要と成果

発掘調査は、用地買収状況の関係で調査可能区が3分割されていたため、東側から第1, 第2, 第3地点と呼称して実施した。まず、それぞれの地点のトレンチ調査を実施し、遺物・遺構の確認されたトレンチを可能な限り拡張していくという方法で実施した。その結果、すべてのトレンチで遺物を確認することができた（第2図）。

- ・ 第1地点 第1トレンチ（76m<sup>2</sup>）……………縄文土器, 石器  
第2トレンチ（126m<sup>2</sup>）……………縄文土器, 石器

この地点は、調査着手直前まで3軒の住宅が建っていた地域で、表層においてはそれに関する痕跡がみられた。現地表下約40cmから砂礫層がみられ、厚さ約3mに達するところもあった。この層からは縄文時代前期～晩期の遺物が出土した。遺物量は多かったが、その多くがローリングを受け、摩耗がかなり激しい状態であった。高井田の台地自体が流堆積をベースとしていると考えられることから、遺跡の本体は標高の高い調査区北側に所在していたといえよう。

- ・ 第2地点 第3トレンチ（114m<sup>2</sup>）……………礫集中区, 土師器, 須恵器, 陶磁器  
第4トレンチ（113m<sup>2</sup>）……………ピット, 土師器, 陶磁器

調査区の中で最も高所（標高約11m）に位置し、11世紀初頭に創建されたと伝えられている春日神社の裏地にあたっている。ここでは、柱穴状ピットや溝状遺構、礫集中遺構などが古代から近世の遺物とともに発見された。



第2図 確認調査トレンチ配置図

- ・第3地点 第5トレンチ (56m<sup>2</sup>) ……土師器, 須恵器, 陶磁器
- 第6トレンチ (24m<sup>2</sup>) ……ピット, 土師器, 須恵器, 陶磁器
- 第7トレンチ (88m<sup>2</sup>) ……ピット, 土師器, 須恵器, 陶磁器
- 第8トレンチ (8m<sup>2</sup>) ……陶磁器
- 第9トレンチ (33m<sup>2</sup>) ……弥生土器, 土師器, 陶磁器
- 第10トレンチ (10m<sup>2</sup>) ……土師器, 須恵器
- 第11トレンチ (12m<sup>2</sup>) ……陶磁器

この地点での調査は、調査着手直前まで水田であったことから、ひとたび雨が降るとまさに田んぼ状態となる悪条件との闘いであった。

すべてのトレンチで古代～近世にかけての遺物が出土。また、ピットもいくつか検出された。第1地点と同様に、遺物の多くがローリングを受けていることから、流堆積中の遺物と考えられるが、これらとピットがどのような関係になるのか確認調査の段階では把握できなかった。さらなる調査を必要とする地点となった。

前述のように、未買収地区もかなりあったため、調査対象区全域に対しての確認調査は実施できなかった。設置した全トレンチで遺物が出土したことから、再度調査対象区全域を視野に入れ本調査（一部、確認調査）が必要であるものと判断した。ただし、いわゆる文化層としての遺物包含層が、どれほど存在するかについては十分に把握できなかったので、本調査ではそのあたりの見極めが大きなポイントであることを確認した。



確認調査現地スタッフ

## 第2節 本調査の経緯

### 1 本調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会では、確認調査の結果をふまえ建設省鹿児島国道工事事務所と協議を行ない、工事着手前に本調査（一部確認調査も含む）を実施することとなった。

本調査は、鹿児島県教育委員会が調査主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成12年5月8日から同年7月28日まで実施した。5,375m<sup>2</sup>の調査対象面積に対し、発掘調査の総面積は約3,500m<sup>2</sup>であった（第3図）。

### 2 本調査の組織

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	第三調査係長	牛ノ濱修
	〃	総務係長	有村貢
	〃	主査	今村孝一郎
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	前迫亮一
	〃	文化財研究員	橋口勝嗣

### 3 本調査の経過

本調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

平成12年 5月8日（月）～5月12日（金）

- ・調査開始。発掘機材搬入。遺跡周辺の環境整備，安全対策。春日神社見学および参拝。
- ・グリッド設定。第3地点の倒木処理。第3地点の表土剥ぎ，包含層掘り下げ，遺物取り上げ

5月15日（月）～5月19日（金）

- ・第2地点の倒木処理。産業廃棄物として搬出。礫集中区の検出。
- ・第3地点の掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。

5月22日（月）～5月26日（金）

- ・A～D-11～16区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。

6月1日（木）～6月9日（金）

- ・A～D-8～16区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。
- ・第2地点の礫集中区検出。その他の遺構検出。第3地点の遺構検出。等高線図作成。



第3図 本調査範囲図



6月12日（月）～6月16日（金）

- ・ A～D-5～15区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。
- ・ 第2地点の礫集中区や溝状遺構の検出。第3地点の遺構検出，掘り下げ，実測図作成。

6月19日（月）～6月23日（金）

- ・ A～D-8～13区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。遺構配置図作成。

6月26日（月）～7月7日（金）

- ・ A～D-4～13区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。
- ・ 第2地点の礫集中区，溝状遺構，自然流路跡，焼土坑等の検出。墨書や近世墓石出土。
- ・ 第2地点の礫集中区および礫敷溝状遺構の実測図作成委託開始（6日～）。

7月10日（月）～7月14日（金）

- ・ A～D-7～15区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。遺構実測図作成。
- ・ 第2地点の礫集中区および礫敷溝状遺構の空中写真撮影。掘立柱建物跡やピット検出。
- ・ 第3地点の等高線図作成。第3地点終了。

7月17日（月）～7月21日（金）

- ・ A～D-7～12区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。遺構実測図作成。

7月24日（月）～7月28日（金）

- ・ A～C-8～12区掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ。遺構実測図作成。
- ・ 第2地点の遺構配置図作成。等高線図作成。空中写真撮影。調査終了。



遺構からはずされた礫の山（約2万4千個）

### 第3節 報告書作成事業の経緯

#### 1 報告書作成事業の経過

高井田遺跡の発掘調査報告書作成事業に伴う整理作業については、平成11年度および12年度の発掘調査中においても遺物の水洗・注記、図面整理等の作業を並行して行なっていたが、本格的な作業は平成13年度に実施した。整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

#### 2 報告書作成事業の組織

事業主体者 国土交通省鹿児島国道工事事務所

報告書作成作業主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

報告書作成作業責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 井上明文

報告書作成作業事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 黒木友幸

〃 調査課長 新東晃一

〃 調査課長補佐 立神次郎

〃 第三調査係長 牛ノ濱修

〃 総務係長 前田昭信

〃 主 査 今村孝一郎

報告書作成作業担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 前迫亮一

### 第4節 発掘調査および報告書作成事業従事者

#### 発掘調査作業従事者（50名）

有村忠夫 安藤綾子 市蘭厚子 入木江津子 白井アサ 内田久美子 大牟禮ヒロ子  
小川富士子 奥初雄 奥村昌彦 小倉和子 小田原ミチ 上水義夫 上村政廣 上脇清子  
川越伸行 河村明美 窪順夫 古城トシ子 小濱香苗 齊藤京子 崎山敦子 重留昌実  
重留睦男 清水美代子 下津佐敏夫 末田艶子 竹下利男 田口明子 永岩カズ子  
長野尚子 早淵ミツエ 春山ツキ子 深港凡夫 藤原和朗 穂森ヨシエ 堀正始  
前田忠臣 牧野五月 町順子 松尾孝子 丸山芳枝 山下清美 山下圭子 山中哲雄  
山之内正義 吉嶺禮子 脇門ミサ子 脇田松秋 渡邊裕美子

#### 報告書作成事業従事者（3名）

（県立埋文センター）岩爪美津子 小山君子 永田よしえ

〈50音順〉

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

加治木町は始良カルデラの北端近くに位置し、鹿児島県のほぼ中央部に所在する。南は鹿児島湾に接し、北・東・西の三方は台地や山地に囲まれている。市街地は別府川・網掛川・日木山川が流れる狭い平野に形成されている。

高井田遺跡は、この市街地を一望に見渡す「さえずりの森」展望台の眼下から南に広がる舌状台地（以下高井田台地と呼ぶ）のほぼ先端部に位置している。高井田台地の東には竜門滝を有する網掛川が、西には下流でそれと合流する宇曾木川が流れている（第4図）。

### 第2節 歴史的環境

加治木町内において、旧石器時代の遺跡・遺物はまだ発見されていない。北側に隣接する溝辺町では、石峰遺跡をはじめ旧石器時代の遺跡が数遺跡確認されていることから、加治木町内においても山間部を中心として、将来発見される可能性は大である。

縄文時代の遺跡はこれまでいくつかの遺跡で発掘調査されている。草創期の遺跡は発見されていないが、早期前半期の遺跡として小山田の下市来原遺跡がある。岩本式土器や前平式土器、加栗山式土器などが出土している。特に加栗山式土器は国分市上野原遺跡や鹿児島市加栗山遺跡のものと同タイプであり、一帯に住居跡を伴う集落跡が存在する可能性が出てきた。

早期後半期の遺跡としては日木山の三代寺遺跡がある。九州縦貫自動車道の建設に伴って調査された遺跡であるが、5基の集石遺構とともに貝殻文系の塞ノ神式土器が多く出土している。

前期の遺跡には、鹿児島の考古学研究史上欠くことのできない日木山洞穴がある。昭和12年に調査された遺跡で、出土した土器の一部は日木山式土器と呼ばれたこともあった。現在、落盤により入口がふさがれた状態になっているのは残念である。前述の下市来原遺跡や日木山の干迫遺跡では曾畑式土器が出土している。

後期の遺跡として大量の遺物が出土した干迫遺跡がある。加治木ジャンクション建設に伴って調査された遺跡で、遺物の出土総点数は百万点を優に越え、遺物を保管するケースも数千箱を数えた。約3,500年前に九州南部で流行した市来式土器や丸尾式土器を中心として、同時期に九州各地で使われていたと考えられる土器が大量に出土したことで、交流の拠点としての様相がうかがえ、注目を浴びている。10基の竪穴住居跡も発見され、当該期の集落・住居の形態や構造を語る上で一つのモデルとなっている。大量の遺物は遺跡を東西に横切る幅約15m、長さ約100mに渡り緩やかに蛇行するように検出された自然流路跡を中心に出土した。深さ約1.5mを測る埋土中に遺物がぎっしりと詰まった状態で出土した。

弥生時代から古墳時代にかけての資料は少ないが、発掘調査された遺跡の中から断片的にみられることから、当該期を主とする遺跡の調査も時間の問題であろう。

古代から近世についての詳細は、第Ⅳ章1、2にゆずり、ここでは考古学的資料を中心とした



第4図 遺跡の位置及び周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡及び史跡地名表

番号	遺跡名	所在地	主な時代	備考	文献
1	高井田	加治木町木田高井田	古代～近世	掘立柱建物跡，礎敷遺構	本報
2	春日神社	〃 木田高井田	伝1006年創建		1
3	山元窯跡	〃 反土棚目	近世	連房式登窯1基，陶磁器	2
4	加治木城跡	〃 反土城	中世	山城	1
5	文之和尚墓	〃 反土	近世	国指定史跡	1,3
6	三代寺	〃 日木山三代寺	縄文早期	集石5基，塞ノ神式土器	4
7	干迫	〃 日木山干迫	縄文後期	竪穴住居跡10基，遺物多量	5
8	日木山窯跡	〃 日木山281	近世～近代		2
9	日木山洞穴	〃 日木山243	縄文前期		6
10	加治木銭铸造所	〃 本町185	近世		2
11	御里窯跡	〃 反土仮屋町	近世	窯底確認	2
12	弥勒窯跡	〃 木田弥勒	近世		7

概要についてふれておきたい。

古代の鹿児島湾奥平野部には、大隅国府や大隅国分寺が置かれたことでもわかるように、712年に薩摩国から分離して設置された大隅国の中心的地域であったと考えられる。加治木町も隣接する始良町と合わせ、古代においては栄えた地域であったであろう。縄文時代前期や後期の遺跡として紹介した干迫遺跡では、土師器や須恵器などの古代の遺物とともに、2棟の掘立柱建物跡が検出された。調査区のぎりぎりで見出されていることから、遺構のひろがり、北側の調査区外へまだ延びていくものと考えられる。また、隣接して古代までさかのぼると考えられる道跡も検出されており、当地が果たした社会的機能について注目されるところである。

干迫遺跡では中世の掘立柱建物跡（2間×2間の総柱）や溝状遺構（断面V字状）も検出されている。遺物の中に徳之島のカムイヤキ窯産の甕片が出土していることは特筆されよう。

戦国期に入ると、長く当地を押さえていた加治木氏に変わり、島津氏が次第に勢力を拡大していったが、豊臣秀吉の島津征伐の結果、加治木は一時秀吉の直轄領となった。しかし「泗川の戦い」の勲功の一つとして再び島津氏に返還された。島津義弘が17世紀初頭に加治木に移ったことで、鹿児島の政治・経済・文化の中心地的な役割を担う地として発展していった。

義弘は、加治木に窯業の種をまいたことでも知られている。そしてその種は花を咲かせ、今日の竜門司焼へと引き継がれている。

加治木町内の薩摩焼の古窯跡は山元窯跡、弥勒窯跡、御里窯跡、日本山窯跡などがある。宇都窯跡や元立院窯跡等のある隣町の始良町を加えた一帯は、薩摩半島側の東市来町苗代川地区とともに集中地区を形成している。ちなみに高井田遺跡からは、竜門司窯、山元窯、元立院窯産の焼物が出土している。

次に、高井田遺跡周辺にある主要な遺跡や史跡を紹介する。\*

### ① 三代寺遺跡（第5図）

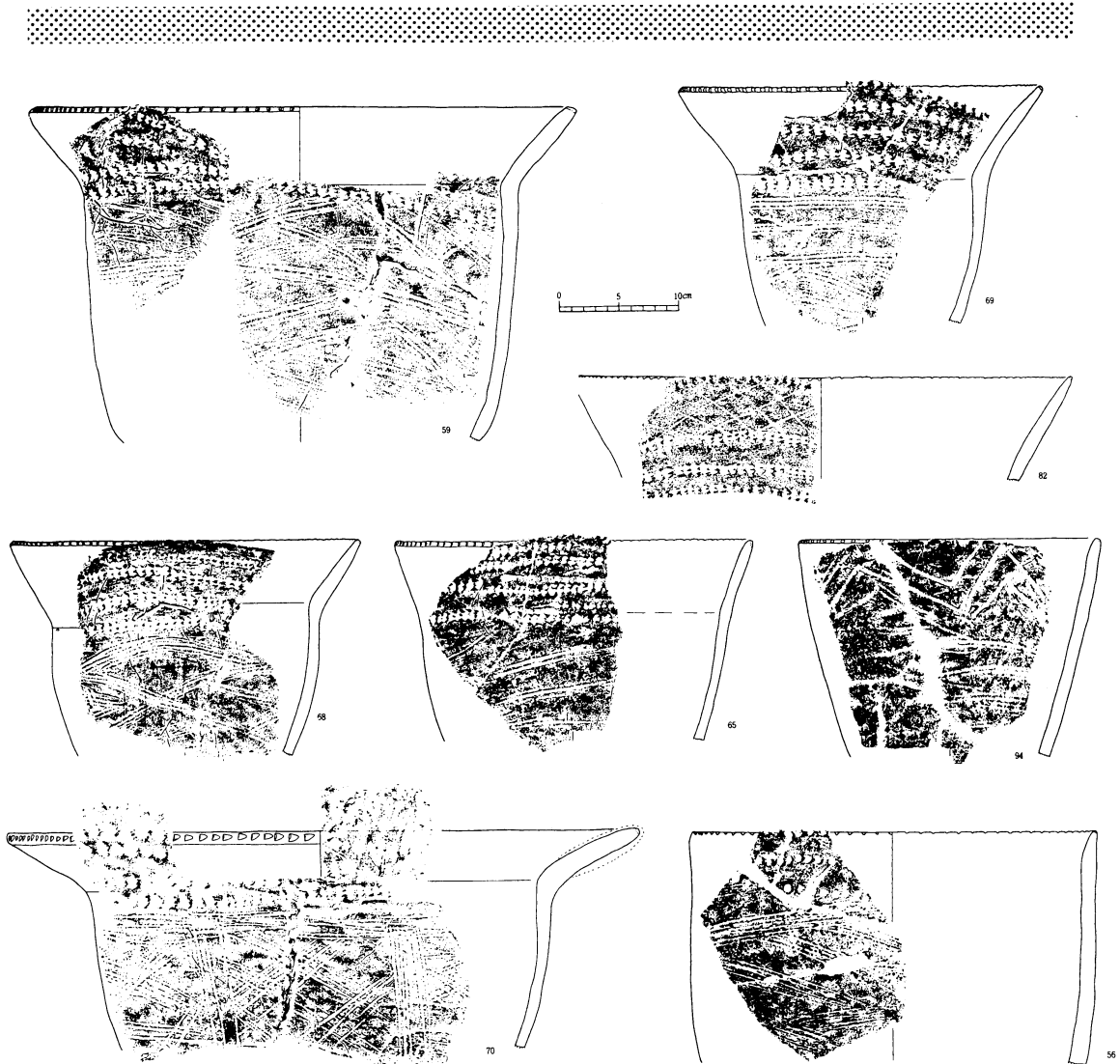
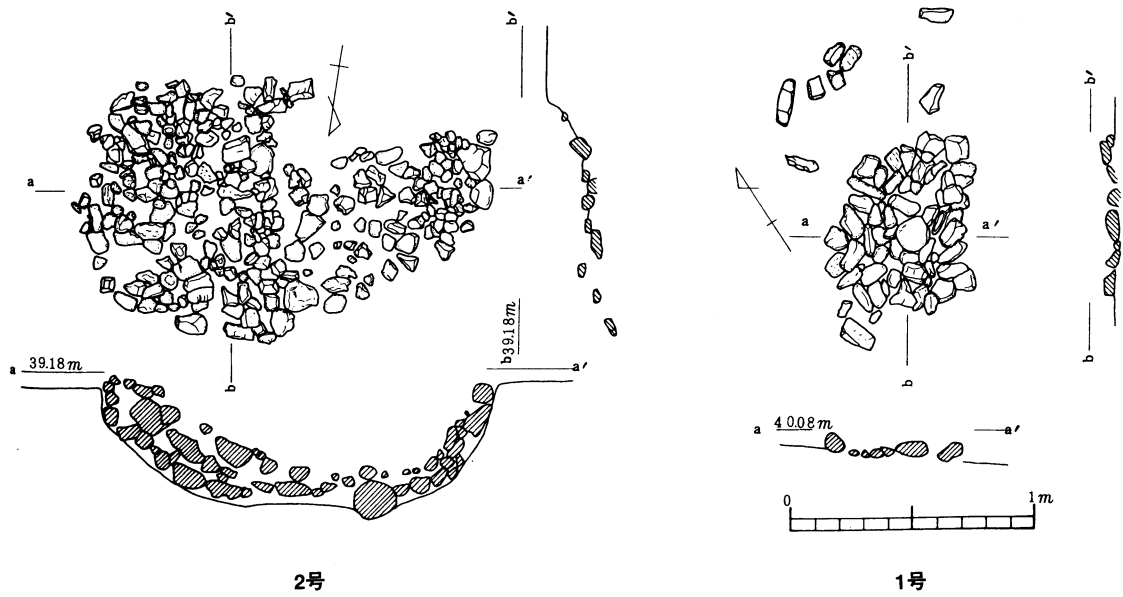
日本山の三代寺に所在する遺跡で、九州縦貫自動車道の建設に伴って1974(昭和49)年に発掘調査された。遺跡は加治木町のシンボルである蔵王岳の山麓（標高40m）にあり、市街地の東部を流れる日本山川の東岸に位置している。出土した資料は縄文時代早期の後半期を中心としたもので、5基の集石遺構とともに塞ノ神B式土器と呼ばれる土器が出土した。この土器型式は円筒形の胴部にラップ状に開く口縁部をもち、器面に貝殻文を施した土器である。塞ノ神式土器なかで最も初源的な器形や文様をもち、「三代寺式土器」と呼ばれることもある。

### ② 日本山洞穴

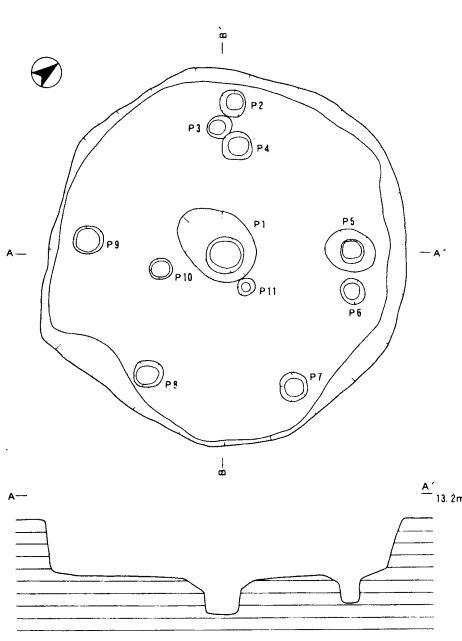
日本山にある洞穴遺跡で、当時國學院大學在職の樋口清之・乙益重隆両氏により1937(昭和12)年8月に発掘調査された。その成果は翌1938(昭和13)年には『史前学雑誌』に掲載され、全国で紹介された。出土土器は縄文時代前期のものと考えられる一群で、条痕文・点線文・相交弧文などの文様が施されたものである。この中で相交弧文と呼ばれた文様は、二枚貝の貝殻復縁部の両端の一端を軸としながら交互に器面を押圧していくという特徴的な文様である。

### ③ 干迫遺跡（第6, 7図）

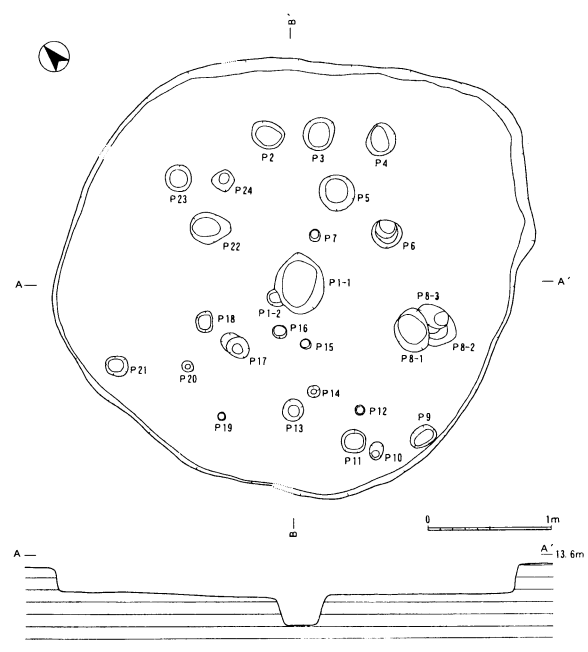
蔵王岳の麓にある縄文時代後期の大遺跡である。標高10m前後の低地にあり、基盤は砂層であったが、前述のように10基の竪穴住居跡をはじめ、143基の土坑、6基の集石遺構、10基の



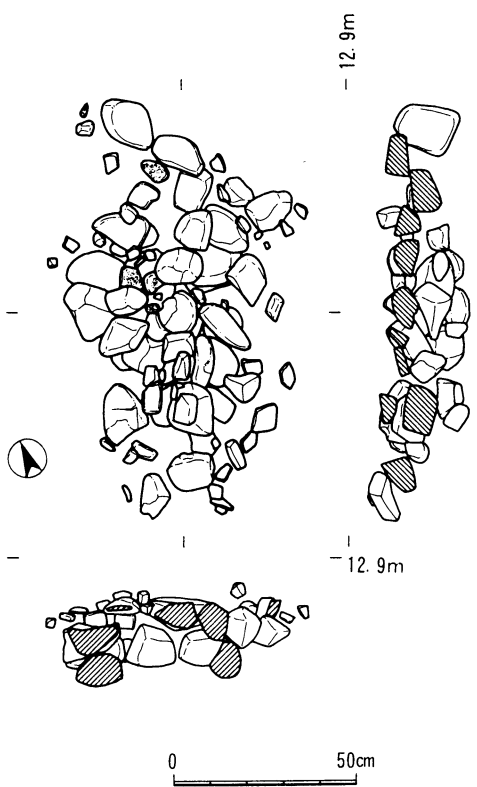
第5図 三代寺遺跡の主な遺構と遺物



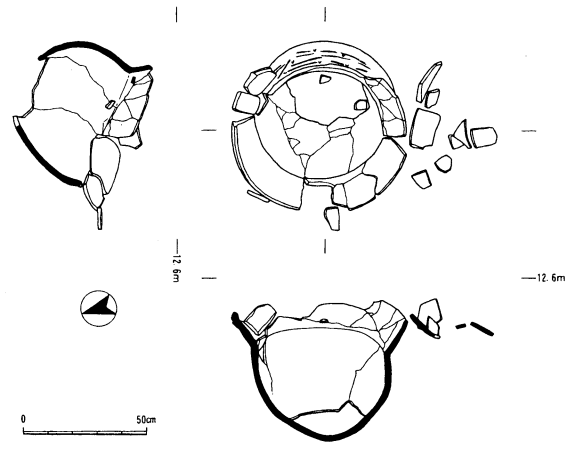
1号竖穴住居跡



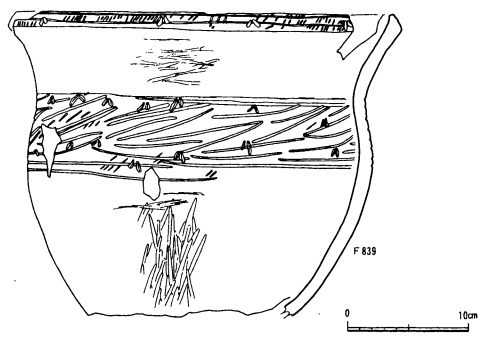
3号竖穴住居跡



3号集石遺構



3号埋設土器



第6図 干迫遺跡の主な遺構と遺物



第7図 干迫遺跡の主な遺物



埋設土器などが検出されている。特に目を引くのが調査区を横切る自然流路を中心に出土した大量の遺物（総点数百万点以上）である。土器型式でいうと市来式土器や丸尾式土器といった在地の貝殻文系土器が中心で、圧倒的な量の多さを示すが、注目されるのは、それらと同時期の磨消縄文系土器も多く出土したことである。鐘崎式土器・北久根山式土器・辛川式土器・西平式土器などがそうである。つまり、縄文時代後期に展開した九州南部独自の土器文化と、それと同時期と考えられる異系統の土器文化との関係を探る上で貴重な資料が出土したということになる。しかも大量にである。ちなみにこれまで鹿児島県内で出土した磨消縄文土器の総量よりも多く、干迫の地が果たしていた役割の重要性を考えざるを得ない。

このような干迫の地における交流の実態は、偶然の産物ではなく、加治木という土地そのものが持つ地理的な状況からくるものと考えられる。現在、加治木には高速道路のジャンクションが開通している。そして干迫遺跡の調査がまさにこのジャンクションの建設に伴うものであった。この地が時代を超えて同じような役割を果たしていたものと考えられるのである。

#### ④ 加治木城跡

南北朝期からみえる城跡で、加治木インターチェンジを見下ろす北側の高台に位置している。加治木が地理的に重要な要衝の地であったことは、前述の通りであるが、その役割は中世も同じで、室町時代にはここを中心として外国との貿易を行い、勘合船が停泊し、隣接の帖佐の納屋町などは、国内の大取引所として繁栄していた。加治木では加治木銭と呼ばれる貨幣も鋳造されたほどであった。このことから戦国時代の末には群雄争奪の目標となった。加治木氏や肝付氏などの居城として推移した加治木城も島津義弘が平地に新たな館を築いたことにより、その役目にピリオドをうつこととなった。

#### ⑤ 山元窯跡（第8図）

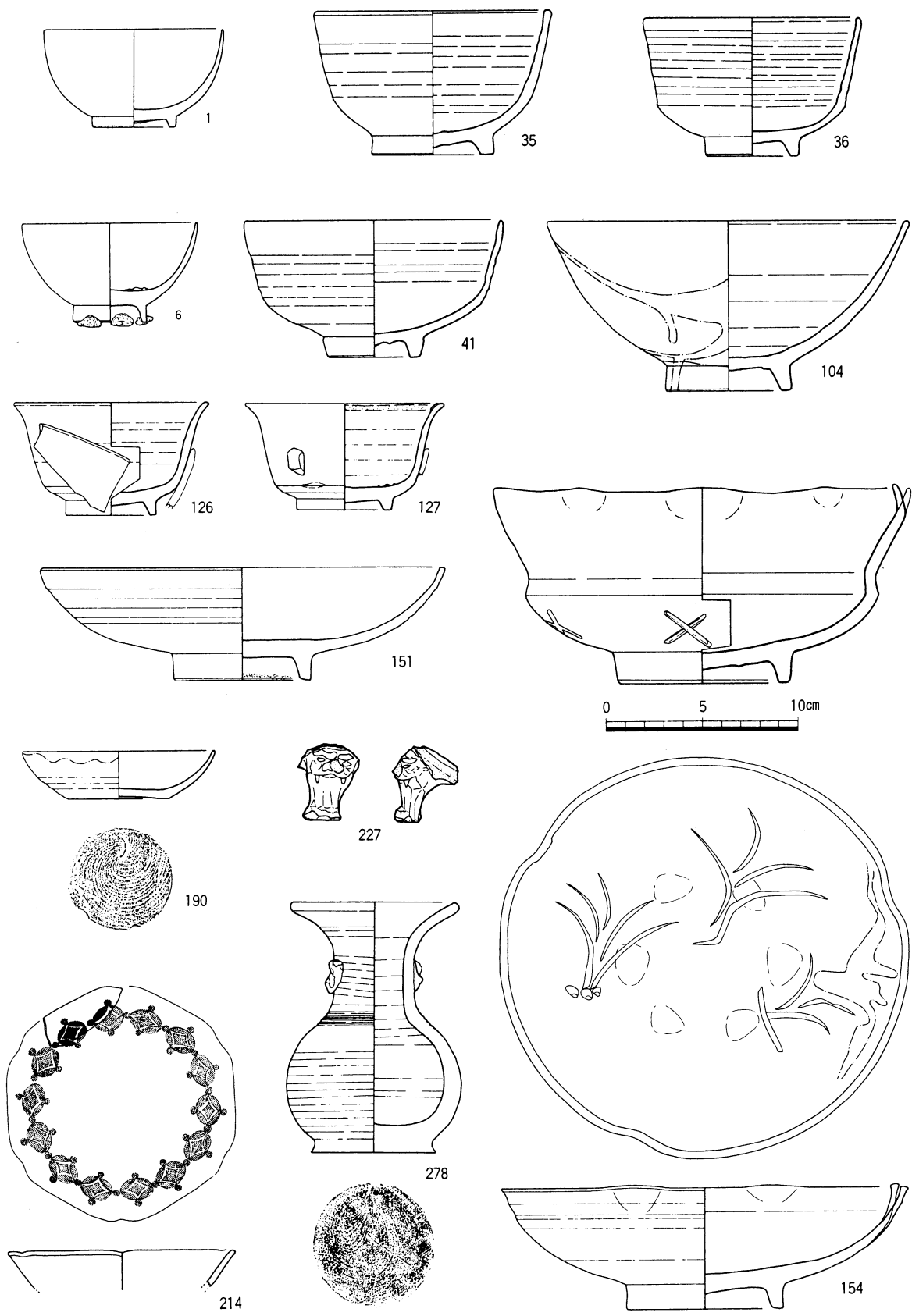
九州縦貫自動車道加治木インターの北側にある薩摩焼の古窯跡である。高井田遺跡からも近く、約1kmの距離しかない。1992（平成4）年に加治木町教育委員会により発掘調査が行われ、7～8室の焼成室をもつ連房式登り窯が1基（推定全長は約15m）検出された。

1762（宝暦12）年に書かれた『加治木古今雑撰』によると、1667（寛文7）年に加治木島津家の庇護のもと、陶工山元碗右衛門によって築かれた窯で、稼動期間は数年間といわれる。碗右衛門はその後、小山田地区に移り、現在に続く龍門司焼の始祖となった。

製品は、小振りな陶器が主体で、碗・皿・鉢類が最も多く、甕等大型のものは見られない。短期間で廃棄された窯であるが多用な器形があり、それぞれに時間的な前後関係を見いだすことはできない。また、少量の染付や型打ち、変形皿等の磁器も出土している。

#### ⑥ 御里窯跡

1601（慶長6）年、帖佐に宇都窯を開いた金海は、島津義弘の加治木移住に伴い、自らも加治木に移り窯を開いた。これが御里窯である。1608（慶長13）年のこととされている。この窯では、茶碗・茶入れ・花生などの茶陶が主に焼かれ、後世古帖佐と呼ばれ茶人に珍重された。この頃作られたもののうち、火計手茶碗と呼ばれるものは、朝鮮半島から直接運ばれてきた白陶土を用い、朝鮮陶工の手によって作られ、火ばかりが薩摩のものという意味から名づけられた薩摩焼の原型ともいえるものとして知られている。



第8図 山元窯跡の主な遺物

2000（平成12）年7月に加治木町教育委員会により発掘調査が行われ、窯の底と考えられる部分が確認された。また、火計手の破片や現存する御里窯跡製とされるものと類似する茶入れの破片も出土した。

#### ⑦ 龍門司坂

木田の高井田集落から小山田の毛上集落に通ずる坂道で、464mにもおよぶ石畳敷の坂である。1741（元文6）年に加治木島津家第4代の久門が薩摩藩の指示で造ったもので、薩摩街道大口筋の一部をなしていた。1987（昭和62）年に県の文化財に指定された。

#### ⑧ 文之和尚墓

反土安国寺墓地内にある古墓である。文之は島津義弘に厚遇された禅師で、島津家の黒衣の宰相といわれた漢学の大家であった。漢文の訓点を創意したことで知られている。著書に『南甫文集』や『聖蹟国和鈔』などがある。和尚は鹿児島の大龍寺から国分の正興寺に帰る途中、病を得て加治木の安国寺において1620（元和6）年に66歳で没した。1936（昭和11）年に国の史跡に指定された。

#### ⑨ 春日神社

高井田遺跡の南側にある神社で、加治木では一番古く加治木五社の一つであった。天兒屋根命（あめのこやねのみこと）・武甕槌命（たけみかつちのみこと）・斎主命（いわいぬしのみこと）・姫大神（ひめおおかみ）の四神を祀っている。約千年前、大蔵氏が加治木の郡司として統治していた頃、一条天皇時の1006（寛弘3）年、元関白藤原頼忠の息子経平が当郷に配流され、大蔵太夫良長の婿となり加治木家を相続したので、藤原家の氏神である奈良の春日大明神のご神霊を勧進したと伝えられる。

豊臣秀吉の命で寺社没収の際、社殿が荒廃したので、島津義久（一説によれば義弘）が1605（慶長10）年に再興し、祭田十五石を寄進し、別当寺を建立するなどした。しかし、再び取り上げられ、1633（寛永10）年、家永の時代になって社殿を新築したとのことである。また、1786（天明6）年、島津重豪が厄年にあたるので、その武運長久を祈るため、加治木六代兵庫は、宝殿・舞殿・善神・鳥居などを新造した。

また、1806（文化13）年3月6日の正午には、宝殿内から火災が起り、社殿が残らず焼失したので、1822（文政5）年に再建された。

県指定の無形民俗文化財である太鼓踊りのスタート地点となっている。2001（平成13）年に社殿が新築された。東方境内には末社である若宮大明神が鎮座している。

※加治木郷土史編さん委員会の『加治木郷土史』（1966）や九州近世陶磁学会の『九州陶磁の編年』（2000）等を参考にして記述した。

#### 【表中文献】

- 1 加治木郷土誌編さん委員会 1966 『加治木郷土誌』
- 2 関 一之 1995 「山元古窯跡」『加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書』1 加治木町教育委員会
- 3 鹿児島県教育委員会 1972 『鹿児島県の文化財』
- 4 新東晃一・弥栄久志・牛ノ濱修 1979 「三代寺遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（11）鹿児島県教育委員会
- 5 池畑耕一・前迫亮一 1997 「干迫」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（22）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 6 樋口清之・乙益重隆 1938 「加治木町日本山洞窟遺跡」『史前学雑誌』10-2
- 7 関 一之 1999 「弥勒窯跡」『加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書』2 加治木町教育委員会

## 第Ⅲ章 発掘調査の概要

### 第1節 発掘調査の方法

発掘調査は対象区域に10mグリッドを設定して実施した。グリッドには、調査区の北東-南西軸にaおよびA～Fのアルファベット名を、北西-南東軸に1～19の数字名を付した（第9図）。

また、調査は対象区域内を大きく2分する下段をA地区、上段をB地区と便宜的に呼称して行った。

工程としては、廃土処理の問題からA地区（下段）を先に仕上げ、できるだけ早く廃土置き場として利用する計画を立て、確認調査で検出された礫が集中する遺構部分に時間を重点配分する方法を採った。

B地区の一部（春日神社隣接地で、確認調査時に未買収地区）には、杉を伐採した状態だったため、慎重な伐根作業が必要であった。

確認調査時の第1トレンチと第2トレンチ周辺については、遺物の出土をみるものの、すべて流堆積と考えられる土層中からの発見であったため、今回の本調査での掘り下げは不必要と判断した。

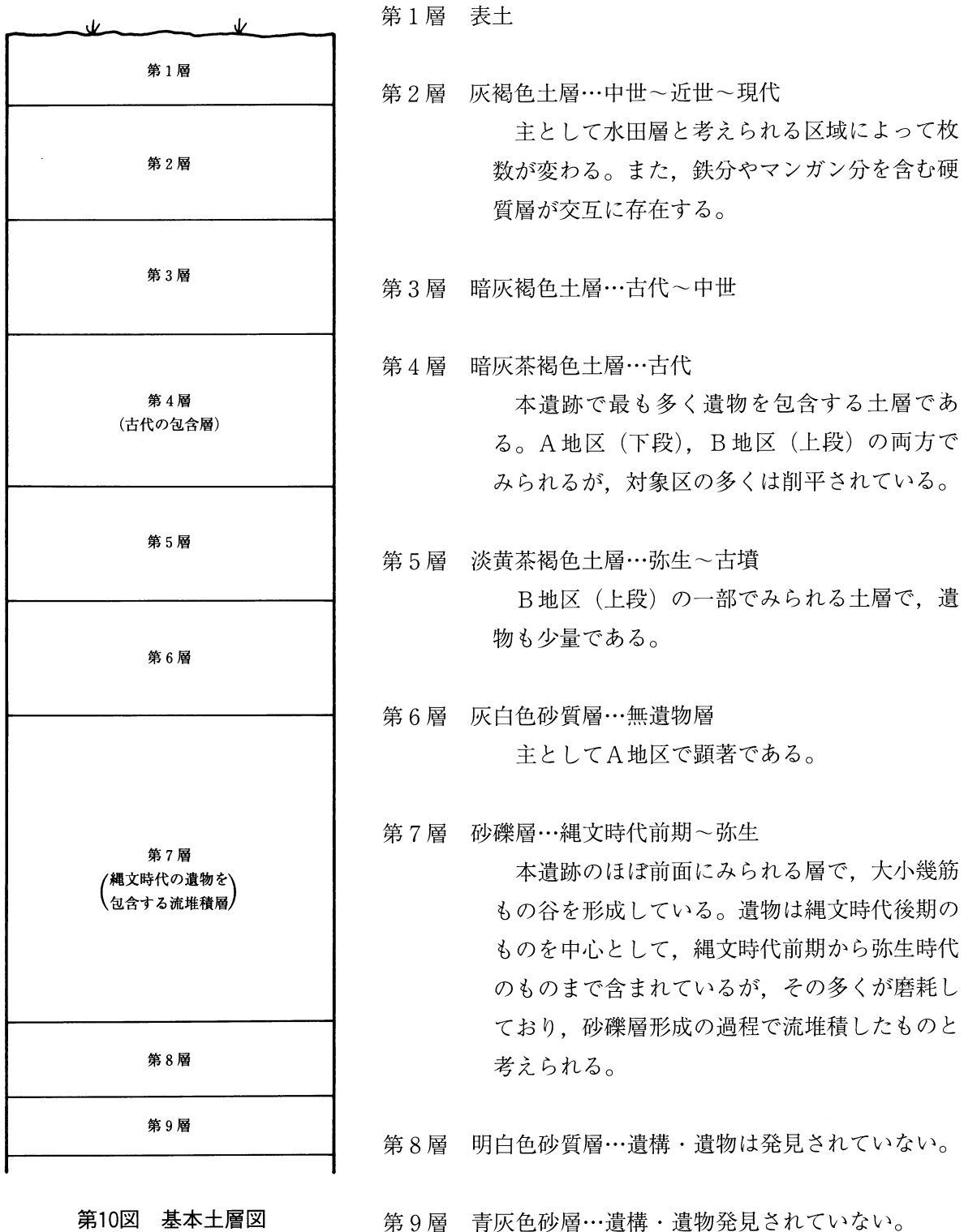
今回の調査区は、低地（A地区は水田）ということもあり、ひとたび雨が降ると水との闘いが始まるといった状況であった。特に調査時期が梅雨と重なったため、大雨になると隣接する九州縦貫自動車道から流れてくる排水も加わり、調査区がプールになることもしばしばであった。



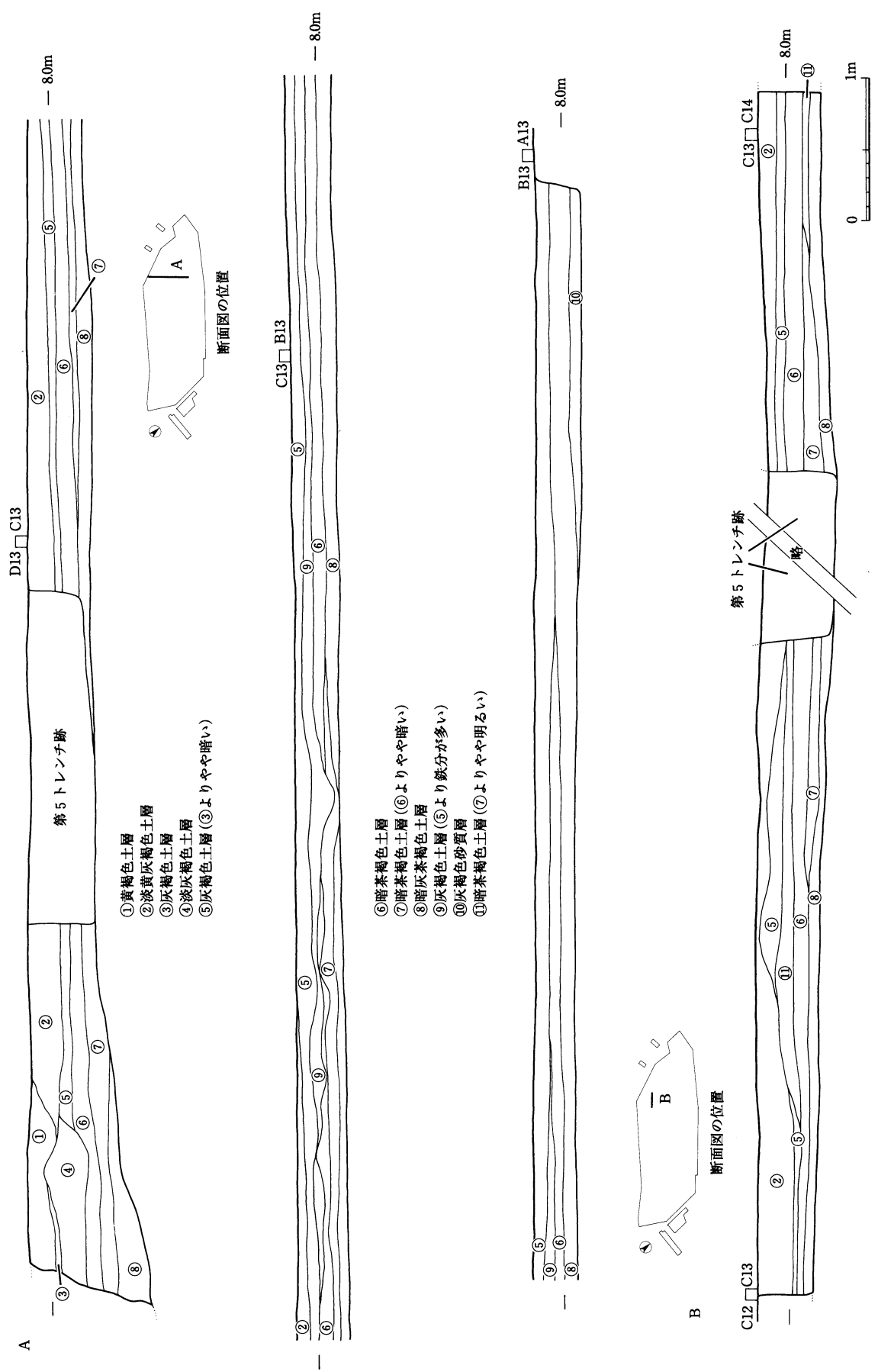
第9図 グリッド配置図

## 第2節 層序

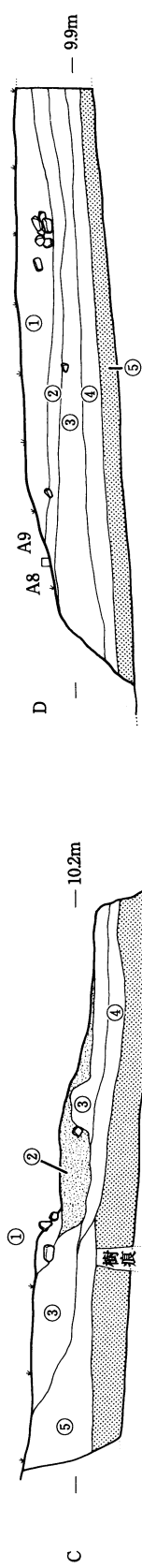
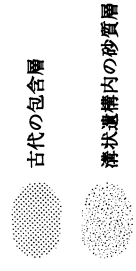
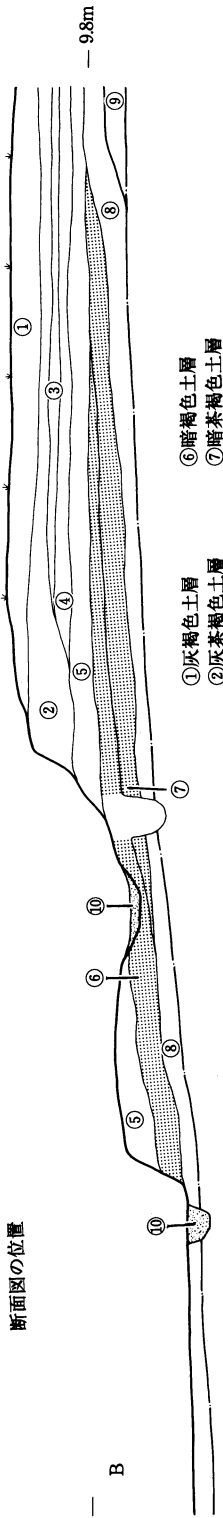
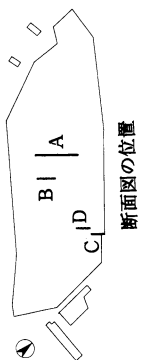
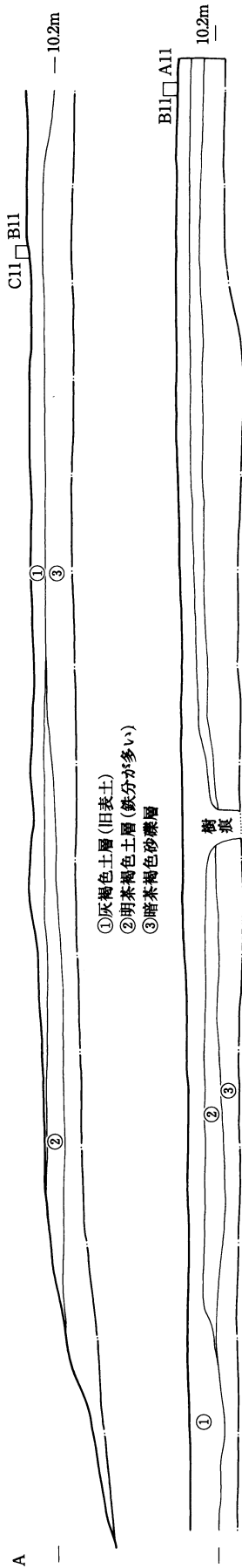
本遺跡は、標高6～10mの低地に立地しているということや、調査前に水田地であった区域も多かったことから、場所によって層位が異なるという状況であった。ここではおおまかな基本層序について記載する（第10図）。



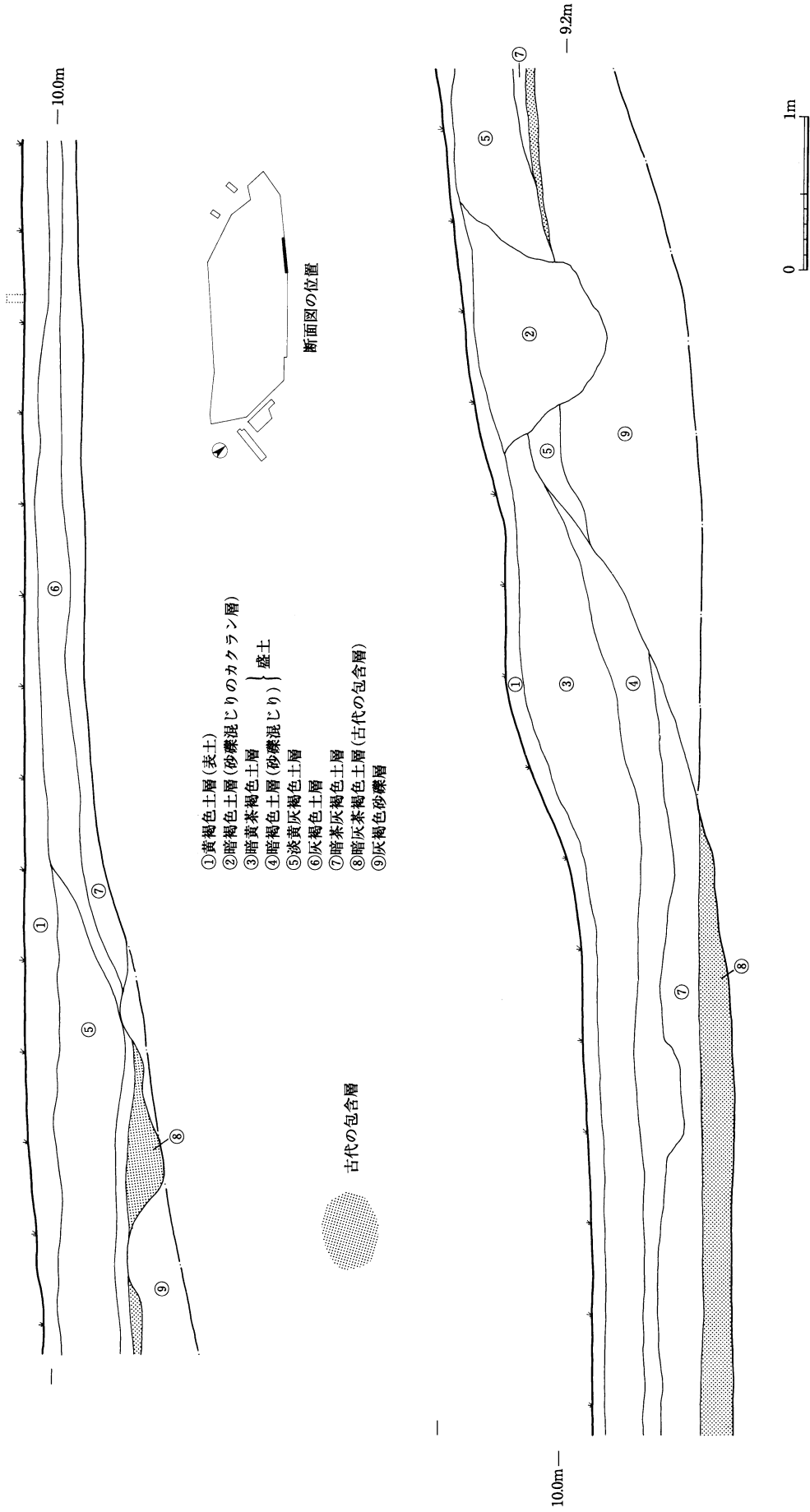
第10図 基本土層図



第11図 土層断面図 (1)



第12図 土層断面図 (2)



第13図 土層断面図(3)



### 第3節 発掘調査の成果

#### 1 縄文時代

縄文時代の遺物と考えられるものは、土器・土製加工品・石器などが出土した。

##### (1) 土器・土製加工品 (第14～21図 1～123)

土器および土製加工品は2トレンチを中心に縄文前期から晩期まで出土した。多くは流堆積層からの出土でローリングを激しく受けていることから、いずれも遺物が本来使用された位置よりかなり移動しているものと考えられる。

1～6は縄文時代前期の曾畑式土器である。1はやや外反する口縁部で、外面に横位ないし斜位の短沈線と大きく湾曲する波状沈線を施している。内面にも2段の刺突連点文と平行する2本沈線がみられる。2は山形口縁を呈する土器で、口縁部下にまず3段の刺突連点文を、さらに下に縦横の短沈線を施したものである。内面には外面同様の刺突連点文が2段施されている。3も2と同様に口縁部下に4段の刺突連点文を、さらにその下位に短沈線を施している。4は口縁部下に刺突連点文と横に展開する羽状のごく短い沈線が施されている。1～4はいずれも口唇部に刻みないし刺突文がみられる。5は口縁部下に横走する3本の沈線がみられる。6は胴部片で短沈線が施されている。

7と8は縄文時代中期の春日式土器である。いずれも器面が磨耗しているためにシャープさにかけているが、やや平べったい粘土紐を2段に貼り付けたものである。8の粘土帯は波状を呈している。いずれの粘土帯にも先端の鋭利な工具で刺突文が施されている。

9と10は縄文時代中期の阿高式土器と考えられる資料である。いずれも胴部片であるが、太型の凹点ないし凹線で構成された土器である。

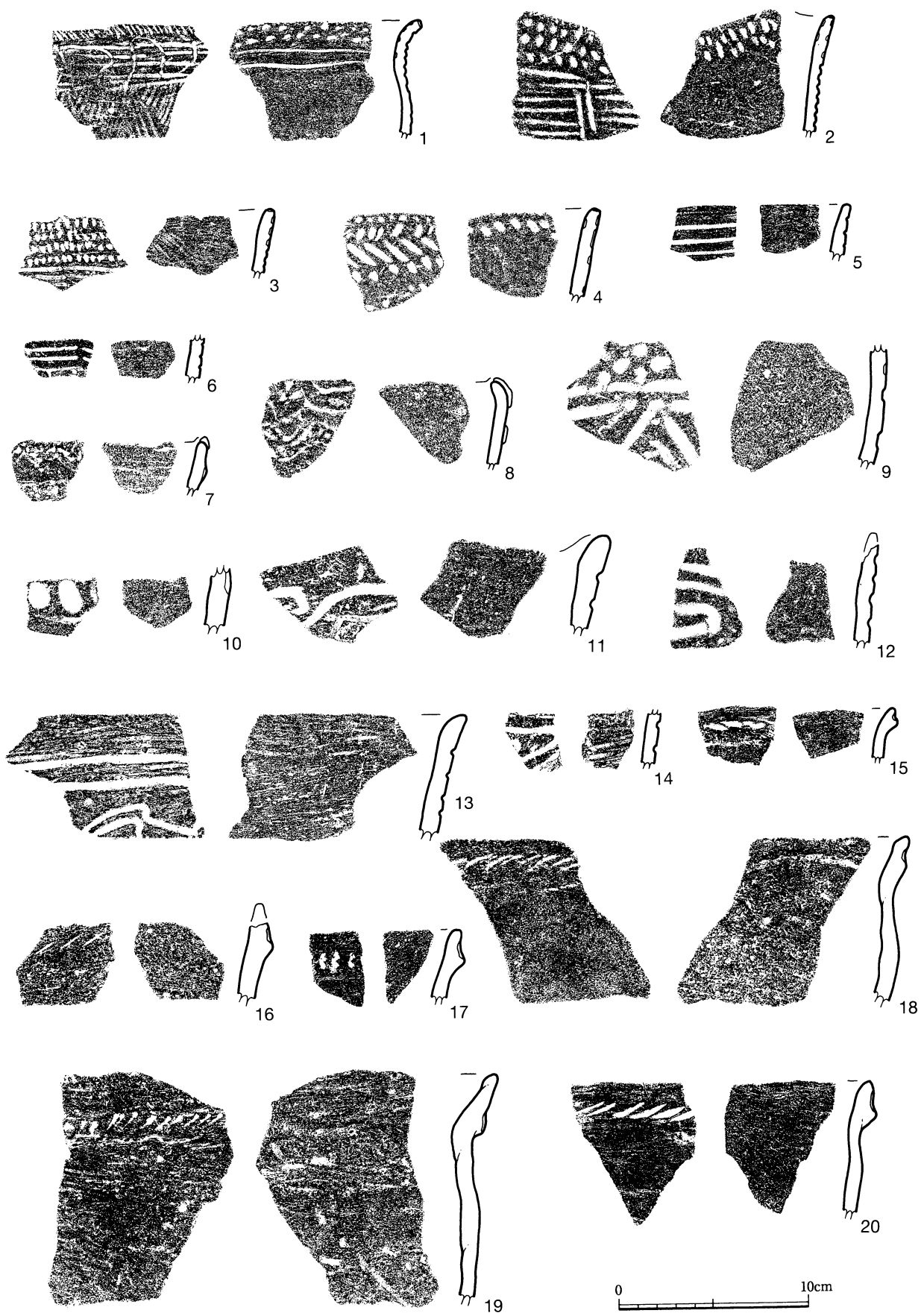
11～14は縄文時代後期前葉の指宿式土器である。11～13は口縁部および口縁部付近の土器でいずれも沈線を文様としたものである。また、14は沈線を施した口縁部下の土器片である。12～14には指宿式土器によく施される2本の平行沈線が観察される。

15～44は本遺跡の縄文土器の中で最も多く出土した縄文時代後期中葉の市来式土器である。いずれも口縁部の断面形が三角形ないし「く」の字を呈するものである。

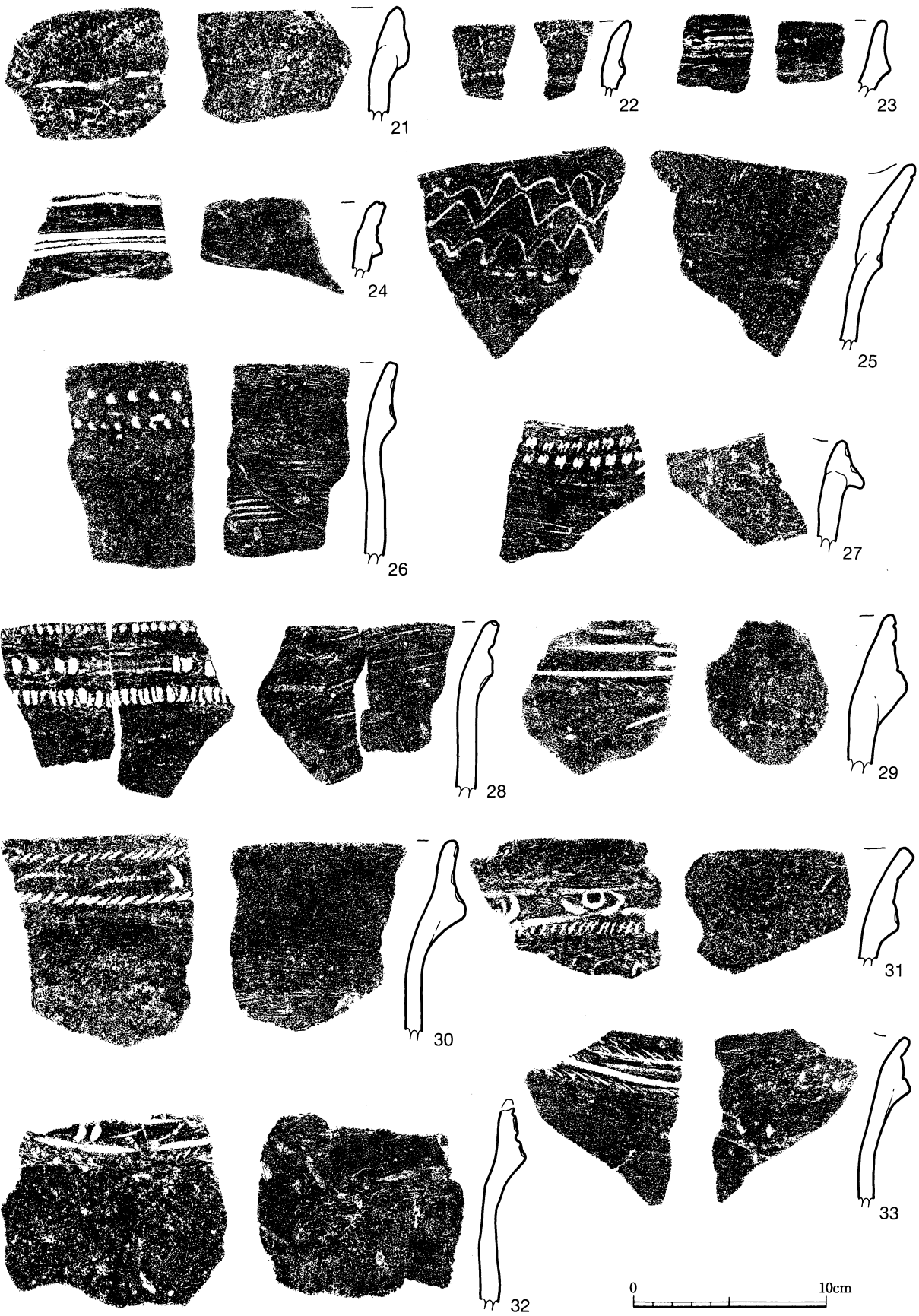
15～21は断面三角形を呈する口縁部の上位を文様帯とするもので、ヘラ状工具や貝殻腹縁部による横位の連続刺突文を施したものである。市来式土器の中では最も単純な文様のタイプである。22は貝殻腹縁部による斜位の刺突文が2段施されている。

23～27も口縁部下に単一の文様が施されたものである。23と24は横走する沈線が数本施されたものである。24は市来式土器には珍しく口唇部に沈線がみられる。25は幅広の口縁部文様帯に3段の浅い波状沈線が施されたものである。26, 27は2段の刺突連点文が施されたものである。15～27のような文様が単純なタイプは比較的平縁口縁を呈するものが多く、山形を呈するのは25と27のみである。

28～37は断面三角形を呈する口縁部の上位を文様帯とするところはこれまでと同様であるが、文様が複数の要素で構成されたものである。これらはおおむね文様帯の上端と下端に連続刺突文を施し、その間をヘラ状工具や貝殻腹縁部による刺突文や沈線を組み合わせて文様を施したものである。34や36, 37のように沈線の両端に凹点を施す手法は市来式土器によくみられる文様要素である。



第14図 縄文土器 (1)



第15図 縄文土器 (2)

38～41は断面三角形を呈する口縁部の上位と下位に文様を施したものである。38は沈線だけの文様である。39～41は口縁部文様帯の上端と下端に連続刺突文を施し、その間に沈線や凹点を施したものである。下位の文様には沈線や貝殻腹縁部による刺突文がみられる。39は口縁部断面形が「く」の字状を呈していることから、市来式土器の中では新しい様相をもつ資料と考えられる。

42と43は断面三角形を呈する口縁部ながら文様をもたない、いわゆる無文土器である。44も基本的に無文であるが、口唇部が波状を呈する土器である。市来式土器とはやや雰囲気を異にする資料であるが、口縁部断面形の類似性からここに位置づけた。

45～50は台付皿（鉢）形土器と考えられる資料である。45～48は脚台部である。45は脚台の裾部に縦位の沈線とその上端の凹点からなる文様単位を横に連続して廻らせたものである。46はやや肥厚した脚台で、細い沈線が施されている。47は無文の脚台であるが、透かし孔の痕跡が2か所みられる。48は脚台の裾部で、端部に細い沈線が施されている。49と50は皿部と脚台部の接合部である。

51はやや外反する口縁部で、口唇にヘラ状工具による連続刻目文が施されたものである。従来草野式土器と呼ばれてきたものである。このタイプの土器は市来式土器を構成する一器種である可能性が高いと認識されつつある土器である。

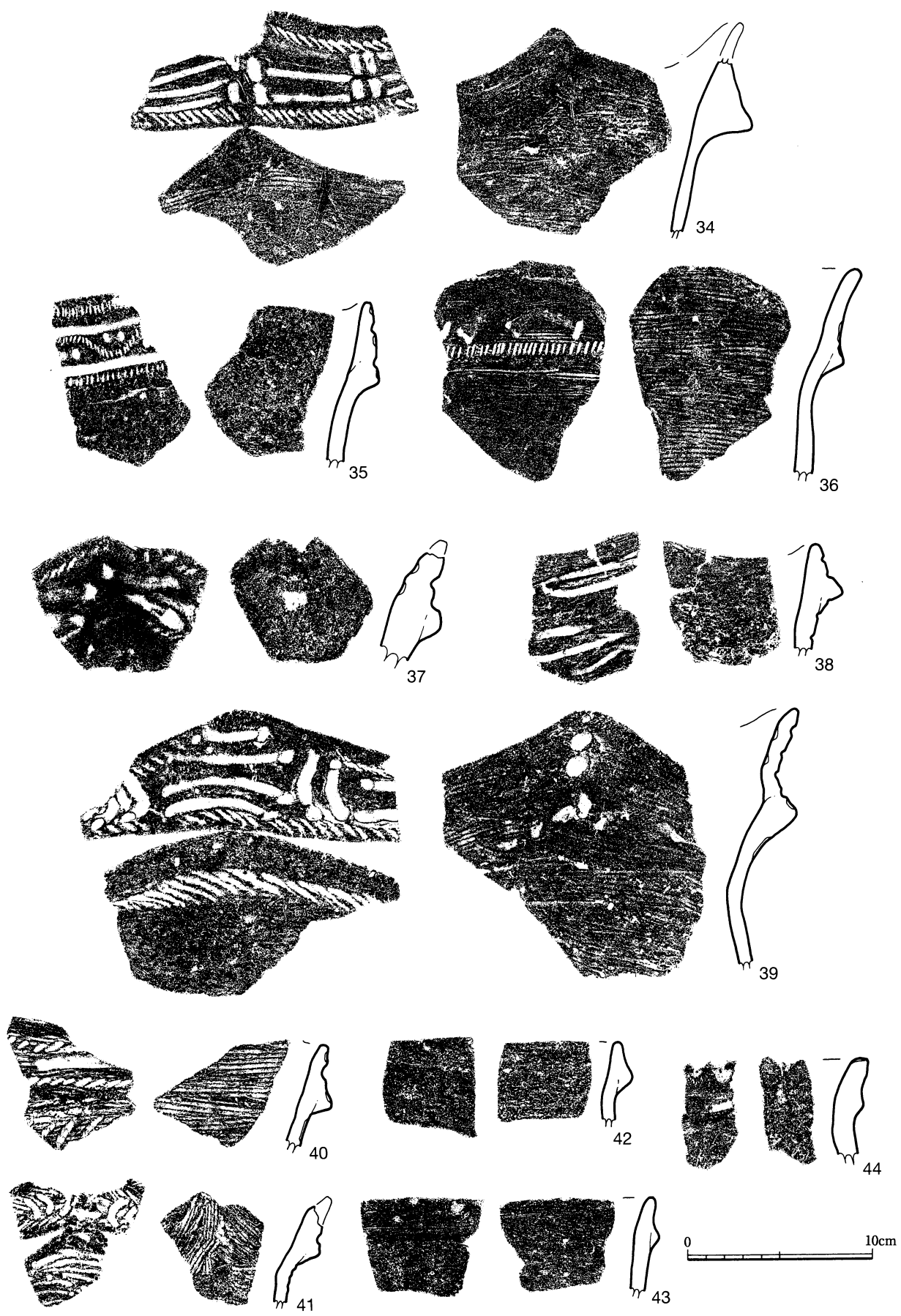
52～63は市来式土器に後続する型式の土器と考えられている丸尾式土器である。52～55は口縁部下の文様が比較的複雑なものである。基本的には文様帯の上端と下端に貝殻腹縁部による刺突文を連続して施し、その間を縦横および斜位の沈線で構成したものである。52, 53は山形口縁を呈するものである。55は平縁の口縁部であるがポッチ状の突起が付いている。56, 57は胴部片であるが破片上端に貝殻腹縁部による連続刺突文がみられる。58～63は貝殻腹縁部による連続刺突文を主文様とする丸尾式土器の中では比較的単純な文様の土器である。58, 59は口縁部断面形が「く」の字状を呈し、かつ山形口縁の土器である。60～63は外反する口縁部を持ち、貝殻腹縁部による連続刺突文を施した土器である。60は貝殻刺突文の下位にヘラ状工具による連続刺突文が施されている。上位の貝殻文とは向きが逆で、全体として羽状をなす文様構成を呈している。60～62は平縁口縁で、63のみ山形口縁を呈している。

64～71（66は除く）は市来式土器や丸尾式土器の底部と考えられるものである。70, 71は底面だけの資料である。66は西平式系土器の底部である可能性が高い。

72～101は磨消縄文系の土器と考えられる資料である。

72, 73は鉢形を呈する鐘崎式土器である。72はやや丸みのある口唇部をもち、その部分と口縁部下に文様帯のある土器である。口唇部には鐘崎式特有の沈線と刺突文がみられる。口縁部下の文様は、縄文地に2本の平行沈線を施したいわゆる磨消縄文が施されている。磨耗が激しく、一見して無文のようであるが、かろうじて一部に縄文が残っている。73は口縁部下の文様帯の部分である。磨耗が激しいため、縄文が施されているのか不明であるが、2本沈線による渦文がみられる。

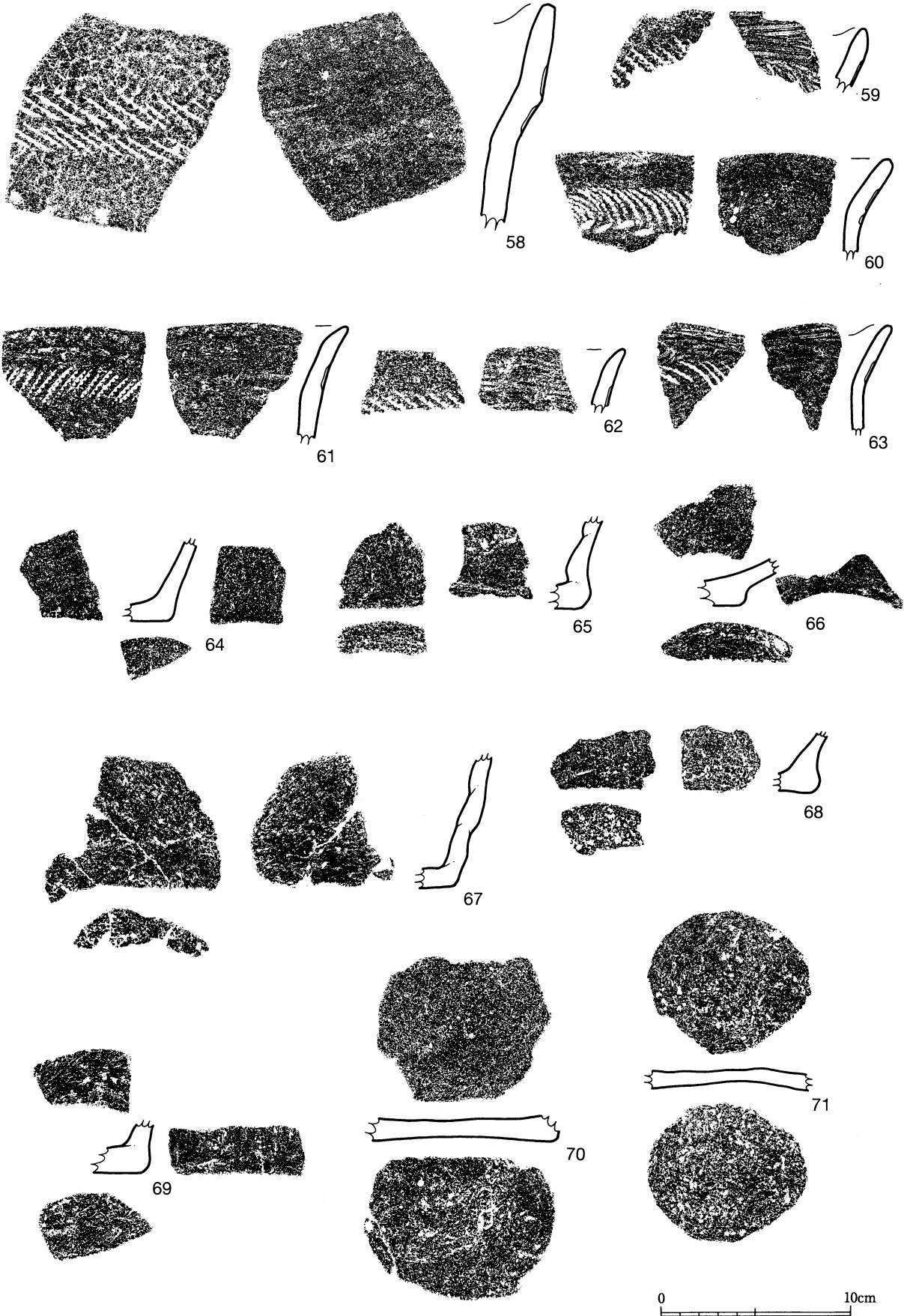
74～77は北久根山式土器の口縁部が大きく開くタイプの土器である。74は胴部の文様帯である。2本の沈線を1単位とする文様には縄文ではなく、巻貝を回転押圧したものと考えられる貝殻文が施されている。75も胴部文様帯である。磨耗が激しく縄文あるいは貝殻文の有無については不明瞭であるが、3本の沈線が施されている。76も胴部文様帯であるが、縄文だけの文様であ



第16図 縄文土器 (3)



第17図 縄文土器 (4)



第18図 縄文土器 (5)

る。77も胴部片で1本の曲線がみられる。

78は鐘崎式土器か北久根山式土器の底部と考えられるものである。

79～83は口縁部がやや外開きになるか内湾するものである。宮下タイプないし納曾式土器と呼ばれている土器である。79は若干内湾しながら外開きになる口縁部片で、口縁部下にやや粗めの貝殻条痕文が斜位に施されたものである。80と81も内湾しながら外開きになる口縁部片である。口縁部下の若干屈曲する部分にヘラ状工具による連続刻み目が施されている。81の口唇直下の内面には浅い沈線状の窪みがみられる。84は内湾する口縁部片である。2本の沈線間に貝殻腹縁部による刺突文を施したもので、磨消縄文を意識した文様構成となっている。83はやや内湾しながら外開きになる山形口縁部である。頂部下位に縦位の4本沈線、両サイドに横位の2本沈線が施されたものである。

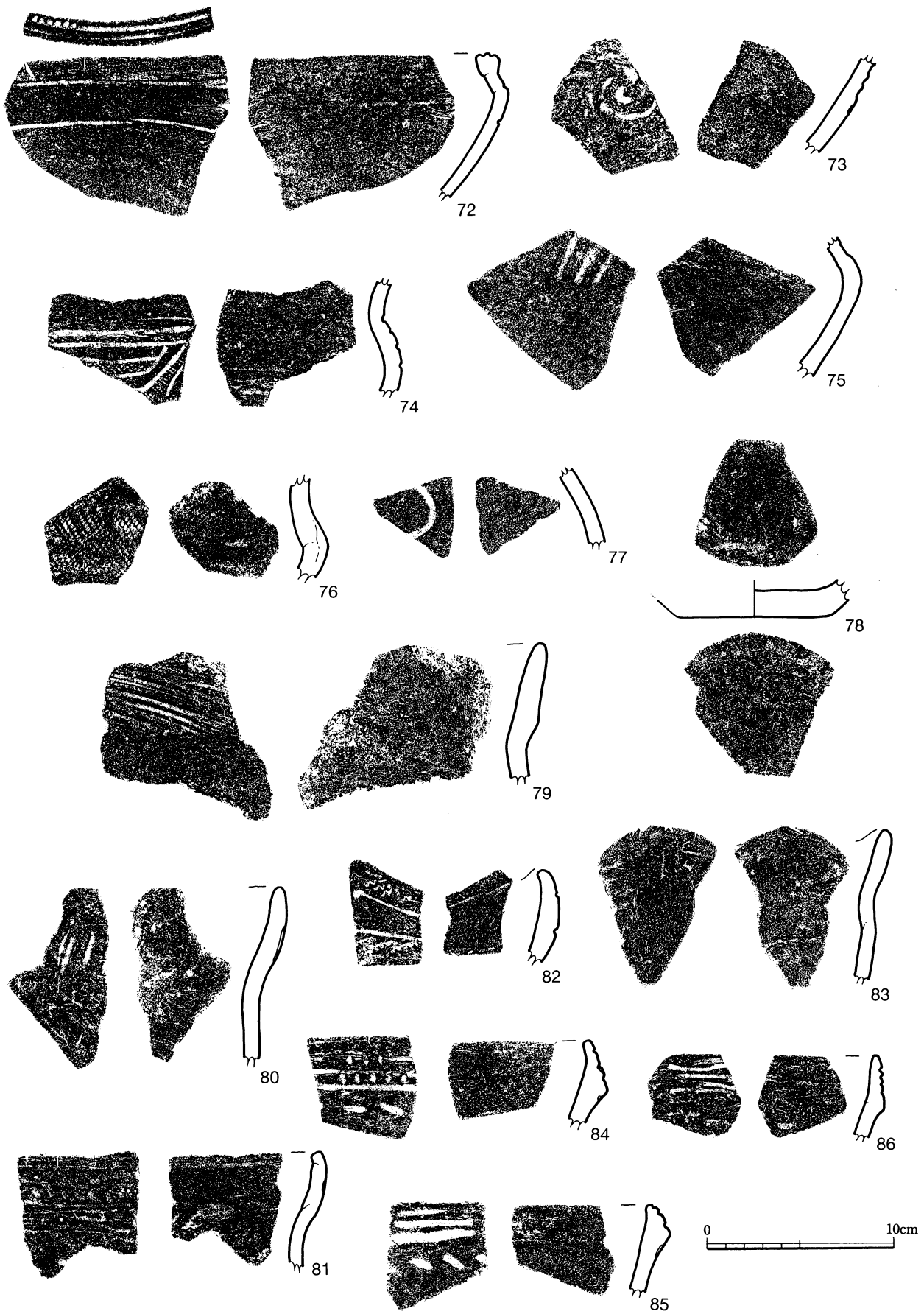
84～86は辛川式土器の段階のものと考えられる資料である。いずれも口縁部断面形が「く」の字状になるもので、口縁部を主文様帯とする土器である。84は口縁部下に3本の沈線と3ないし5個の刺突連点文を施したものである。「く」の字状を呈する口縁部の屈曲部下位には、先端が比較的鋭利な工具による連続刺突文が施されている。このような文様は85も同様にみられる。ただし屈曲部上位は3本沈線のみ観察できる。86は口縁部下に浅い沈線が数条施されたものである。破片が小さいため全容は知りえないが、上から下へ蛇行する沈線の可能性もある。

87～101は西平式土器の系統と考えられる資料である。87は口縁部断面形が「く」の字状に屈曲する山形口縁部片である。2本の沈線を基本とし、口縁頂部下に沈線と凹点がかからむ文様が施されている。口縁頂部は上面観「S」字状に押しつぶされている。やや磨耗しているため不明瞭であるが、口唇部に縄文が施されている可能性がある。88も山形を呈する口縁部片である。若干「く」の字状を呈する口縁部には2本の沈線と「ハ」の字状の凹点がみられる。口縁直下内面には凹線状の窪みがみられる。胴部には2本沈線とその間に連続刺突文が施された文様がみられる。資料はこの部分で下位は破損しているが、この文様が胴部文様帯の上端の区画を示すものと考えられる。

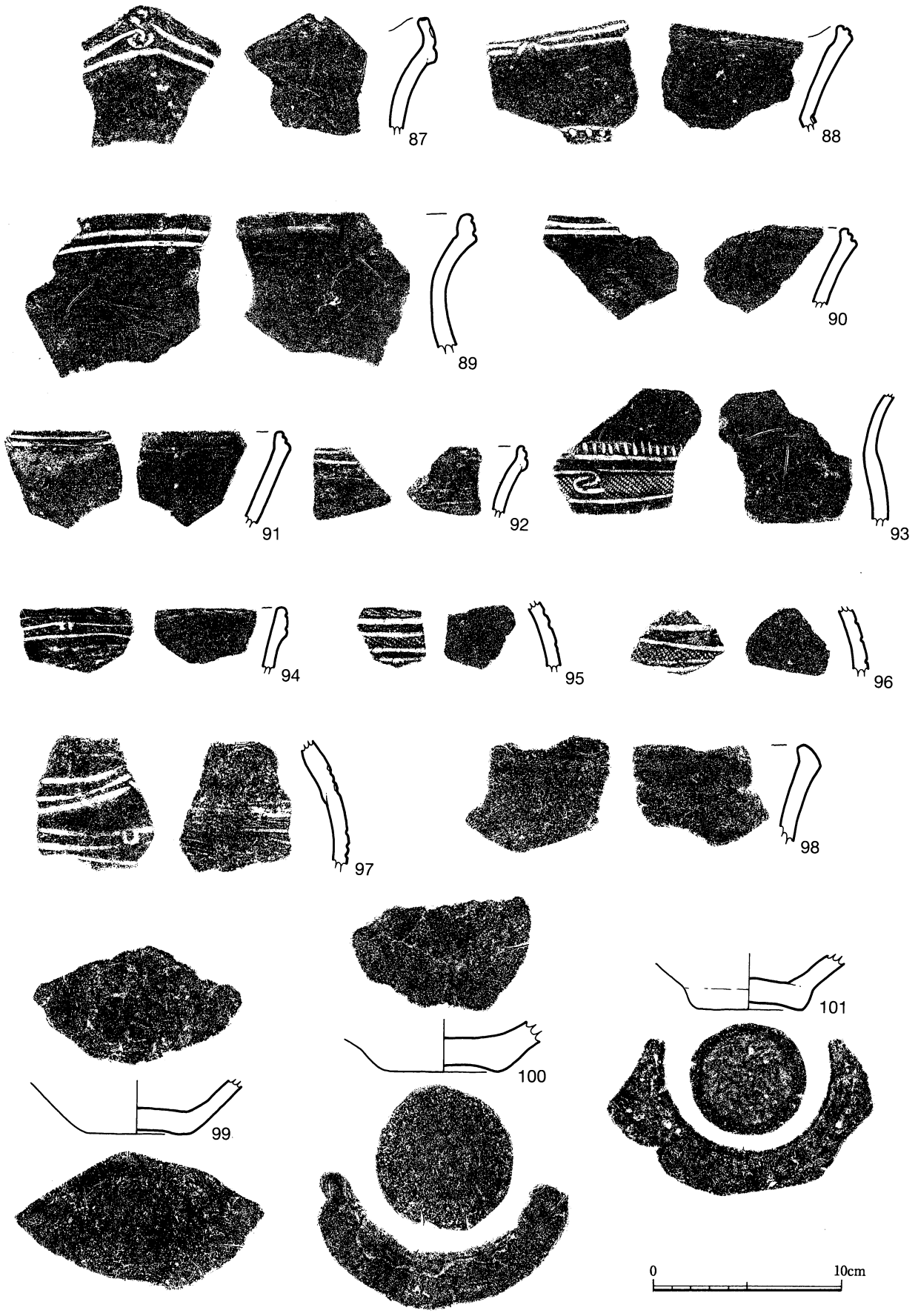
89は断面形が「く」の字状を呈する平縁口縁部片である。口縁部文様帯には2本の沈線がみられる。口縁部内面には凹線状のくぼみがみられる。90も2本の沈線を持つ口縁部片である。平縁を想定しているが、山形になる可能性もある。91と93も口縁部に2本沈線を施したものである。いずれも沈線は細く浅い。また、口縁部断面形もやや「く」の字が崩れたような雰囲気がある。93は「く」字状に屈曲する胴部片である。屈曲部内面には若干稜が見られる程度である。屈曲部外面には先端の鋭利なヘラ状工具により連続刺突文を施し、胴部文様帯の区画上端の役割を果たしている。その下位には沈線とそれに挟まれた縄文との構成で、いわゆる磨消縄文が施されている。94は断面三角形状を呈し、やや外反する口縁部である。細くて浅い2本の沈線と凹点からなる文様がみられる。95、96は磨消縄文が施された胴部片である。97は沈線と凹点で文様構成された胴部片である。胴部文様帯が上端と下端に沈線を廻らし、その間を2ないし3本の沈線が山形に繰り返しながら施されたタイプと考えられる。これは鹿屋市の中ノ原遺跡で出土していることから「中ノ原タイプ」と呼ばれる場合もある資料に類似している。ただし、本例には縄文がみられない。98は断面形が「く」の字状を呈する口縁部である。ただし、文様はみられない。

99～101は西平式土器の底部と考えられる土器である。最大の特徴は上げ底になるということ





第19図 縄文土器 (6)



第20図 縄文土器 (7)

である。

102～104は西平式系の土器であるが、口縁部が外反するものである。102と103は口唇部に近づくにつれ器壁が薄くなっている。一方104は一定の厚さを保ったまま口唇部へと伸びている。

105～114は縄文時代晩期の深鉢形土器である。105～107は入佐式土器と考えられる。大きく外反する肥厚口縁をもつもので、105は無文、106と107は3～4本の横走る沈線が施されている。沈線は浅くて細いことから入佐式土器の中では後出のものと考えられる。

108～114は黒川式土器と考えられるものである。109は口縁端部が若干肥厚するタイプである。

111は大きく外反する口縁部である。口唇部が欠けているが、若干屈曲する可能性がある。中鉢的な器形かも知れない。112は黒川式土器特有の文様で、蝶ネクタイ状の貼付文である。深鉢の肩部分と考えられる。113、114は深鉢の胴部片と考えられるものである。

115は中鉢的な土器で、口縁端部が若干肥厚し、内面に浅くて細い沈線がみられる。

116～121は縄文時代晩期の浅鉢形土器である。116はやや外側に開く口縁部をもつもので、口縁部文様帯に2本の沈線がみられる。117～119は入佐式土器の浅鉢である。大きく外へ開く口縁部で、口縁端部内外に浅くて細い沈線がみられる。120と121は黒川式土器である。入佐式土器と同様に口縁端部内外に浅くて細い沈線がみられるが、頸部が長い入佐式土器に対し黒川式土器のそれは短くなる傾向がうかがえる。

122、123は円盤形土製加工品、いわゆるメンコである。122は胴部片、123は底部片を利用している。123の底部片利用のものには、磨耗が激しく不明瞭であるが、網代の痕跡が観察できる。

## (2) 石器 (第23～29図 124～170)

縄文時代の石器と考えられるものとして、石鏃や磨製石斧・スクレイパーなどが出土した。

124～136は打製石鏃で13点出土した。完形品が3点と少ないため、石鏃の形態についての詳細は不明であるが、おおむね凹基式と考えられる。石材は125・128・130・133・136はチャート、126・127・131・134が頁岩、132・135が黒曜石（腰岳産か？）である。

137と138は石匙である。2点出土した。137が横型で鉄石英製、138が縦型で黒っぽいチャート製である。

139は石錐と考えられるものである。黒曜石製で、長さ4mmのドリル部を作り出している。

140～152はスクレイパーである。出土したスクレイパー15点のうち13点を図化した。

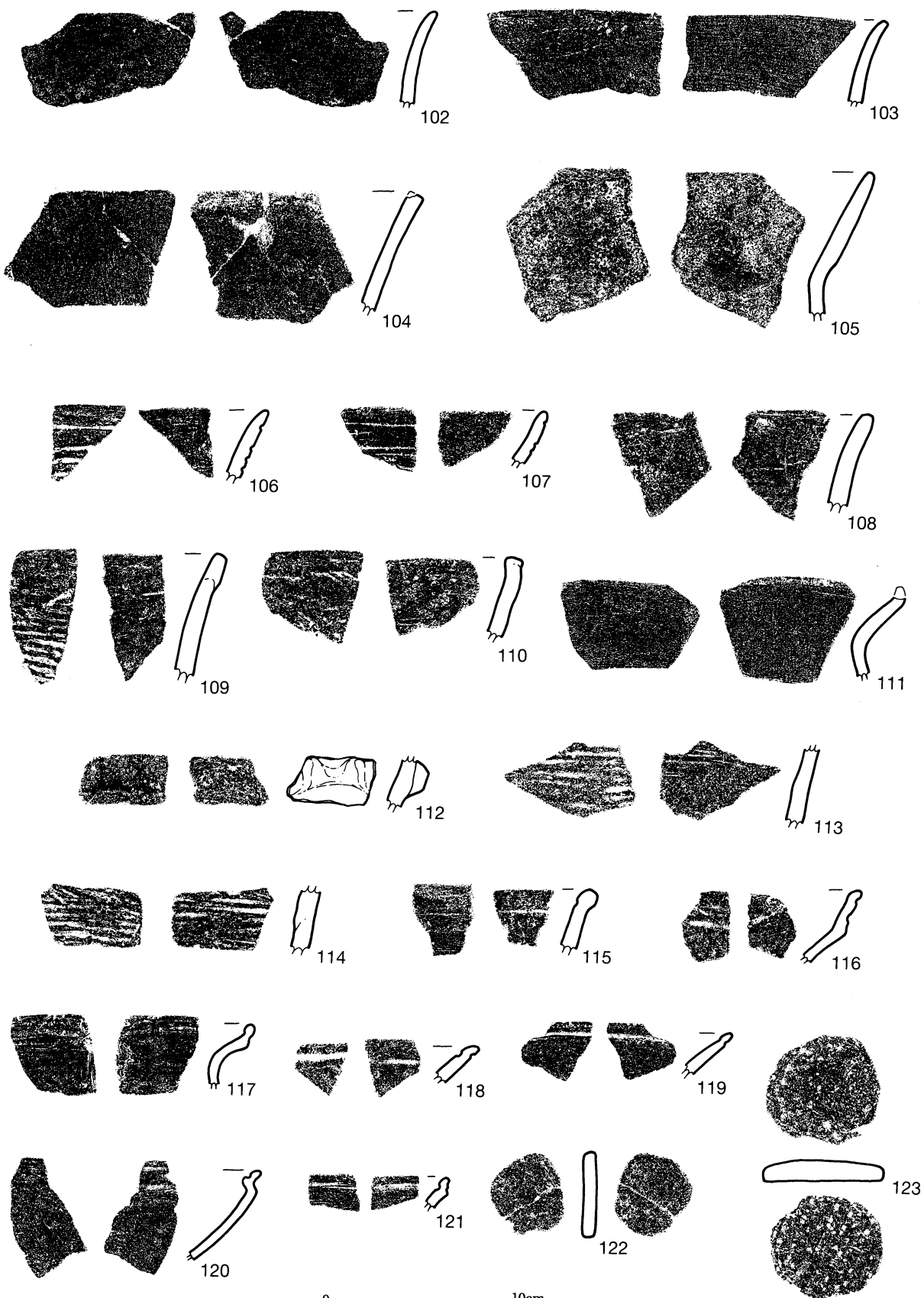
140・141・145・148・149・151は黒曜石製、142・143・146・150・152が珪質頁岩製、144が玉髓製、147がチャート製である。

153～155は使用痕のある剥片で、いずれも黒曜石製である。

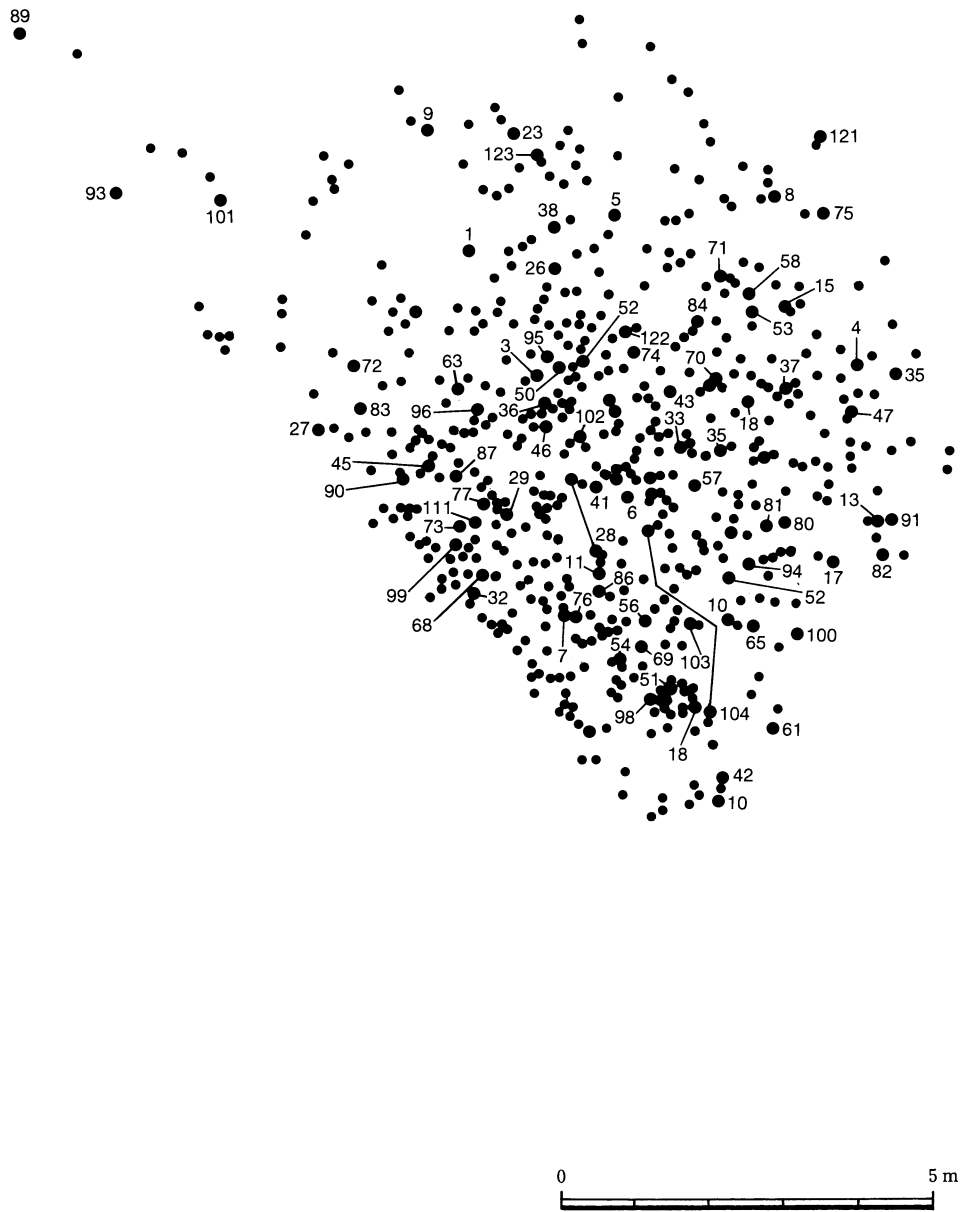
156は研磨痕のある横長剥片である。粘板岩製で表面に鉄分が付着している。

157・158は磨製石斧である。ともに頁岩製である。157は基部を、158は基部と刃部の多くと両側辺部を欠いている。

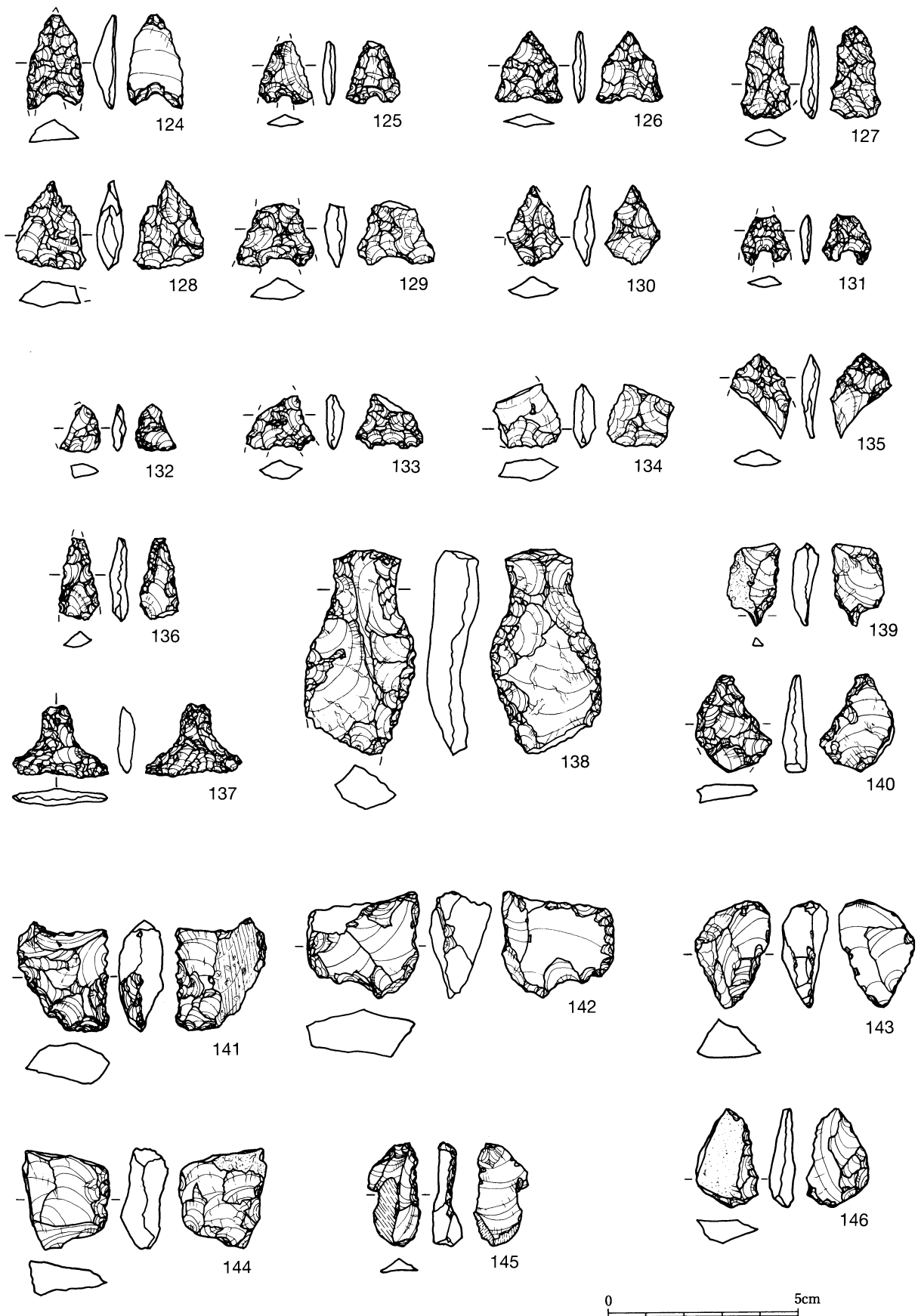
159～161は打製石斧である。159は刃部を欠いた粘板岩製の打製石斧である。160は刃部のみのホルンフェルス製打製石斧で、一部に研磨痕跡がみられる。161はほぼ完形の打製石斧で粘板岩の横長剥片を利用したものである。ローリングのせいか全体的に磨耗している。



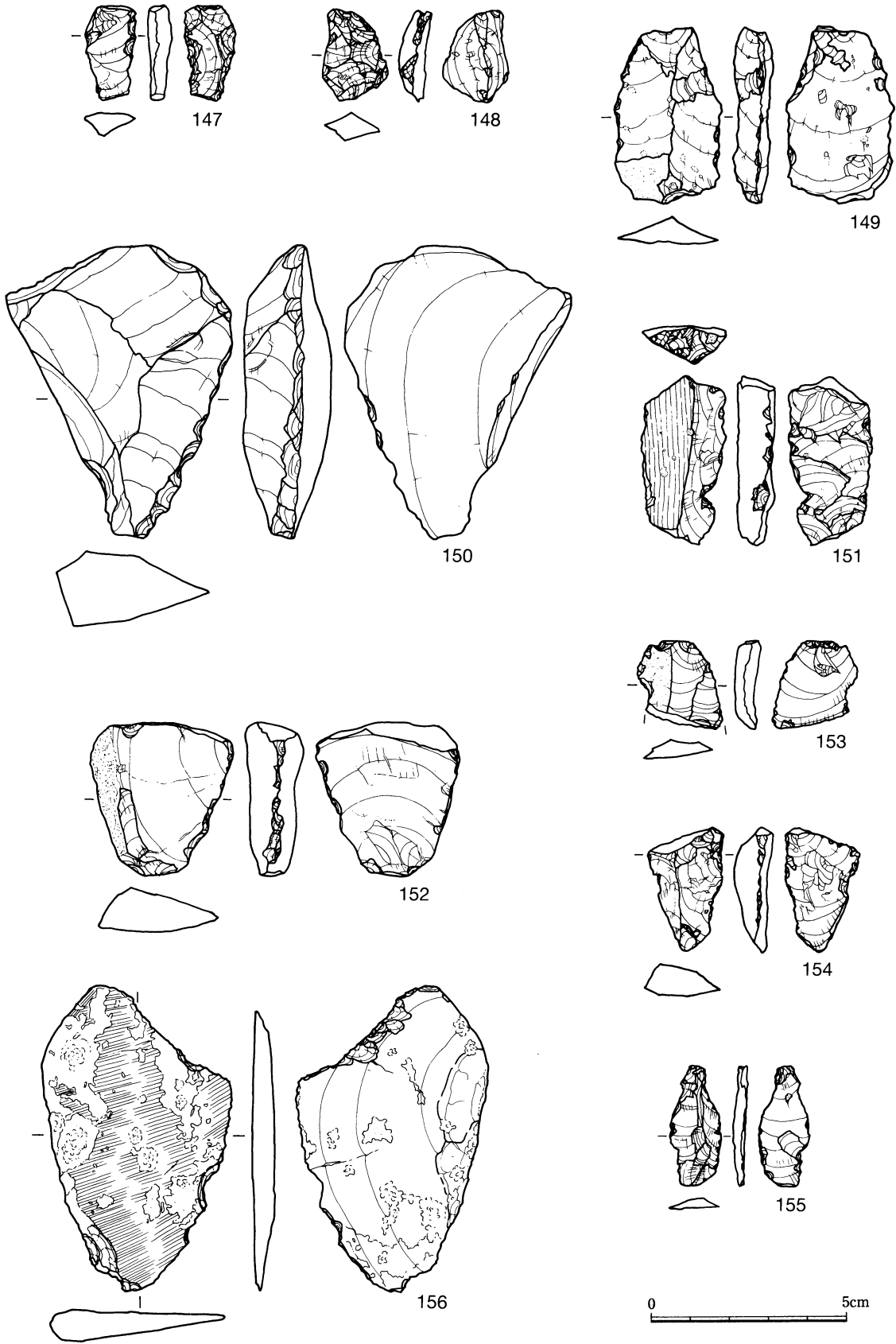
第21図 縄文土器 (8)



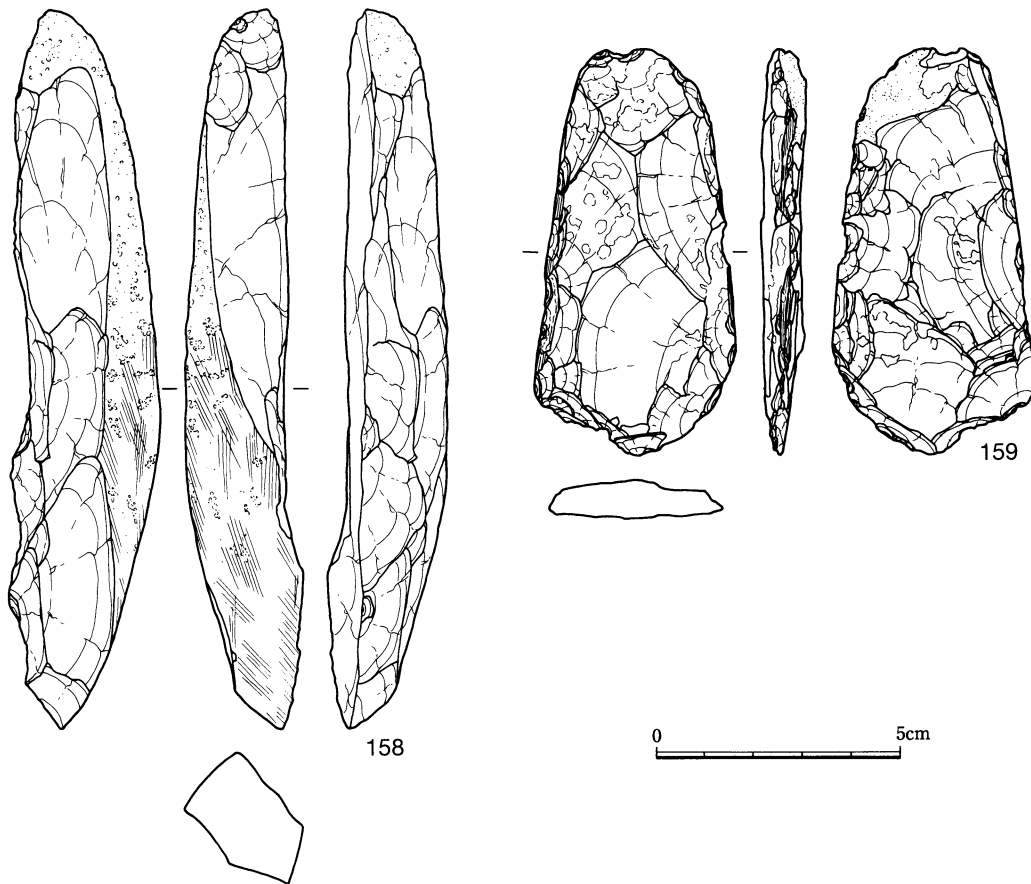
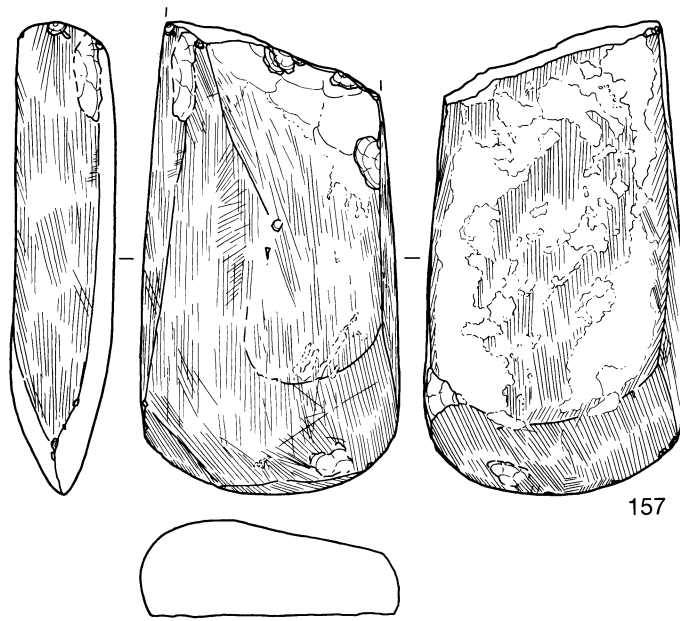
第22図 第2トレンチ遺物出土状況図



第23图 石器 (1)

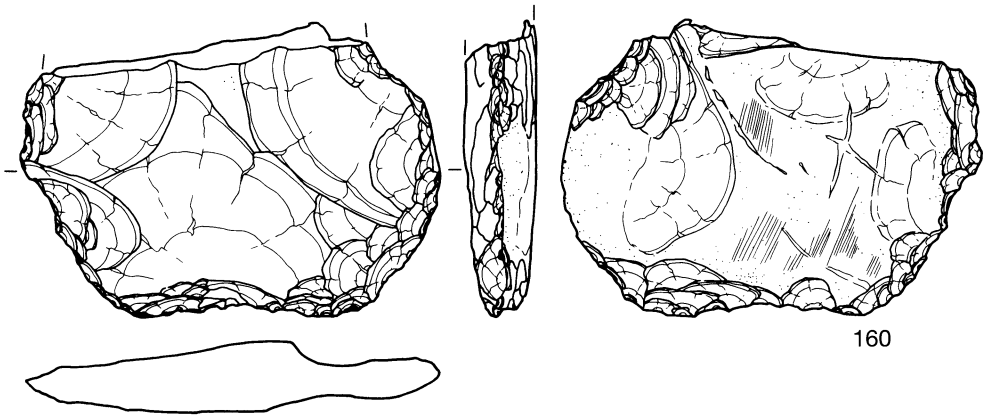


第24図 石器 (2)

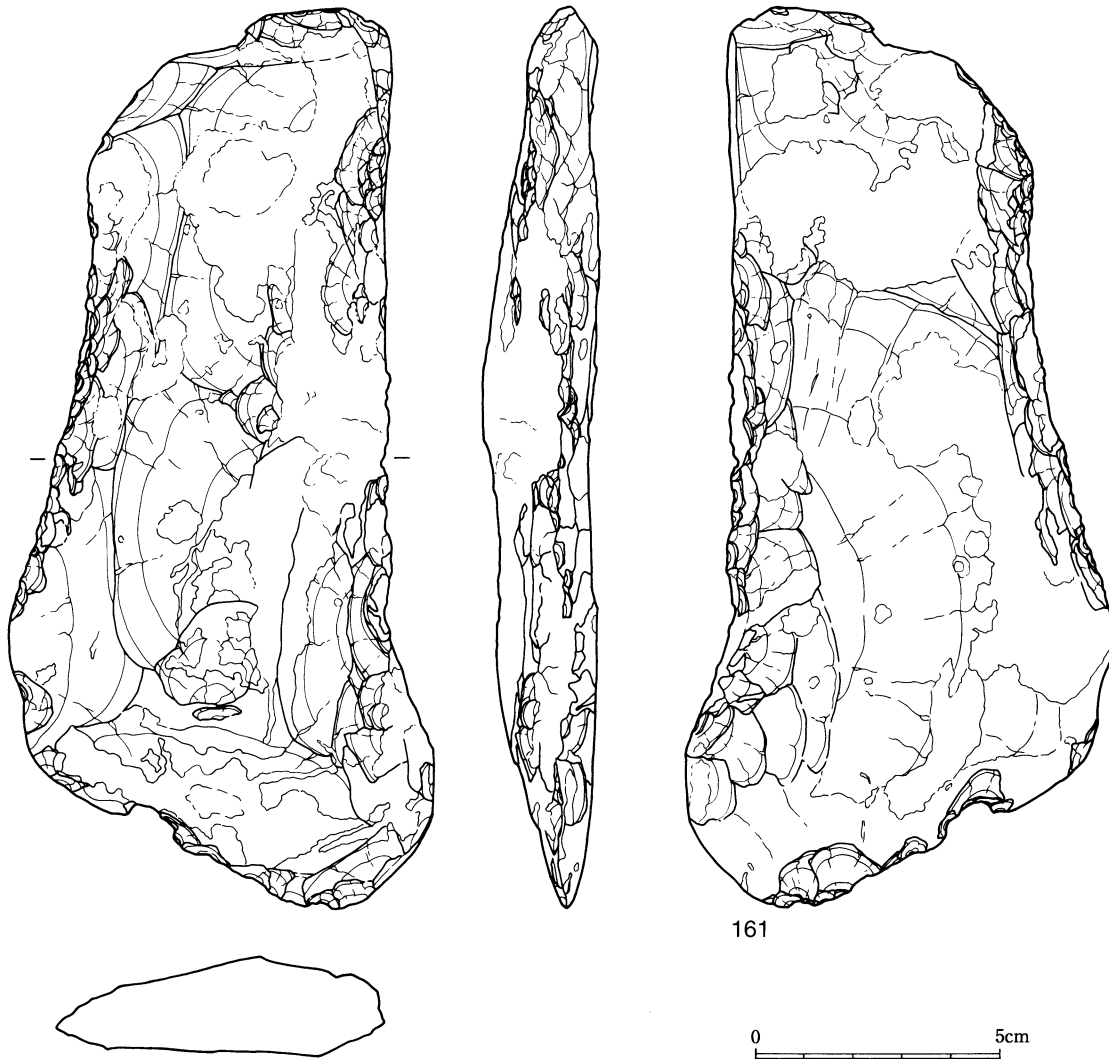


第25図 石器 (3)





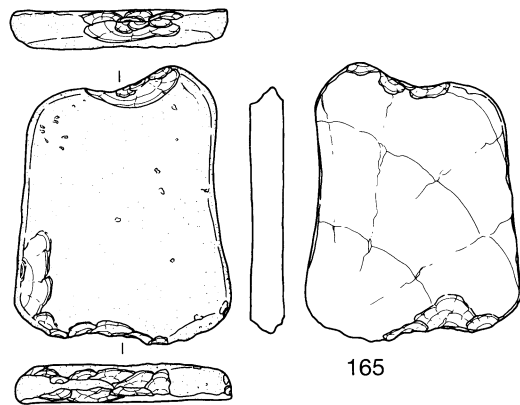
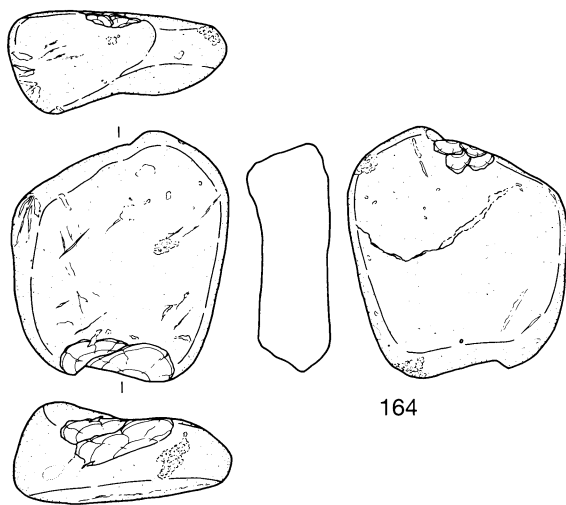
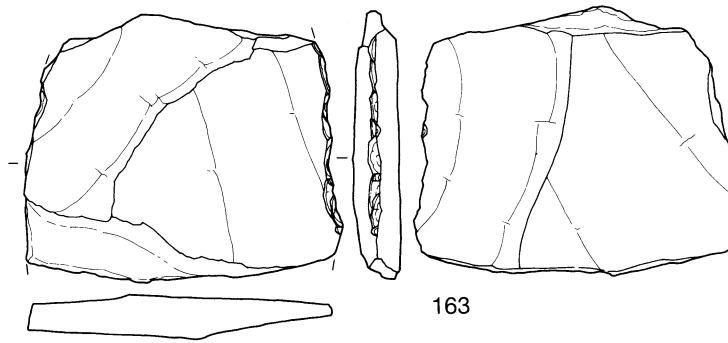
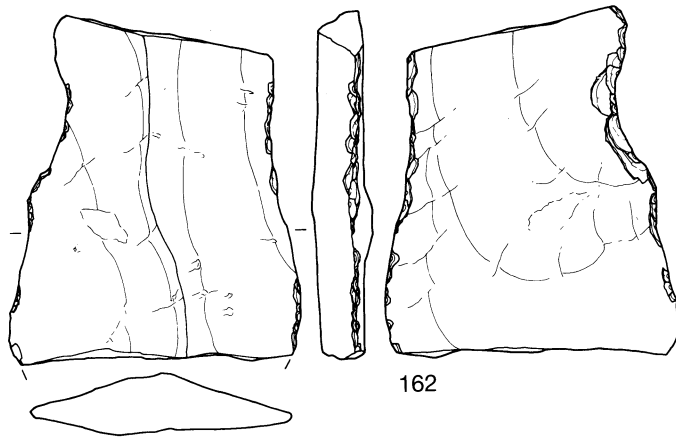
160



161

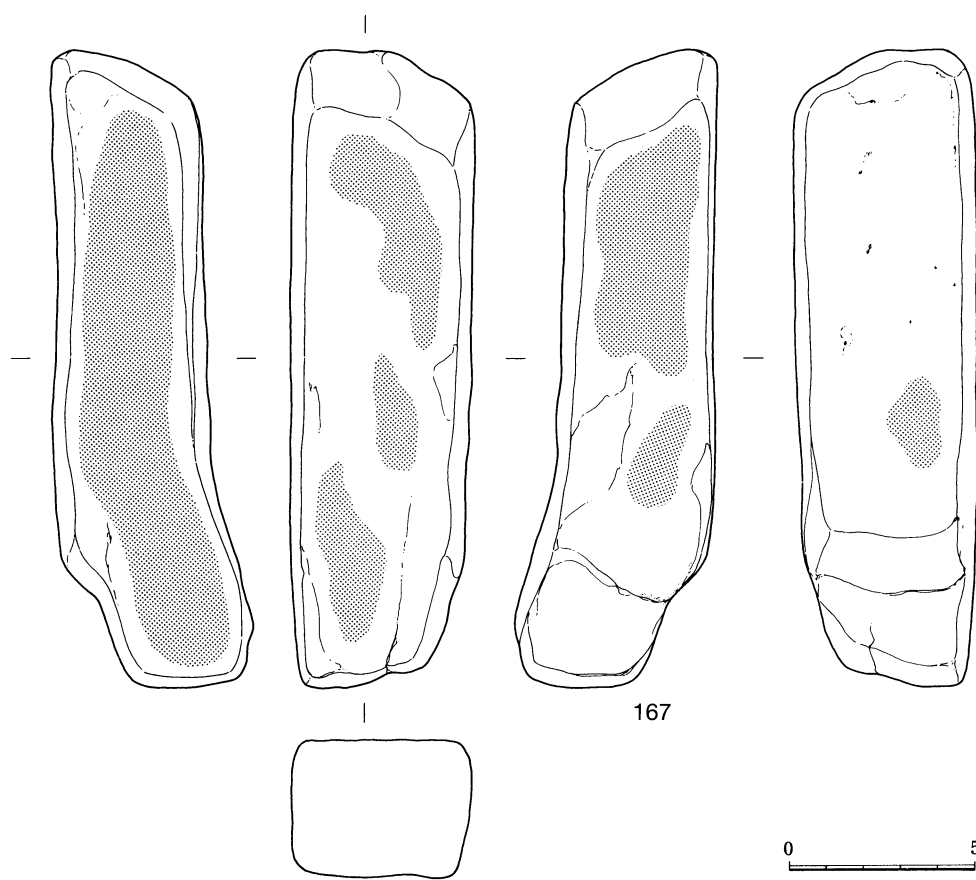
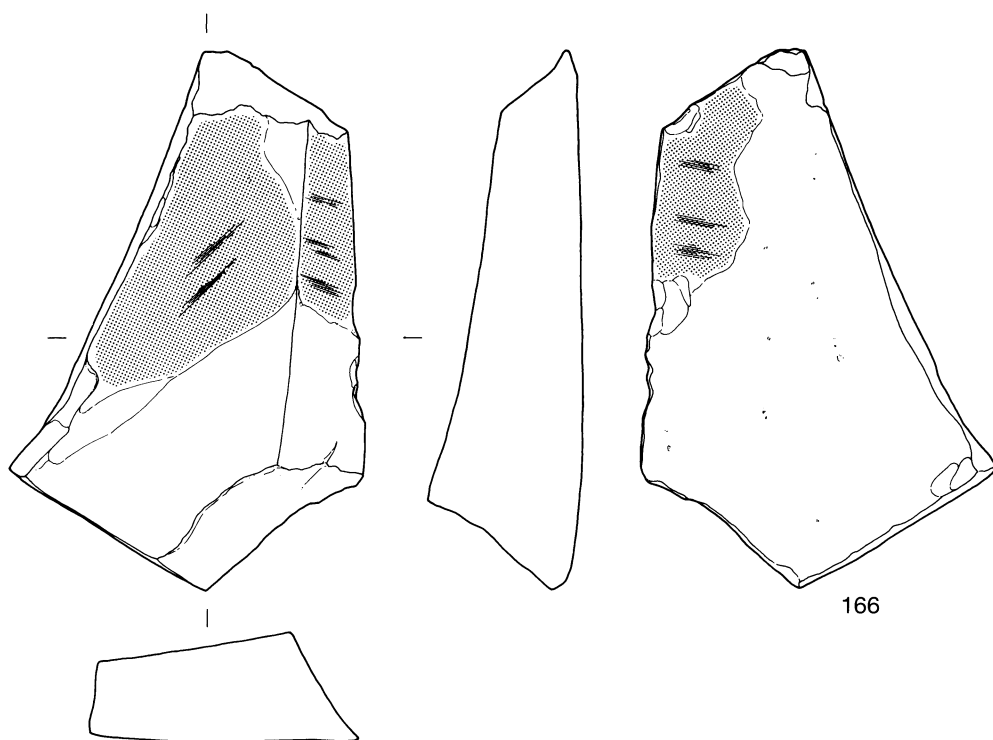
0 5cm

第26図 石器（4）

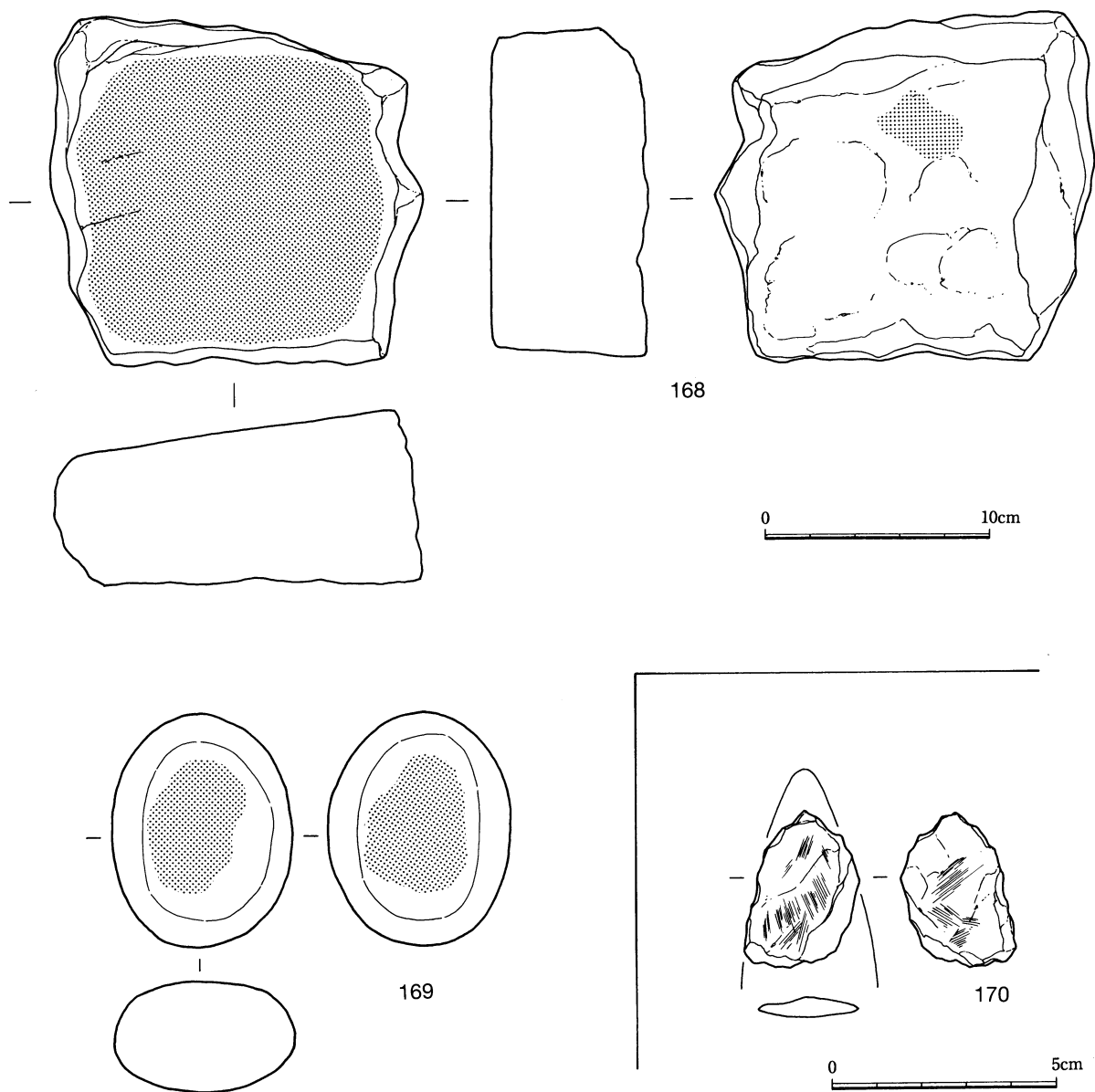


0 5cm

第27図 石器 (5)



第28図 石器 (6)



第29図 石器（7）

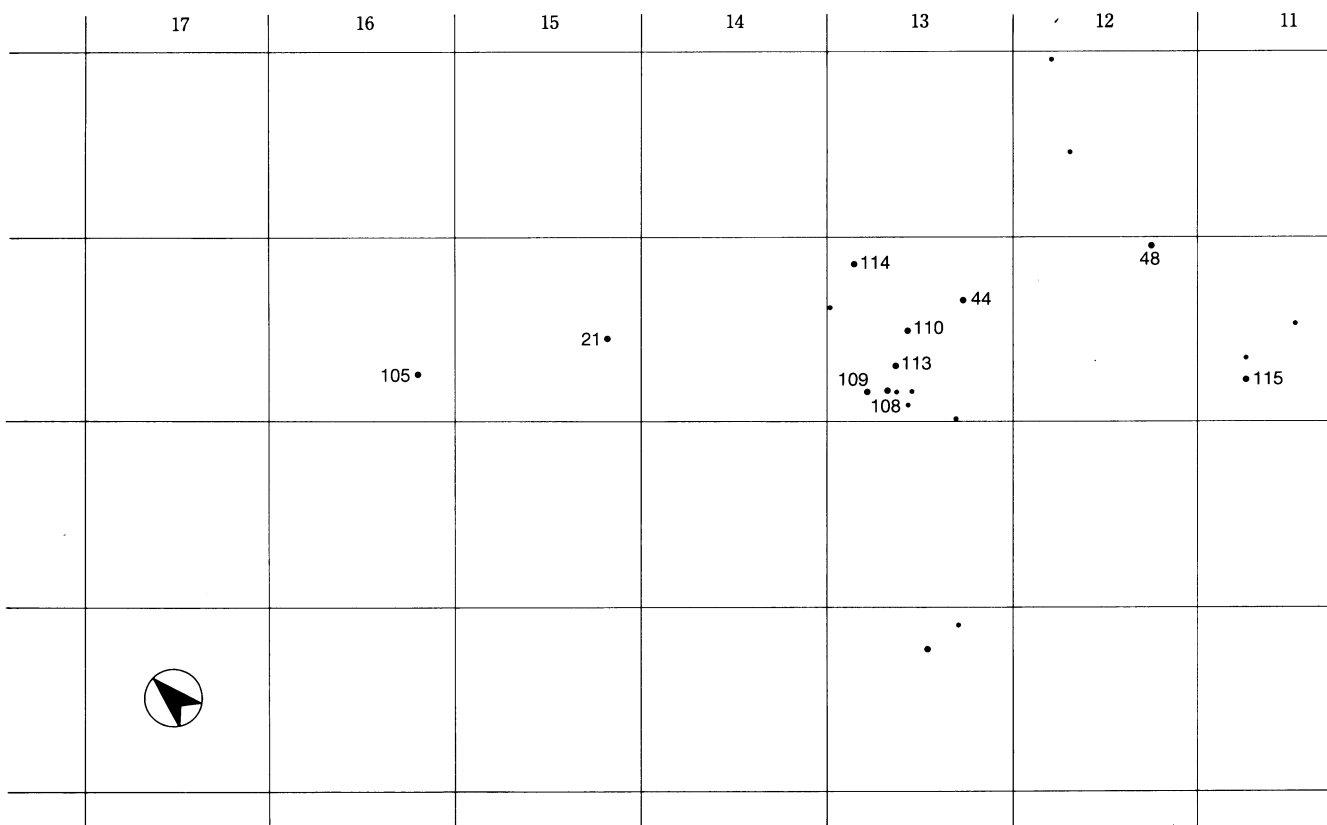
162・163は横長剥片の側辺に加工痕をもつ剥片石器である。安山岩製でいずれも全体的にローリングを受けている。

164・165はいずれも安山岩製の石錘である。164は自然円礫の窪みを巧みに利用して2か所に抉りを作り出している。165は扁平な礫を使用し抉りを2か所もうけている。いずれも縦型である。

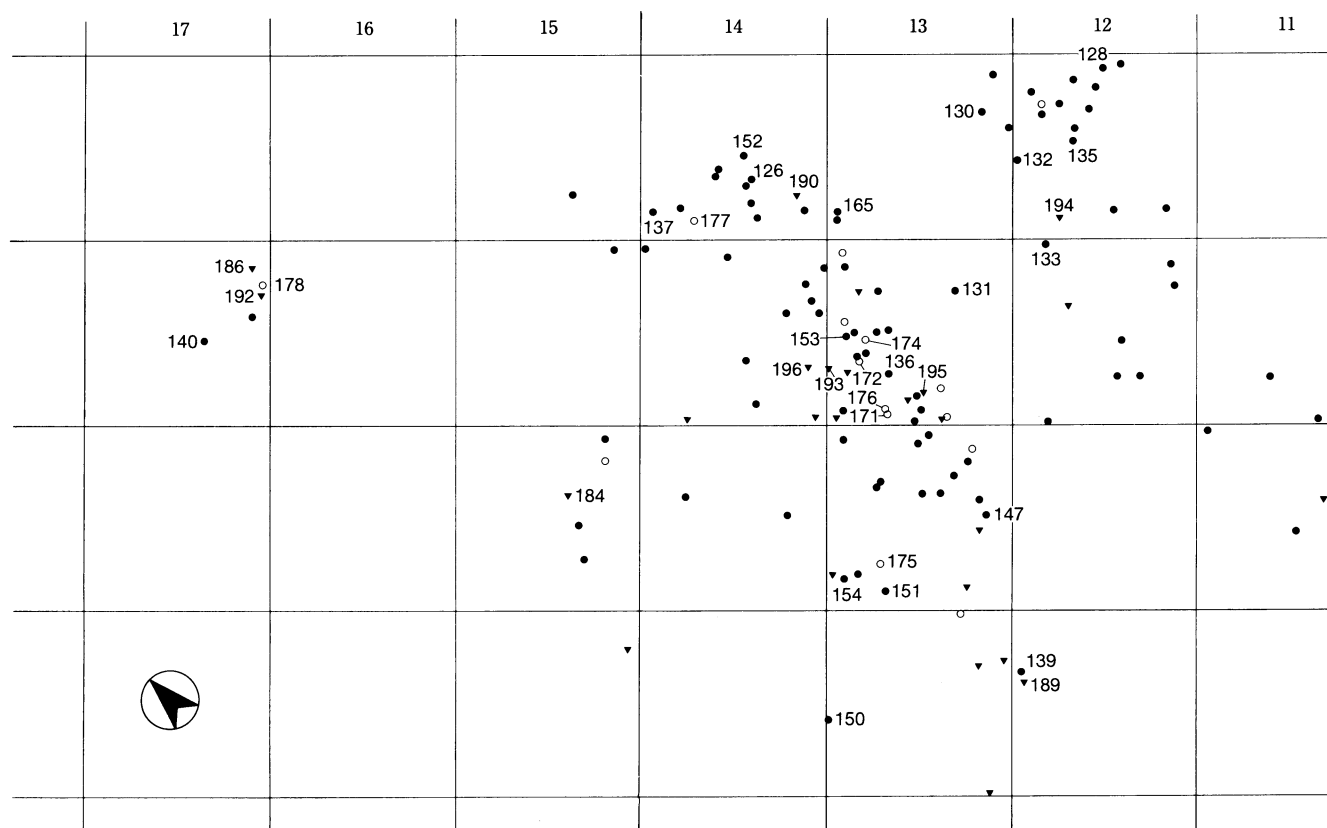
166・167は砥石状の石器である。3～4面に研磨痕（擦痕）がみられる。いずれも安山岩製である。

168は安山岩製の石皿である。扁平な2面に擦痕がみられるが、そのうちの1面は剥落が目立つ。加熱による現象とも考えられる。

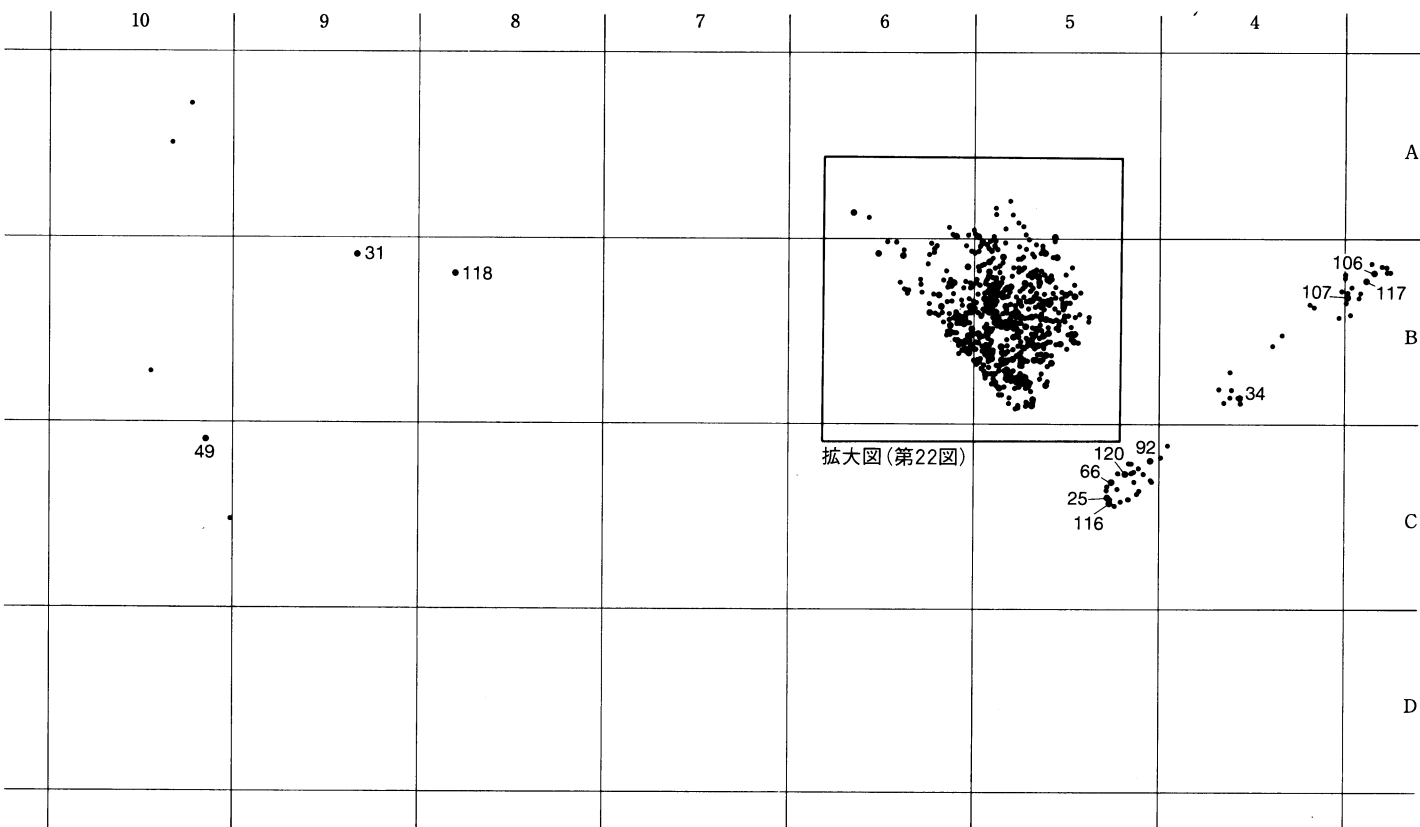
169は砂岩製の磨石である。2面に擦痕がみられる。



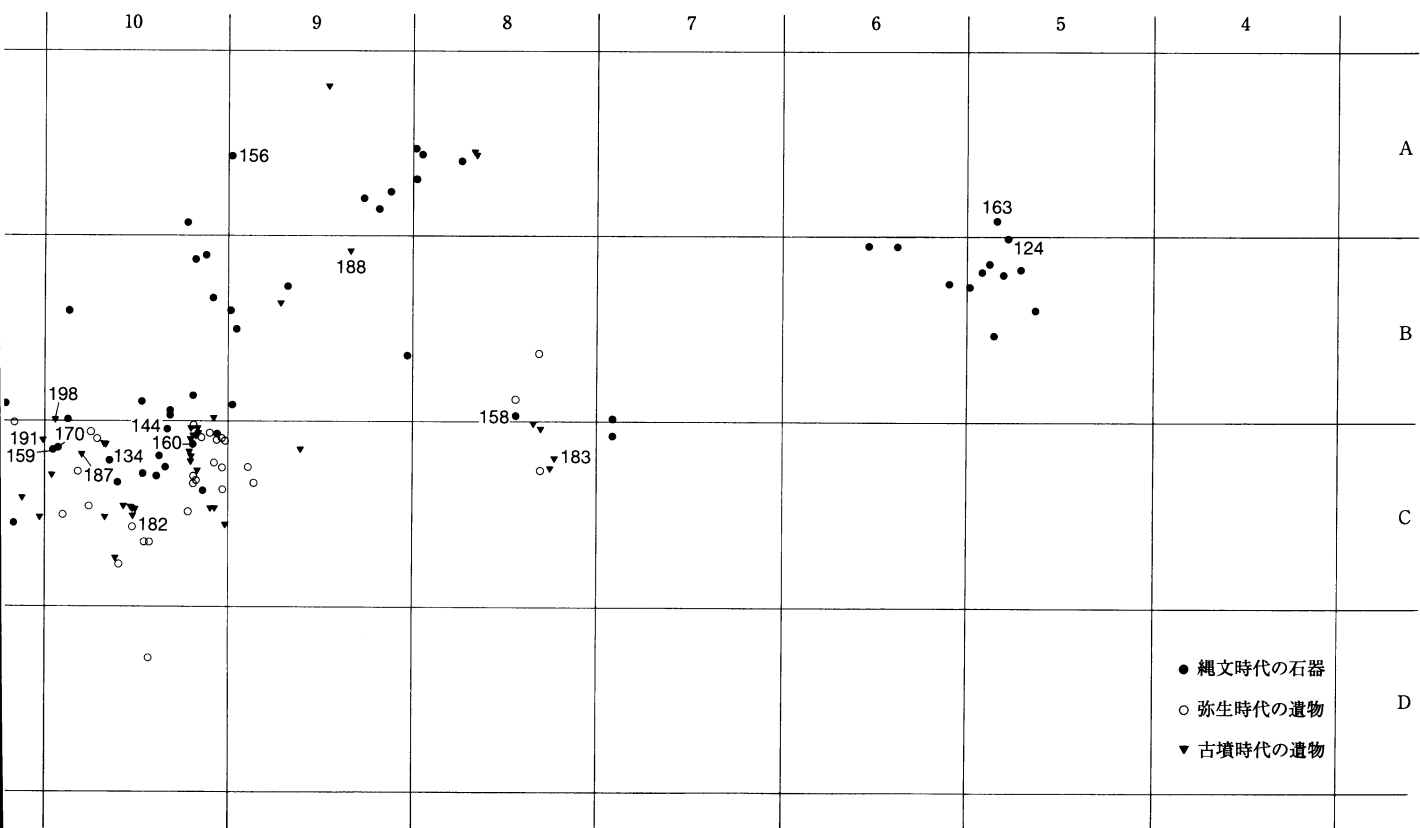
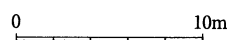
第30図 縄



第31図 縄文時代



文土器の出土状況図



の石器ほかの出土状況図

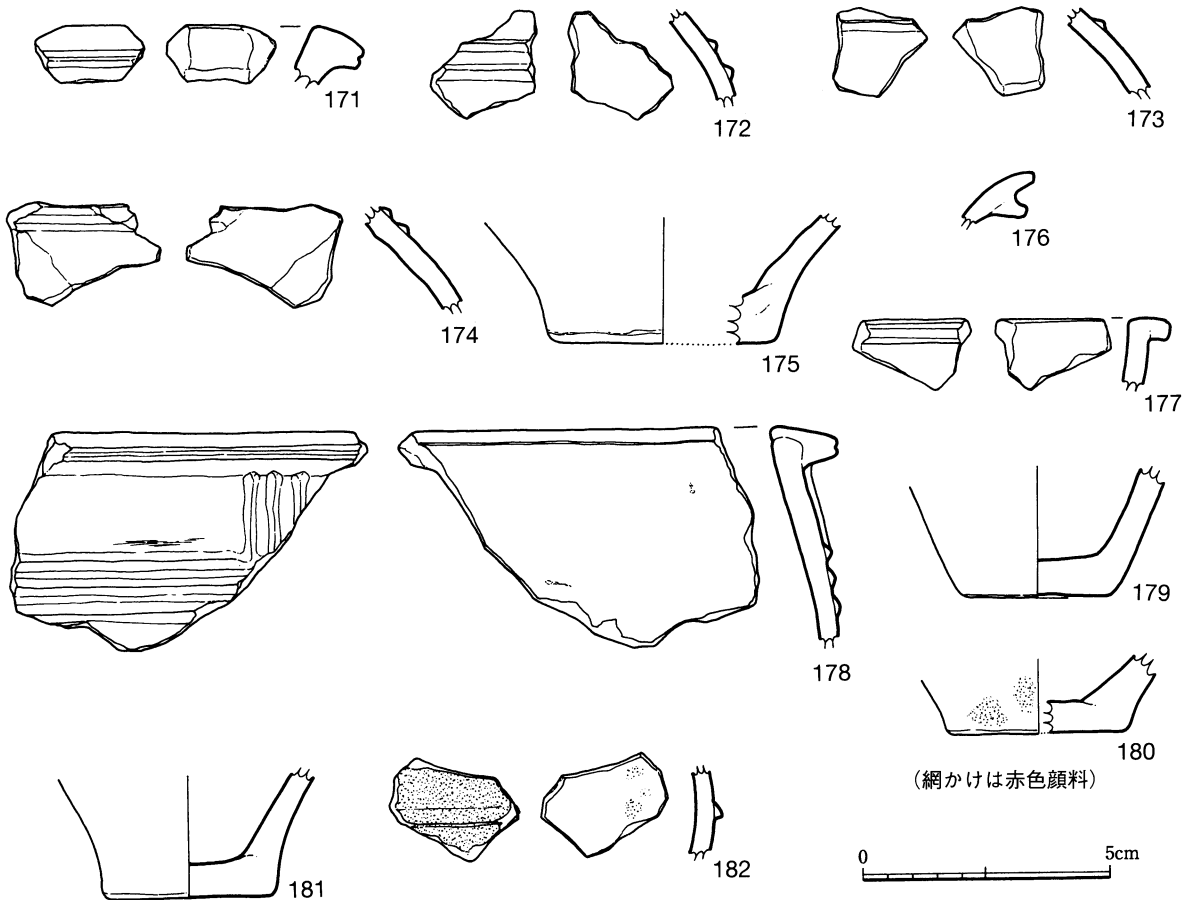
## 2 弥生時代（第32図 171～182）

弥生時代のものと考えられるのは土器がほとんどであるが、第29図の170は、前述のように弥生時代の磨製石鏃である可能性が高い。

171～176は壺形土器と考えられるもので、176のみが後期であるとは中期中葉ころのものと考えられるものである。171の口縁部は小片ながら口唇部が「M」字状にくぼむ特徴が明瞭に残るものである。172～174は断面三角突帯を有する肩部である。172・174は2条、173は1条の突帯を有しているが、172を除き実際の本数はまだ増えそうである。175は底部である。胴部へ大きく広がる様子がうかがえる。176の口縁部は二叉状口縁で、前述のように壺形土器の中ではこの1点だけが後期の所産と考えられる。

177～181は甕形土器で、いずれも中期中葉のものと考えられるものである。177は口縁部が「L」字状を呈する土器である。口唇部に沈線状のくぼみはみられない。178はやや垂れ下がり気味の口縁部をもつ資料である。口唇部には171と同様な「M」字状の沈線がみられる。口縁部下に3条の三角突帯が縦横に貼付されている。179～181は底部片である。180については壺形の可能性もある。

182は壺形土器の胴部片である。やや垂れ下がり気味の三角突帯が貼付されている。最大の特徴は器表面全体と内面の一部に赤色顔料が施されていることである。黄白色の色調と胎土の緻密さから須玖式土器である可能性もある。



第32図 弥生時代の土器

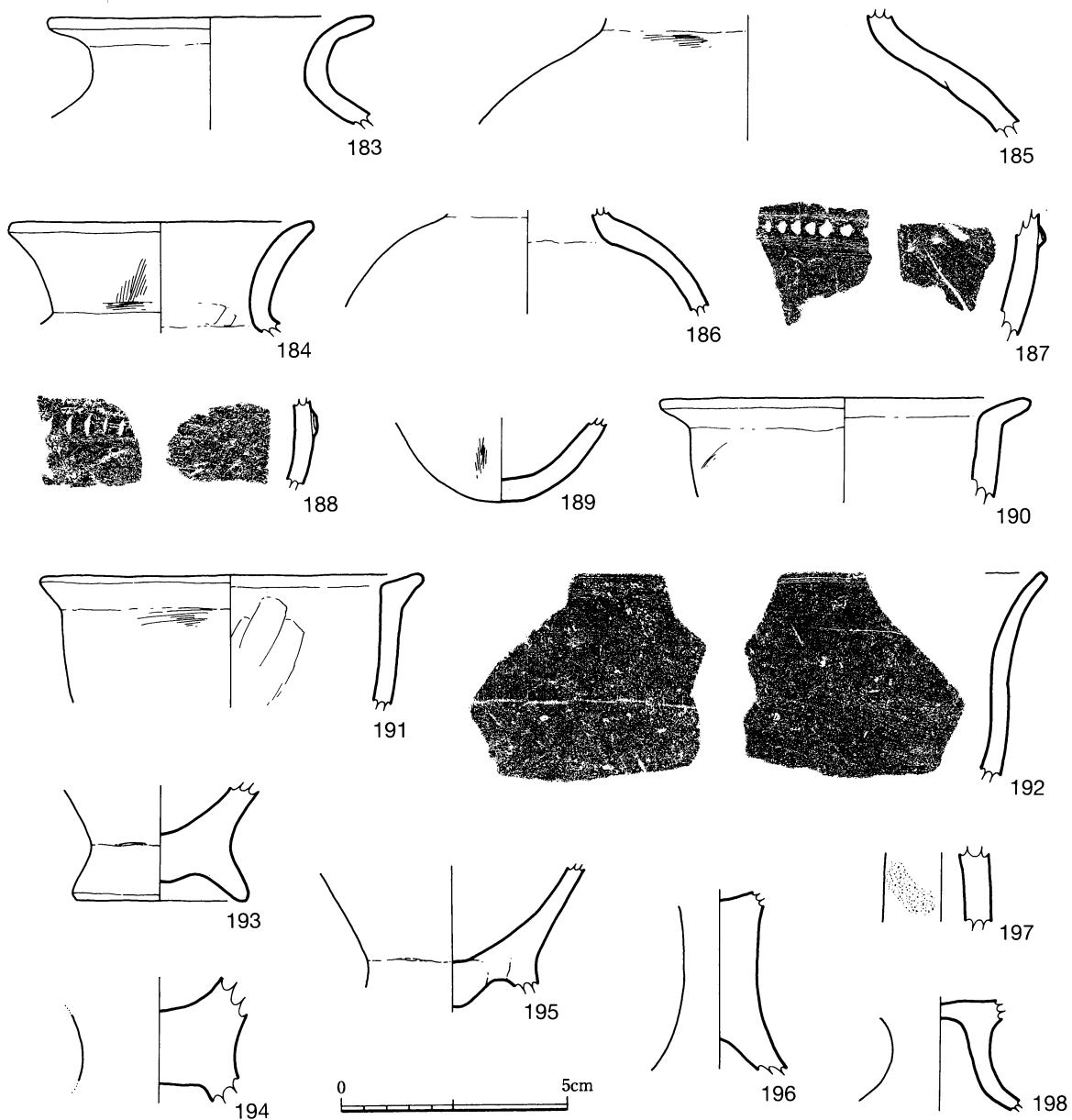
### 3 古墳時代（第33図 183～198）

古墳時代と考えられる遺物は土器のみであった。

183～189は壺形土器である。183と184は口縁部で、184は肩部との間に明瞭な段を有している。185と186は肩部から胴部にかけての資料である。187と188は最大径部分の胴部片である。形状は異なるがいずれも刻目突帯が施されている。189は丸底の底部片である。

190～195は甕形土器である。190～192は口縁部片であるが、192が緩やかに外反する口縁部であるのに対し、前二者は「く」字状の形状を呈し、内面にある程度の稜線を残していることからやや古い様相と考えられる。193～195は上げ底を呈する底部片である。

196～198は高坏形土器である。196と197は脚部で、198は坏底部から脚部のみの資料である。197の器表面の一部には赤色顔料が認められる。



第33図 古墳時代の土器

（網かけは赤色顔料）



## 4 古代

本遺跡の調査で、最も多くの資料を提供してくれたのが古代のものであった。これらのうち、遺構は調査区上段のB地区で検出されたが、遺物については上段とともに下段でも多く出土した。また、調査区の北側にあたる現九州縦貫自動車道方面から流れていたと考えられる自然流路内からも多くの遺物が出土した。

### (1) 遺構

古代の遺構としては、掘立柱建物跡5棟、土坑3基、溝状遺構4条、礫敷溝状遺構1条、柱穴状ピット多数が検出された。前述のように遺構は上段のB地区で検出された。上段の中でも比較的残りのよいA～B-7～11区付近に集中して検出されたが、後世の削平さえなければ、まだまだ遺構の広がりがあったものと考えられる。また、遺構の配置からや検出レベルから判断して、北側の九州縦貫自動車道下にも確実に延びていくものと考えられる。

#### ① 掘立柱建物跡（第35～39図）

5棟の掘立柱建物が確認できた。建物跡の軸はすべて東西南北にほぼ沿った状況で検出された。建物跡としたものの中には、想定される位置に柱が検出されなかった例も多い。もともと無かったのか、何らかの理由で消滅したのかは不明であるが、建物のあるベースが砂地であることも考慮しなければならない。

今回の掘立柱建物跡検出に際しては、偶然の産物的な状況もあり、遺構検出の難しさを改めて確認することとなった。

当初、本遺跡で掘立柱建物跡として認識していたのは、「5 中世～近世」の項目で述べる中世の1棟のみであった。しかも、この遺構を構成する柱穴の一つから、埋納品と考えられる完形の土師器が出土したことも、遺構（建物跡）としての認識を早い段階で得るきっかけとなっていたのであった。

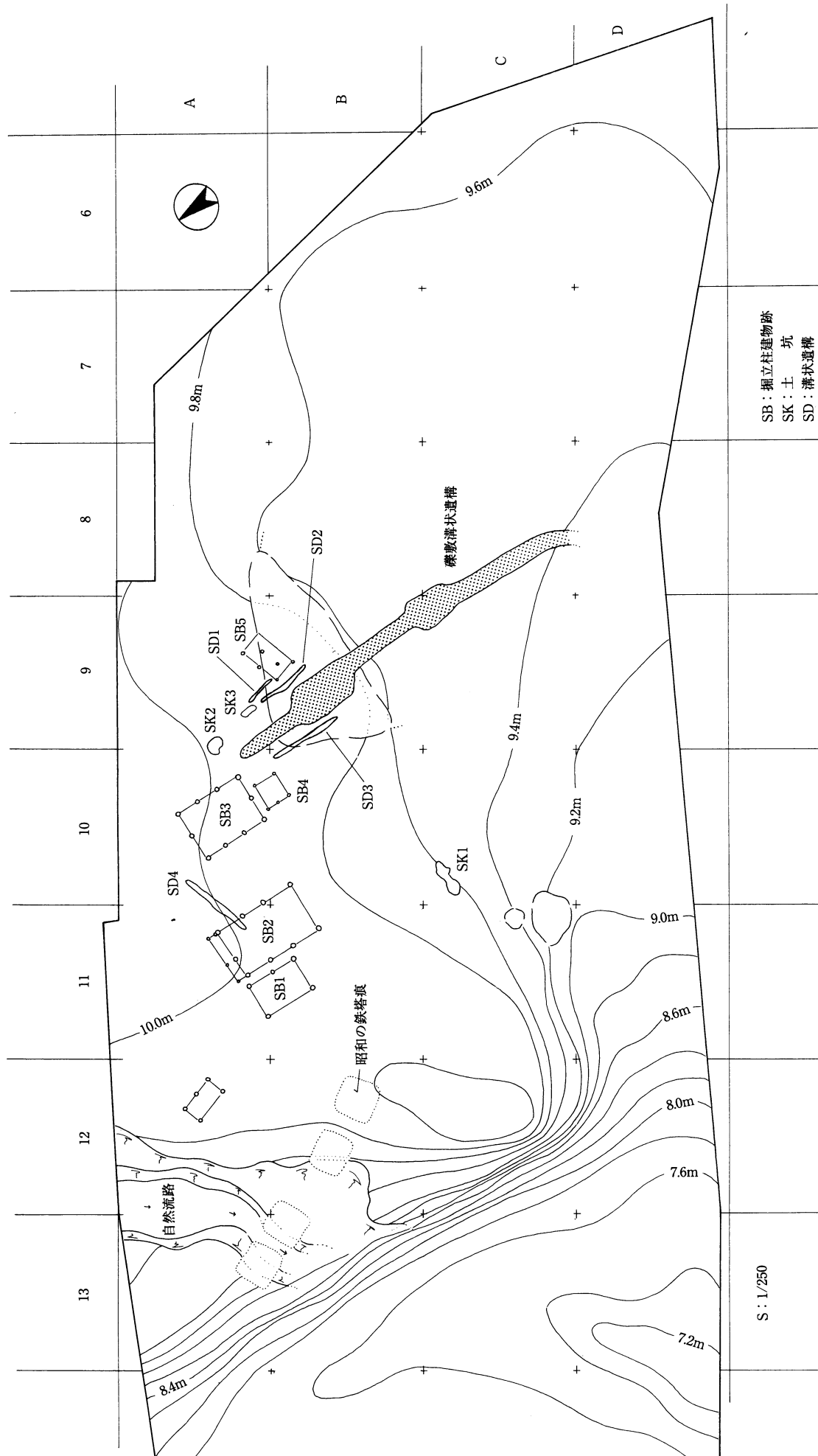
古代の遺構検出面は、おおむね高井田の台地を形成している砂礫層（第7層）および灰白色砂質層（第6層）であった。今回の遺構検出にあたり、特に砂質層の特性が大きな鍵を握っていた。はじめ、夏場の激しい太陽光の中で乾燥の著しかった砂質層には、とても遺構の存在など想像すべくもなかった。ところが、これもまた夏特有のスコールの急襲する雨が大地を濡らしたことによって、歴史の証人を鮮やかによみがえらせたのである。しかも、それはまもなく乾燥するために、数十分間の蘇生でしかなかったのである。

雨にぬれ、かつ乾きが始まり、やがてすべてが乾燥するまでの数分間が勝負であった。いくつかの柱穴状ピットが捉えられたことにより、建物跡の存在を想定できることとなり、随時水撒きをしながらの精査結果、4棟の掘立柱建物跡を検出できたのである（残りの1棟は、礫集中遺構を取り除いたあとに検出）。

今回の教訓は、砂（質）層における遺構検出法について、一つの示唆を与えてくれる結果となった。検出面の状況によって、検出のポイントが多少異なることは当然といえば当然である。調査者は、それらをすばやく読み取りかつ順応する心構えが必要となる。

#### a) 掘立柱建物跡1（第35図）

5個のピットからなる建物跡で、A～B-11区で検出された。掘立柱建物跡2の西側に位置し



第34図 古代の遺構配置図(1)

ている。基本的には1間×2間の建物跡であるが、西側中央の柱はなく、変則的配置となっている。柱間はP1-P2間が2.35m、P2-P3間が1.75m、P3-P4間が1.75m、P4-P5間が2.35m、P5-P1が3.6mであった。

ピットの直径は30cm～45cmで、検出面からの深さはおおむね20cm程度であった。

#### b) 掘立柱建物跡2 (第36図)

15個のピットで構成された建物跡で、A-11区を中心に検出された。掘立柱建物跡1の東側に位置している。基本的には2間×3間の建物であるが、北側に庇をもち南側がやや変則的な柱配置をみせる。

柱間はP1-P2が1.4m、P2-P3が2.08m、P3-P4が2.0m、P4-P5が1.54m、P5-P6が2.25m、P6-P7が3.4m、P7-P8が1.78m、P8-P9が1.9m、P9-P1が1.85mを測る。

また、北側の庇部分はP10-P11が1.35m、P11-P12が2.1m、P1-P10、P2-P11、P3-P12がそれぞれ0.7m、0.65m、0.8mを測る。

さらに南側の変則的な配置を見せるP13～P15の柱間については、それぞれ1.2m、1.06mを測る。

ピットの直径は20cm～30cmで、検出面からの深さはおおむね30cm程度であった。P3は北側に広がりを見せることから柱の抜き取り痕である可能性が高い。

#### c) 掘立柱建物跡3 (第37図)

10個のピットで構成された2間×3間の建物跡で、A-10区で検出された。掘立柱建物跡1及び2とほぼ平行している。

柱間はP1-P2が1.72m、P2-P3が1.6m、P3-P4が1.58m、P4-P5が1.58m、P5-P6が1.56m、P6-P7が1.72m、P7-P8が1.52m、P8-P9が1.6m、P9-P10が1.48m、P10-P1が1.48mを測る。

ピットの直径は20cm～40cmで、四隅のピットが比較的大きい傾向がうかがえる。検出面からの深さは15cm～20cmと浅い。

#### d) 掘立柱建物跡4 (第38図)

掘立柱建物跡3のすぐ南側(A～B-10区)でほぼ平行して検出されたものである。6個のピットで構成されているものとして取り上げたが、1間×1間をベースとして考えたほうが良さそうである。西側柱列の中央にある1本と東側の柱列の外側にある1本が、それぞれ棟持柱としての役割を担っていた可能性もある。

柱間は、P1-P2が1.78m、P2-P4が1.5m、P4-P5が1.68m、P5-P6が0.84m、P6-P1が0.8mを測る。また、棟持柱の可能性のあるP3とP6の柱間が2.44mであった。

ピットの直径は20cm～30cmで、検出面からの深さは20cm～40cmであった。

#### e) 掘立柱建物跡5 (第39図)

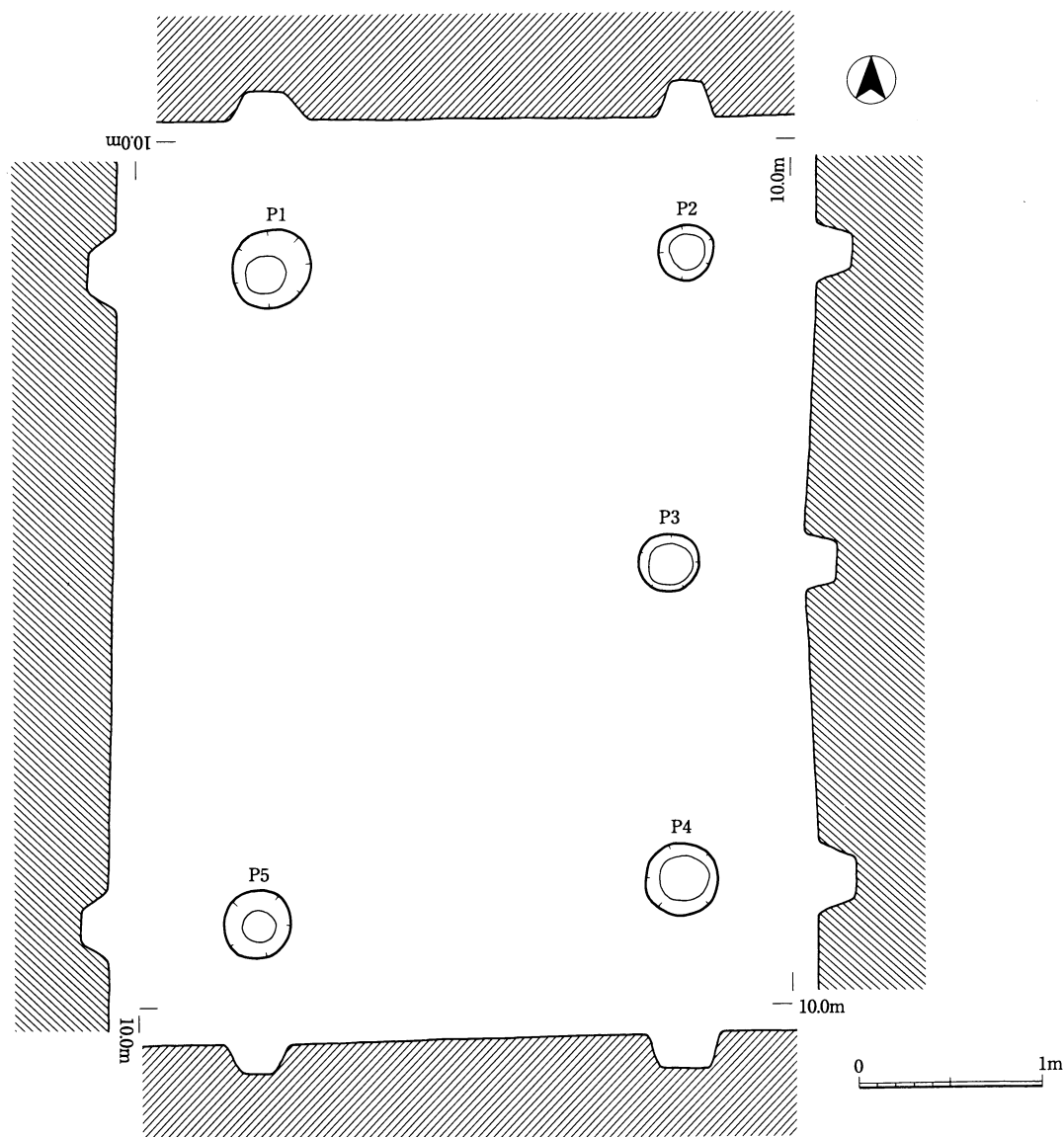
A～B-9区で検出されたもので、6個のピットで構成されている。しかし、想定している建物を1間×1間として捉えると、柱が2本不足することになる。ここでは、砂地がベースとなっているということも考慮して、本来は存在したものとして取り扱うことにする。

この建物にはもう一つ特徴がある。建物の内部に2個のピットが存在することである。しかもこれらからは、鶏卵大から拳大の礫が集中して出土した。いずれもピット底面にはなく、やや浮いた状態で検出されている。床を支える柱である可能性も考えられよう。

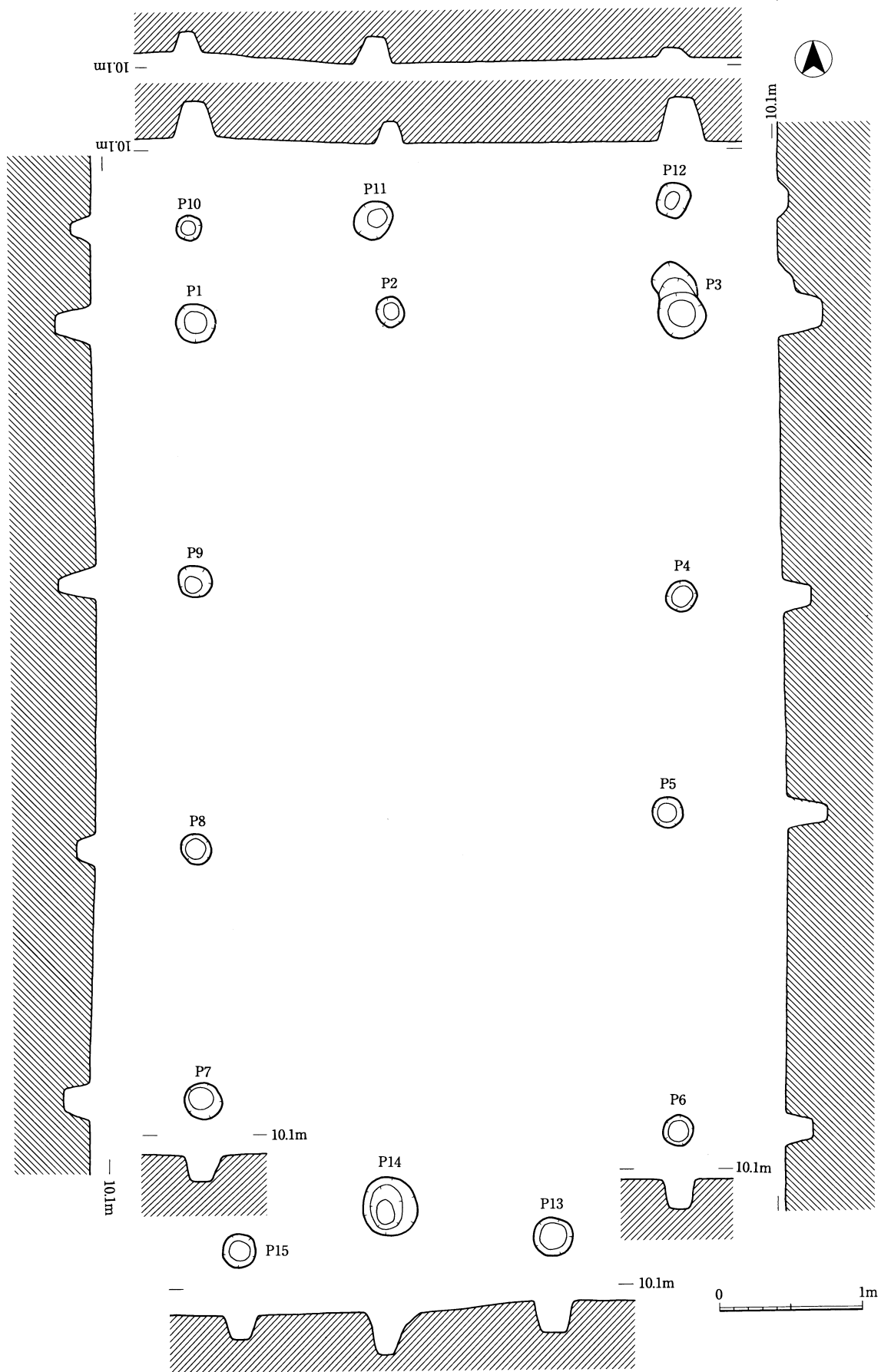
柱間は、P 1 - P 2 が1.36m、P 2 - P 3 が1.42m、P 4 - P 1 が1.68m、P 5 - P 6 が1.2mを測る。ピットの直径は20cm~30cmで、検出面からの深さは15cm~25cmであった。

建物の北西側および西側には溝状遺構1と溝状遺構2がそれぞれ近接し、さらに溝状遺構2の西隣には礫敷溝状遺構が並列して検出されている。

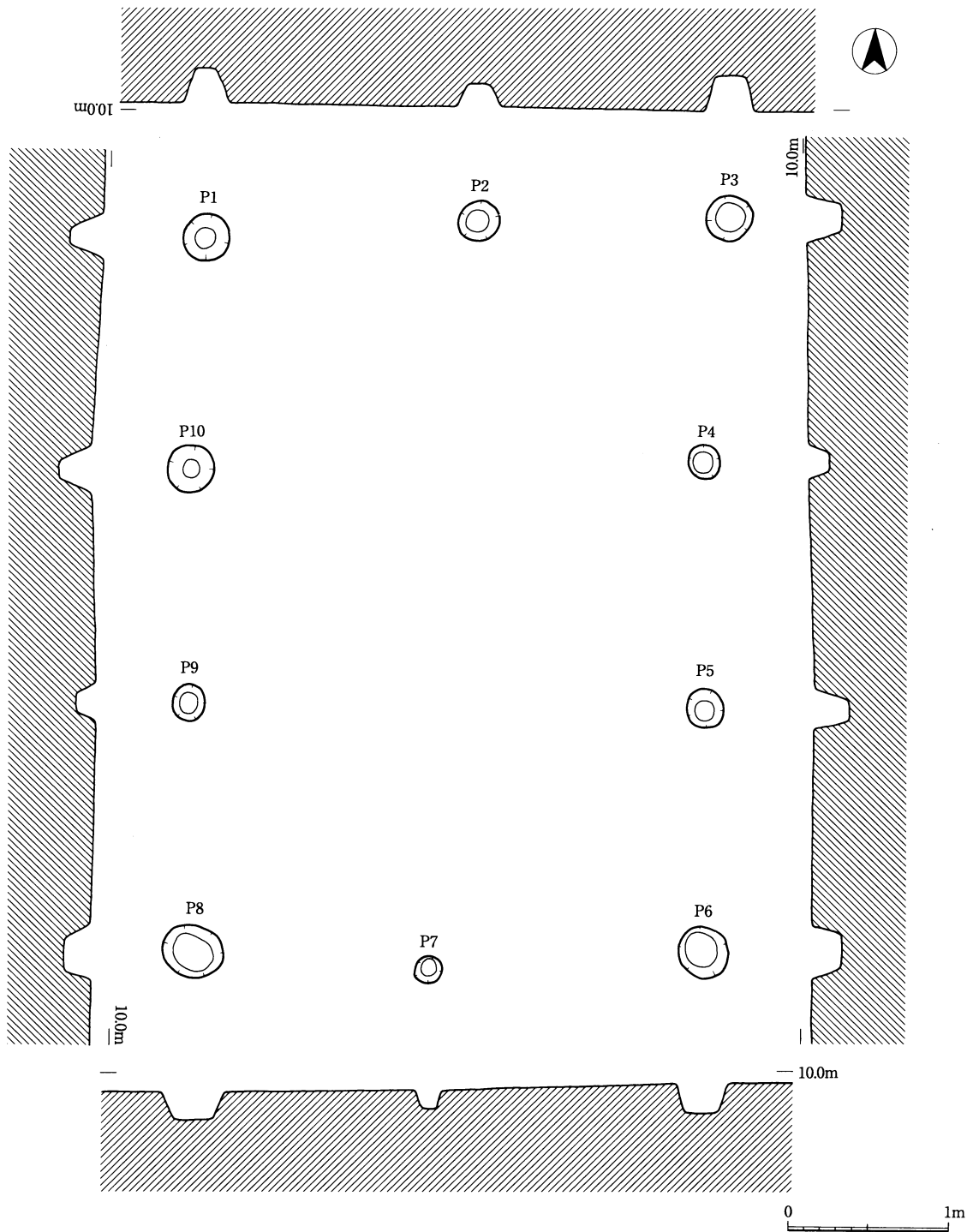
この建物は、中世から近世にかけての所産と考えられる礫集中遺構の下位から検出された。ピット内からの遺物はなく、厳密な時期決定は困難であるが、周囲にある古代の遺構と検出面や柱穴内埋土がほぼ同じであることから、おおむね同時代であるものと理解したい。



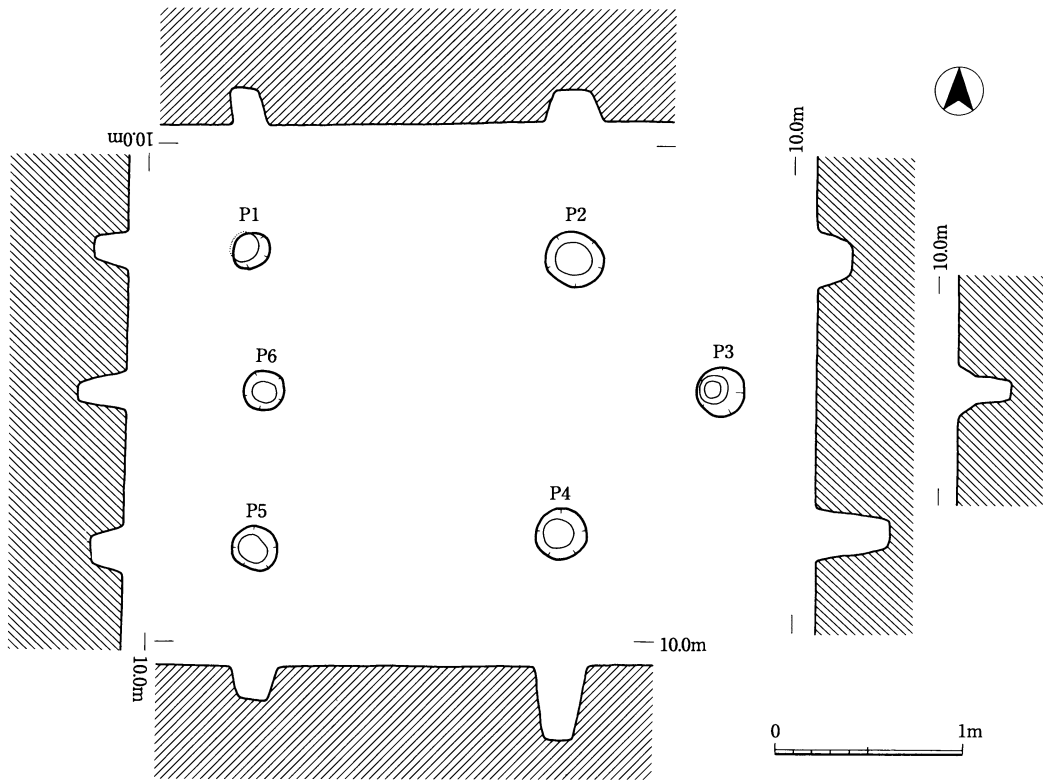
第35図 掘立柱建物跡1



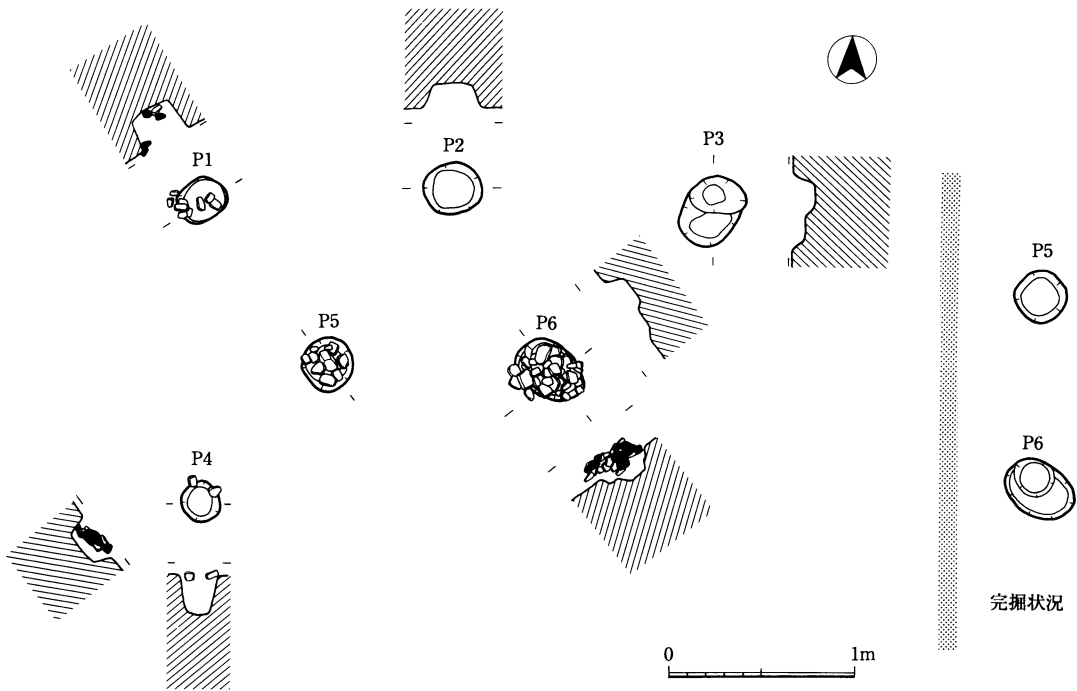
第36図 掘立柱建物跡 2



第37図 掘立柱建物跡 3



第38図 掘立柱建物跡 4



第39図 掘立柱建物跡 5

## ② 土 坑 (第40,41図)

土坑として検出したものは3基確認できた。このうち土坑1は焼土を含むものである。

### a) 土 坑 1

C-10区で検出されたもので、埋土中に焼土を多く含むという特徴がある。実測図を見ればわかるように、東西2つの土坑をはじめ、複数の土坑が重複している可能性もある。おおまかなスケールは平面が360cm×130cm、深さ20cm程度を測る。16点の遺物が出土したが、図化した坏蓋のほか、黒色土器片もあるがほとんどが小片のため図化できなかった。

### b) 土 坑 2

A-9~10区にかけて検出されたもので、平面が略楕円形(260cm×200cm)を呈するものである。土坑内は南側へ徐々に傾斜し、南端にはピット状の落ち込みが見られる。検出面からの深さはこのピット状の落ち込み部分で60cmを測る。機能については不明であるが、近接して礫敷溝状遺構や掘立柱建物跡3、土坑3などがあり、関連性が注目される場所である。

### c) 土 坑 3

A-9区から検出されたもので、平面形が長楕円形(250cm×120cm)を呈するものである。中央部分にくびれのようなものが見られることから、2つの土坑の重複の可能性もある。深さは20cmと浅く皿状を呈している。近接して南側に溝状遺構1、2がある。

## ③ 溝状遺構 (第42図)

古代の溝状遺構と考えられるものが4条検出された。長さが約2m~5m、幅が約20cm~50cmと比較的小規模な溝である。いずれも掘立柱建物跡や土坑などが検出された区域にあり、遺構群の一角をなしている。

### a) 溝状遺構 1

A-9区で検出されたもので、長さ225cm、幅20cm、深さ10cmを測る。溝状遺構2や土坑3、掘立柱建物跡5と近接している。溝状遺構2とはほぼ平行している。

### b) 溝状遺構 2

B-9区で検出されたもので、長さ400cm、幅30cm、深さ10cmを測る。溝状遺構1や土坑3、掘立柱建物跡5と近接している。溝状遺構1や3とはほぼ平行している。溝状遺構3との間には礫敷溝状遺構があることから、何らかの関連も考えられる。

### c) 溝状遺構 3

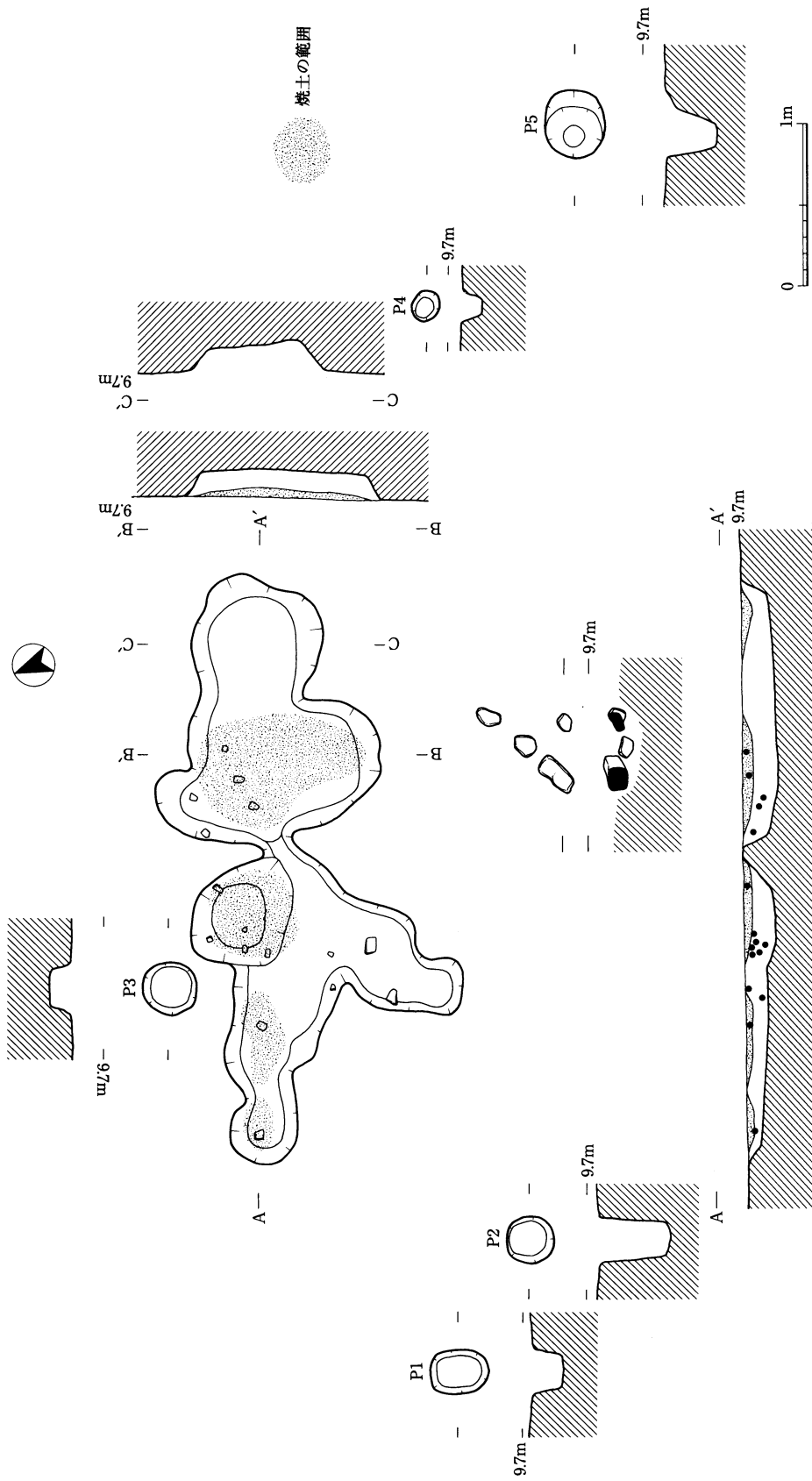
B-9区を中心に検出されたもので、長さ525cm、幅25~40cm、深さ10cmを測る。溝状遺構2と平行し、間には礫敷溝状遺構がある。遺構中央には、本体より若干深い2個のピットがみられる。いずれも直径約40cm程度のものである。

北側には掘立柱建物跡3、4があるが、遺構の軸はいずれも一緒に、ほぼ東西南北に合致している。

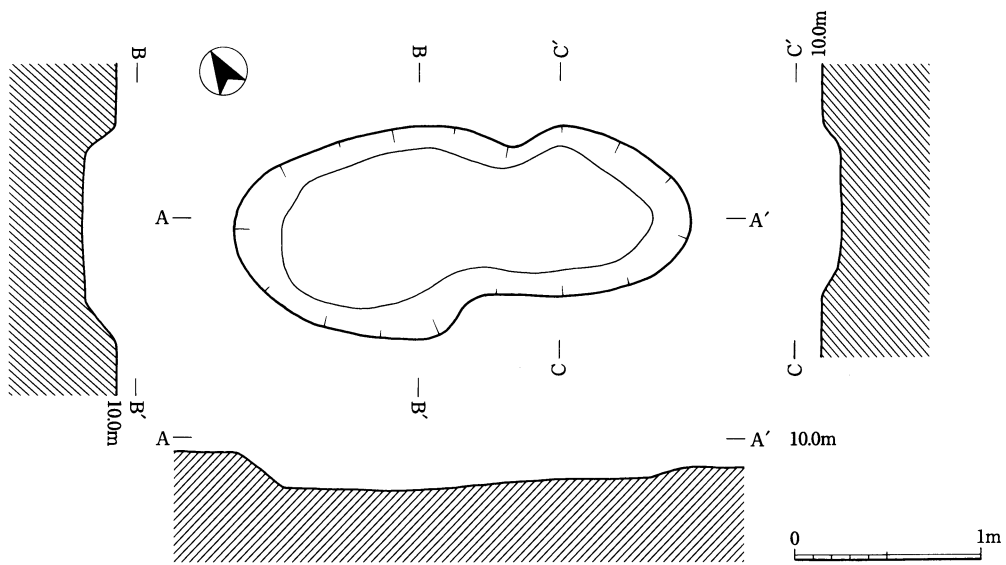
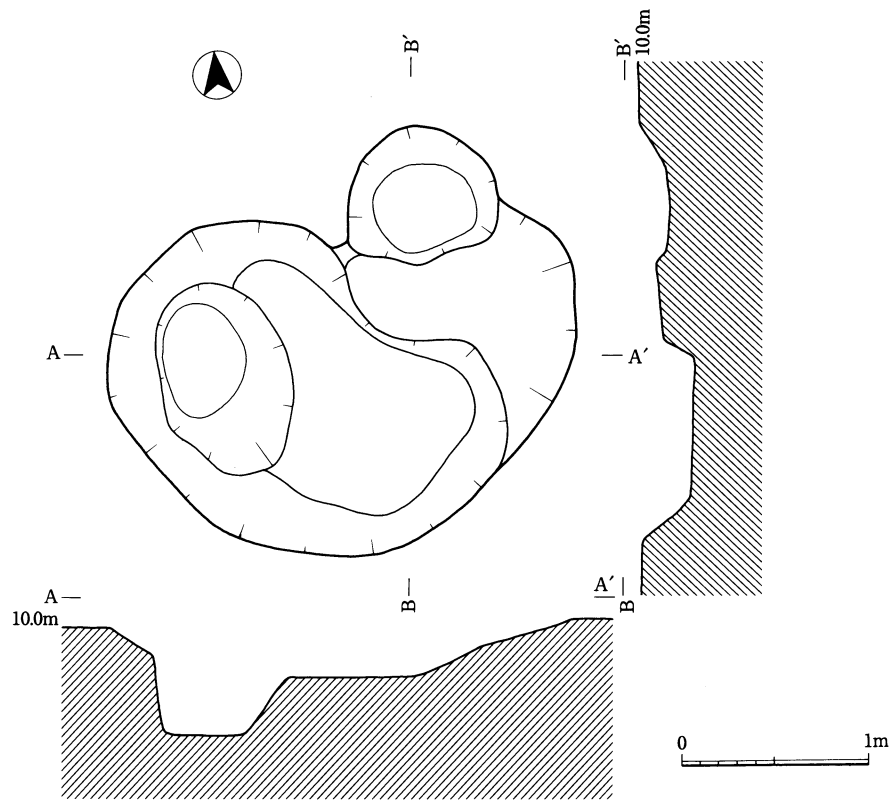
### d) 溝状遺構 4

A-10~11区で検出されたもので、長さ530cm、幅40cm、深さ20cmを測る。掘立柱建物跡2と重複している。遺構の軸にもずれが見られることから、時間差があると考えられる。

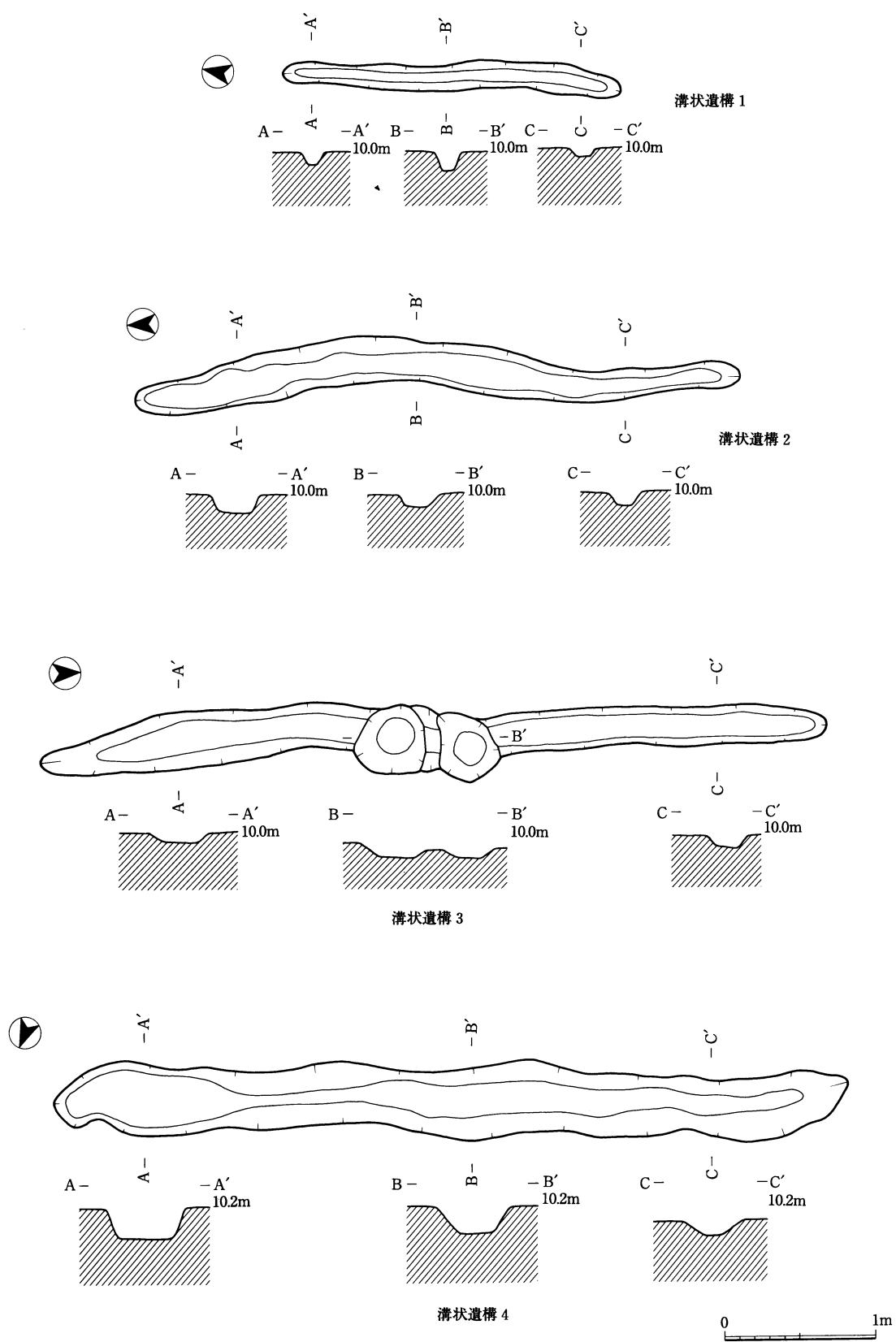




第40図 土坑1



第41図 土坑2(上)・土坑3(下)



第42図 溝状遺構 1 ~ 4

9

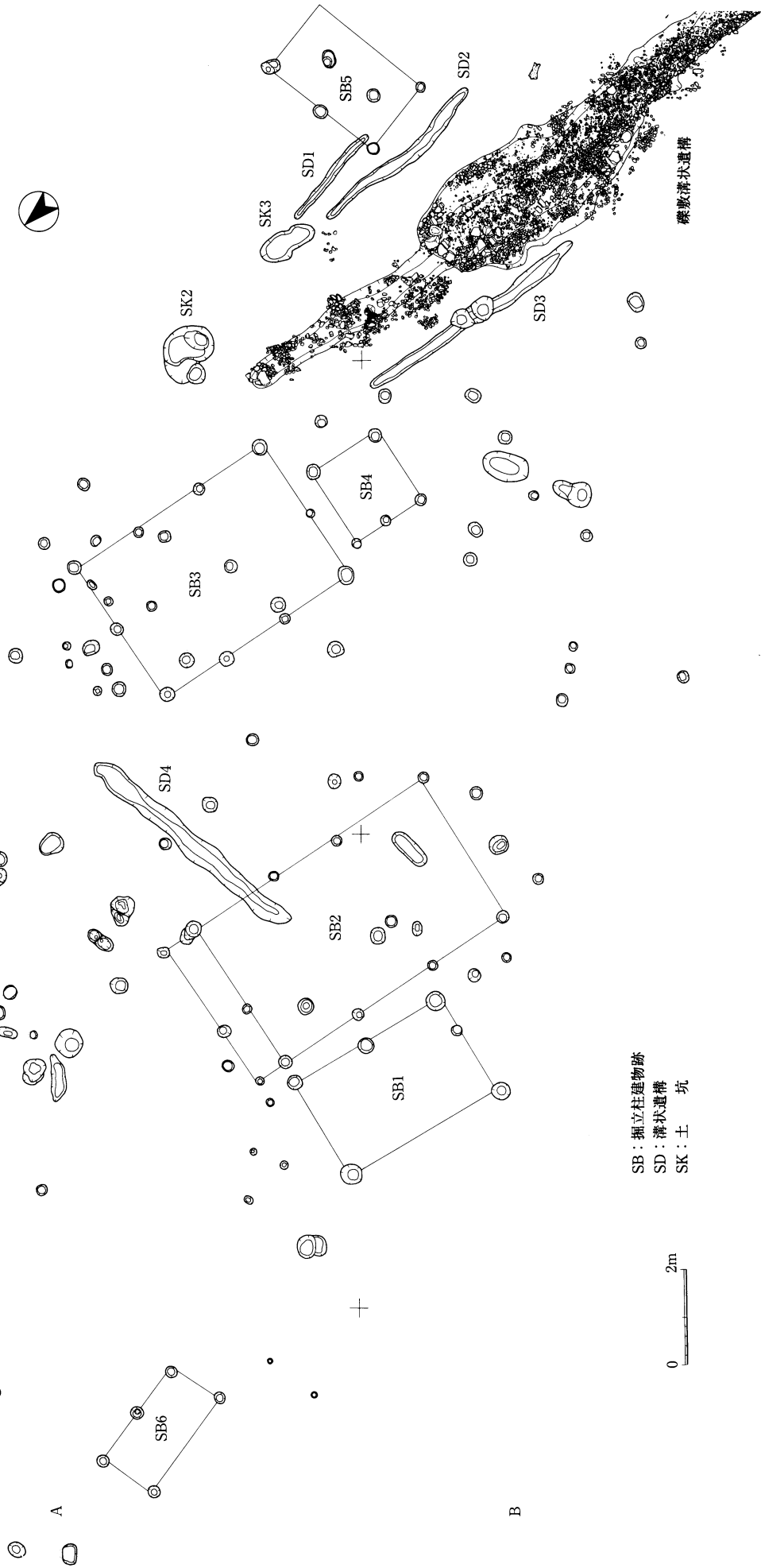
+

10

+

11

12



SB: 掘立柱建物跡  
 SD: 溝状遺構  
 SK: 土坑

第43図 古代の遺構配置図(2)

#### ④ 礫敷溝状遺構（第45, 46図）

礫を敷いた溝状遺構が1条検出された。A10区からD8区にかけて確認されたもので、幅約1～2mを測り、やや弓なりになりながらも、ほぼ南北方向を軸として検出された。確認できた部分の全長は24.5mであった。

比較的残存状況の良好な遺構の北側は、上位に中世から近世の所産と考えられる礫集中遺構1が存在したため、当初同一の遺構として捉え、検出作業を続けていた。しかし、現代のものと考えられる削平部分、特にB9区において南側に伸びる礫集中部分が検出されたため、2つの遺構が存在することを確認することができた。削平のために段差のついた部分では、明らかに2つの遺構の関係がつかめたが、礫集中遺構1と重複するB9区の北側部分では、2つの遺構に明らかな差を見出すことができなかつたのが現状である。

溝を構築するために意図的に集められ（敷かれ）た礫については、溝状に窪んだ掘り方のラインに沿って出土している礫が該当するものとする。問題は溝状遺構内に集中して出土する礫群である。頁岩（系）や安山岩を主として用いて遺構を構成している点においては、上下2つの遺構に差異はなかつた。

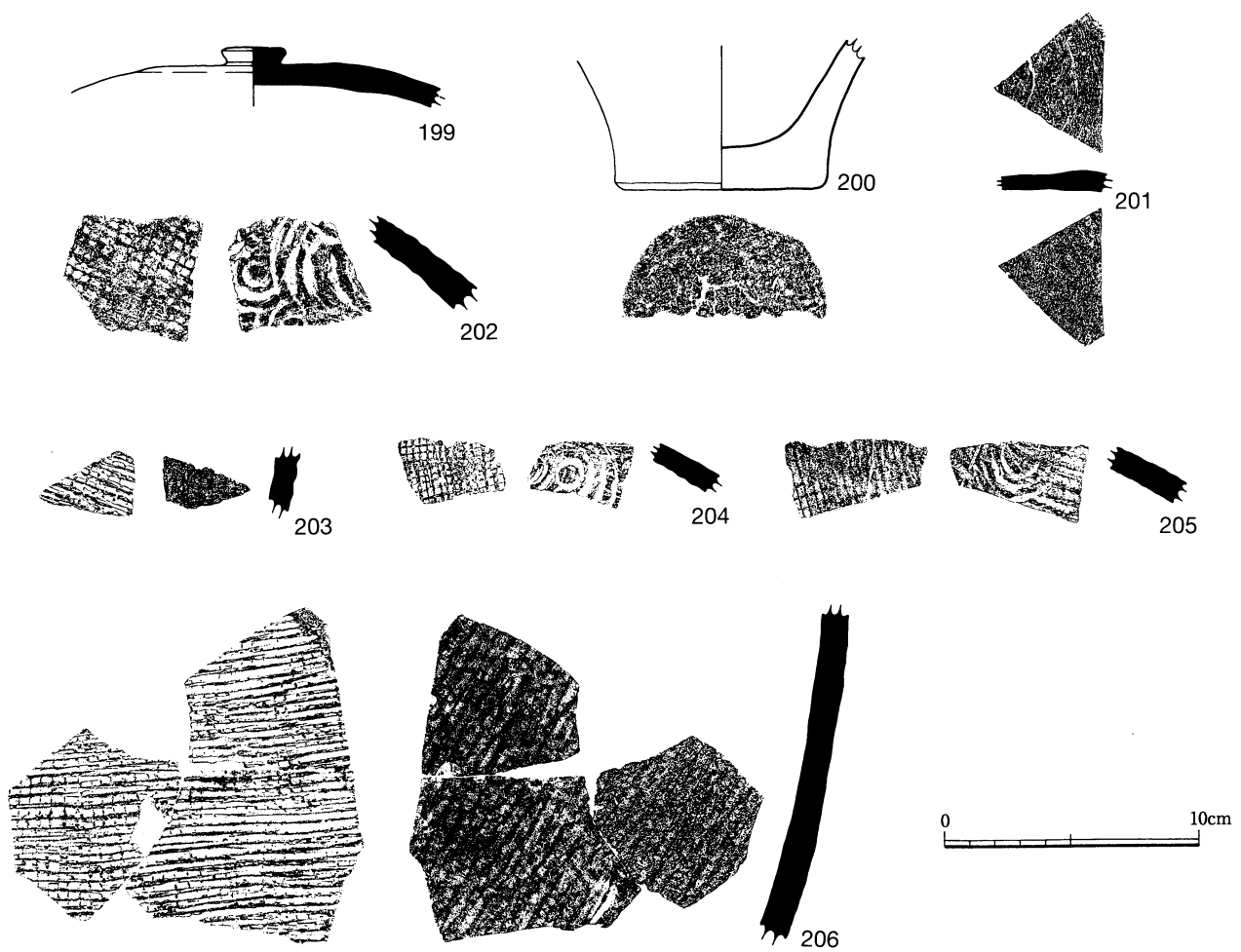
さて、礫敷溝状遺構の形状についてみていきたい。遺構は北側端の検出点から約4m南側で、その幅を約3倍に広めている。また、深さにおいても2倍以上の開きがある。つまり、この地点で段差を形成しているのである。しかも、ここでは大人の頭状の礫を数個用いて、階段状の段差をつくっているのである。この幅広の状況は約5m続いたあと、再び狭小部分を形成しながらさらに南側へと伸び、先の段差部分から約9mで再び幅広部分をつくっている。興味深いのは、幅広部分にはいずれも人頭大の礫が数個存在することである。

もっとも、幅がいったん狭くなる部分から後世の削平が激しいために、遺構の深さも減少し、次第に検出ラインを引くのもままならない状況となっていく。当然、遺構を構成する礫の数もかなり少なくなっている。削平された土砂や礫がどこへ移動したのか知る由もないが、注目されるのは、礫集中遺構1や段差縁辺部分につくられた現代の溝を構成する礫の中に人頭大の礫が数点見られることである（第67図）。

この上下の遺構で見られる人頭大の礫はいずれも凝灰岩であった。また、周辺にある第7層とした礫層の中にはそれほどみられないことを考慮すれば、意図的に集めたものと考えられる。推測の域を出ないが、当初礫敷溝状遺構で使われていた人頭大の礫を中世以降の人々が再利用したのではないだろうか。特に削平後の再利用が激しかったものと考えられるのである。

次に、他の遺構との関係を考えてみたい。第43図でわかるように、礫敷溝状遺構の両サイドに溝状遺構がほぼ平行して並んでいることがわかる。SD2とSD3である。それぞれ長さ約4m、5m強の遺構である。それぞれの遺構の機能をどのように考えるかは、3つの遺構の時間的関係によって異なることは言うまでもない。遺構の軸が共通しているのは、少しはなれて検出されている掘立柱建物跡（SB3、SB4）も同様である。

古代のものとして捉えたこれらの遺構群が、実際にはどのように有機的つながりをもっていたのか？本遺構の性格も含めて今後の検討課題である。



第44図 古代の遺構内出土遺物

礫敷溝状遺構内からは、数十点の遺物が出土したが、その多くが土師器の小片であった。ここでは、図化することのできた数点について紹介したい（第44図）。

200は弥生土器の甕の底部と考えられるものである。本遺跡内での弥生時代の遺物は、第32図のように中期を中心として数点出土している。いわゆる包含層は確認されていないが、かつて本遺跡調査区域およびその周辺に弥生時代の生活が営まれていたことは間違いないであろう。本遺物は混入品と考えられるものである。

201～206は須恵器片で、本遺構と時間的に最も近い関係にあるものと考えられる資料である。201は蓋の天井部である。202～206は甕の破片と考えられるもので、203と206が胴、その他が肩の一部である。

ほとんどの遺物の外面には、格子目状のタタキ痕がみられる。また、202・204・205の内面には同心円状のあて具痕がみられる。

206は3点の須恵器片が接合した資料であるが、本遺構外の破片と接合している興味深い事例である。

これらの須恵器は遺構内埋土中からの出土というより、遺構床面に敷かれた礫に混在して出土した。



V

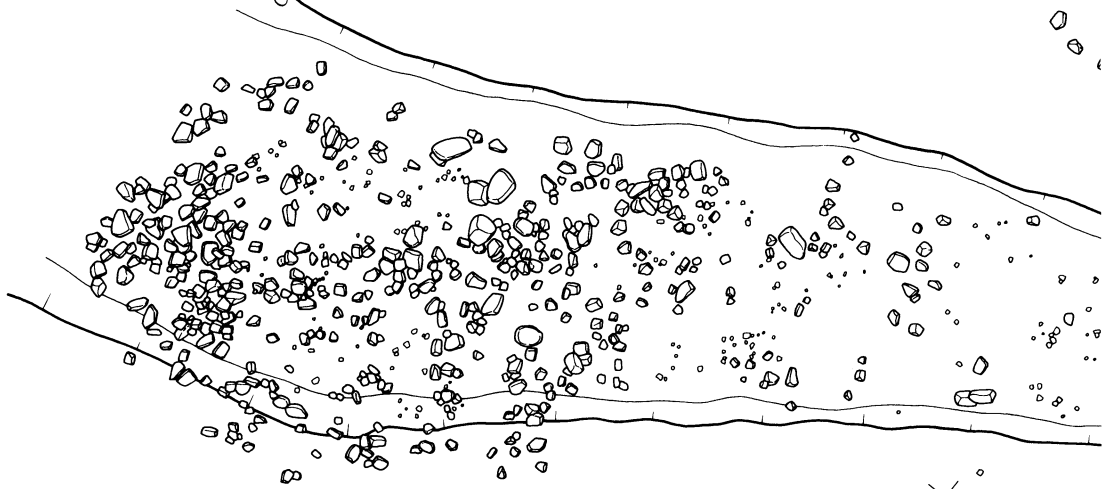


A10/A9  
B10/B9

B

B

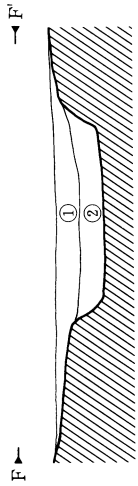
B0/B8  
C0/C8





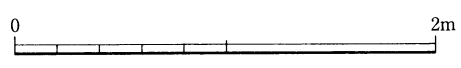
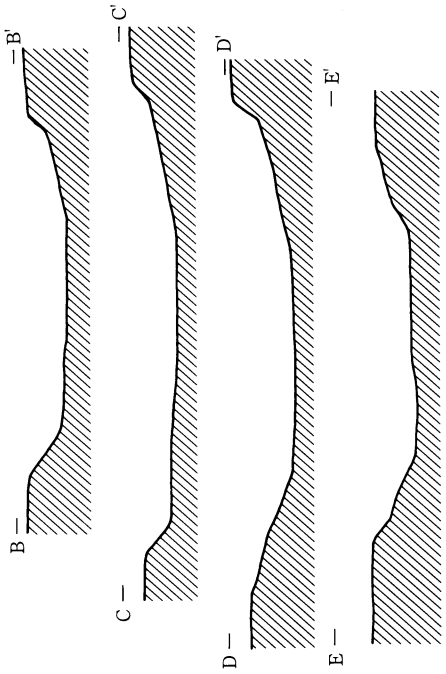
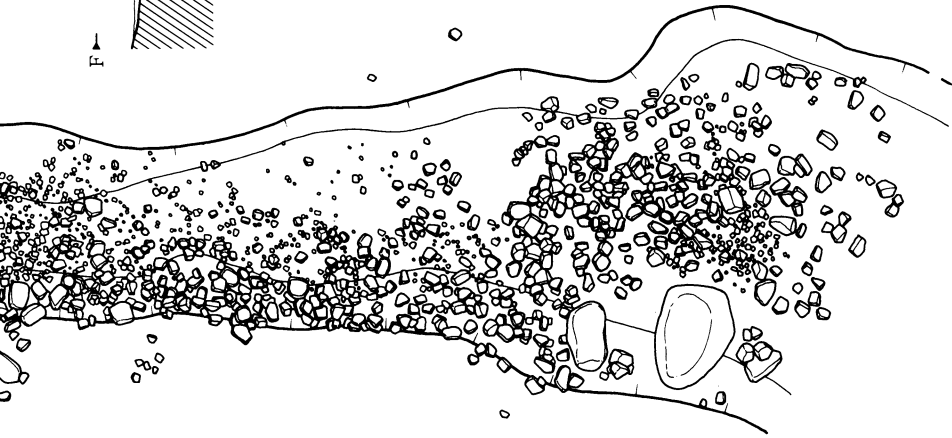
第45図 礫敷溝状遺構(1)

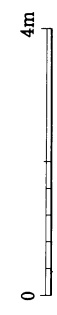
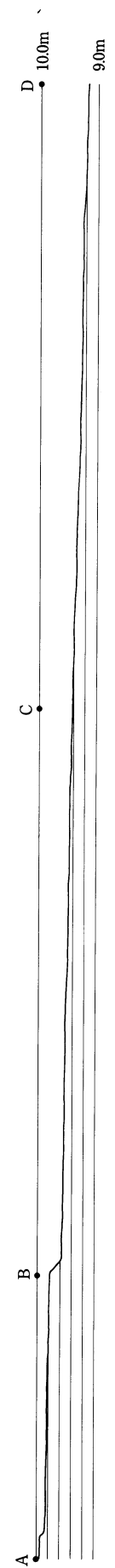
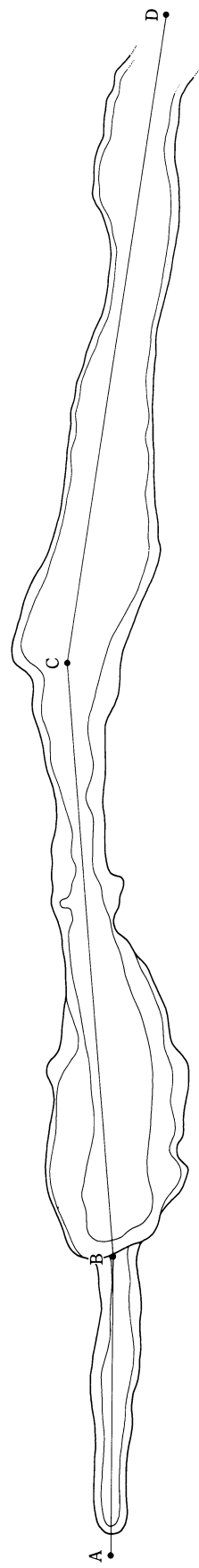
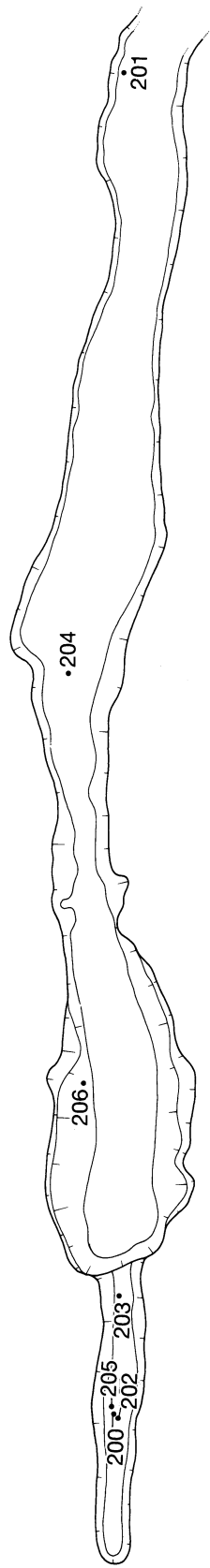




- ① 淡灰茶褐色土層
- ② 淡灰褐色土層(やや粘質)

※断面図のレベルバーは  
すべて10.0mである。





第46図 礫敷溝状遺構 (2)

## (2) 遺物

古代の遺物としては、須恵器・土師器・黒色土器・鉄製品・土製品などが出土した。なかでも須恵器・土師器が出土遺物の多くを占め、これらとほぼ混在して黒色土器が少量含まれるといった状況であった。

### ① 須恵器 (第48～58図 207～346)

須恵器としては、甕・壺・小形壺・坏蓋・坏・鉢などが出土した。これらは、B～C-10～11区やB～C-13～14区を中心に出土した。なかにはNo207のように、60mの距離を越えて接合した資料もあった。調査区域の上段と下段を結ぶ遺物の接合例をいくつか確認できたが(第47図)、下段の分、つまりB～C-13～14区の遺物は、上位からの流れ込みである可能性が高いと考えられる。

また、調査区域上段でみられる須恵器出土域の空白部分は、後世の削平によるものと考えられることから、元来遺物の広がりがあったものと理解したい。これは、この上段部分で掘立柱建物跡をはじめとする古代の遺構が検出されていることから推定できよう。

#### a) 甕 (第48～55図 207～306)

須恵器の中で、最も多く出土したのが甕である。胎土や色調あるいはタタキ目やあて具痕から、同一個体である破片も多く出土しているが、ここではそれらも一破片としてそれぞれ取り上げた。

207は口径19cmを測る口縁部片である。肩部の外面に格子状のタタキ目、内面に同心円文のあて具痕がみられるものである。口縁部の内外に緑灰色の自然釉がかかっている。213までが207と同一個体のものと考えられる。207は15点の破片が接合した資料である。

214と215は、外側へ大きく開く口縁部片である。216や217も含めて同一個体の可能性がある資料である。216と217の肩部片も同一個体と考えられる資料で、内外ともに茶褐色系統の色調を呈している。

218～234は甕の肩部と考えられるもので、外面に格子状のタタキ目、内面に同心円文のあて具痕がみられるものである。219の内面には、あて具痕とは別と考えられる沈線が複数みられる。222は焼成時のひずみが見られる。225は胎土に砂粒を多く含んでいる。

232～236・238は同一個体と考えられるものである。235・238は胴部片で、外面に格子状のタタキ目がみられることはこれまでと同様であるが、内面には平行のあて具痕がみられる。

236・237・238～240・244・245は外面に格子状のタタキ目、内面に同心円文のあて具痕という組み合わせの肩部片である。

242・246は外面に格子状のタタキ目がみられるが、内面についてはあて具痕が浅いために明瞭でない。部位が口縁部と胴部との繋ぎ目(肩部)でもあることから、粘土の接合面をナデ仕上げした結果と考えられる。246は焼きにむらがあり、断面に空洞がみられる。

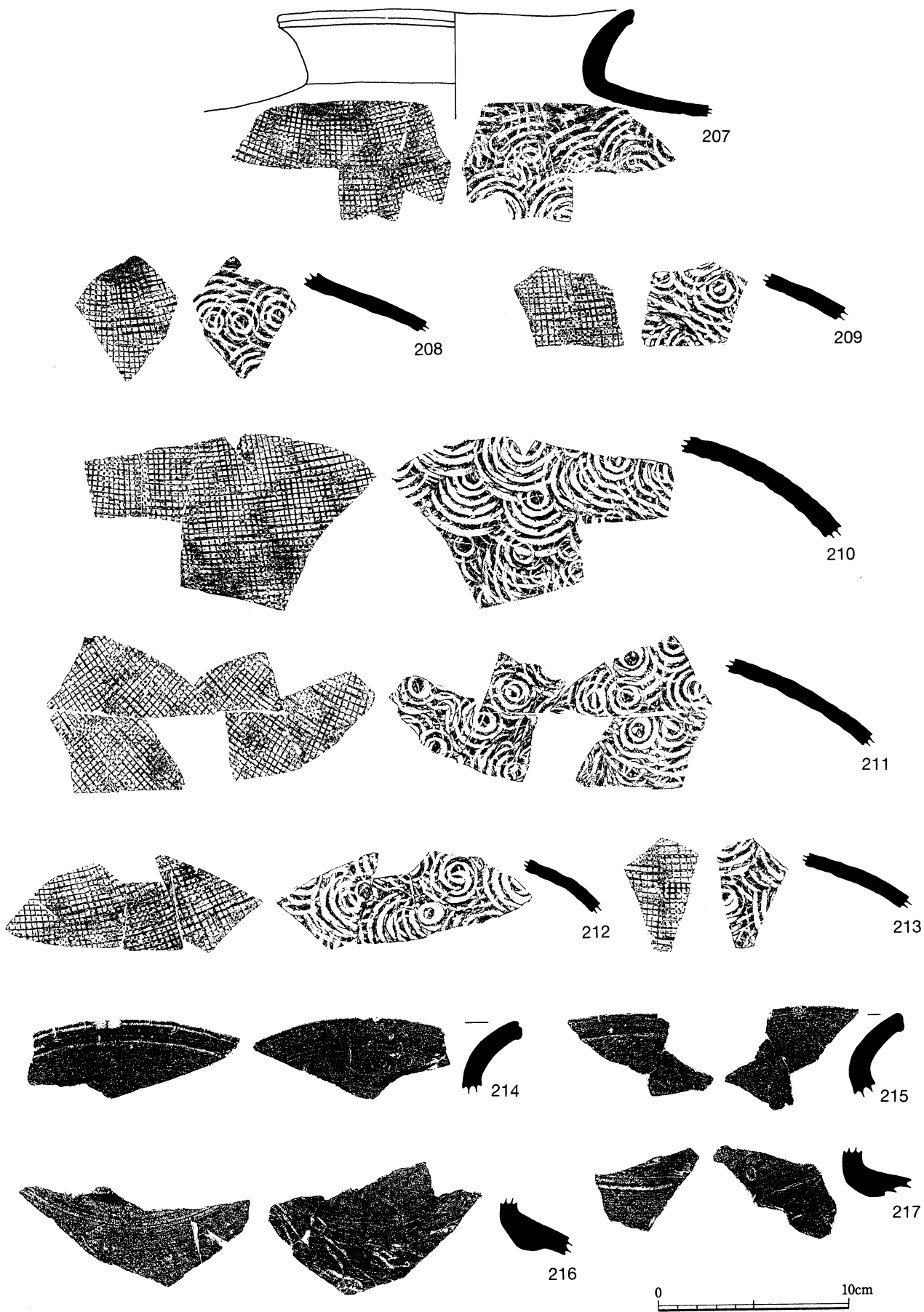
241は外面に格子状のタタキ目、内面に平行のあて具痕がみられるものである。ただし、内面には同心円文的な部分も若干見られる。

247～256も肩部と考えられる資料である。247の内面あて具痕は、明瞭な同心円文である。

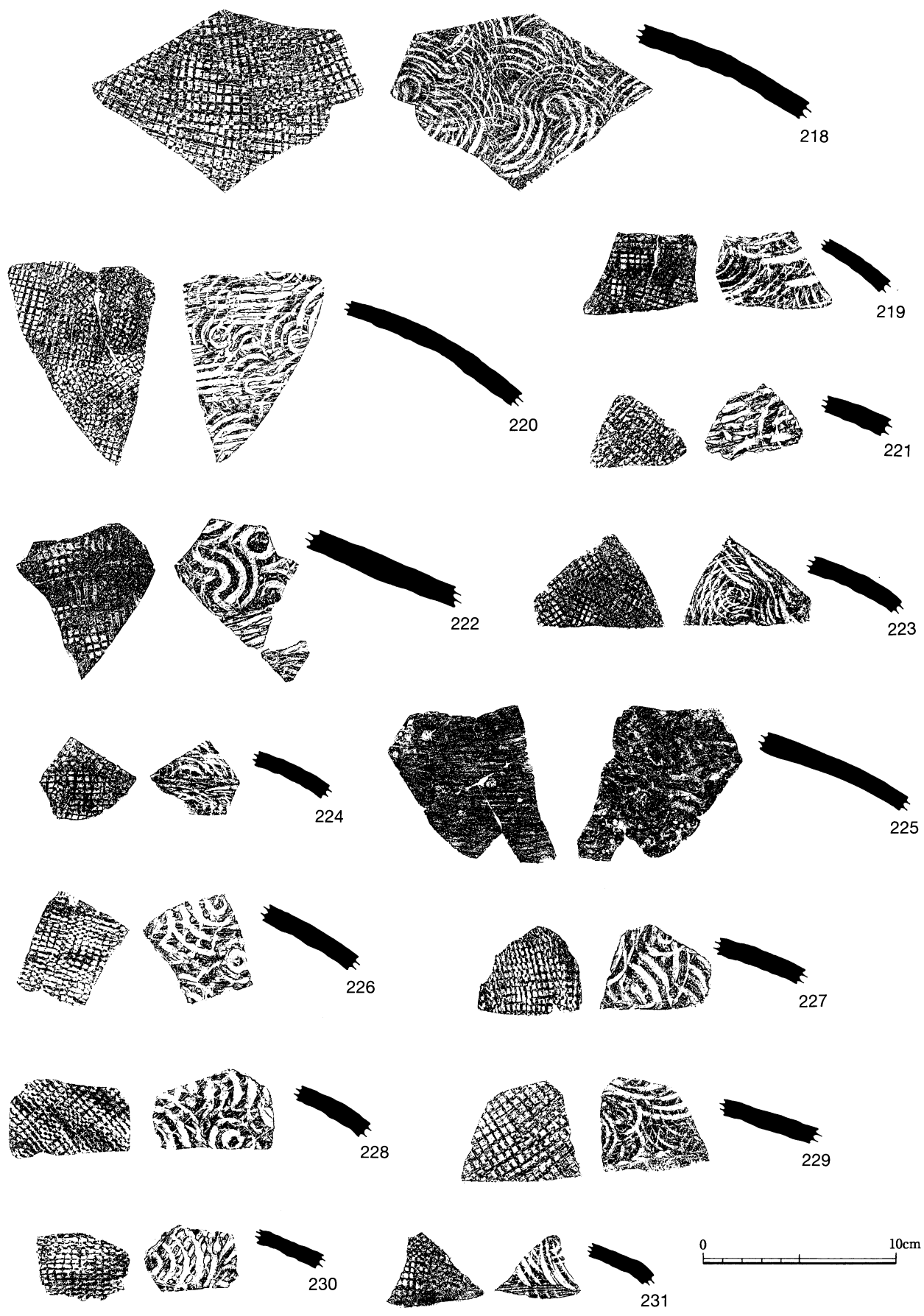
248・252は242と同様内面のあて具痕が浅くて不明瞭なものである。これらは249とあわせて、焼き上がりにむらがあり、断面に空洞が見られる。252は浅いながらも、やや太目の沈線を構成する平行あて具痕がみられる。



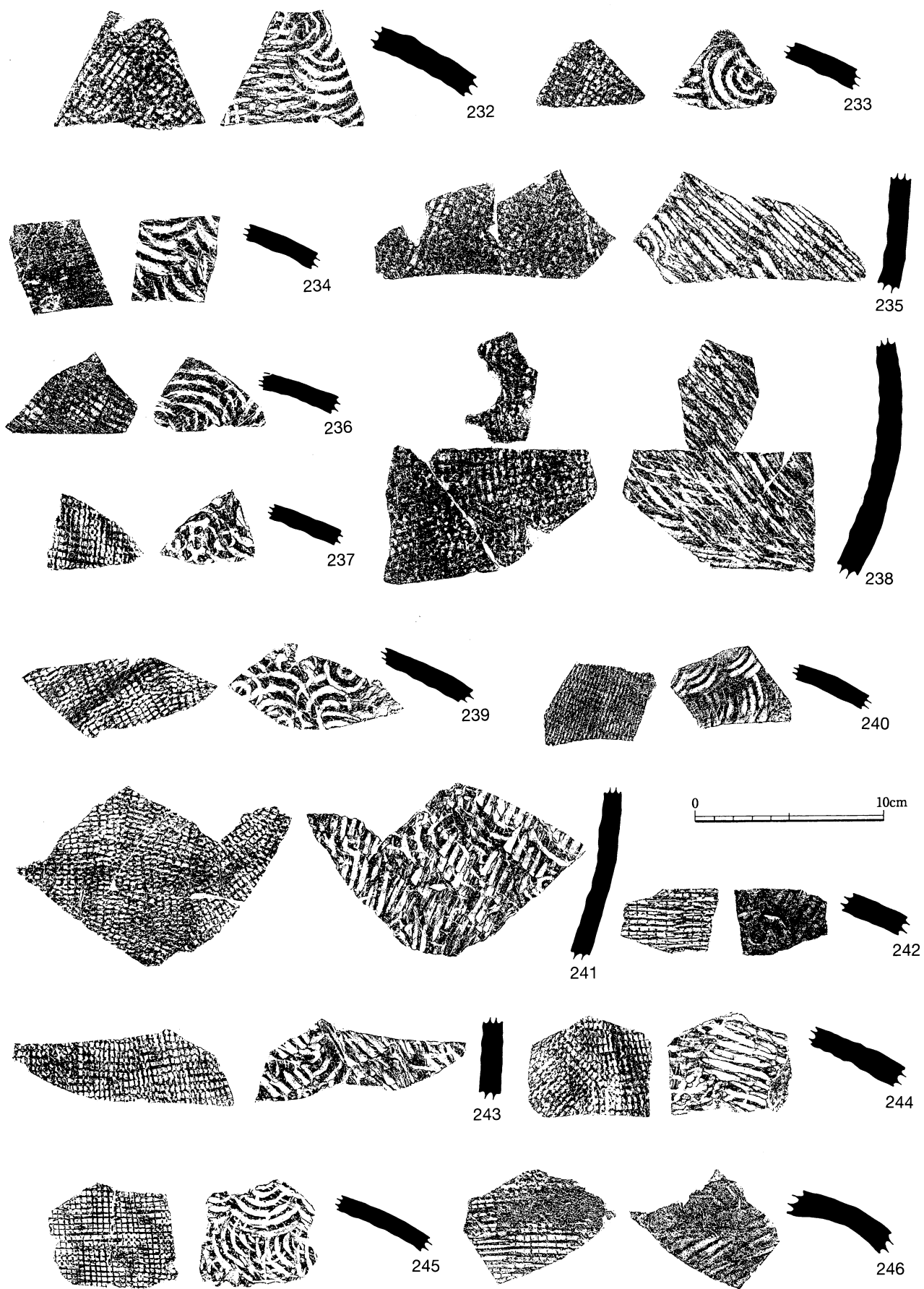
第47図 須惠器出土状況図



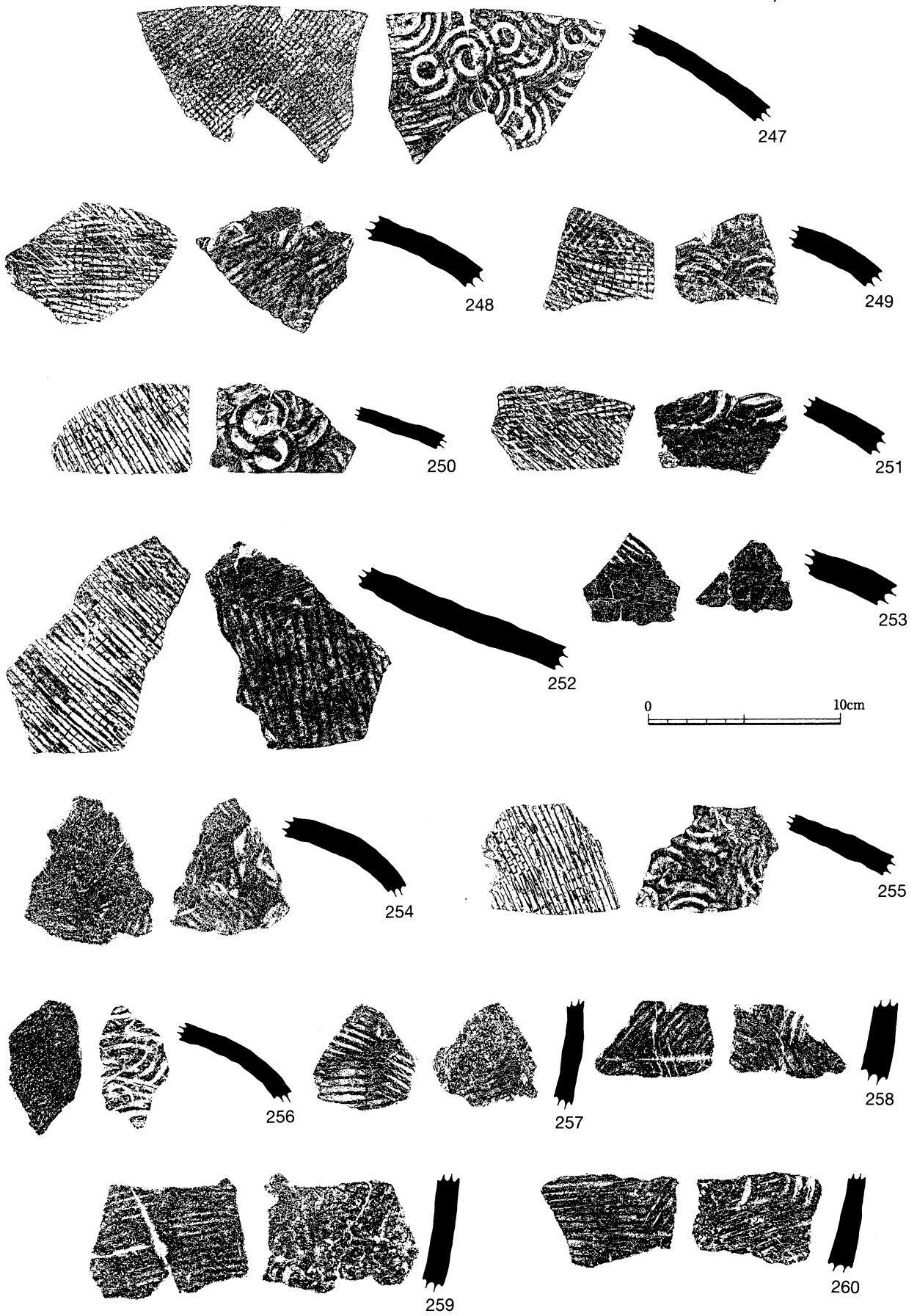
第48図 須恵器 (1)



第49図 須恵器 (2)

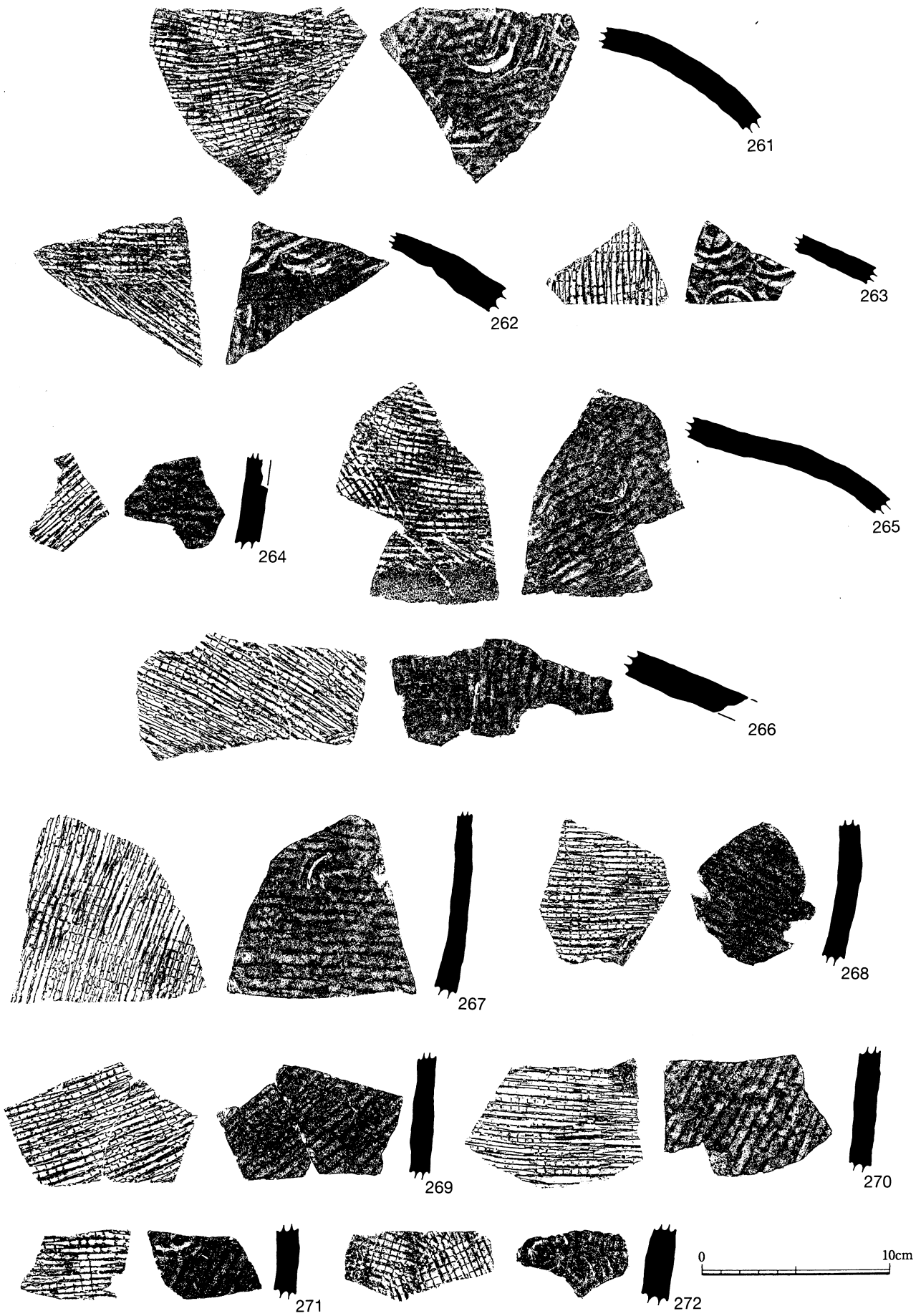


第50図 須恵器 (3)



第51図 須恵器 (4)





第52図 須恵器 (5)

253・254は内外面ともに明瞭なタタキ目及びあて具痕はみられない。253などは両面横方向のナデ仕上げ痕が観察できる。

255や256の内面には同心円文のあて具痕がみられる。外面は255に格子状のタタキ目がみられるものの、256は丁寧にナデ仕上げを行った様子がうかがえる。

257～260は全体的に淡灰褐色を呈する胴部片である。やや軟質の資料で、胎土には石英をはじめとする細粒を多く含んでいる。内外面ともに浅いながらも細沈線状の平行タタキ目やあて具痕がみられる。

261～272は同一個体と考えられる資料である。全体的に器壁が厚く、焼き上がりのむらも多い。特に264・265・272はその傾向が強く、断面に空洞が見られる。272の外面には、焼成時のもとと考えられる藁灰の痕跡が一部に残っている。

261～263は外面に格子状のタタキ目、内面に浅い同心円文のあて具痕がみられる肩部片である。265や266も肩部片であるが、内面は浅い平行あて具痕がみられる。265の外面の一部には、暗緑灰色の自然釉がみられる。

264・267～272の胴部片も外面に格子状のタタキ目、内面に浅い同心円文のあて具痕が見られるものである。261～272は同一個体である可能性が高い。

273～277は外面に蓆目状のタタキ目がみられる肩部片で、同一個体と考えられる資料である。おおむね外面の色調が淡紫茶褐色、断面が明茶褐色を呈する。273は6点の破片が接合した資料で、内面上位に青海波状文、下位に細沈線の平行あて具痕がみられるものである。274や276の内面には浅いながらも同心円文のあて具痕がかすかに観察できる。

278は外面がナデ仕上げ、内面が線の細い青海波状文のみられる肩部片である。また、279・281は外面が平行タタキ目、内面が青海波状文のみられる肩部片である。これら3点は胎土に砂粒を多く含んでいる。278の断面は赤紫色を呈している。

280・283は、内外面ともに平行沈線状のタタキ目、あて具痕がみられる胴部片である。282は内面に283などと同様な平行あて具痕がみられるが、外面には格子状のタタキ目がみられる。焼成がやや弱いため全体的にもろい。断面は淡黄白色を呈している。

284～286は同一個体と考えられる胴部片で、外面は細かな格子状タタキ目がみられる。内面には細かな平行沈線による密なあて具痕がみられる。焼成は良好であるが、内面の凹凸が激しく仕上げは粗い。

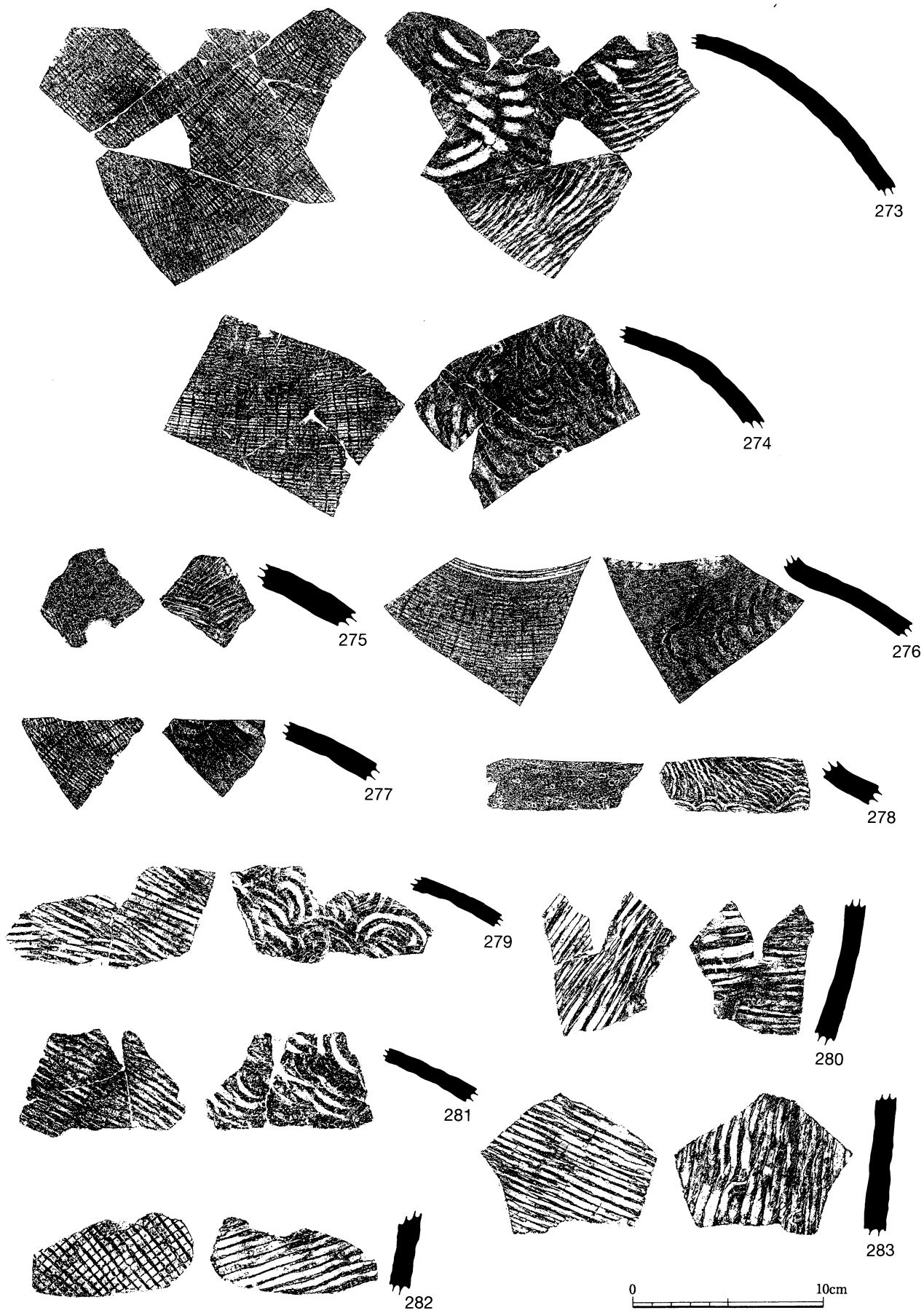
287は外面に細線平行タタキ目がみられるが、内面は痕跡が浅くて不明瞭である。

288は4点が接合した胴部片である。内外面ともに浅い痕跡であるが、外面に格子状のタタキ目、内面に太線の平行あて具痕がみられる。器壁が1mm以下と比較的薄い。内面には磨耗痕が観察されることから、転用硯である可能性もある。外面には暗緑褐色の自然釉がみられる。

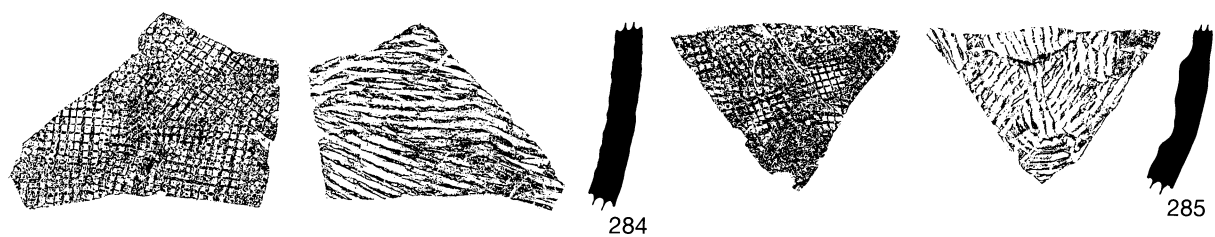
289は外面に浅い平行タタキ目、内面に単位の細かい平行あて具痕がみられる。生焼け状態で、内外面ともに淡黄白色で、一見して土師器様を呈している。

290～294は外面に格子状のタタキ目のある胴部片である。内面は浅い平行あて具痕がみられる。290・292～294は同一個体と考えられる資料である。

295・297～306は外面に格子状のタタキ目、内面には主として細線の平行あて具痕がみられる

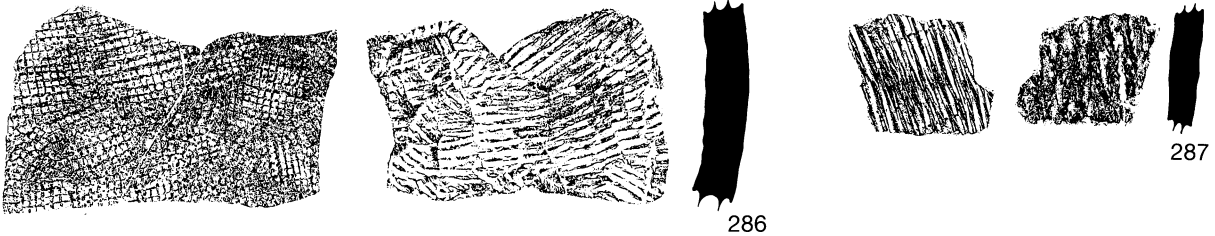


第53図 須恵器 (6)



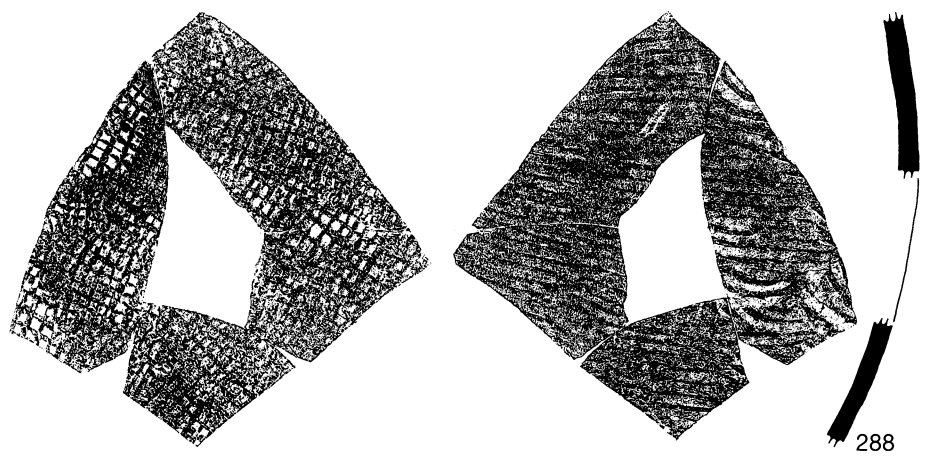
284

285



286

287

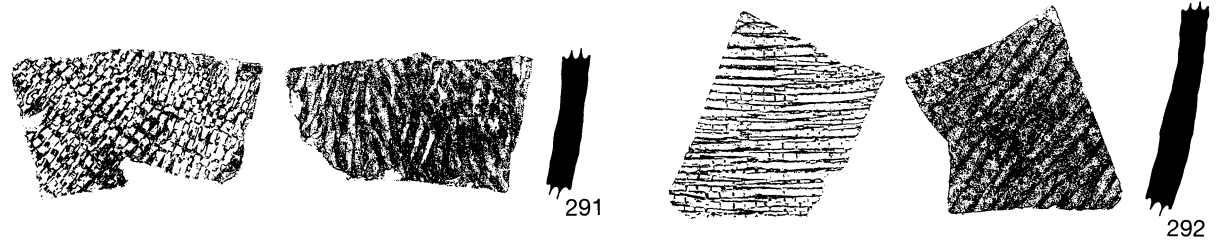


288



289

290



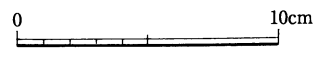
291

292

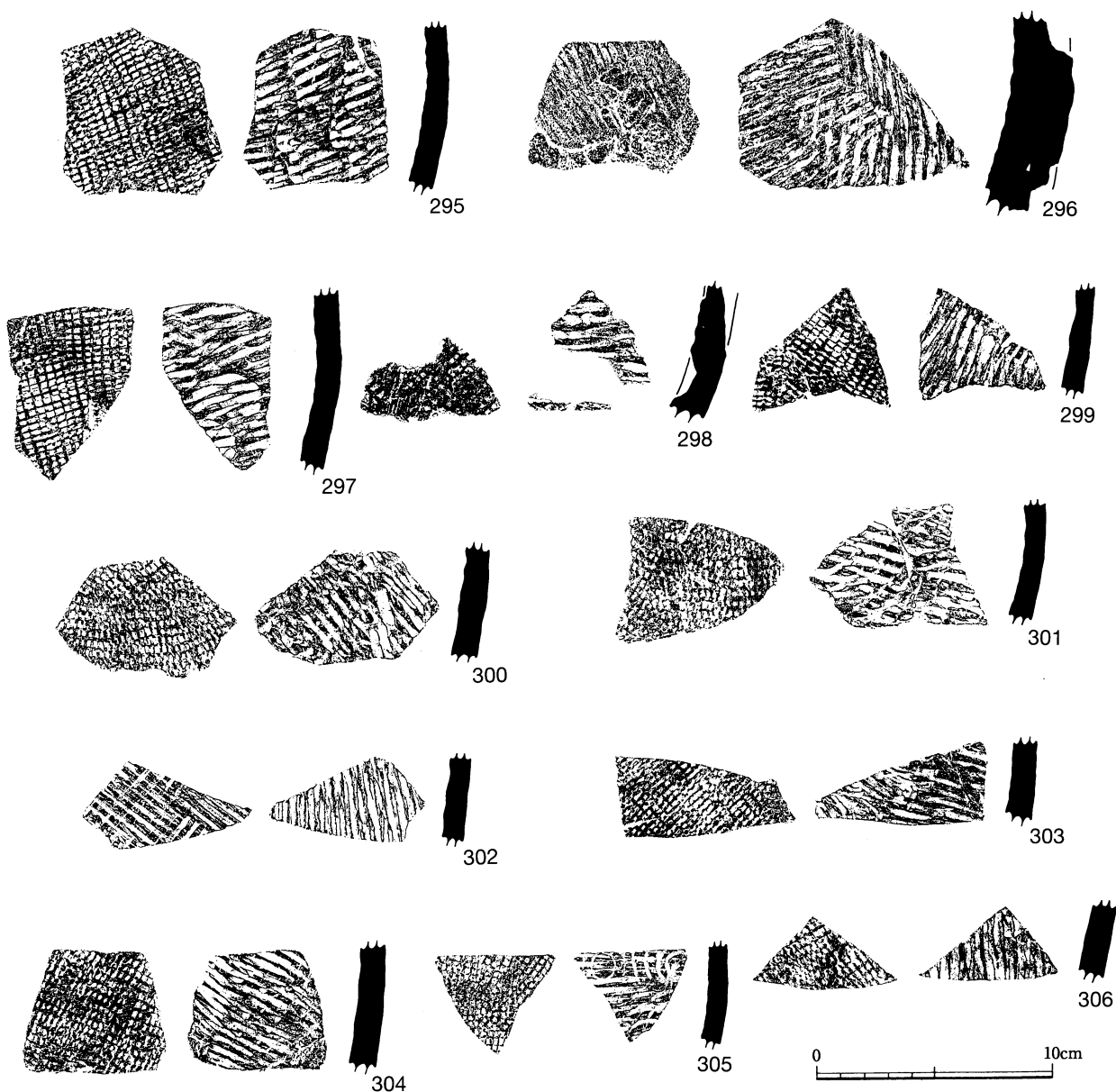


293

294



第54図 須恵器 (7)



第55図 須恵器（8）

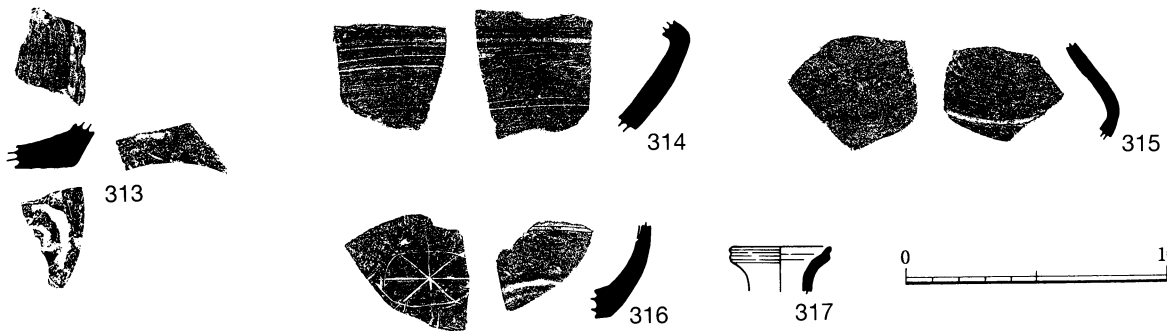
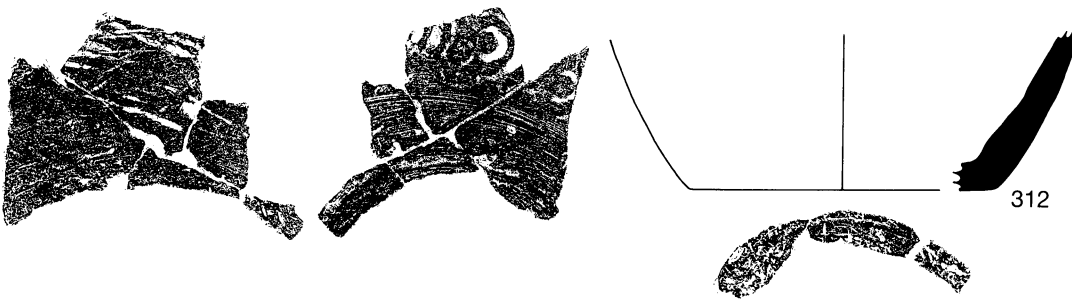
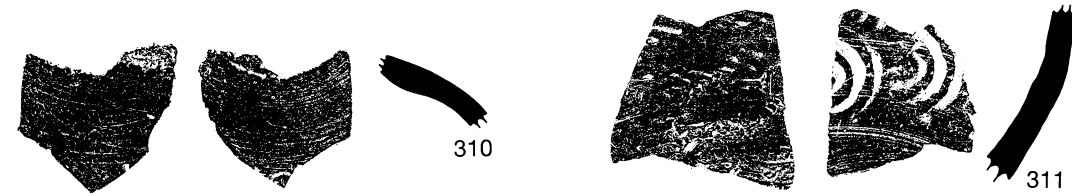
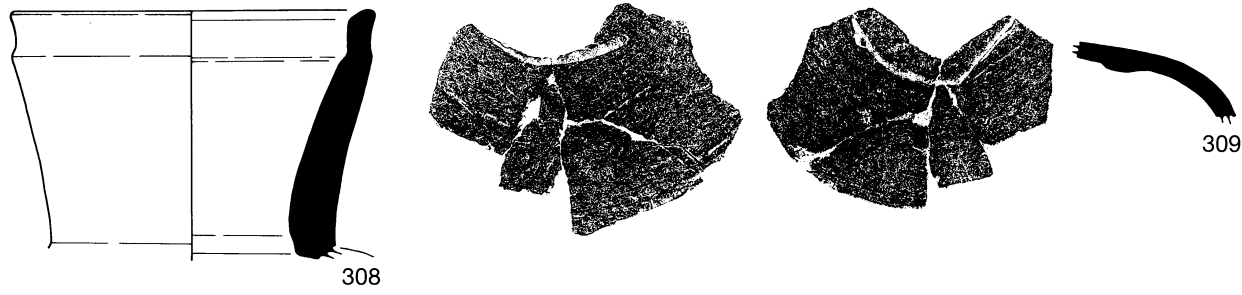
胴部片である。295・297・299～301・304は同一個体と考えられる資料である。

296は4点の須恵器片が窯内で結合した状態のまま出土した資料である。破片が付着したまま製品として流通したものであろう。約1.2cm程度の器壁をもつ甕の胴部片の間に、口縁部片（おそらく小形の鉢であろう）が挟まれた状態で付着している。さらに外側の胴部片に若干須恵器の一部が付着している。

298は296と同一個体と考えられる資料である。内面に意図的なもの（穿孔途中？）と考えられる直径約2cmの円形の窪みが見られる。また、外面は剥落が激しい。

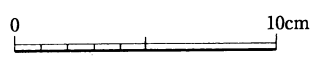
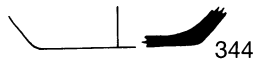
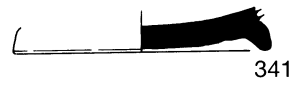
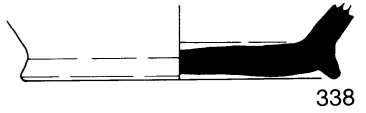
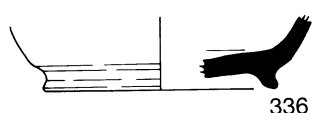
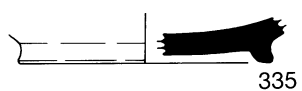
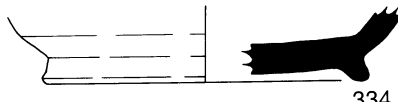
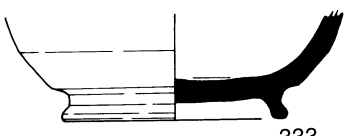
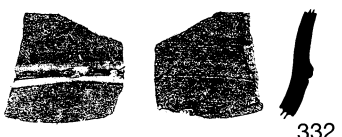
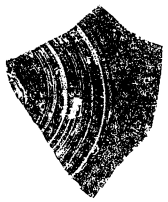
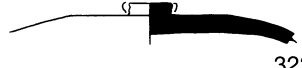
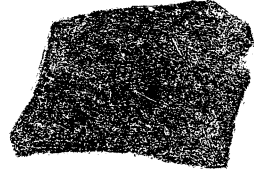
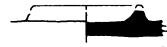
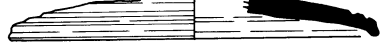
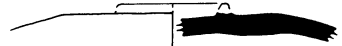
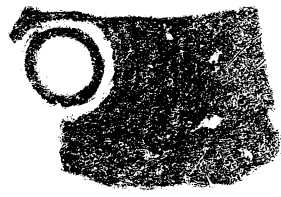
**b) 壺（第56図 307～317）**

壺形の須恵器は甕に比べて圧倒的に少なく、明らかに確認できたのは図化した第56図の資料のみであった。ほとんどが調査区南西側の下段から出土したものである。

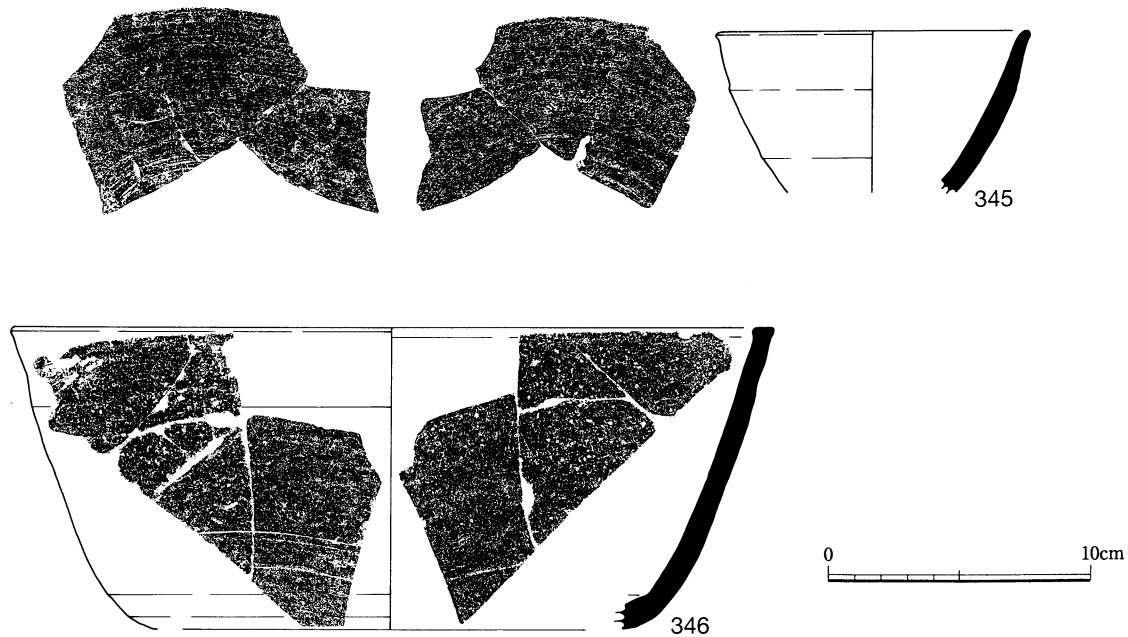


0 10cm

第56図 須恵器 (9)



第57図 須恵器 (10)



第58図 須恵器 (11)

307は頸部から底部付近までの資料で、そろばん玉状の壺である。胴部最大径が14.7cmを測る。頸部下外面には暗緑色の自然釉がみられる。内面は青灰色を呈している。

308は口径14.2cmを測る口縁部で、計7点の破片が接合した資料である。外面は部分的に赤茶褐色を呈している。

309・310は肩部片である。309の内面には粘土の接合面が明瞭に残る。

311～313は同一固体と考えられるもので、焼成がおやや甘いため全体的に明黄白色を呈している。311・312は内面に、313は底面に同心円文のあて具痕がみられる。

315・316は同一固体と考えられる小形の壺である。全体的に淡青灰色を呈している。316の外面には\*を○で囲んだヘラ記号が施されている。317は口径4.0cmの超小型の壺である。

#### c) 蓋 (第57図 318～330)

318は焼成が甘く淡黄白色を呈する蓋である。319も焼成が甘くもろい。320は径14.4cmを測るもので、外面には襷文がみられる。内面中央にはやや磨耗痕がみられる。321・322・325～327は宝珠様のつまみを、323・324は高台状のつまみをもつ蓋である。322のつまみは全周が欠けている。324は外面に淡茶褐色の自然釉がみられる。325の断面は赤茶褐色を呈している。326、327のつまみは焼成が甘くもろい。

#### d) 坏 (第57図 331～342)

331～333は内外面ともに赤茶褐色の色調を呈する須恵器である。焼成時の密封度が低かったことから生じる酸化状況の結果かもしれない。ただし、色調自体は鮮やかであり、意図的な様子がうかがえる。

334～336は焼成が甘くもろい。また、胎土も粗い。337・339・341・342は断面が赤茶褐色を呈



している。

#### e) その他の器種 (第57, 58図 343~346)

343・344は椀形の須恵器である。344は淡茶白色で生焼け気味であるが比較的堅緻である。

345・346は鉢形の須恵器である。345は口径12.2cmで胎土に砂粒を多く含む。346は口径29.6cm, 底径18.9cmを測るやや大形の鉢である。全体的な色調が明黄褐色を呈しており, 一見土師器様である。胎土に細粒を多く含んでいる。

#### ② 土師器 (第60, 61図 347~385)

土師器としては, 甕・椀・坏などが出土した。これらは, C-10~11区, A~C-13~14区を中心に出土した。

##### a) 甕 (第60図 347~356)

347~356は甕形の土師器である。ほとんどが明茶褐色の色調を呈し, 砂粒を多く含む資料である。胎土のせいもあるが, 水田下からの出土ということもあり, 器の表面はかなり粗悪な状態である。349や352・354などのように外面に刷毛目の見えるものや, 347のように内面にケズリ痕が観察できるものもかろうじて存在する。

356は甕あるいは甑の胴部に付くと考えられる把手である。胎土・色調は甕とほぼ同様である。

##### b) 椀 (第61図 357~369)

357・358はともに口径16.2cmを測る土師器である。それぞれ口縁部下に若干の段をもつ。359~362は高台をもつ底径が7.0~7.2cmを測る資料である。364・365は低い高台をもつもので, 上げ底状を呈している。366・367は高台をもたないが, 粘土を貼り付け, 分厚い底部を作り出している。363~369はおおむね底径6.5~8.0cmの範囲に収まるものであるが, 366が8.8cm, 369が10.8cmとやや大形である。

椀の特色のひとつに胎土に含まれる鉱物の問題がある。それは胎土に火山ガラスが多く含まれているということである。本遺跡の多くの土師器椀には無色透明の火山ガラスが含まれていた。焼物の胎土に含まれる火山ガラスの問題は, 第V章で詳述するが, 黒褐色の火山ガラスも含めて興味深い傾向があり, 注目される場所である。

##### c) 坏 (第61図 370~383)

370~378は口縁部がほぼ直線的に開く坏である。口径は370の15.2cm, 378の9.8cmをのぞき, ほぼ12.5~13.0cmを測る。また, 底径は6.6~7.0cmを測るものが多い。

376は自然流路内から出土したもので, やや薄いものの「之」と考えられる墨書が観察される。本遺跡の発掘調査で唯一出土した墨書土器である。

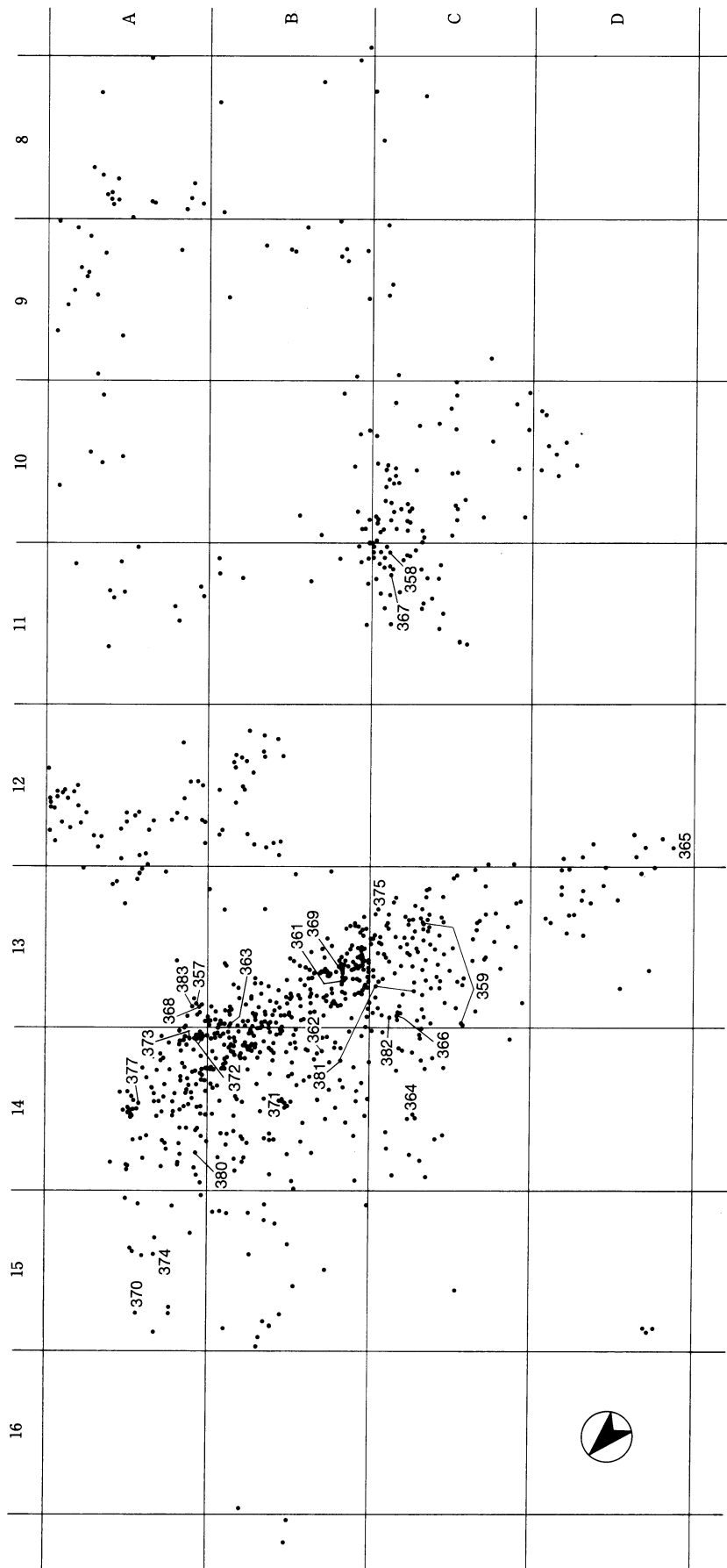
##### d) 皿 (第61図 384)

384は唯一, 皿として掲載した資料である。復元口径10.5cm, 底径8.5cmを測る。

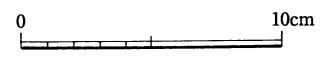
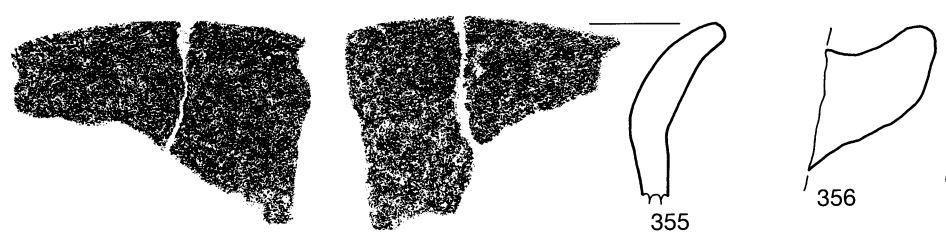
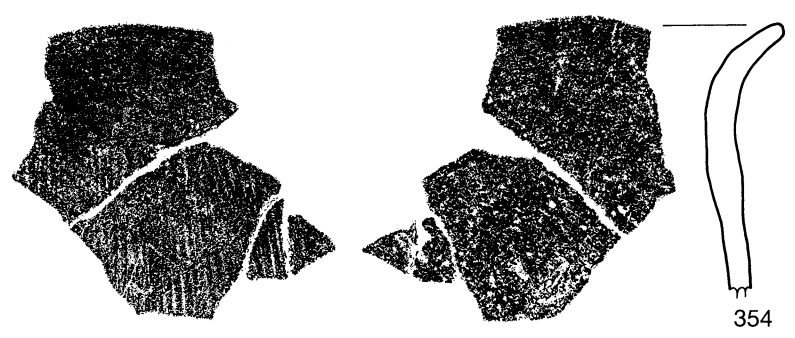
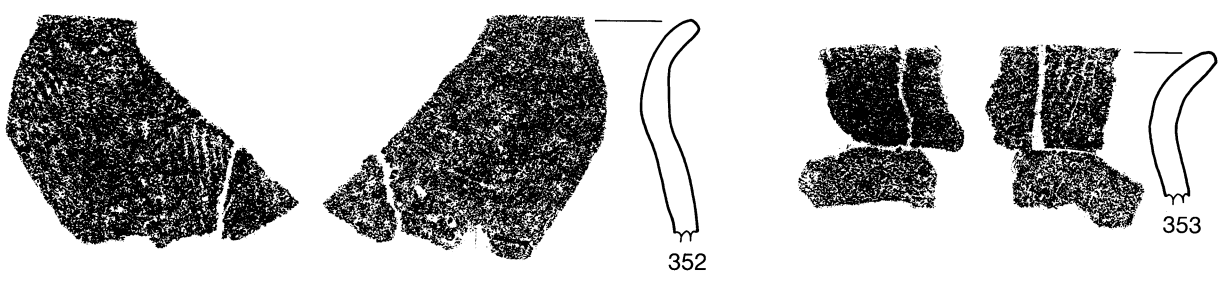
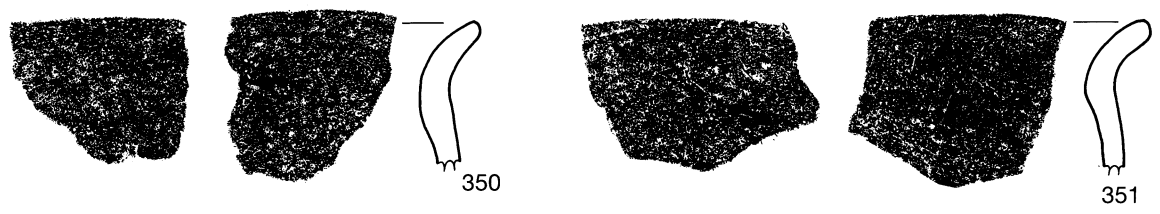
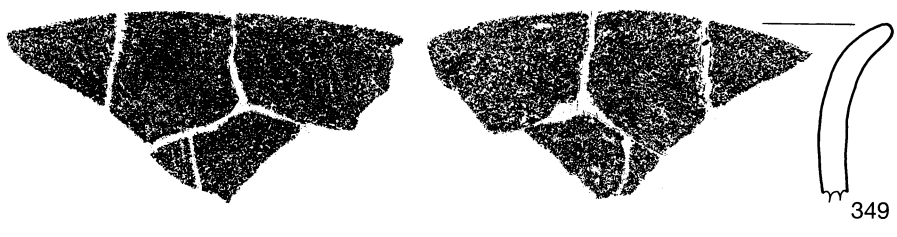
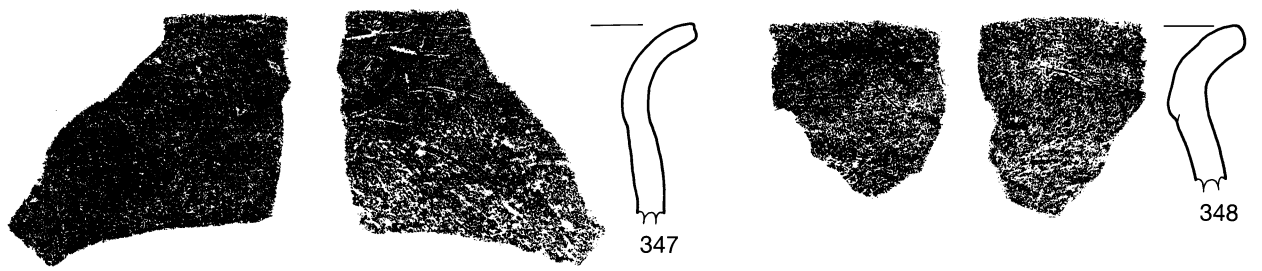
#### ③ 黒色土器 (第63図 386~402)

386~402は内面が黒色を呈する土師器, いわゆる黒色土器である。386~392が椀, 393~397は坏, 398は皿である。386~390はやや外に開く口縁部をもつ椀, 390は直線的にのびる口縁部をもつ坏である。

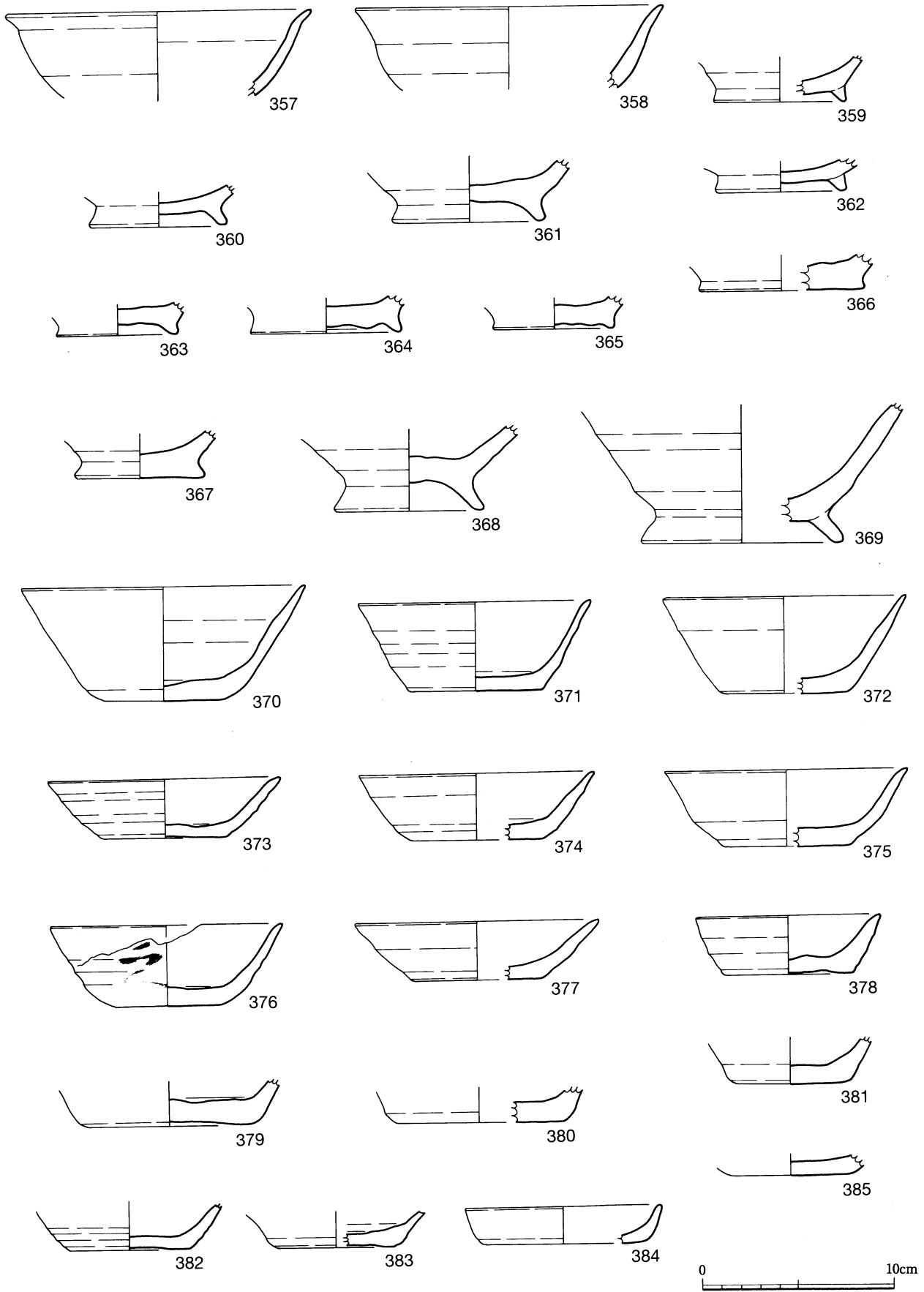
口径や底径のわかる資料は, おおむねそれぞれが14.0~15.0cm, 7.1~7.4mmの範囲におさまっ



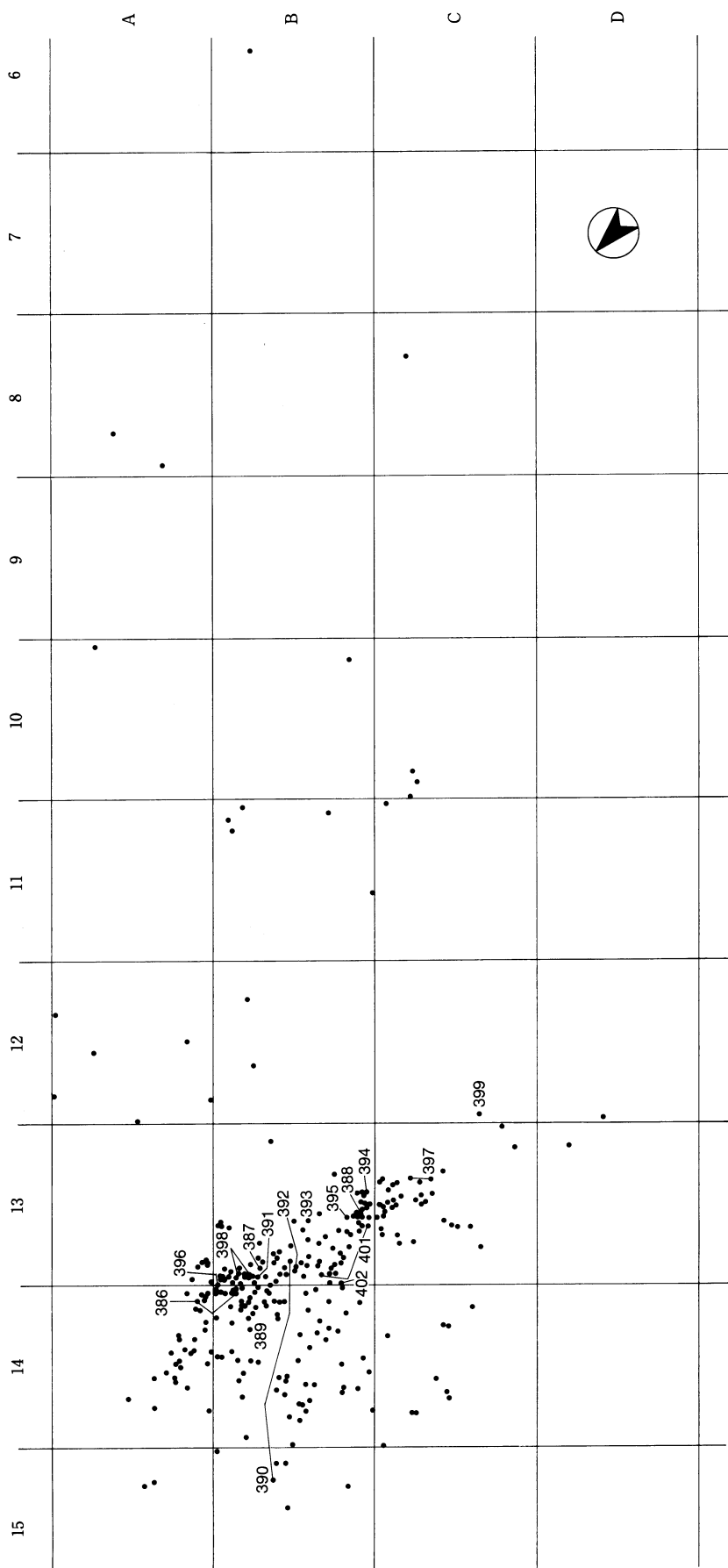
第59図 土師器出土状況図



第60図 土師器 (1)



第61図 土師器 (2)



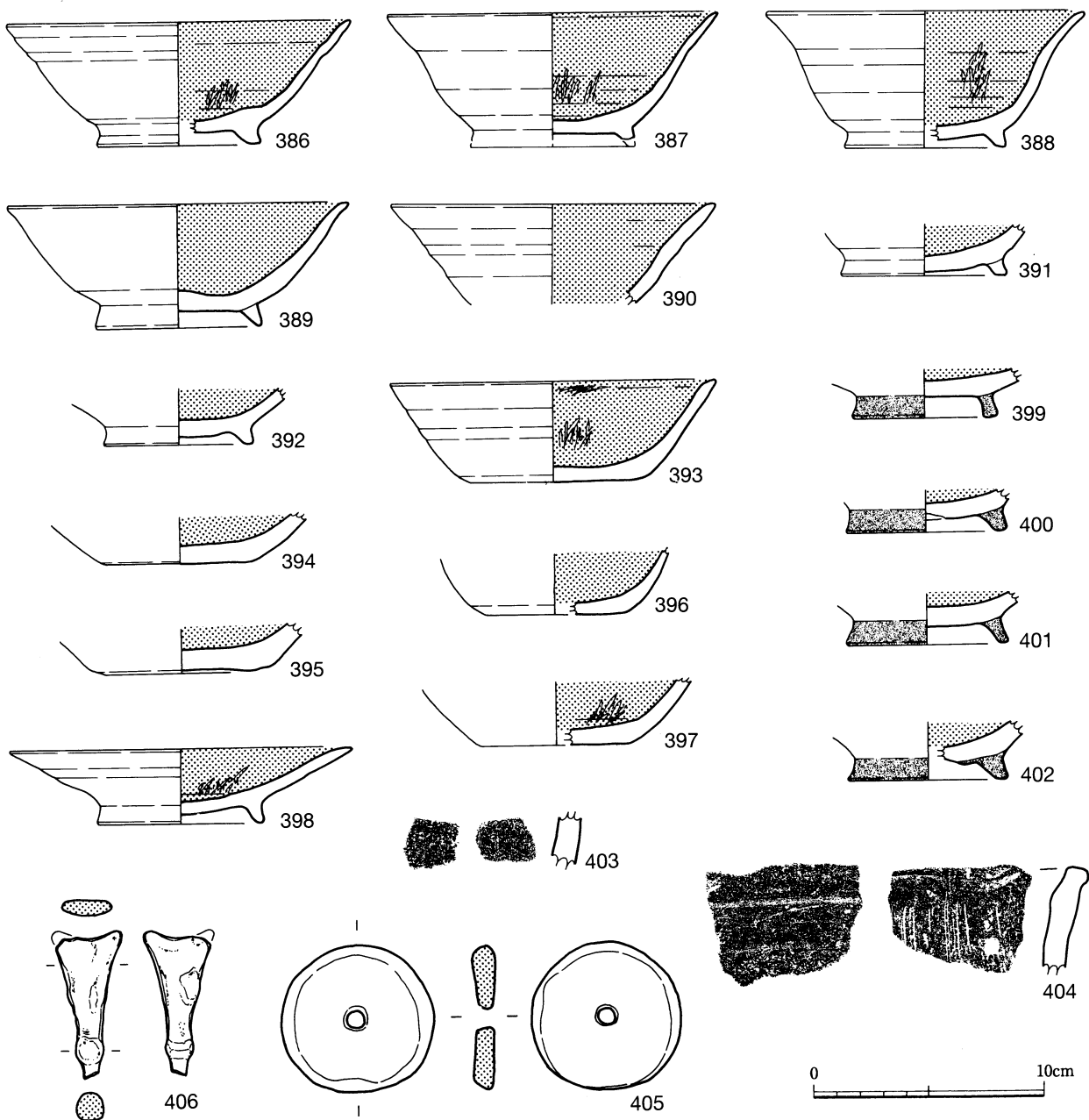
第62図 黒色土器出土状況図

ている。

399~402は高台のある底部であるが、高台部分のみ赤茶褐色を呈している資料である（図版2参照）。これは本体と高台部分の生地に違いをもたせることで、黄白色と赤茶褐色のメリハリをもたせたものである。

#### ④ その他の遺物（第63図 403~406）

403は内面に布痕がある小片で焼塩壺と考えられる資料である。404の鉢は内面にすり鉢の掻き目状の沈線がみられるものである。405は直径6.5cmを測る紡錘車である。土師器椀か坏の底部を再加工したものと考えられる。406は鉄器で雁股鍬の先端部である。腐食が進んでいるが、一部には樹皮を巻いたものと考えられる隆起部がみられる。



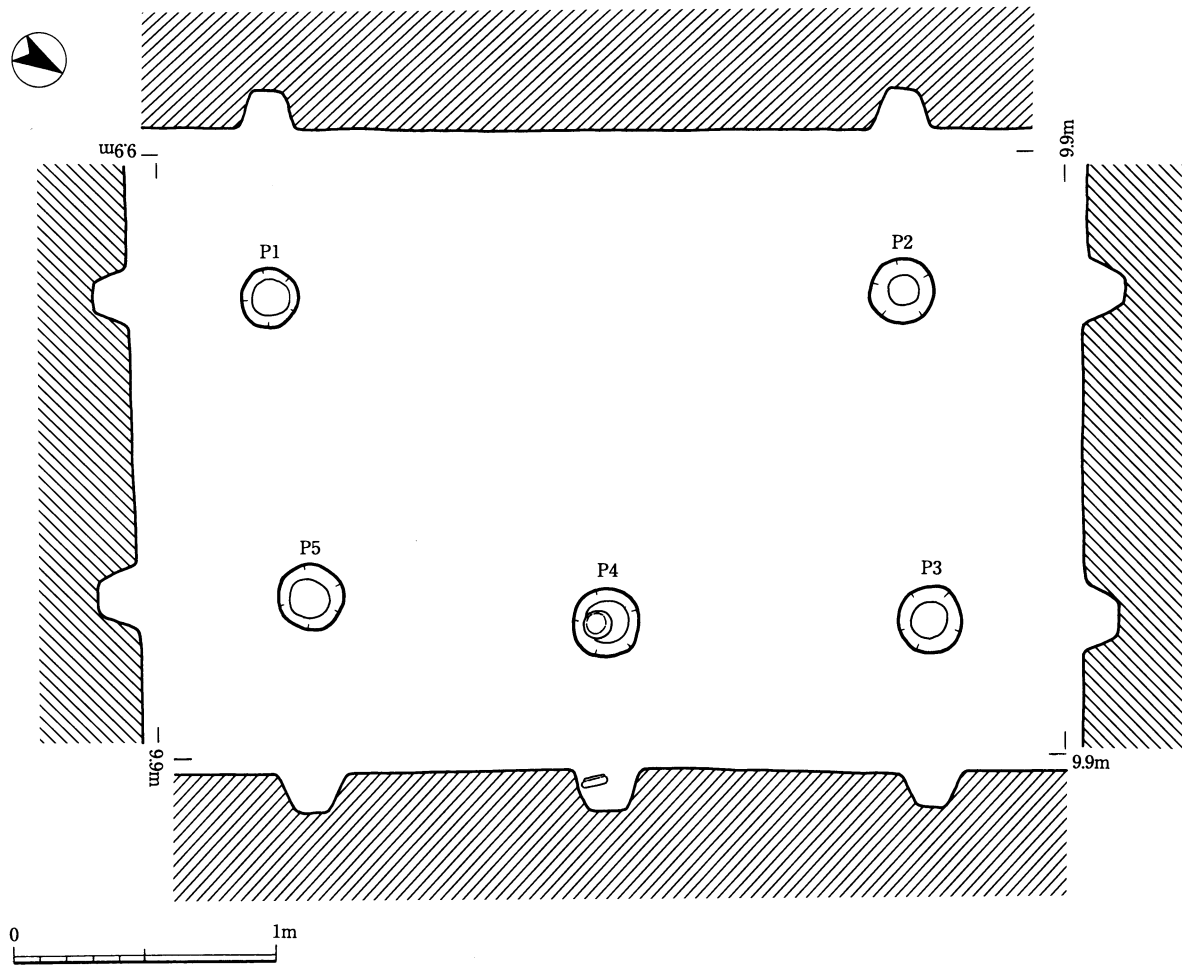
第63図 黒色土器ほか

## 5. 中世～近世

中世から近世の資料としては、掘立柱建物跡や礫集中遺構などの遺構が検出され、土師器や陶磁器類などの遺物が出土した。ここでは二つの時期をあわせて記述する。

### (1) 遺構

中世の遺構としては、掘立柱建物跡1棟、中世から近世のものと考えられる礫集中遺構が2か所検出された。



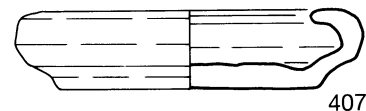
第64図 掘立柱建物跡 6

#### ① 掘立柱建物跡 (第64図)

5個のピットで構成された1間×2間の建物で、A-12区で検出された。

柱間はP1-P2が2.4m, P2-P3が1.25m, P3-P4は1.22m, P4-P5は1.17m, P5-P1は1.17mを測る。

407はP4内から出土した糸切り底をもつ土師器坯の完形品である。口縁部が大きく内湾するという特徴がある(第65図)。

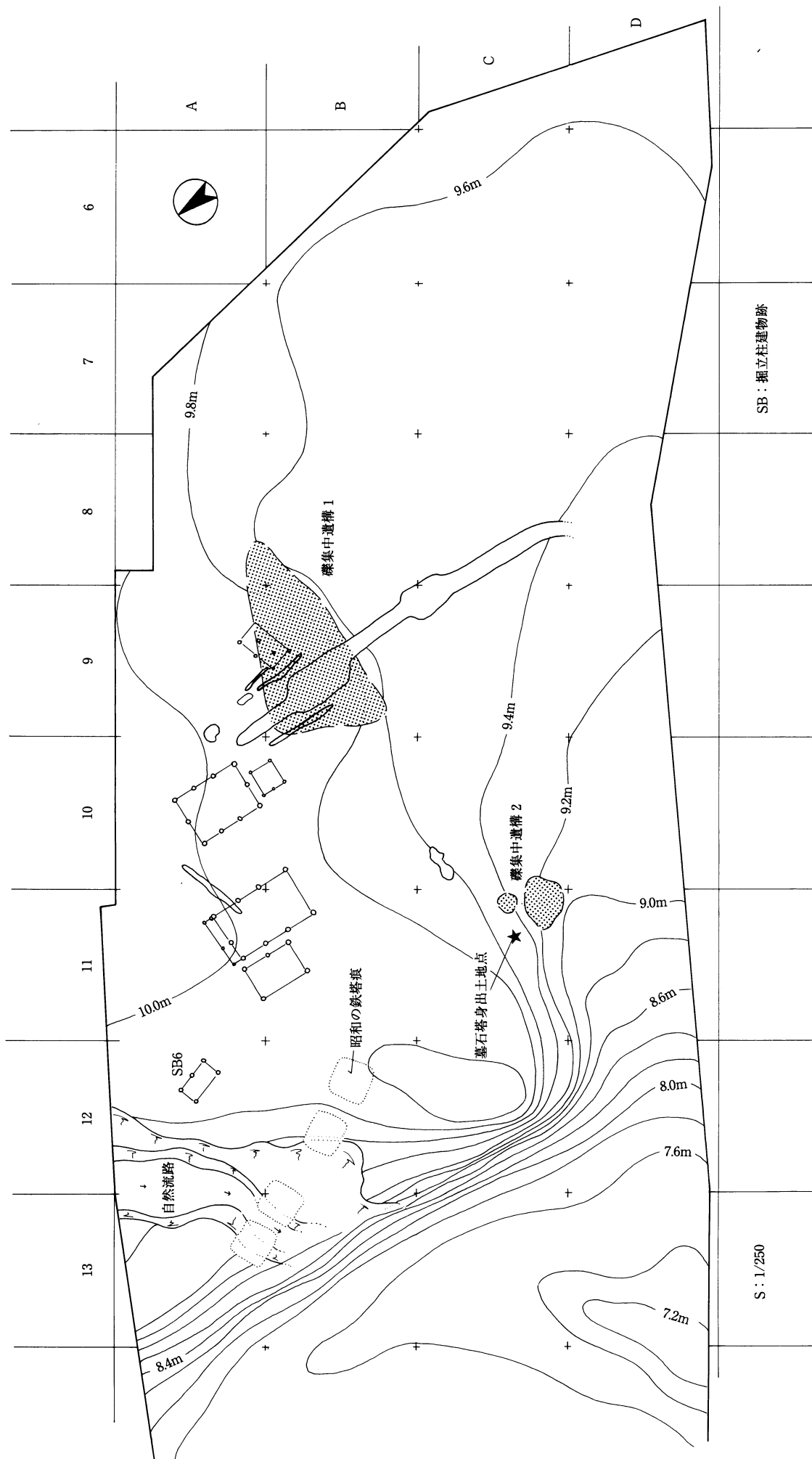


407



S:1/3

第65図 柱穴内出土の土師器



第66図 中世～近世の遺構配置図



## ② 礫集中遺構（第67, 68図）

拳大を中心にした礫が集中して出土した場所が2か所検出された。遺構の性格がつかめないこともあり、遺構の名称について苦慮したが、ここでは礫集中遺構として呼称することにした。時期については出土層位や遺物の状況から、中世から近世にかけての所産としてとらえた。

### a) 礫集中遺構 1（第67図）

B-9区を中心に検出されたもので、一辺が約9m・15m・18mを測る三角形の範囲の中に拳大の礫が集中して出土したものである。礫は親指の爪大のものから人頭大を上回るものまでであるが、おそらく総計数万個を超えるものと考えられる。三角形に広がる遺構の南側は、後世の削平があることから、本来はまだ続いていたものと考えられる。(長)方形状の遺構であったとも十分考えられる。また、三角形でとらえられる部分の中に、いくらか空白部分がある。これは後世に田畑が耕されたことからくる攪乱部分であると考えられる。

この遺構は、まず平成11年度に実施した確認調査の際の第3トレンチで確認された。当初、礫の集中が人工的なのか、それとも自然なのかの判断に苦慮した。そもそも遺構が形成されている台地のベースには砂礫層があったからである。いろいろ考慮した結果、次のような理由から遺構であると判断した。

「礫の形が比較的そろい、ほぼ隙間なく詰まった状態が多くみられる」「自然礫層内の遺物は縄文時代のものであるが、ここでは陶磁器類が主体となる」「自然礫層ではあまり見かけない拳大の軽石が数点含まれ、かつ加工品まで存在する」「礫集中部分全体の形状が整っている」などである。

ところで、第67図をみればわかるように、遺構の南側はやや東西に広がったような様子を見せる。これは、前述のように遺構の南側が削平されたことと関係があるものと考えられる。一段上になる遺構部分の縁辺に、調査前までかろうじて形をとどめていた溝があった。これは大雨の際に、水が集まるかなという程度のものであった。溝が作られた時期が明瞭でないために、本遺構とのかかわりが明らかでないが、削平後に作られたものであることは間違いのない。その際に破壊され、散乱した礫を用いて溝の一部を形成していた可能性が高いと考える。

また、本遺構の下位に存在した古代の礫敷溝状遺構との関係も当初判然とせず、調査方法や実測図作成の方法など戸惑うことも多かった。結果的に両遺構の区別が明瞭でないものもあったことから、第67図では両方の遺構を記載した。

遺物については後述するが、陶磁器類を中心に須恵器や成川式土器、土師器などが出土している。軽石製の加工品や土馬が出土していることは遺構の性格を考える上で注目されよう。

### b) 礫集中遺構 2（第68図）

C-10~11区で検出されたもので、拳大の礫数千個で構成された遺構である。礫集中遺構1と同様に、後世の削平を受けているために、完全な形で検出ではない。第68図のように2か所に分断された状態で検出された。

遺構の時期については、須恵器や青磁が出土しているためある程度想定可能であるが、下限については不明瞭な部分が多い。調査前の状況が、隣接する春日神社所有の杉林であったということもあり、検出状況は決して良好なものではなかった。ここではとりあえず、近世までの時間幅を持たせて取り扱った。

C10/B10  
C9/B9

B10/A10  
B9/A9

413

442

425

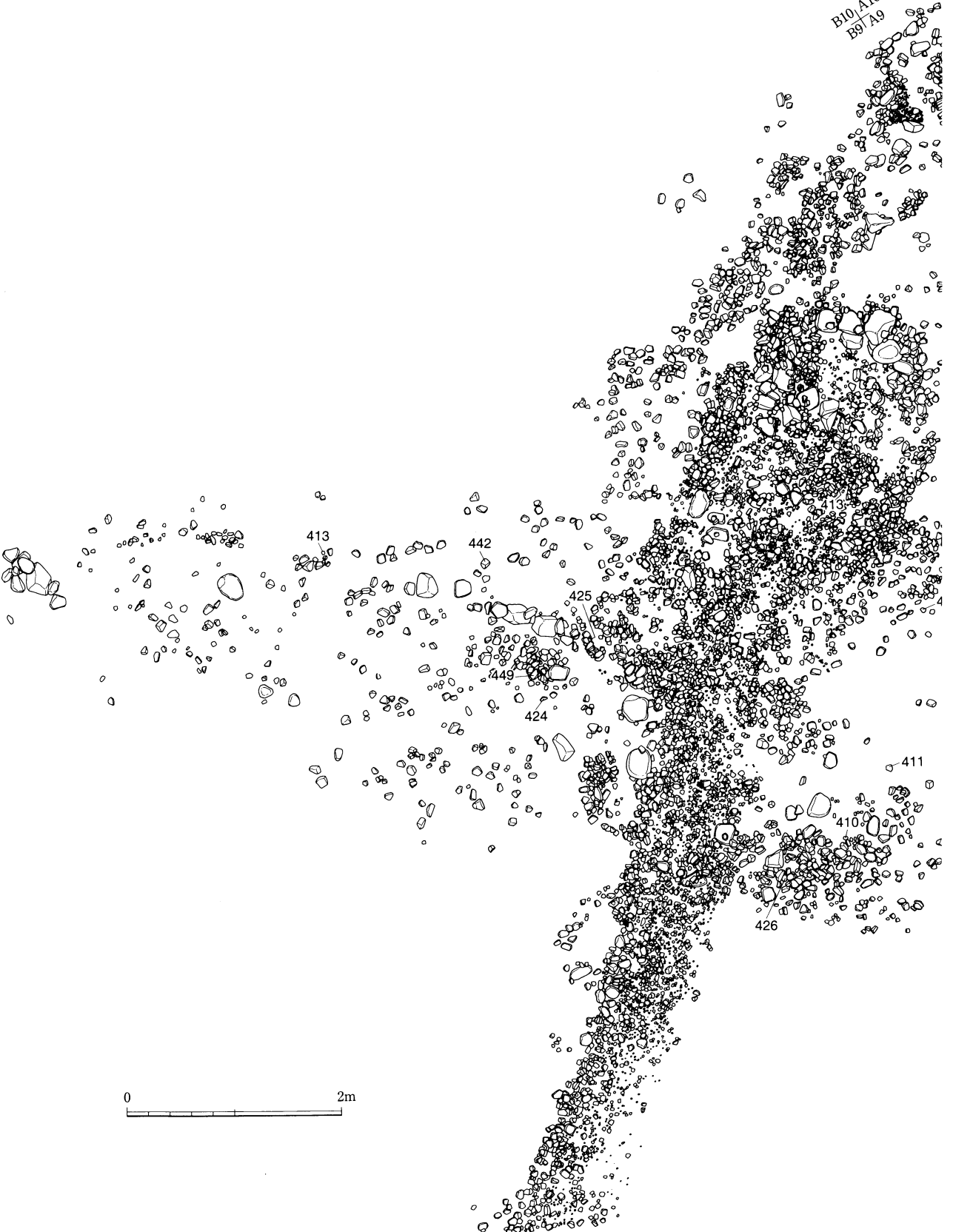
449

424

411

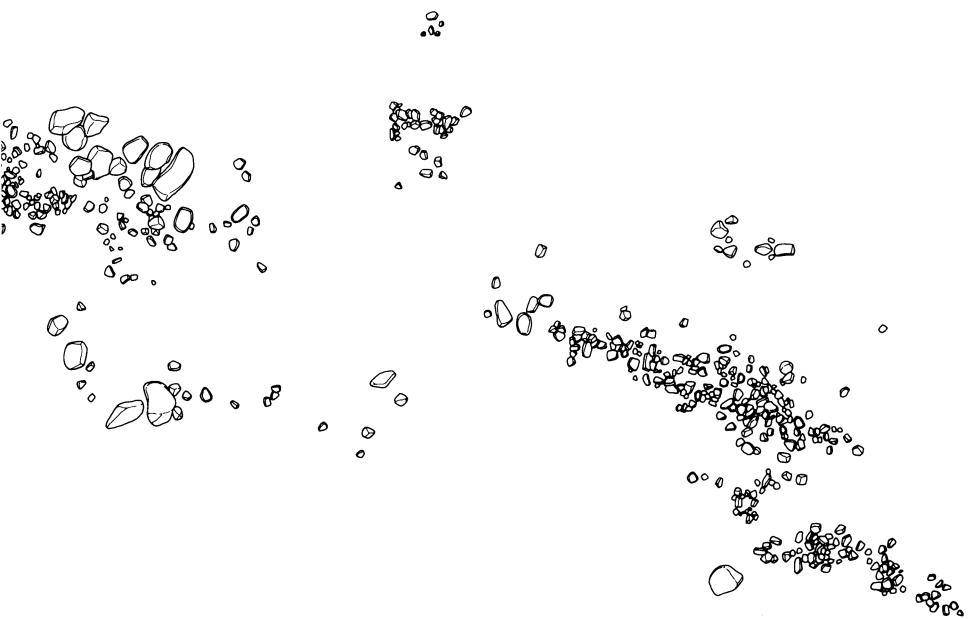
410

426





第67図 礫集中遺構 1



D10 | D11  
C10 | C11



第68図 礫集中遺構 2

### c) 礫集中遺構内の遺物 (第69～75図 408～449)

408～439のうち、418～422・427が礫集中遺構 2 からの出土で、ほかはすべて礫集中遺構 1 内の出土遺物である。

408～410は石器・石製品である。408は半欠品であるが砂岩製の砥石である。409は磨石と考えられるものである。一面に長さ3cm、幅2mm程度の線刻がみられる。意図的なものか単なる傷なのか不明である。410は両端に抉りのある石錘状の石製品である。一面に409と同じような線刻がある。これは刻みが断面「V」字形を呈し、比較的明瞭なこと、抉りと対応した位置関係にあることなどから意図的なものと解釈したい。陰石的な意味合いを持つ製品の可能性もある。クスノキの大形樹木片 (第IV章5参照) の近くで出土した資料である。

411～415は須恵器である。411・412・415が胴部片、413・414が肩部片である。411はやや大形の胴部片である。外面には浅いながらも格子状のタタキ目がみられる。内面にはやや太型凹線の平行あて具痕がみられる。4点の破片が接合した例であるが、1点は包含層中、もう1点はB12区の自然流路内から出土したものであった。

412～414の外面にも格子状のタタキ目がみられる。413と414の内面には、青海波状文がみられる。415の器面調整は内外面ともに浅くて不明瞭である。

416は土馬と考えられる土製品の一部である。胴体部左側の脚の付け根部分と考えられる。

417は土師器の坏である。復元口径12.6cm、底径9.4cmを測る。また、器高は3.0cmである。底面には糸切り仕上げの痕跡が見られる。

418・419は成川式土器の壺である。前者が底部、後者が突帯のつく胴部片である。

420は敲石と考えられるものである。長軸の両端に敲打痕がみられる。

412・413は須恵器の肩部と胴部片である。

423～425は白磁である。423は玉縁口縁の碗である。12世紀の所産と考えられる。

426・427は青磁の碗である。426は口縁部外面に雷文帯、内面胴部には大きな線描きの蓮弁文がみられる。427の外面は無文であるが、内面には蓮弁文がみられる。削り出し高台をもつ。

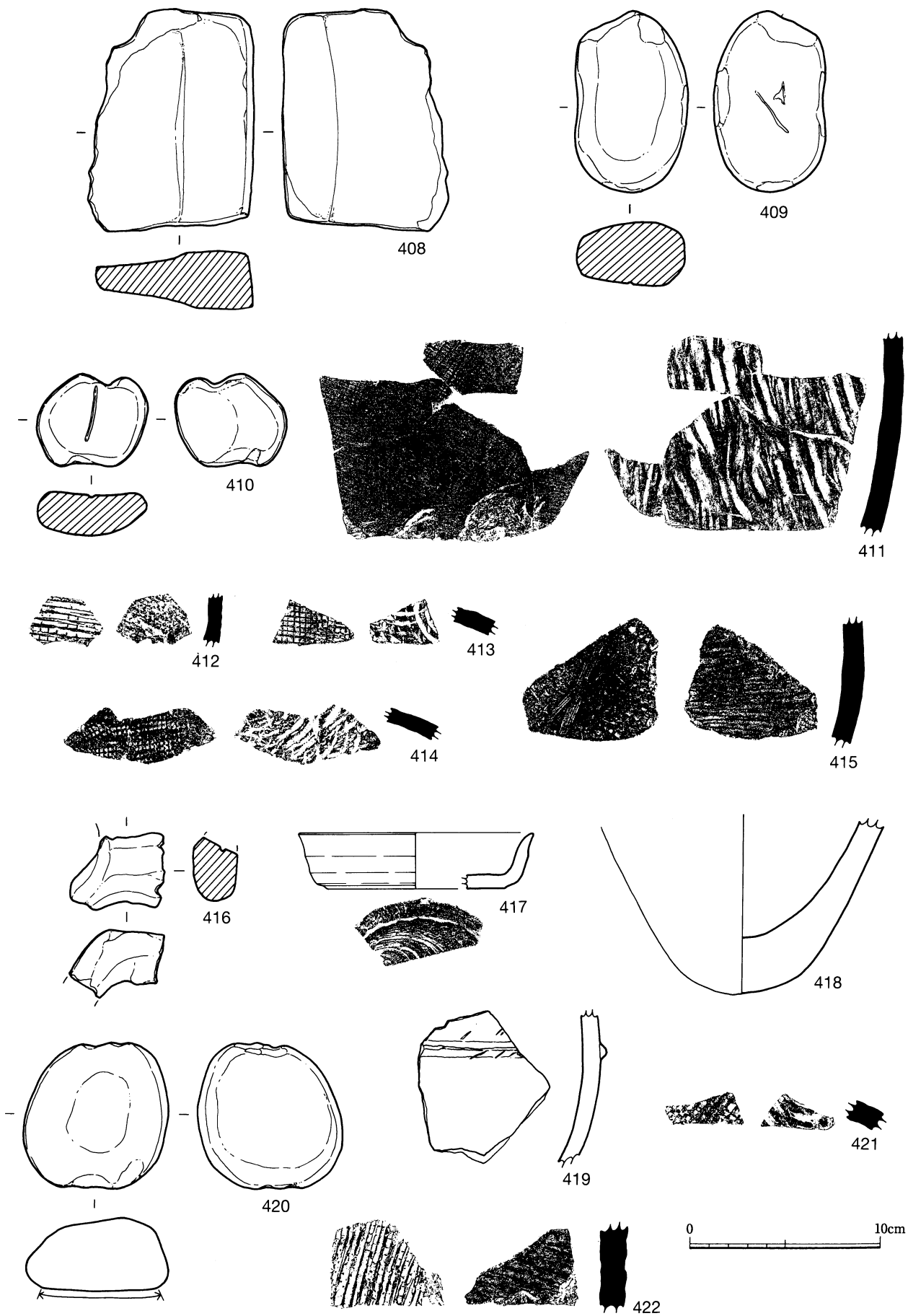
428・429は常滑焼の甕の口縁部片である。口縁部がやや外開きになる分、428のほうが古いと考えられる。430は染付碗の底部である。

431～437の陶器はいわゆる薩摩焼と考えられる。431～435は碗である。431・432・433の口径はそれぞれ11.2cm・10cm・6.2cmを測る。

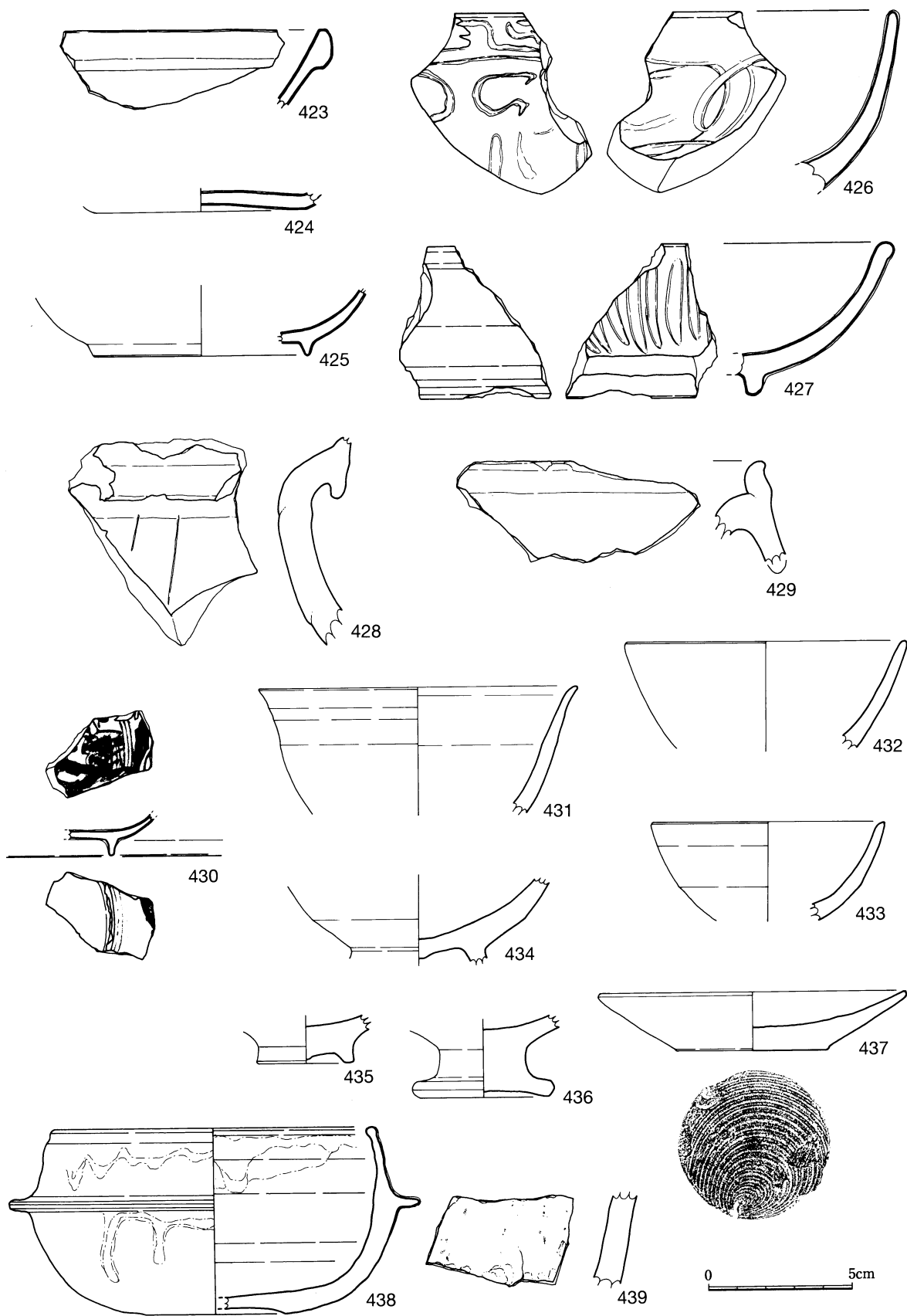
435は底径3.5cmを測る。底面中央が434と同様に飛び出している。436は仏飯器と考えられる碗の脚台である。径5cmでやや上げ底である。437は口径10.8cm、底径5.2cmを測る皿である。底面に糸切り仕上げの痕跡が明瞭に残っている。

438は小形の羽釜である。口径11.2cm、底径5.0cm、器高6.5cmを測る。4点が接合した資料である。439は埴塼片である。

440～449は軽石加工品である。頁岩や砂岩を中心として構成された礫集中遺構の中で、軽石の存在は異色であった。遺構周辺に部分的にのぞいている礫の自然堆積層の中にも軽石は少ないことから、意識的に集めてきたものと考えられる。その中で加工していると判断したのがこの10点である。多くは、面取りを行っているものや数条の線刻が見られるもの等であるが、最も注目さ

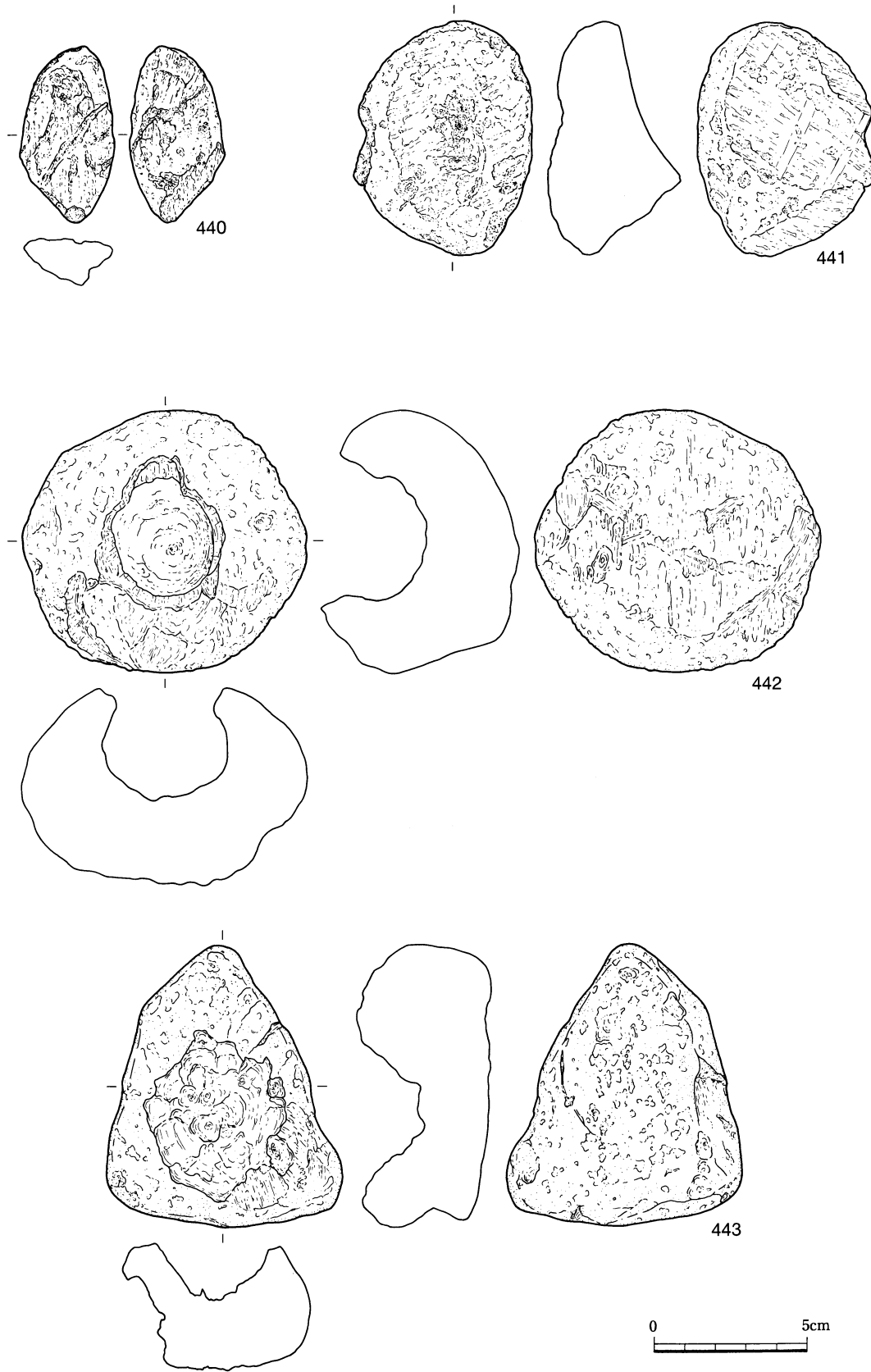


第69図 礫集中遺構内出土遺物（1）

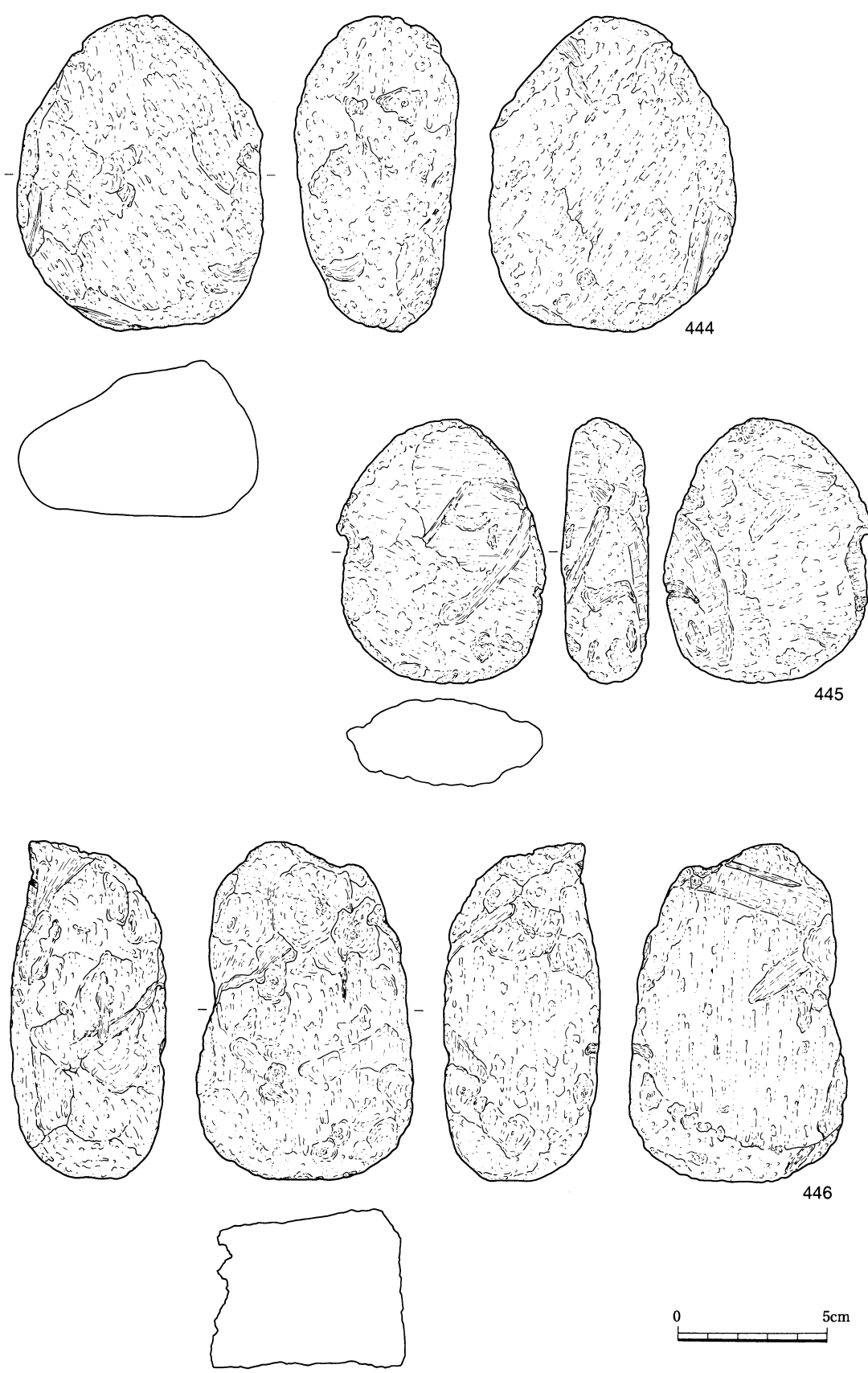


第70図 礫集中遺構内出土遺物 (2)

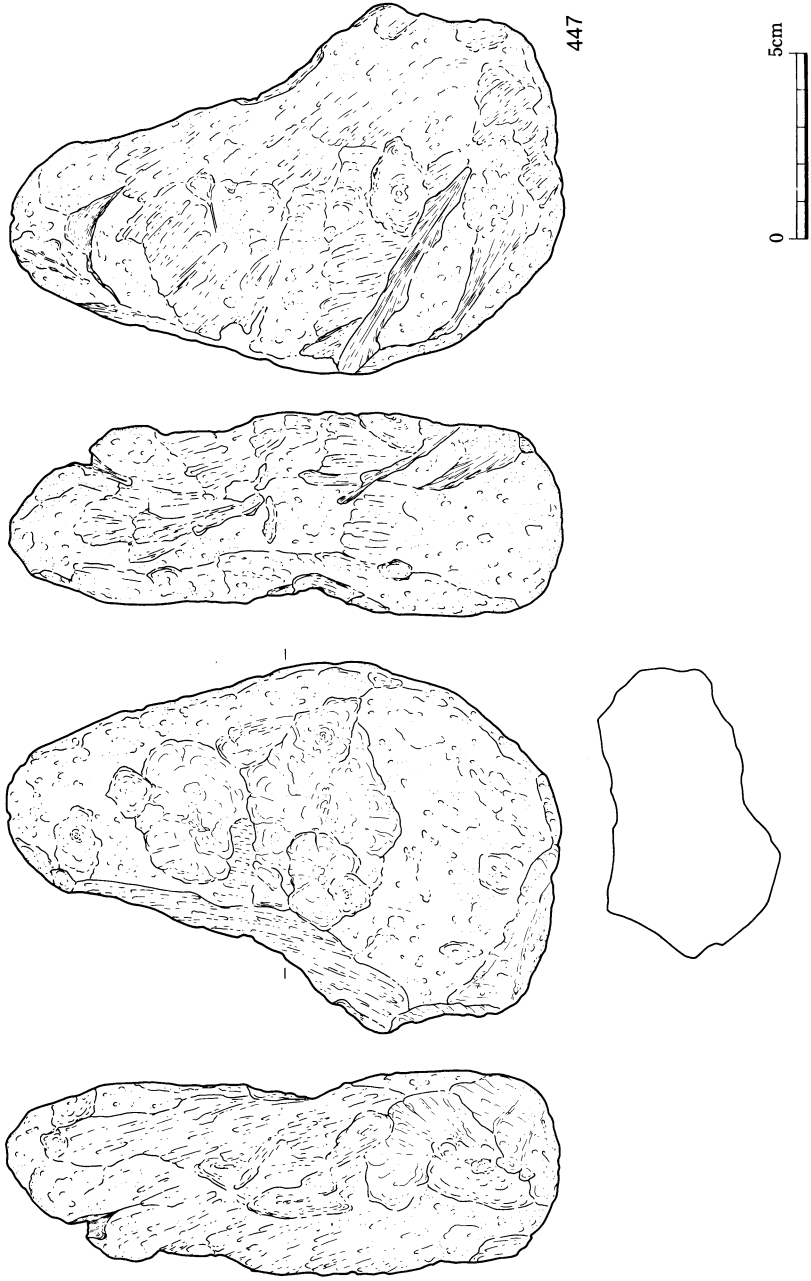




第71図 礫集中遺構内出土遺物（3）

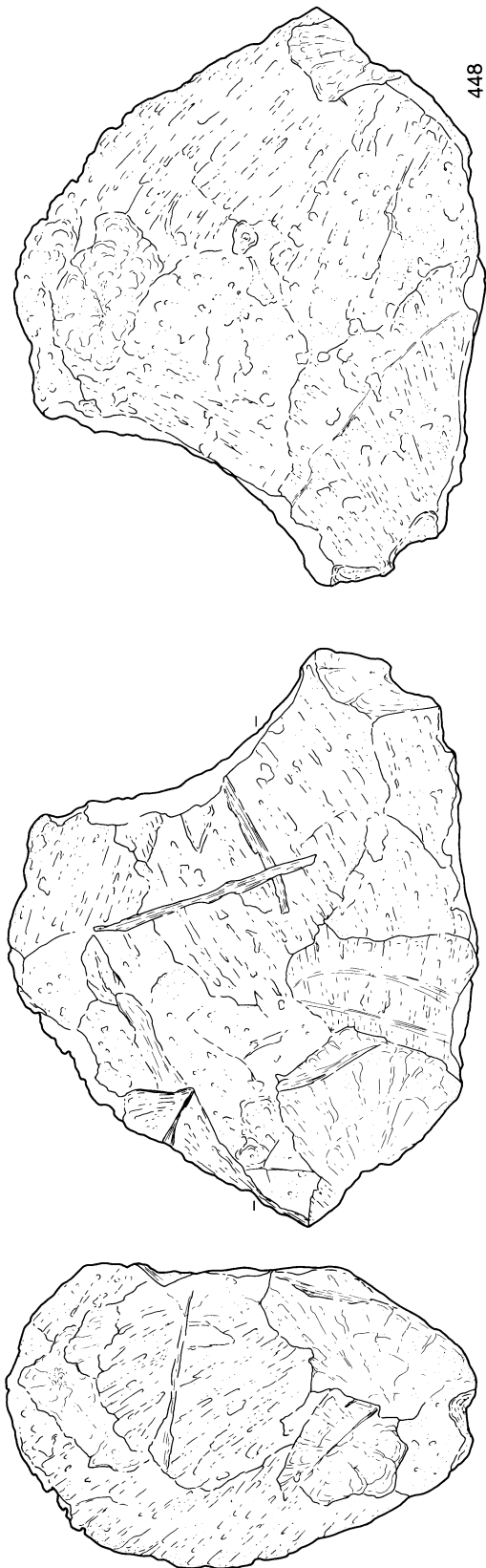


第72図 礫集中遺構内出土遺物（4）

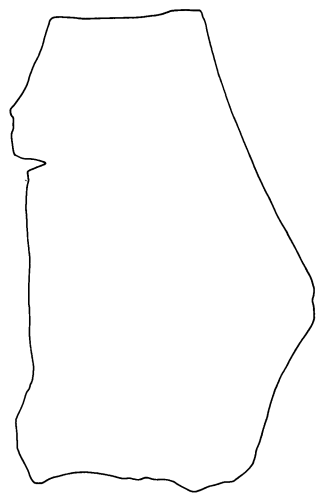
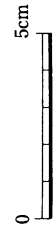


447

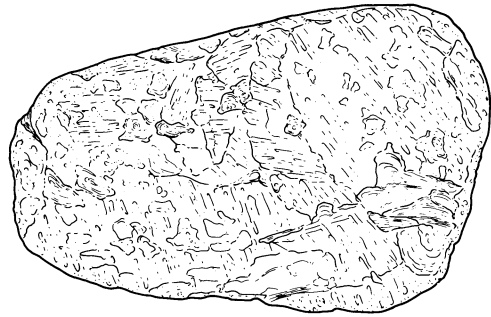
第73図 礫集中遺構内出土遺物 (5)



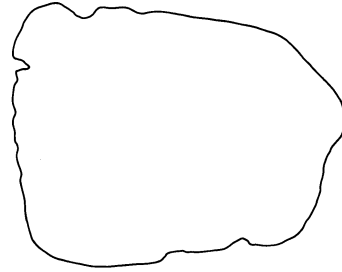
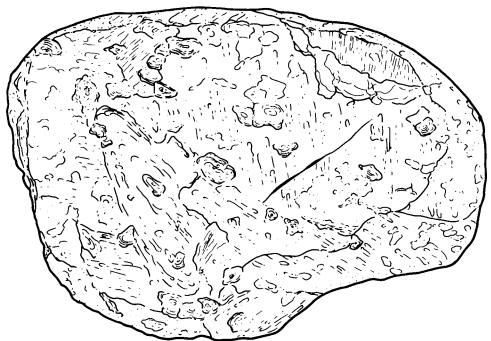
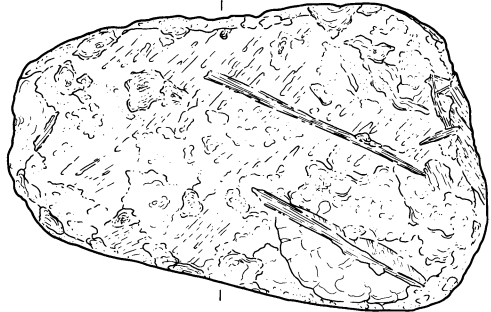
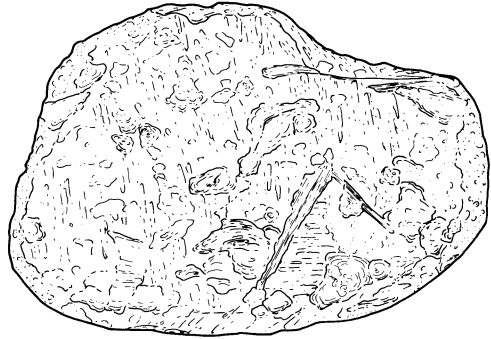
448



第74図 礫集中遺構内出土遺物 (6)



449

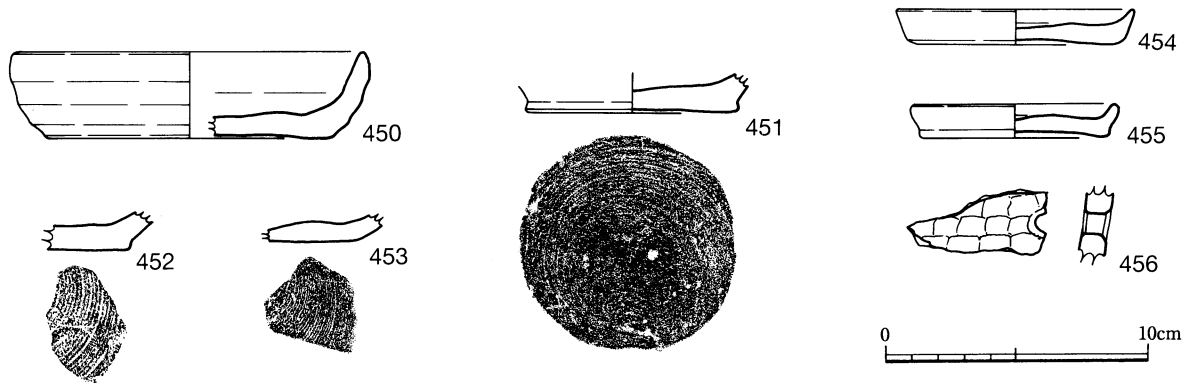


第75図 礫集中遺構内出土遺物 (7)

れるのが一面の中央に大きな窪みをもつ442と443である。その性格については不明であるが、同様な形態のものが同一遺構に2点含まれていたということは遺構の性格を考える上でも興味深い資料となろう。

## (2) 遺物

中世～近世の遺物としては、土師器・滑石製品・青磁・染付・陶器・土製品・埴塼・銭貨・墓石等があった。



第76図 土師器・滑石製品

### ①土師器 (第76図 450～455)

450～453は坏と考えられるもので、450は口径13.7cm、底径11.0cmを測る。また、451は底径8.2cmを測る糸切り底である。452・453も糸切り仕上げの痕跡を残す。

454・455は皿である。それぞれ口径9.2cm・8.0cm、底径8.0cm・7.2cmを測る。

### ②滑石製品 (第76図 456)

456は滑石製石鍋の破片と考えられるもので、補修孔の一部が残っている。

### ③青磁 (第77図 457～464)

457～460は龍泉窯系と考えられる碗である。457は内面に劃花文、458と459は外面にそれぞれ鐏蓮弁文、やや粗い蓮弁文がみられる。13世紀代のものと考えられる。460は見込みに櫛描き文がみられる皿である。同安窯系で457～459よりやや古いと考えられる。

461～464は明代のものと考えられる碗である。461や462は内面に草花文が、463は外面に細い蓮弁文がみられる。464は口縁部がやや端反り状を呈し、高台がへら削りにより斜めに面取りされた無文の皿である。口径11.6cm、底径6.2cmを測る。

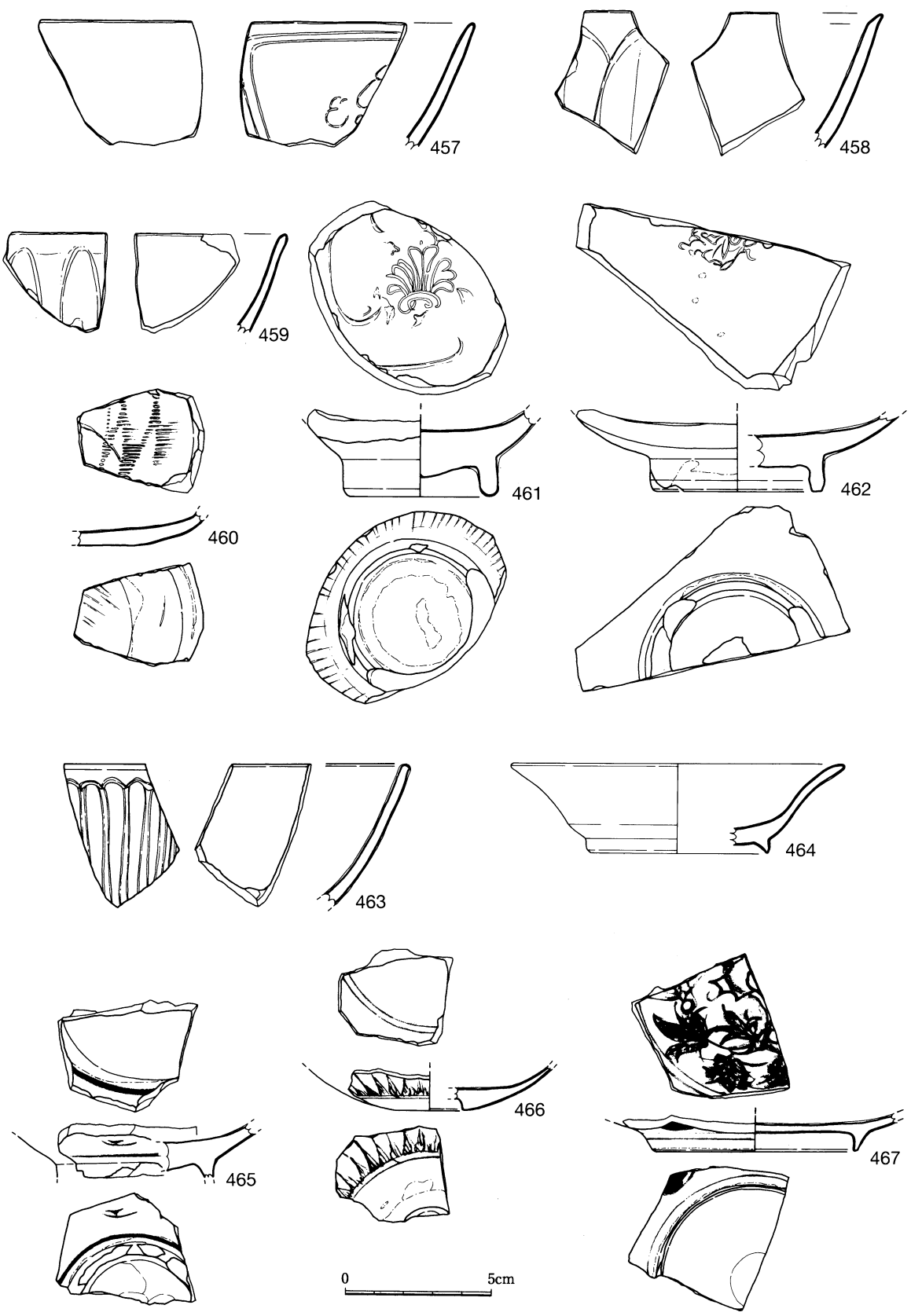
### ④染付 (第77, 78図 465～481)

465は漳州窯系と考えられる碗である。見込に圈線がみられる。466は碁笥底を呈する皿である。胴部外面に芭蕉葉文が描かれている。467は高台がへら削りにより斜めに面取りされた皿である。見込には二重圈線内に花文がみられる。466とともに16世紀前半期のものと考えられる。

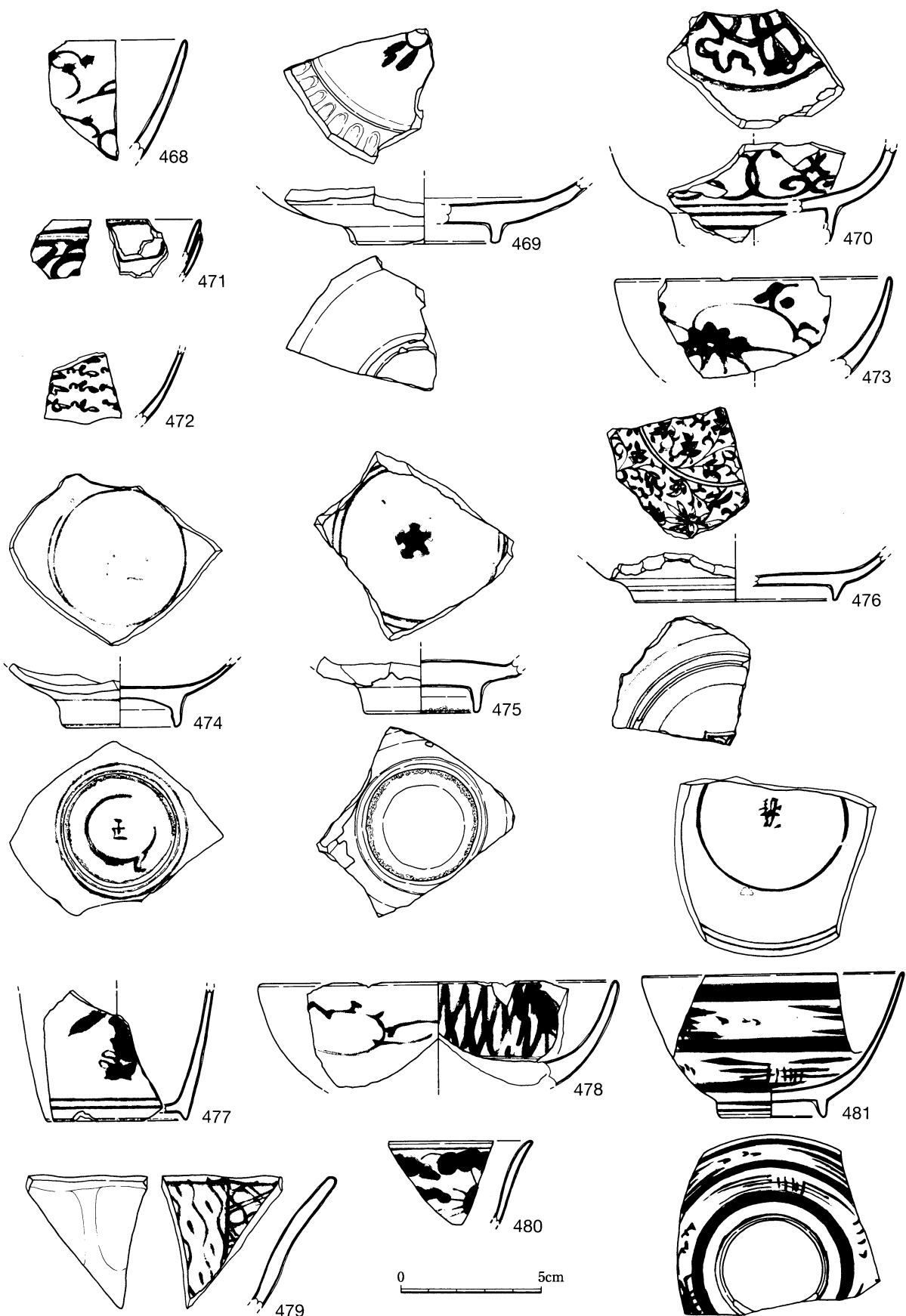
468も16世紀代と考えられる漳州窯系の碗である。469は17世紀代と考えられる皿である。

470・472は景德鎮窯系と考えられる碗である。471は2片が接合した重ね焼き状態で出土したもので、明代の碗と考えられるものである。473は18世紀代と考えられる碗である。

474は清代と考えられる碗である。見込と高台脇および高台内に一重の圈線がみられる。高台



第77図 青磁・染付



第78图 染付



内中央には「正」字の印がみられる。また、畳付には砂が付着している。

475は肥前系の碗で18世紀代のものと考えられる資料である。二重圏線のある見込中央には蒔蕨印がみられる。高台の畳付には砂が付着している。476は内面に花唐草文が描かれた18世紀代の皿である。高台脇には圏線がみられる。

477は18世紀代の蕎麦猪口と考えられるものである。高台を有する。478～480は在地産の可能性のある碗と皿（479のみ）である。481は19世紀代と考えられる碗である。

#### ⑤陶器（第79, 80図 482～510）

482は天目茶碗の口縁部である。黒褐色の釉をもつ。483, 484, 486は龍門司窯と考えられる碗である。見込に釉剥げがあり、重ね焼きの痕跡が残る。485も龍門司窯と考えられる碗である。高台は断面逆三角形を呈している。487は元立院窯と考えられる碗である。高台が断面逆三角形を呈している。

488・489は元立院窯の灯明皿の底部である。底は糸切り仕上げ（轆轤右回転）を行っている。489の見込には重ね焼きの胎土目跡がみられる。490は山元窯と考えられる灯明皿である。見込に重ね焼きの痕跡が残る。491は灯明皿台である。492は鮫肌釉を有する龍門司窯の小形壺である。493・494は小形壺の底部である。いずれも若干上げ底を呈し、底径は4.8cmを測る。

495は竹筒状を呈する花生の胴部で元立院窯と考えられるものである。釉は黒色である。496は花生につくと考えられる獅子形の把手である。497～501は蓋である。497は鮫肌釉を有するもので龍門司窯と考えられる。498は底部を糸切り高台状に削りだしたもので、元立院窯と考えられる資料である。499～501はそれぞれ底径が5.2cm・6.6cm・6.8cmを測るものである。500は龍門司窯と考えられる。502と503は茶家の注口部である。本体と注口部間の器壁にそれぞれ3個、2個の孔がみられる（ただし503もベースは3個と考えられる）。504～510は摺鉢である。505は備前焼、506～510は在地のいわゆる薩摩焼と考えられる。504・505はそれぞれ10本、9本の櫛刃状施文具で刻みを入れている。

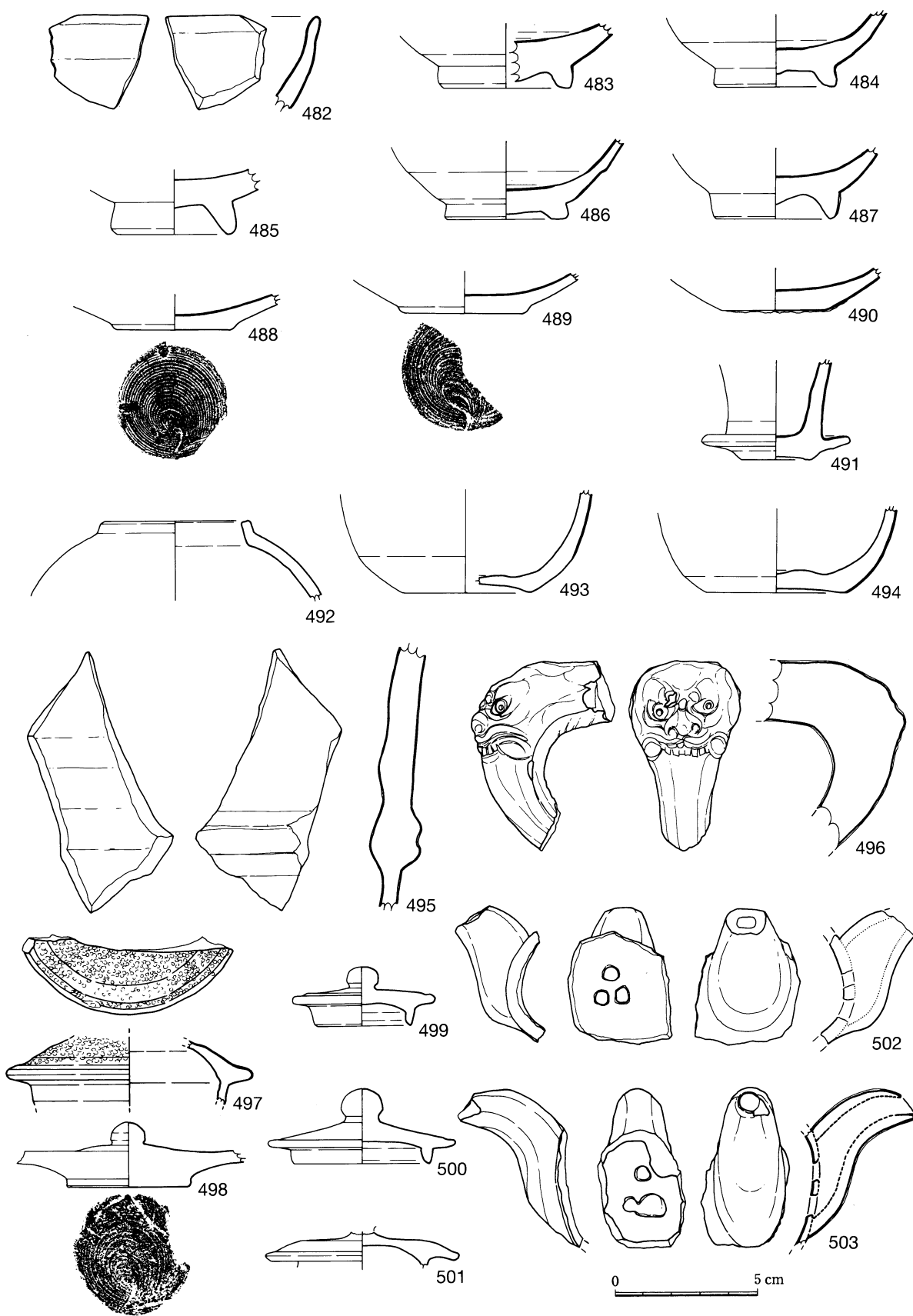
#### ⑥その他の遺物（第80～82図 511～514）

511は埴塙の口縁部である。512は在地の土人形として知られている、いわゆる帖佐人形で、狛犬の後頭部分である。神社への奉納用であろうか？ 513は寛永通宝で、直径2.1cmと小形である。

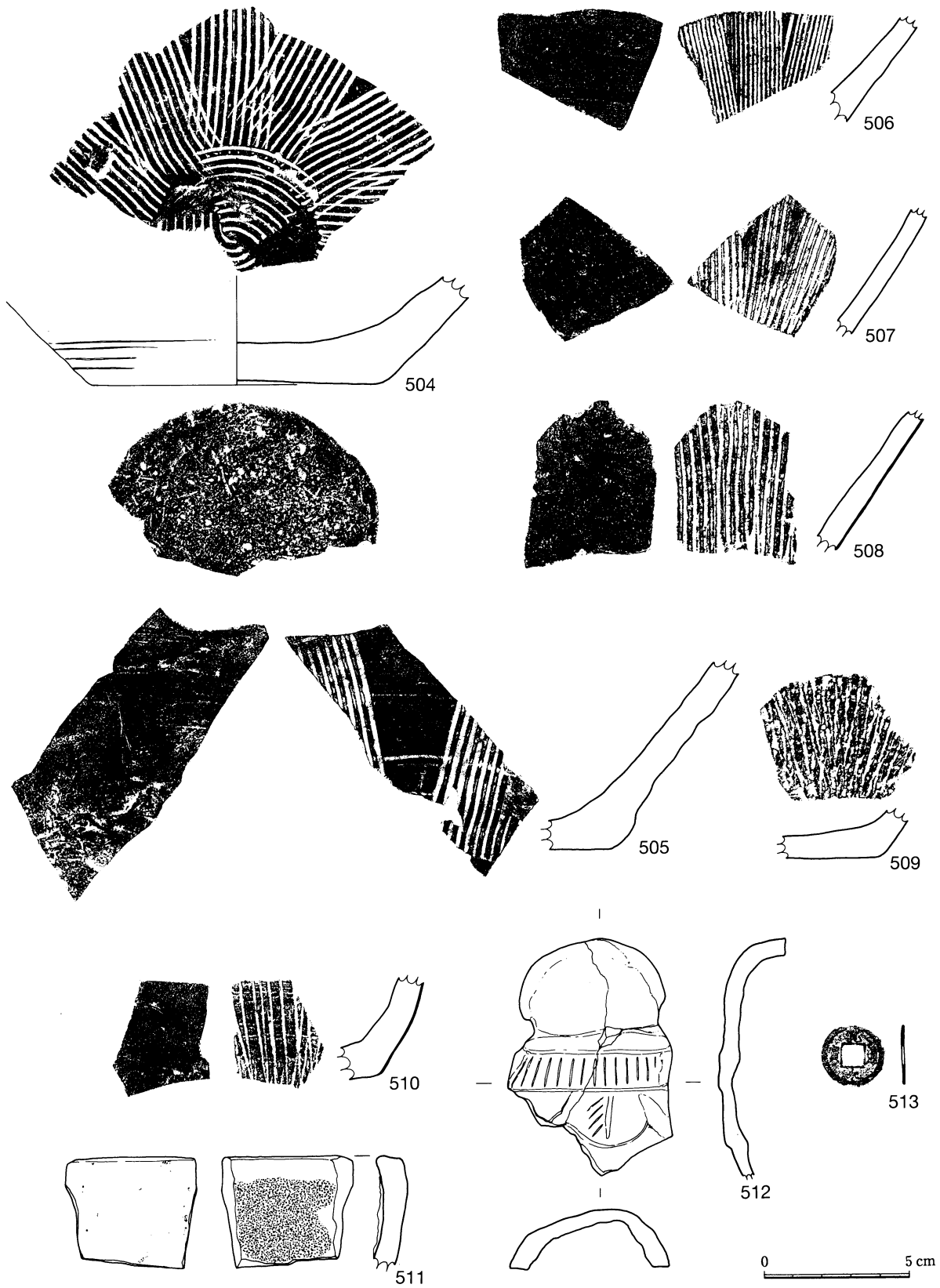
514は溶結凝灰岩製の墓石塔身である。C11区の攪乱層から出土した。正面の銘文は削り取られ、法名等は不明であるが、側面に「新納仲右衛門」「藤原時淳」という陽刻が残っていた。詳細は第IV章2掲載の松尾千歳氏による玉稿を参照していただきたいが、幸いにも系図が残されていることから若干ではあるが人物像を垣間見ることができる。それによると「藤原時淳」なる人物は、「延寶三年乙卯十二月二十五日誕生、母武州江戸傘人野原平衛門女也」とある。つまり西暦1675年に生まれた人物であることがわかるのである。

新納家は代々藤原姓を名乗っている。藤原氏の氏神は春日大社。つまり、本遺跡の南隣に春日神社が鎮座することと大いに関係がありそうである。現在の新納家の墓地は加治木町内の長年寺墓地にある。しかし、17世紀代に遡れる墓石塔はない。このことは、本遺跡地付近に存在したと伝えられる真福寺の存在を示唆しているのではないだろうかと考えられるのである。

また、墓石側面や裏面には「春」「大」「口」などの落書き状の線刻があり、興味深い。



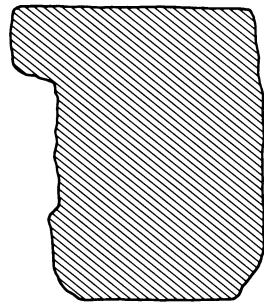
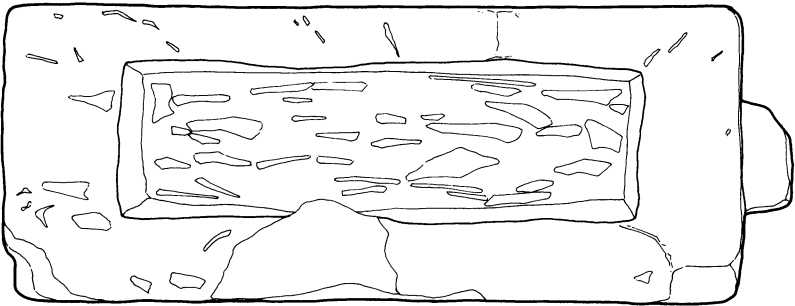
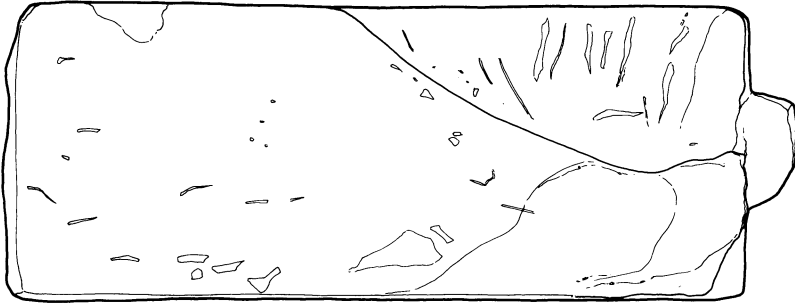
第79图 陶器



第80図 陶器ほか



514

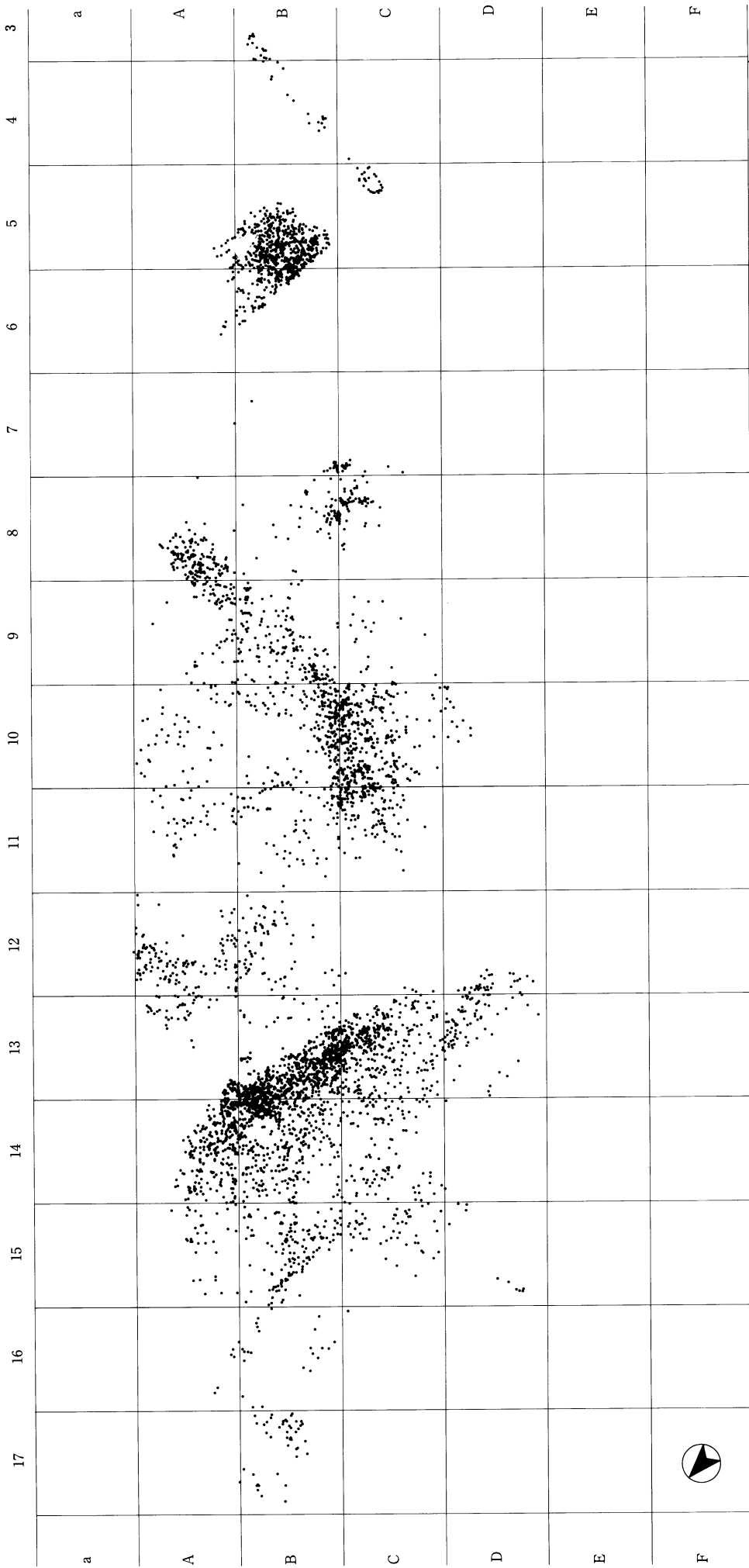


縮尺：1/6

第81図 墓石塔身（近世）



第82図 墓石塔身拓影図



第83図 遺物出土状況全体図

#### 第4節 遺跡の残存状況（第84図）

今回の発掘調査は、国道バイパス工事に伴う調査ということで、調査対象区域は当初から細長いものであった。確認調査の結果、流堆積ではなく本来遺跡を形成していた区域として本調査区域を設定した。その結果、第84図のような遺跡残存区域を推定するにいたった。おおむね今回調査した区域の北側と南側分かれている。

北側には九州縦貫自動車道がある。道路工事が行われた当時、この部分での埋蔵文化財調査は行われていない。しかし、道路部分は盛土となっていることから、遺跡は残存している可能性が高い。さらにその北側には水田が広がっているが、本遺跡調査後、近接する病院の拡張工事が行われた。遺跡の存在が予想されただけに極めて残念である。

南側には春日神社がある。本調査では南側は削平が激しく、残りが悪かったが、神社境内部分は舌状にのびる高井田台地の先端部にあることや、加治木町内で最も古い創建と伝えられる神社そのものの存在、あるいは近接していたとされる真福寺の存否等の問題もあり、遺跡残存区域として推定した。



第84図 遺跡残存状況図

## 第Ⅳ章 研究・分析・同定

### 1 高井田遺跡の古代における歴史的位置

永山修一（ラ・サール学園）

#### 1 大隅国の成立

大隅国の成立は、『続日本紀』和銅六年（713）四月乙未条に、「日向国肝坏・曾於・大隅・始羅の四郡を割きて、始めて大隅国を置く」との記事があり、日向国からの分置であったことがわかる。設置当初は4郡であったが、『続日本紀』和銅七年（714）三月丁酉条に「隼人、昏荒野心にして、未だ憲法を習はず。因りて豊前国の民二百戸を移して、相勧め導かしむるなり」とあって、移民による隼人教導が試みられた。養老～天平ころの実態を示すとされる『律書残篇』には、「大隅国【郡五、郷十九、里廿七、去京行程十三日】守、掾、大目、五位以下也」とあって、1郡が増加しており、この増加した郡は、桑原郡であろうと考えられている<sup>1)</sup>。10世紀に成立した『和名類聚抄』には「桑原郡 府 大原 大分 豊国 答西 稻積 廣西 桑善 仲川（国、中津川の三字を用ふ）」とあって、桑原郡に国府が置かれていたことと共に、大分郷・豊国郷という豊後国・豊前国からの移民によると見られる郷が存在したことが知られるからである<sup>2)</sup>。

さて、大隅国の国府については、国分市の府中から向花にかけての守公神社（現在の祓戸神社）を含む地域とするのが一般的であるが、始良郡隼人町の真孝から住吉にかけての地域に比定する説もある。『和名類聚抄』は桑原郡に国府と記し、『拾芥抄』は曾於郡に国府と記しており、また真孝は新国府を意味しているとの考え方も示されていて、国府の移動の問題も含めて、比定地の決定には本格的な発掘調査が待たれる状況であるが、大隅国分寺は、現在の国分市中央一丁目付近に所在したことが発掘調査によって明らかになりつつあり、いずれにしても大隅国の行政の中心が国分平野にあったことは動きそうにない。

一方、始良町では、小瀬戸遺跡・小倉畑遺跡など、9世紀代の官衙・寺院に関連すると思われる遺跡や、大隅国分寺の瓦を焼成した宮田ヶ岡瓦窯跡が調査されており、また同町船津では官道の痕跡ではないかとされている凹地も知られているから、ここも一つの拠点となった場所であったと考えられる。

国分平野と始良町の間位置し高井田遺跡が所在する加治木町は、古代においては桑原郡に属しており、薩摩国府と大隅国府を結ぶ官道が東西に通っていたと考えられている。従来加治木町内では、古代の遺跡はあまり知られていなかったが、干迫遺跡で9世紀後半～10世紀初めの遺構・遺物が検出され、つづいてほぼ同時期の高井田遺跡が調査されることとなった。

#### 2 9世紀の南九州

高井田遺跡では、9世紀半ばから10世紀初めの遺物が多く出土している。このころの大隅国および大宰府管内の状況を文献・考古の両面からまず概観していく。

『類聚国史』巻百五十九田地上口分田の延暦十九年（800）十二月辛未条には「大隅・薩摩两国



の百姓の墾田を収めて、便りに口分を授く」との記事があって、大隅・薩摩両国に班田制が適用されたことがわかり、さらに『類聚国史』巻百九十風俗隼人 延暦二十年（801）六月壬寅条には「大宰府に隼人を進むることを停めしむ」、同二十四年（805）正月乙酉条には「永く大替隼人の風俗歌舞を停む」とあって、隼人の朝貢が終了したことを伝えている。そしてこの後、大隅・薩摩両国の住民を隼人と呼ぶことは行われなくなるから、これは隼人の「消滅」と評価できる事態であり、両国は、隼人が居住していたことによって受けていた特別扱いが適用されなくなった<sup>3)</sup>。

しかしその一方で、『弘仁式』民部によれば、中国にランク付けされている大隅・薩摩両国ともに正税・公廩の出挙本稲は各6万束ずつで、下国の基準10万束をも下回っており、また両国の国分寺料2万束の出挙はそれぞれ日向国・肥後国で行われるなど、依然として財政的自立を達していない。8世紀後期以降、大宰府管内諸国に関する風雨・蝗害・疫病などの記事が多く、しばしば飢饉におそわれたようであり、弘仁十四年（823）に、その面積は明らかでないもの大隅・薩摩両国にも公営田が設定された<sup>4)</sup>。また、薩摩国では仁寿二年（852）に書生の食料の不足を補うために国厨田という直営田を設定したが<sup>5)</sup>、これは日向・大隅国にならったものであり、大隅国でも財源の不足を国厨田経営などで補っていたと思われる。

一方、西海道でも9世紀には「力田の輩」「富豪の輩」「富豪浪人」などが登場してくる。弘仁十三（822）年、政府は大宰府管内諸国において、うち続く疫病・飢饉に対して、疫病の百姓を看護したり療養させる者および私財を用いて飢えた百姓を養う者には位を与え、官人に取り立てるといふ措置を発しているが<sup>6)</sup>、これは郡司層や「力田の輩」「富豪の輩」などとされる富裕な農民が応じてくることを想定した措置であったと思われる。また、大宰府の管内では、任期終了後の官人（前司浪人）などが任国に居座って独自の活動をしており、大きな問題になっていた。その代表的な人物が、豊後の日田に私宅を構え私営田を営み、筑後・肥後でも活動していた前豊後介の中井王である。また、日向国では斉衡二年（855）に日向守嗣岑王が訴えられ、政府が派遣した推訴使田口房富を殺そうとする事件が起こっている。嗣岑王は貢租・労役の集取、郡司や在地土豪との対立にあたって武力を行使したものと考えられている<sup>7)</sup>。また、天安元年（857）には対馬嶋で、郡司らが党類300人ほどを率いて嶋守らを射殺する事件が起こっており、元慶7年（883）には、現地で採用・任命された任用国司と提携した前司浪人らが筑後国守を襲撃・殺害する事件が起きている<sup>8)</sup>。

さて、近年鹿児島県内では9～10世紀の遺跡の調査が増加している。また、宮崎県都城市でも重要な知見が得られている。そこでいくつかの遺跡を取り上げ、当時の時代状況について考えてみる。

まず、日向国について。都城市金田町の大島島田遺跡は、9世紀後半から10世紀前半の敷地面積7200m<sup>2</sup>以上の豪族居館跡とされるものである。遺跡はⅠ期～Ⅲ期に分けられるが、Ⅰ期は掘立柱建物10棟からなり、首長や有力者の居宅あるいは何らかの公的施設と考えられる。Ⅱ期では5棟の掘立柱建物が検出されており、南側に溝と門による区画施設が作られ、「私宅」的様相が現れる。Ⅲ期になると、2間×5間の四面に庇と孫庇が廻る大型建物（孫庇まで計測すると面積は約300m<sup>2</sup>となる）と7棟の掘立柱建物および中の島をもつ池が作られ、多量の陶磁器の所有や寝殿造系庭園との類似性などから京との強い結びつきが指摘されており、何らかの公的施設と有力者の私宅が共存していたと捉えられている<sup>9)</sup>。

万寿年間に大宰大監平季基が無主荒野の地を開発し撰閥家の藤原頼通に寄進することで島津荘

が成立するとの史料があることから、島津荘発祥まで都城盆地の開発は進んでいなかったと考えられてきたが、大島畠田遺跡や上ノ園第2遺跡・本池遺跡・肘穴遺跡・ニタ元遺跡・馬渡遺跡など9世紀代の遺跡が多数確認されてきており、都城盆地では9世紀代から開発が活発に行われていた状況が明らかになってきている<sup>10)</sup>。

東日本では、9世紀中葉から9世紀後半ころ、集落の立地が大きく変化し、平野部で周辺の開発を進めた有力者の居宅と考えられる大規模な掘立柱建物を核とした建物単位が成立した。また、丘陵・山地・高原など水田耕作が想定できない所に検出される集落は、畑作や鉄生産などを生産基盤とし、やはり有力層が開発の直接的な主体者であったと推定されているが、短期間しか存続しないところに特徴があるという<sup>11)</sup>。

鹿児島県財部町南俣の高篠遺跡では、約50点の墨書土器や官人のベルトに用いられた石帯や帯金具のほか9棟の掘立柱建物や鉄生産に関する遺物・遺構が検出されている。この遺跡の存続は9世紀後半～10世紀前半の間の短い期間であり、古代は日向国諸県郡であることから、都城盆地の有力者との関係も想定され、東日本と同じような状況を想定できそうである。

次に薩摩国の状況について見てみる。日置郡市来町の市ノ原遺跡第1地点は、標高50mのシラス台地上にあり、遺構として12棟の掘立柱建物跡が確認された。その中には2間×3間の四面庇をもつものも含まれている。「厨」をはじめとして100数十点の墨書土器や緑釉陶器や越州窯青磁も数点出土している。この建物群は、9世紀後半～10世紀前半にかけてのものと思われる<sup>12)</sup>。また、同じく市来町の犬ヶ原遺跡では、墨書土器や同時期の鍛冶遺構や硫黄の結晶などが見つかると、小規模な生産遺跡と考えられるが、市ノ原遺跡第1地点や犬ヶ原遺跡の様相は、先にあげた東日本の様相に似た面をもっていると考えられる。

さて、2001年に川内市の京田遺跡から出土した木簡は、9世紀半ばころの在地の状況の一面を垣間見せる資料である。

薩摩国国分寺跡に隣接する京田遺跡から出土した木簡は、約3cmの角柱状の木杭に「告知諸田刀祢等 勘取□田 二段九条三里一曾□□/右件水田□□□子□□□□□□□□/嘉祥三年三月十四日 大領薩麻公/擬少領」の墨書が4面に認められ、平安時代の水田面に杭として天地逆に転用された状態で約40cmが残存していた。これは、鹿児島県下で出土した初めての古代木簡であり、その内容は、九条三里一坪にある水田2段が勘取（差し押さえ）されたことを、嘉祥三年（850）三月十四日に郡司の大領薩麻公（名欠）と擬少領（姓名欠）が「諸田刀祢」に「告知」というものである。これによって、9世紀半ばに薩摩国で条里システムが機能し、また隼人の有力氏族であった薩麻公が、隼人「消滅」後の9世紀になっても大領として力を持っていたことが明らかになったが、本稿のテーマに関して言えば、「諸田刀祢」が注目される。2段の水田を勘取した主体を郡司とし自ら告知したとするか、あるいは郡司がこの水田の所有権の第三者への移転を確認し告知したものとするか、どちらの可能性もあり得ると考えるが、いずれにしても有力農民とされる田刀祢が告知の対象となったことは明らかである<sup>13)</sup>。田刀祢は田堵の語源とされ、9世紀半ばの段階で、薩摩国内に有力者が存在していたことがわかるのである。

以上から、大隅国においても9世紀半ばの段階で、有力者が出現していたとしても全く不自然ではないと考えられる。

### 3 遣水状遺構について

高井田遺跡で検出された平安時代の遺構としては、3棟の掘立柱建物跡と石敷の遣水状遺構をあげることができる。このうち、遣水状遺構は特に重要であると思われるが、都城を除くと<sup>14)</sup>、宮城県多賀城市・福岡県久留米市の遣水状遺構が管見に触れているので、先にこれらの遺跡について見てみることにする<sup>15)</sup>。

まず、宮城県多賀城市の山王遺跡多賀前地区のB区で、約110mにわたって溝跡が検出されている。多賀城の南西部一帯に道路によって区画された方格地割が施工されており、この遺跡では方格地割施行前（A期、8世紀後半代）、地割存続期（B期、9世紀前半～10世紀前半）、道路および地割廃絶後（C期、10世紀後半～）の3時期に大別できる。溝跡は、B期の1区画（南1西2区、南北約139m、東西約118m）で検出されており、遺構の重複関係などから、B期はさらに4期に区分できるといえる。B1期に構築されたこの溝は、B2期（9世紀中葉）とB4期（10世紀前半代）に改修されている。この区画は、整然とした建物構成、奢侈品の種類・量、工房が付属していた可能性が高いこと、「守」と記した墨書土器が出土していることなどから、国司館のうちでも「国守」の館の可能性が考えられるという。

この溝は素堀で、幅は0.5～3m前後と一定せず、鉤手に曲がったコーナーのやや下流付近には溝水の浄化のためとみられる枡や貯水的な施設とみられる土壇をともなっている。この溝が、国司館の中央部に位置し、少数の整然とした建物が配置されていること、また広い空地が存在していることは、庭園としての鑑賞的な性格をもち、周囲から奢侈品が集中してみられることなどは、頻繁に饗宴が行われていたことを示すという。以上から、この溝跡は、庭園に構築された遣水の遺構であるとされている<sup>16)</sup>。

福岡県久留米市朝妻町では、筑後国府跡の第122次と第168次調査で遣水遺構が確認された。第122次調査で約10m、第168次調査で約20m、この間に20mほどの未調査地があるので、計約50mの遣水遺構が検出されている。溝の幅は0.5m～2.5mで深さは20cm前後、断面は浅いU字形をしている。溝底には礫・平瓦・土師器・須恵器・黒色土器・白磁・青磁・緑釉陶器を小さく砕き、いわゆる「三和土」状に突き固めた部分があり、また溝肩部には礫で護岸された部分もあった。

この遺構は、調査地の約100m東南側に所在する「朝妻の清水」（総社とみられる味水御井神社の境内に湧出する）を水源とする遣水遺構と推定され、一部では二度にわたって流路の変更が行われた。この遣水遺構は、11世紀代～12世紀前半ころに比定され、第3期の筑後国府（朝妻国府、10世紀後半～11世紀）政庁の東隣接地に営まれた国司館の一部と想定される施設（園地）の一部としてつくられ（園地自体は10世紀代にさかのぼる可能性も否定されていない）、『高良記』に見られる延久五年（1073）の国府移転（第4期の横道国府）の後、在国司居屋敷となった時期まで存続したと考えられている<sup>17)</sup>。

### 4 高井田遺跡の位置づけ

さて、以上をふまえて、高井田遺跡の遣水状遺構について考えてみる。今のところ、都城以外の遣水遺構として知られている山王遺跡多賀前地区のB区と久留米市の筑後国府跡は、ともに国司館の可能性が高いとされている遺跡である。

高井田遺跡の性格については、まずこの国司館の可能性を考える必要がある。しかし、冒頭で述べたように、大隅国府は国分平野に位置したと考えられており、比定地の1つである国分市の府中までは10kmほどの距離があるから、国司館の可能性には否定的にならざるを得ない。しかし、この時期に遣水状遺構が造られていることは、京との強い結びつきを想定させる。

そこで、都城市大島畠田遺跡をみると、日向国府から直線距離でも40km以上離れた都城盆地に京との強い結びつきが指摘される園地をもつ居館が営まれていることは注目される。この遺跡の性格について、調査を担当した谷口武範氏は国府・郡衙の出先機関の可能性も指摘しているが、寝殿造系庭園との類似性などからは、この居館の主自身が京との強いつながりをもっていたと考えられ、任期終了後の官人（前司浪人）などの居館の可能性も考えられると思う。

山形県米沢市の古志田東遺跡では、庇を含めると約330㎡の大型掘立柱建物や船着き場、木橋などの遺構が検出された。また多量の墨書土器、椀・物差し・鍬・独楽・修羅などの木製品・木簡が出土しているが、その時期は9世紀中頃から10世紀に入るところで、多くの労働力を組織して大規模に農業経営を行い、河川を管理して交易を行っていた富豪層の屋敷跡とされている<sup>18)</sup>。9世紀半ばの段階で、当時日本の北辺の出羽国で、富豪層の活動が確認できることの意味は大きい。

高井田遺跡は、これとほぼ同じころ日本の南辺にあつて、遣水状遺構造営を可能にするだけの豊かな経済力と京との強い結びつきを持った者によって営まれたとすることができる。

10世紀代の大隅国の状況を伝える史料として、『宇治拾遺物語』巻九の「歌詠みて罪を許さるる事」および『北山抄』巻十吏途指南をあげることができる。前者は、10世紀後期に大隅国守（『拾遺集』によりその国守は桜島忠信）が、「しどけない」郡司を懲らしめようとして召喚したが、哀れな様子であったので、歌を詠ませて赦してやったというものであり、立場を替えれば、郡司のしたたかさを示す史料とも言える。後者は大隅国守弓削仲宣の勤務評定に際して、同国内でも税の未徴収分を糊塗するために里倉負名による会計処理が行われていたことを伝えるものである。

11世紀にはいると、大隅国では「もうひとつの長元の乱」とも言われる大宰大監平季基による大隅国府焼き討ち事件が起こっている<sup>19)</sup>。これは島津荘の開発者とされる平季基が島津荘の大隅国への拡大をねらって、この動きに反対した大隅国司重（船守重か）の館、藤原良孝の宅や国庁などを焼き討ちしたものである。藤原良孝についてはたとえば国司の任期終了後もそのまま住み続けるというような形で大隅国内に勢力を持ちながら、一方で中央政界とのつながりも持っているという人物像が想定されている。また、平季基の動きの背景には彼を通じて摂関家につながり国司の支配からの離脱をはかろうとする在地の有力者の存在があったと考えざるを得ない<sup>20)</sup>。

## おわりに

今回見つかった高井田遺跡の平安時代の遺構は、遺跡全体の南の一部と考えられ、その全体像は現時点では不明とせざるを得ないが、上述したように遣水状遺構は、全国的にきわめて貴重な例とすることができるのであり、重視すべき遺跡であると考えられる。これを営んだ勢力が、どのようにして百数十年の後、平季基を迎え入れたり対抗したりした在地の勢力につながるのか、あるいはつながらないのか、当該時期の集落の様相の復元を始めとする、考古学の諸資料の集成に基づく考究に期待するところ大である。

〈附記〉遣水遺構については、菅野成寛（中尊寺仏教文化研究所）、大平聡（宮城女学院大学）、水原道範（久留米市教育委員会）の各氏に、ご教示並びに資料提供いただいた。記して感謝する  
しだいである。

【 註 】

- 1 当時、大隅国内で戸籍・計帳の制度が十分に機能していたと言い難いから、「郷十九，里廿七」の記載から在地社会の実態をうかがうことは難しい。
- 2 井上辰雄『隼人と大和政権』（学生社 1974年）137頁，中村明蔵『隼人の研究』学生社 1977年（新訂版 丸山学芸図書 1994年），新川登亀男「豊国氏の歴史と文化」（新川登亀男編『古代王権と交流 8 西海と南島の生活・文化』名著出版 1995年）
- 3 原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一『鹿児島県の歴史』（山川出版社 1999年）
- 4 『類聚三代格』卷十五易田并公宮田事 弘仁十四年二月二十一日付太政官符
- 5 『類聚三代格』卷十五易田并公宮田事 貞観十八年五月二十一日付太政官符
- 6 『類聚三代格』卷十七 募賞事 弘仁十三年三月二十六日付太政官符
- 7 笹山晴生「平安初期の政治改革」（『岩波講座 日本歴史』第3巻 岩波書店 1976年）
- 8 西別府元日「九世紀の大宰府と国司」・平野博之「在地勢力の胎動と大宰府支配の変容」（下條信行・平野博之編「新版『古代の日本』③九州・沖縄編』角川書店 1991年）
- 9 谷口武範「宮崎県大島島田遺跡の調査」（『日本歴史』632号 2001年1月号）
- 10 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』（都城市 1997年），『都城市史 史料編 古代・中世』（都城市 2001年）
- 11 坂井秀弥「律令以後の古代集落」37頁（『歴史学研究』681号 1996年）
- 12 「埋文だより」第15号（鹿児島県立埋蔵文化財センター 1998年2月）
- 13 中村明蔵「鹿児島県京田遺跡出土の木簡をめぐる諸問題」（『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第2巻第1号 2001年），  
梶尾達哉「鹿児島県京田遺跡出土木簡の「田刀□」について—田堵初見史料の出現—」（『鹿大史学』49号 2002年）
- 14 都城の園池遺構については、牛川喜幸・井上博道著『新装 日本の庭園2 池泉の庭』（講談社 1996年）に詳しい。
- 15 岩手県平泉町の毛越寺庭園や同じく柳の御所遺跡でも、遣水遺構が確認されているが、ともに12世紀のものであり、高井田遺跡の年代と大きく隔たりがあるので、ここでは取り上げない。
- 16 宮城県文化財調査報告書第171集『山王遺跡Ⅳ—多賀前地区考察編』（宮城県教育委員会1996年）
- 17 久留米市文化財調査報告書第100集『筑後国府跡 平成6年度発掘調査概要』（久留米市教育委員会 1995年），久留米市文化財調査報告書第164集『筑後国府跡—第168次調査—』（久留米市教育委員会 2000年）
- 18 手塚孝「山形県米沢市古志田東遺跡—平安時代の富豪層の屋敷—」（『日本歴史』第639号 2001年8月号）
- 19 『都城市史 史料編 古代・中世』（都城市 2001年 野口実氏執筆分）
- 20 永山修一「島津荘成立前後の南九州」（『みなみの手帖』95号 2002年）

〈初校に際して〉高井田遺跡の遣水遺構の性格に関して、菅野成寛氏より、浄土系庭園を持った寺院の可能性もあるとのご教示を得た。「遣水（流れ）・洲浜の庭園意匠をもつ遺跡一覧」（田中哲雄『日本の美術No.429 発掘された庭園』2002年2月 至文堂）によれば、京都・奈良以外で平安時代前期にさかのぼる浄土系庭園を持った寺院はなく、したがって、これを寺院としても、その造営者としては、京と強い結びつきを持った者を想定しなければならない。

## 2 高井田遺跡の中世～近世における歴史的位置

松尾千歳（尚古集成館）

### 1 歴史的環境

高井田遺跡の周りには、加治木の歴史を物語る上で欠かせない数多くの遺跡がある。遺跡の位置づけは、これらの史跡との関係を考慮しなければならない。そのためにまず中近世の加治木の歴史を振り返っておこう。

平安時代後期から室町時代にかけて加治木を支配していたのは加治木氏であった。加治木氏の系図によれば、寛弘3（1006）年、元関白藤原頼忠の三男宰相経平が、皇后冊立の争いにより罪を得て加治木に配流され、加治木郡司を勤めていた太夫良長（大蔵氏）の女肥喜山女房と結ばれ、加治木氏の祖となったという。加治木氏は、その後500年近く加治木を支配し続けてきたが、21代大和守久平の時、守護島津忠昌（11代）と対立し、明応5（1496）年、忠昌に加治木を攻略され没落した（明応6年とも）。

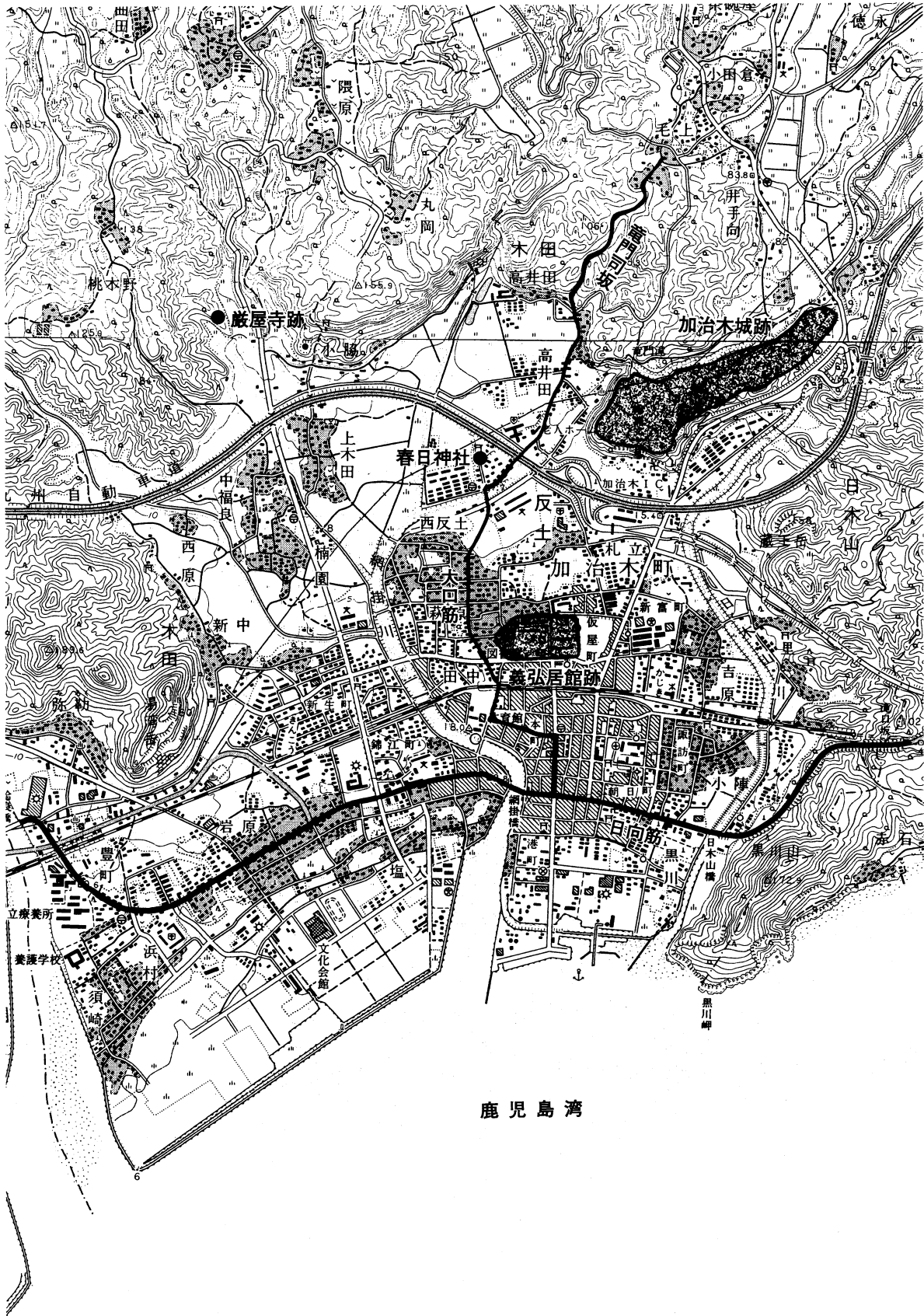
加治木氏の没落後、忠昌は伊地知重貞を地頭に任命し加治木を統治させた。しかし、大永7（1526）年、重貞も忠昌の子勝久（14代）に反旗を翻し、勝久方の島津忠良（伊作家）に討たれ、代わって、溝辺城主肝付兼古の子兼演が加治木に入った。兼演も、天文11（1542）年、勝久の養子となった島津貴久（15代）とその実父忠良と対立し、両者は戦火を交えたが、同18年兼演が貴久に降伏し、貴久は兼演に加治木を安堵した。以来、兼演・兼盛・兼寛・兼三と4代68年にわたって加治木を支配し続けた。

天正15（1587）年、島津氏を降した豊臣秀吉は、文禄3（1594）年から4年かけて島津氏領国の太閤検地を実施し、その結果を基に、島津氏家臣団の全面的な転封をおこなった。その際、加治木は秀吉の直轄地として召し上げられ、加治木を統治していた肝付氏は喜入に移されたのである。

加治木が島津氏領に服するのは慶長4（1599）年のことで、前年、17代島津義弘が泗川の合戦で明の大軍を撃破し、その恩賞として返還されたのである。義弘は、同5（1600）年の関ヶ原合戦で石田三成に味方して徳川方と戦い、敵中突破を敢行して帰国。桜島に蟄居し、家康の許しを得た後、帖佐（現始良町）に移り、平松（同町）を経て、同12（1607）年加治木に落ち着いた。

加治木入りにあたっては、要害の地加治木城を避け、帰化明人江夏友賢（黄友賢）に土地の吉凶を占わせ、加治木城の南方の高台に屋敷の位置を定め、その周囲に家臣たちの屋敷を配した。そして、18代島津家久の次男忠朗が祖父義弘の所領を受け継ぎ、忠朗を祖とする加治木島津家が江戸時代を通じて加治木を統治した。なお、現在の加治木の町並みは、この義弘の屋敷跡を中核としたものである。

さて、第85図は、高井田遺跡の周りにおける主要な史跡の配置図である。まず高井田遺跡に隣接して加治木氏の祖経平が勧請したと伝えられる春日神社がある。加治木五社の一つとして、また加治木で最も古い歴史を誇る神社として著名な神社である。春日神社の前の道は主要街道の一つ大口筋である。遺跡の北700mほどの所にある石畳の古道・竜門司坂（県指定史跡）はこの大口筋の一部である。竜門司坂の南には竜門の滝があり、その南側の台地は加治木氏や伊地知氏・肝



鹿児島湾

第85図 高井田遺跡周辺史跡配置図

付氏が居城とした加治木城の跡である。さらに北西1kmほどのところには、加治木一の名刹であった巖屋寺の跡がある。加治木氏や伊地知氏など、歴代領主が手厚い保護を加えていた大寺院の跡で、明治初年の廃仏毀釈の際に破壊されたと思われる石仏があり、その多くに伊地知氏時代の年号が入っている。また鳥津義弘の居館跡も、遺跡の南東700mほどの所に位置している。

これらの史跡、特に中世の史跡の配置は、第86図の鹿児島市上町地区の史跡配置と驚くほど似ている。

まず、室町時代に鳥津氏の居城とした清水城は、現在の清水中学校とその裏山である。清水城の西を大口筋が南北に貫き、大口筋を挟んだ西側には鳥津氏の菩提寺玉竜山福昌寺があった。福昌寺は、巖屋寺と同様、廃仏毀釈で廃寺となり、跡地には玉竜高校が建ち、その裏手に鳥津家墓地が残っている。さらに清水城跡・福昌寺跡の南方の高台には、桃山時代の居城御内城（現大竜小学校）や若宮神社・春日神社など鳥津氏が勧請した神社がある。この二つの神社に、稲荷神社・南方（諏訪）神社・八坂（祇園）神社を加えたのが上町五社である。鹿児島の城下町は、まず清水城を中心に形成され、江戸時代に鶴丸城が築城されると、町の中心も鶴丸城周辺へ移っていった。この点も近世、義弘居館を中心とした町に生まれ変わった加治木と似ている。

類似する鹿児島上町地区の事例、さらに高井田遺跡から多数の柱穴や溝状遺構が出土していることを考慮すると、かつてこの周囲は加治木城跡を中核とした城下町としてにぎわっていたのではないかと思われる。

## 2 礫敷溝状遺構の性格について

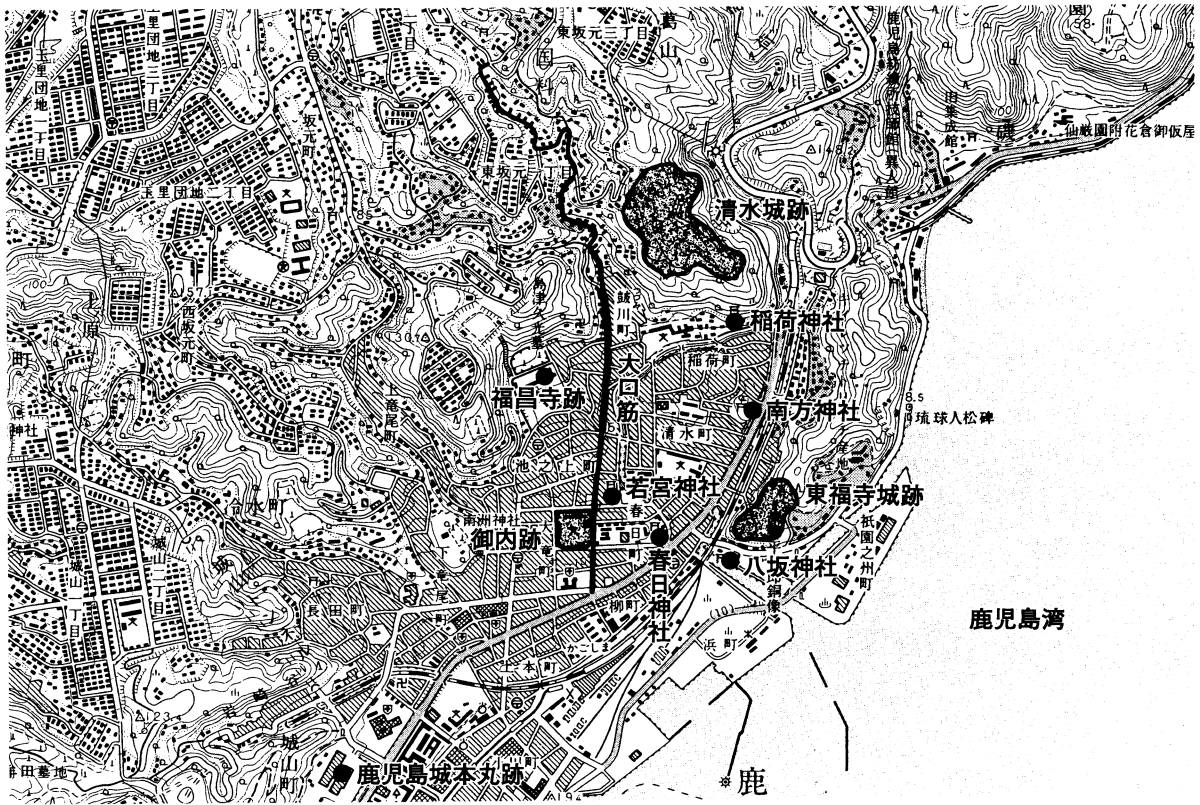
高井田遺跡の平安期の地層からは、長さ約25m、幅1～2mの礫敷溝状遺構が出土した。側壁は主として拳大の円礫を並べ、床面は砂利を敷いて堅くしめてある。溝状遺構は緩やかな斜面上にあり、その中央部には段差が設けられ、段差部には人頭大の礫が数個固定されている。なんらかの流水施設で、しかも丁寧な仕上げぶりを考えると、庭園内の水路であった可能性が高い。

高井田遺跡の位置が、平安時代、加治木氏の祖藤原経平が勧請した春日神社に隣接していること、平安時代に京都で曲水の宴が盛んにおこなわれていたこと、さらに礫敷溝状遺構でも水の流れが想定され、かつ仕上げが丁寧なことなどから曲水庭園の一部ではないかという意見が出ている。

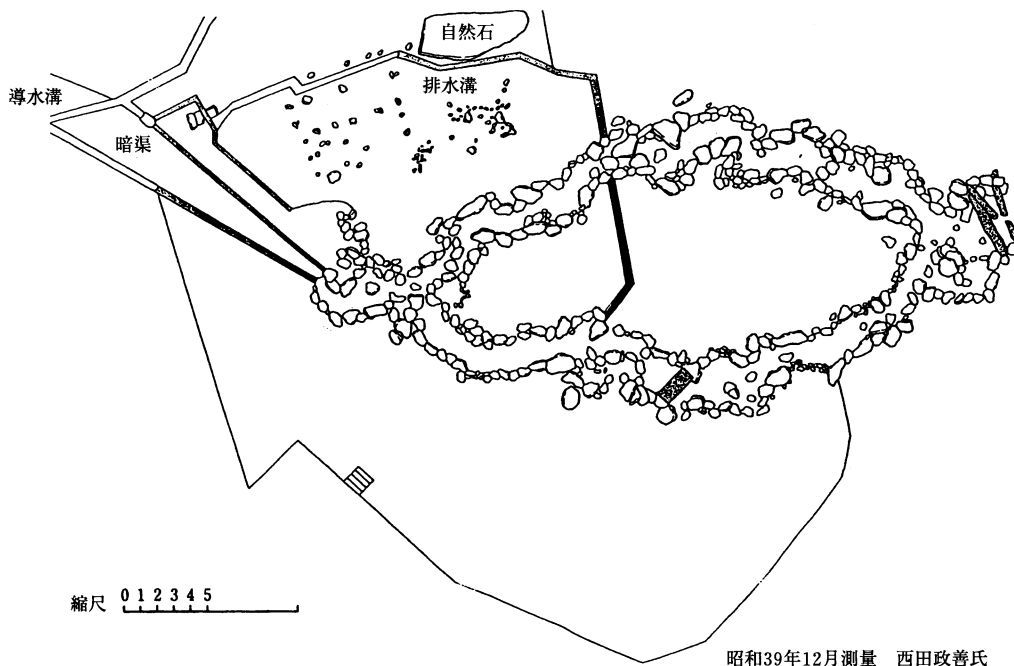
曲水の宴は、酒杯を流水に浮かべ、酒杯が自分の前に流れつくまでに詩を作り、杯を取り上げて酒を飲むという風流な宴である。中国では「耳杯」という浮力を得るために杯の両端に耳を付けた杯が、日本では鳥の形をした「羽觴」を浮かべ、それに杯を乗せて流した。曲水庭園は、曲水の宴を催すために人工的な流水を設けたもので、杯が程よい時間で流れつくように、また途中杯が滞ることがないように工夫が施されている。中国の蘭亭や故宮内の「楔賞亭」、京都上賀茂神社の「涉溪園」、鹿児島市吉野町の仙巖園（国指定名勝）内の曲水庭園（第87図）などが著名である。

さて、礫敷溝状遺構と仙巖園の曲水庭園とを比較した際、まず大きく異なっているのが段差の有無である。曲水の宴では、酒を満たした杯を流すため段差は設けない。段差があると杯がうまく流れず、酒がこぼれてしまう。また礫敷溝状遺構を曲水庭園とするには直線的すぎるように思われる。さらに仙巖園の曲水庭園では、杯が流れの中央に行くように細工がしてあるが、このような工夫も見られない。従って礫敷溝状遺構を曲水庭園とするには無理があろう。





第86図 鹿兒島市上町地区の史跡配置図



昭和39年12月測量 西田政善氏

第87図 仙巖園の曲水庭園

### 3 加治木新納家について

高井田遺跡から「新納仲右衛門」「藤原時淳」と記された墓石が出土した。『鹿児島県史料』『旧記雑録拾遺諸氏系譜一』に収録された新納家の系図によれば、新納仲右衛門時淳は、島津義弘に仕えた新納旅庵（長住）の流れを汲む人物で、代々加治木に居住し、長住－忠雄－久供－時純－時淳と続く。時淳は延寶3（1675）年12月25日の生まれである。

新納旅庵は、島津忠良の家老新納康久の次男で、若くして僧籍にいら、肥後国八代の莊嚴寺の住職となっていた。天正15(1587)、島津義久の命で還俗し、休閑斎旅庵と号し、のち義弘の執政となった。義弘に従って関ヶ原合戦に従軍して徳川方に捕らえられ、徳川・島津の和平交渉に尽力。慶長7（1602）年大坂（現大阪）で病没した。墓は帖佐（現始良町）の願成寺墓地にある。願成寺は浄土宗の寺で、開山は、旅庵とともに八代莊嚴寺にいた運営である。運営はのちに、義弘の命で加治木反土に松月山靈鷲院本誓寺を開いた。

旅庵の娘婿忠雄が加治木に入り、その長男忠彰は鹿児島城下士となり、次男久供が加治木に残った。天和2（1862）年の「加治木衆中高極帳」には170名余りの加治木衆中の名が記されているが、その筆頭が時淳の父新納仲右衛門である。持高は537石余りで、曾木家の646石余りに次ぐ。また新納家の屋敷は、義弘館の正門の真ん前にあった。

現在、新納家の墓地は長年寺墓地にあり、なぜ新納時淳の墓石が高井田遺跡から出土したか定かではない。長年寺は曹洞宗の寺で、かつては加治木本城の下（反土）にあったが、寺の位置が義弘の館の鬼門にあたり、家久がこれを嫌って木田に移した。時淳の頃はすでに木田にあり、墓石と長年寺とは結び付かない。また、春日神社の側には、文化年間（1804－1818）まで、真言宗の新福寺があった。墓石はこの新福寺にあった可能性がある。

### 3 掘立柱建物の柱穴内埋納品に関する若干の考察

上 床 真 (鹿児島県立埋蔵文化財センター)

#### 1 はじめに

高井田遺跡で掘立柱建物の柱穴中に埋納された鉢形土器(中世)が発見されている。これは建物を建てる際に行われた地鎮に関する遺構であると考えられる。

では「地鎮」とはどのようなものを指すのだろうか?『日本考古学用語辞典』<sup>1)</sup>によると、「社寺の建築・屋敷の建築などをはじめ、それぞれの建設に対し、土地の神霊を祈り祭るために行う儀式。宅地の場合は宅鎮ともいわれている。神道・仏教・道教など、各宗教に関係し、また民間信仰に基礎をおくものもある。したがって、儀式の形態にも複雑なものがあるが、貨銭の埋納、特殊土器の奉納などもあり、水野正好は、中世から近世に及ぶ地鎮の儀式の一例として輪宝を墨書きした小皿を用いるもののあることを考察している」とある。

また、『神道考古学講座』第一巻<sup>2)</sup>によると、「地鎮祭の時に、地霊を鎮めて土地の安全を祈るために、地中に埋納するものを鎮物(または忌物)という」「建物や墓をつくる時には金銭や財物を献じて地神(土地の神・地主の神)の許しを得なければならなかった」とあり、鎮物の具体的なものとしてここでは石製模造品などがあげられている。

具体的な出土例では塔の基壇をつくる時に築土の中に貨銭などを入れたものや、建物の中やこれに隣接したところに穴を掘って土師器杯の完形品などが埋納されたものなどがみられる。一般的にはこれらを「地鎮」の可能性の高い遺構とする場合が多い。

今回は地鎮の可能性のあるものの中で、掘立柱建物のピットの中に完形の遺物が埋納されたような状態で発見されたものに注目し、鹿児島県内を中心として類例をみてみたい。

#### 2 鹿児島県内を中心とした事例

古代に関する遺構では金峰町の山野原遺跡での例<sup>3)</sup>がある。掘立柱建物跡(15)のP11から「良」と墨書された土師器杯が出土している。報告書では「本遺跡で出土した「良」は掘立柱建物の中央に近い柱穴遺構内で完形で真上を向いた状態で出土しており、人為的に埋納したことが考えられる。地鎮的な祭祀的性格が示唆され、吉祥的な位置付けが可能である」と述べられている。

中世の例では鹿屋市中ノ原遺跡<sup>4)</sup>・知覧町知覧城跡<sup>5)</sup>などの例がある。

中ノ原遺跡では3号掘立柱建物の柱穴P20から土師器杯2点が出土している。底部は糸切りであるので中世のものであることがわかる。

知覧城跡ではNo.2トレンチ9柱穴(直径20cm・深さ80cm)で2枚重ねの土師器杯が出土している。報告書では「1ヶ所の柱穴からは二枚重なった土師器皿が出土した。この場所で、地鎮・鎮壇の祭事のあったことが考えられる注目される遺構である」と述べられている。トレンチでの発見であるので掘立柱建物の柱穴かどうかは明らかでないが、状況からみて建物の柱穴である可能性が高い。

城跡での出土例としては宮崎県都城市都之城跡での事例<sup>6)</sup>がある。都之城主郭部(本丸跡)で

鎮壇ピットから墨描土器が出土している。これも建物建立の地鎮・鎮壇と考えられている。ここで注目すべきなのは輪宝が墨描された土器である。水野正好氏が輪宝を墨書きした小皿を用いる地鎮について考察している<sup>7)</sup>というのは先述した通りである。今回取り上げた例の中でもっとも確実性の高い地鎮遺構であるといえよう。ただし柴田博子氏は「上部に建物が建っていた形跡がみつかっていないので、この地鎮・鎮壇の儀式は、周辺一帯すなわち曲輪全体を対象にしたものであったかもしれない」としている<sup>8)</sup>。

この他、完形品だけでなく、それ以外の遺物（土器の破片等）を含む事例についてもいくつか紹介したい。

川内市西ノ平遺跡では地鎮かどうかはわからないが掘立柱建物2のほとんどの柱穴に多くの土器が入っており完形のものが多い<sup>9)</sup>。ただし、地表面にも遺物が多く見られる。また、柱痕跡がみられる柱穴の中には完形品ではないが土師器坏・皿などがみられるものがある。流れ込みの可能性も考えられるがこの場合は建物を建てる際に意図的に埋められた可能性が高いと考える。

大口市新平田遺跡では掘立柱建物6号のP572とP573から一括して遺物が出土している<sup>10)</sup>。多数の破片が投げ込まれたような状態だが、この場合は建物廃棄後のものである可能性が高いと考える。完形でないものがほとんどなので地鎮といえるものかどうかは明らかでない。掘立柱建物28号のP266からは小皿の破片が2点、P247とP563からは完形の小皿が1点ずつ出土している。

掘立柱建物29号のP218とP233では完形の小皿と破片が出土している。P218については出土状況実測図よりピットの端のほうから遺物が出土しているのがわかるので、柱をたてる際に入れられたものである可能性を考えたい。また、P218の状況は重ねて埋納された可能性があるので、地鎮関連遺構としておきたい。

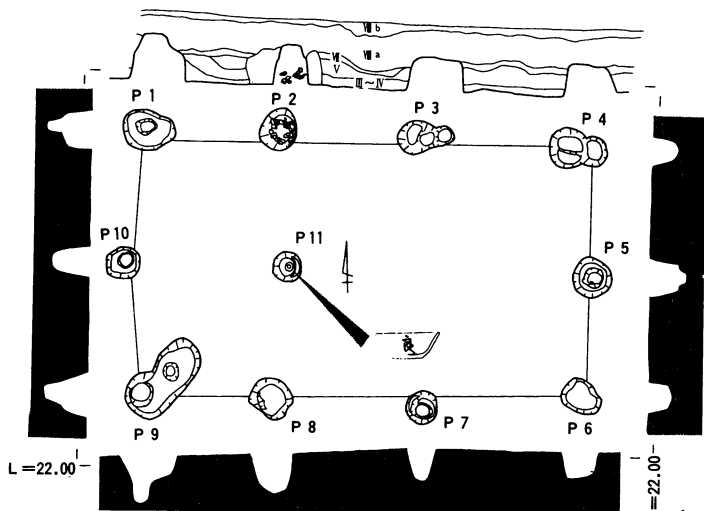
以上、鹿児島県内を中心とした事例について若干調べてみたが、はっきりと「地鎮」と呼べるほどの遺構はほとんどないということが明らかとなった。次項で若干の考察を加えまとめとしたい。

### 3 まとめと若干の考察

「地鎮」に関する遺構が少ないということについては、報告書内で「掘立柱建物の柱穴（掘り方）内から遺物が出土した」という記載があってもどのピットからのものなのか、完形なのかどうか、流れ込みではないかという部分についての記録がなされていない場合が圧倒的に多いことが原因の一つと考えられる。ただし、今回県内の報告書をみた限りでは、良好な状態で柱穴の中で発見されたものは数例であった。簡単な記録にとどめられたというのが事実であろう。

傾向としては掘立柱建物の隅にあたる柱穴におさめられたものとそれ以外に柱穴におさめられるものとの差はあまりないようである。強いていうならば隅でないピットに埋納された例が多いようにも感じられる。これは建物を建てる時に埋納されたのか解体する時に埋納されたのかを考えるうえで重要である。四隅の柱穴は建物の構造上では要となるために、それ以外の柱穴に埋納された可能性があるのではなかろうか。すなわち、建物を建てる時に埋納されたものである可能性が高いと考える。ただし、建物を解体し廃棄する時に埋納された場合もあるかもしれない。逆の想定も必要であると考えられる。

各遺跡について共通していることとして、いずれも一般集落遺跡でない可能性が高いというこ



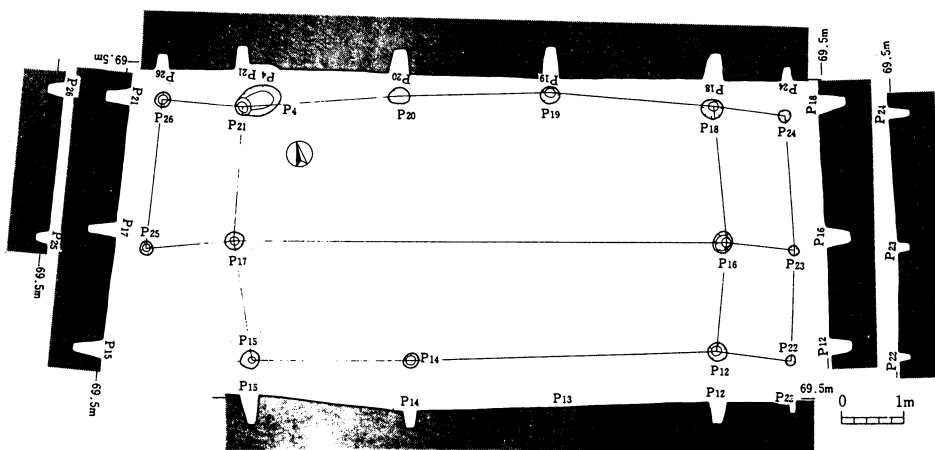
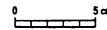
掘立柱建物 (15)

山野原遺跡 (金峰町)

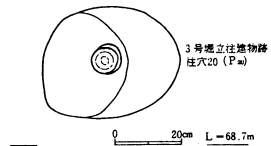
S : 1/120



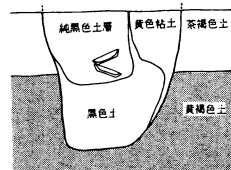
出土遺物



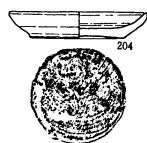
S : 1/120 3号掘立柱建物



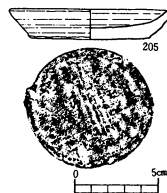
3号掘立柱建物跡  
柱穴20 (P20)



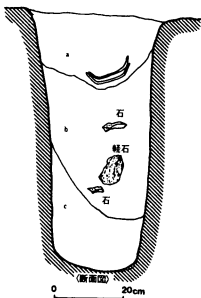
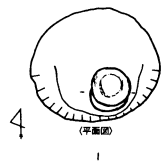
土師器出土状況



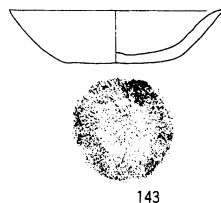
出土遺物



中ノ原遺跡 (鹿屋市)

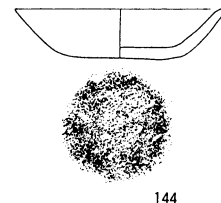


NO.2トレンチA土師器出土状況



143

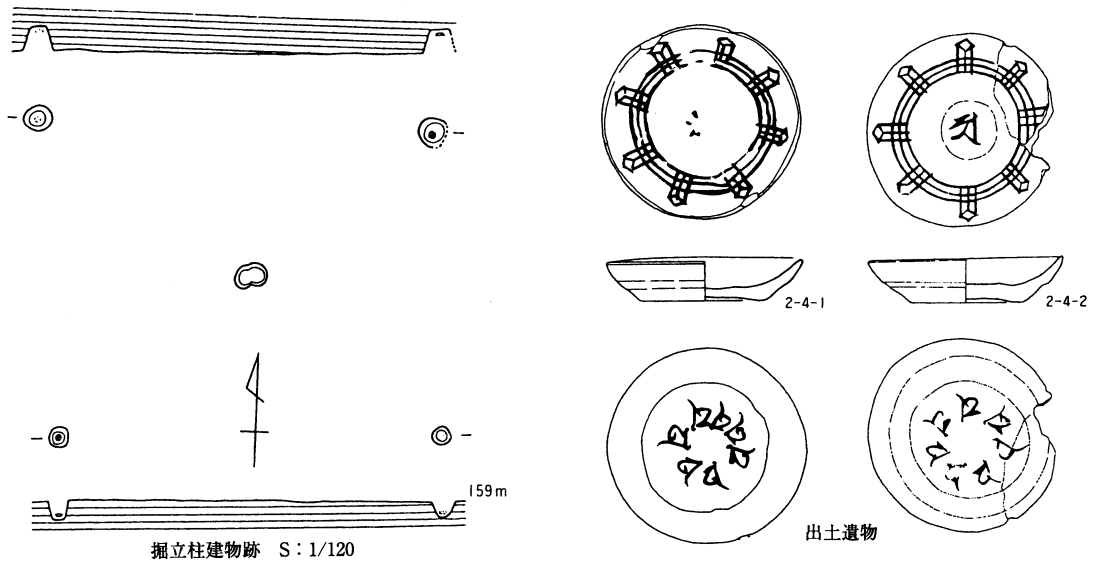
出土遺物



144

知寛城跡 (知寛町)

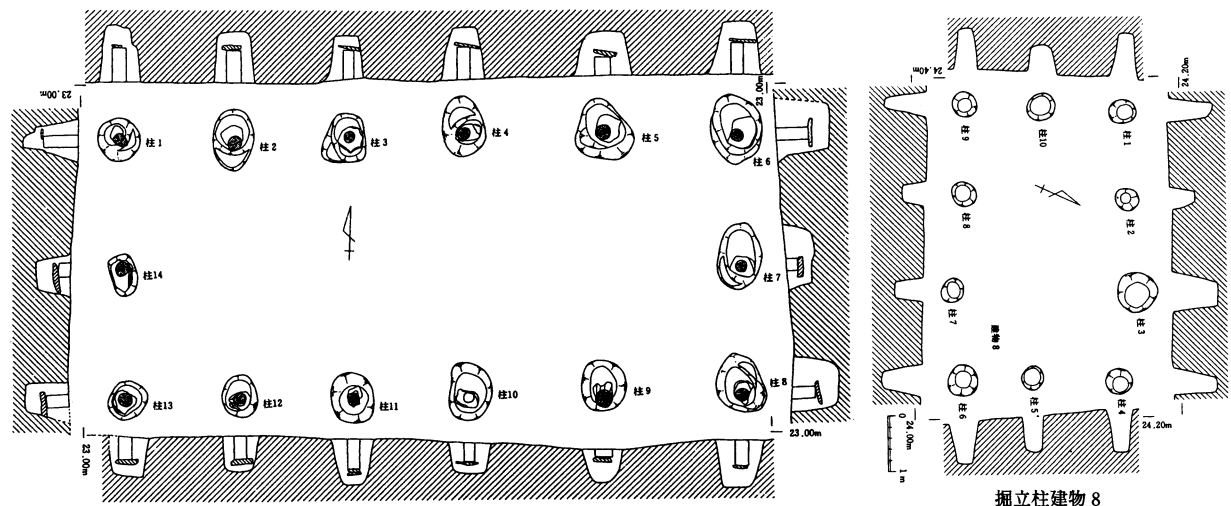
第88図 柱穴内埋納品資料 (1)



掘立柱建物跡 S: 1/120

出土遺物

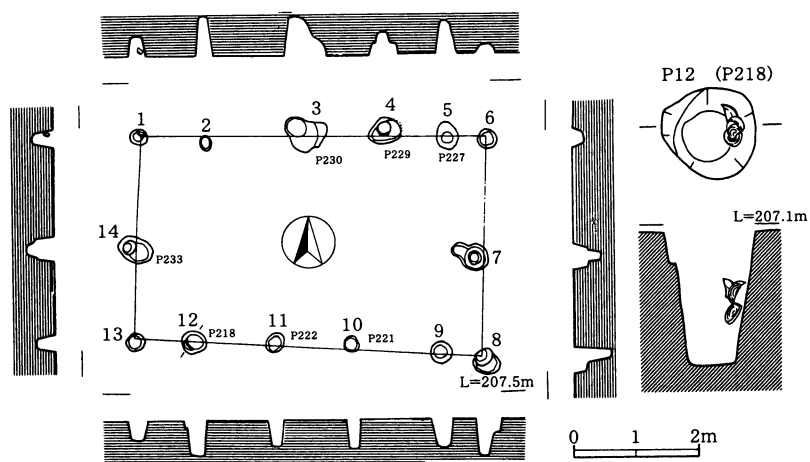
都之城跡主郭部 (都城市)



掘立柱建物跡 2 S: 1/120

掘立柱建物 8

西ノ平遺跡 (川内市)



S: 1/120 掘立柱建物29号

新平田遺跡 (大口市)

第89図 柱穴内埋納品資料 (2)

とがあげられる。山野原遺跡は官衙や富豪層に関連する遺跡とされているし、知覧城跡・都之城跡は城跡である。高井田遺跡は信仰に関係している可能性の高い遺跡であり、埋納遺物がみられた建物は特殊な用途が考えられる遺構である。中ノ原遺跡については具体的な様相は不明であるが、全体的な傾向としては一般集落ではなく官衙関連遺跡・城跡・信仰遺跡などの遺跡でみられる場合が多いことが明らかとなった。

上村和直氏は「都城内の諸施設や宅地内の建物・施設を鎮めるための祭儀である『鎮祭』に係る遺構（鎮祭遺構）」について検討している<sup>11)</sup>。この中で宅地内に位置した遺構をⅣ類としてその中で宅地内建物に関連した遺構をⅣ-3類（特に柱穴掘形内に埋納された場合は4-3-b類）とし、奈良時代前半から平安時代中期後半（10世紀）の期間に14遺跡で認められることを明らかにしている。

この中で建物の隅穴に埋納遺物がみられる例は6遺跡で最も多く、「一つの建物で2ヶ所埋納した建物が1ヶ所である」「柱穴の場合は掘形内に限定されることから、鎮祭は建物施工中に行われたと推定できる」としている。容器についても検討を行い、容器を埋納した遺構（この中で容器のみと容器内に他の器財を埋納する場合の2類に細分）と容器無しで器財（貨銭やガラス玉など）を直接埋納した遺構の2類に分類した。ただし、「甕・壺・皿等の容器が埋納され、納入物が確認できない場合」にも「穀類・菜類・香類や粥などの有機物が納入された可能性が高い」とし、注意すべき必要があることを述べている。

埋納容器については土師器甕・皿、須恵器壺類・坏類などが主流を占めるといえる。「ある程度の傾向が伺えるものの容器の組合せや埋納方法については多種多様で画一的でない」こと、「いずれの土器も使用痕跡がみられず、未使用品を使用するのも特徴である」などの点も明らかにしている。

また、「都城における鎮祭は単なる宗教的な意義だけでなく、国家による都城の管理・運営政策の一環としての役割を担っていた」と理解されており都城としての制約が働いているので直接的な比較は危険であるが、参考となるだろう。

河野眞治郎氏は、「本来の機能と異なる場に検出される器物に呪術的意味を考慮することは研究の出発点であり、合わせ口や銭入りのかわらけの埋置などは陰陽道という「犯土」に対する手当でとみなせよう。ただし、即断は危険である。また地下空間を埋める際に機能を喪失させた器物を添えたり、井戸に竹筒を入れたりする例は、民俗学的事例との比較研究も必要となろう」「仏・神、修験、陰陽の知識の他に、民俗事例や民話・文芸など、広い見地からの検討が道をひらいてくれるかもしれない」として、幅広い学際的なアプローチの必要性を述べている<sup>12)</sup>。鹿児島県内の地鎮遺構に関しては発見された遺構数も少なく、研究もほとんどない状況ではあるが、幸いにして民俗学的な研究は多くのものであるので、民俗学をはじめとした関連諸科学の成果を参考に研究の糸口にできればと考える。

#### 4 おわりに

今回は建物の「地鎮」の可能性のある遺構についていくつかの類例をあげて比較してみた。しかしながら鹿児島県内の掘立柱建物の様相が明らかになっていない状況では全体の中での位置付

けも難しい。今後掘立柱建物についても集成を行い、その上で改めて考察を行いたい。

本稿を作成するにあたり、堂込秀人氏、乗畑光博氏、前迫亮一氏に協力を得た。記して感謝したい。

#### 【 註 】

- 1) 齊藤 忠 1992 『日本考古学用語辞典』 学生社 (1992年に軽装版として再発行)
- 2) 大場磐雄編 1981 『神道考古学講座』 第一巻 雄山閣
- 3) 宮下貴浩 1995 『山野原遺跡』 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7) 金峰町教育委員会
- 4) 新東晃一 1990 『中ノ原遺跡 (Ⅱ)』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (52) 鹿児島県教育委員会
- 5) 上田 耕 1994 『知覧城跡 (二)』 知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5) 知覧町教育委員会
- 6) 乗畑光博 1989 『都之城本丸跡』 都城市文化財調査報告書 (10) 都城市教育委員会  
1991 『都之城 (主郭部)』 都城市文化財調査報告書 (13) 都城市教育委員会
- 7) 水野正好 1983 「屋敷と家屋の安寧そのまじない世界」『奈良大学紀要』 12 奈良大学
- 8) 柴田博子・中野和浩・東 憲章 1998 「日向国出土の墨書土器」『宮崎県史 通史編』 古代 2 宮崎県
- 9) 池畑耕一ほか 1983 『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (28) 鹿児島県教育委員会
- 10) 堂込秀人・中村守男 1997 『新平田遺跡・辻町B遺跡』 大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (20) 大口市教育委員会
- 11) 上村和直 1999 「都城における埋納遺構 ―鎮祭遺構を中心に―」『瓦衣千年 ―森郁夫先生還暦記念論文集―』 森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 12) 河野真知郎 2000 「さまざまな祭祀・呪術」『図解 日本の中世遺跡』 東京大学出版会

#### 【参考文献】

- 木下密運 1984 「中世の地鎮・鎮壇」『古代研究』 28・29 元興寺文化財研究所
- 隆矢哲男 2000 「研究ノート 博多遺跡群における地鎮め遺構について」『博多研究会誌』 第8号
- 水野正好 1984 「近世の地鎮・鎮壇」『古代研究』 28・29 元興寺文化財研究所
- 森 郁夫 1984 「古代の地鎮・鎮壇」『古代研究』 28・29 元興寺文化財研究所  
1998 『日本の信仰遺跡 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財研修の記録』 雄山閣



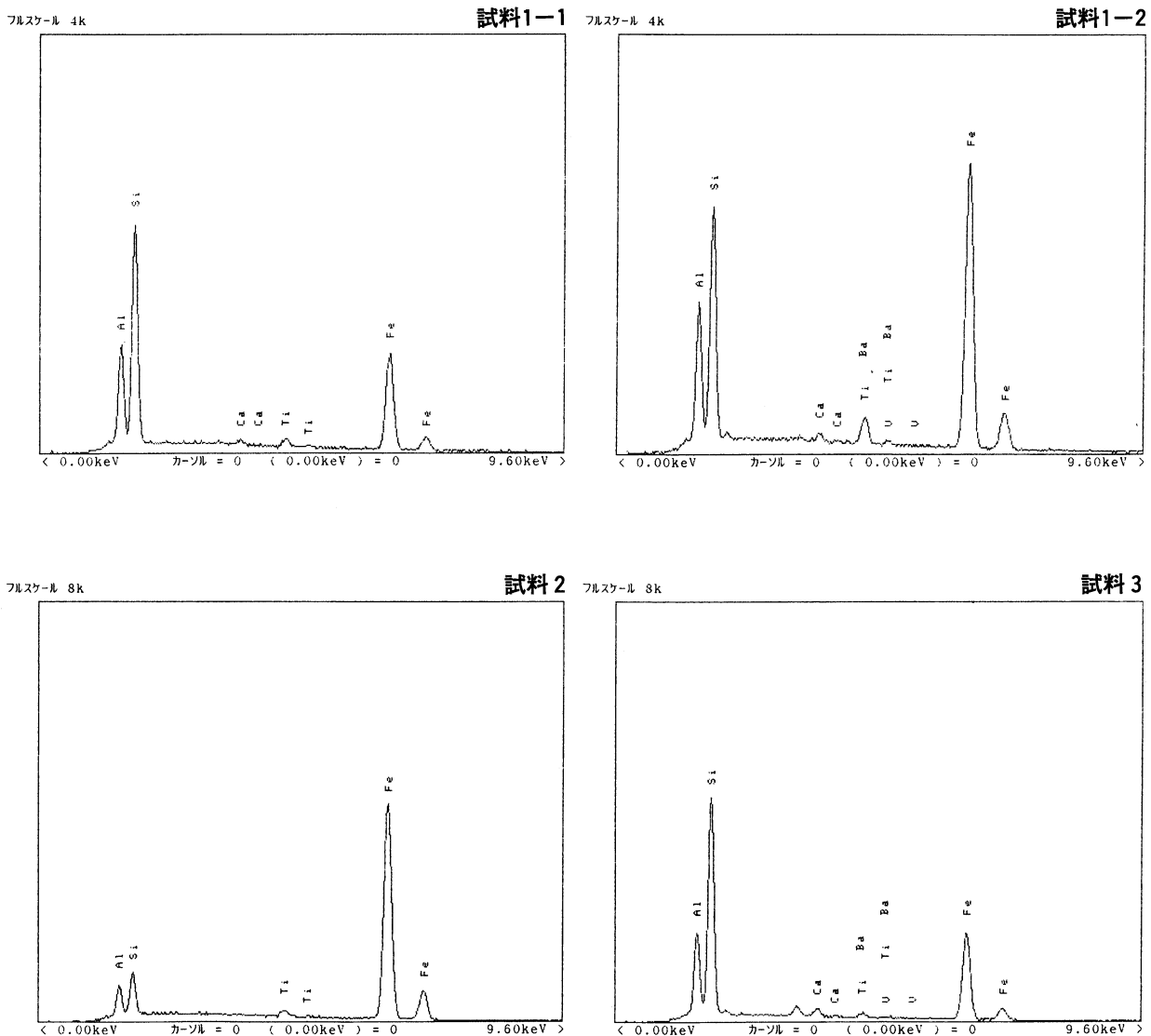
## 4 赤色塗彩資料の分析

高井田遺跡から出土した遺物の中で、赤色塗彩したもの、あるいはその可能性があるものについて分析を行った。その結果について簡潔に記しておきたい。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡(低真空タイプ・LV-SEM)とエネルギー分散型X線装置(EDS)である。

**資料1 (第90図 写真1)** これは報告書掲載番号182で、弥生時代の壺形土器の胴部片である。内外面に彩色がみられたので、両面の分析を行った。SEM画像によると、細かな粒子がみえる。X線分析によると、内外面ともにFe・Al・Siのピークがみられる。

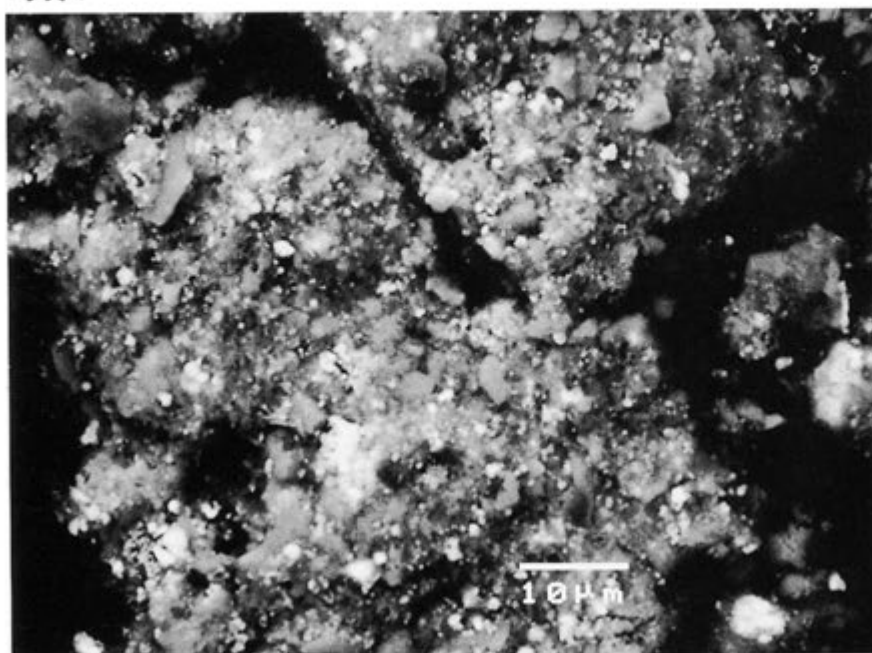
**資料2 (第90図 写真2)** これは報告書掲載番号197で、古墳時代の高坏の脚部である。剥落が激しく、SEM画像でも明確な粒子は確認できないが、X線分析ではFeにピークがみられる。



第90図 X線分析によるスペクトル図(1)

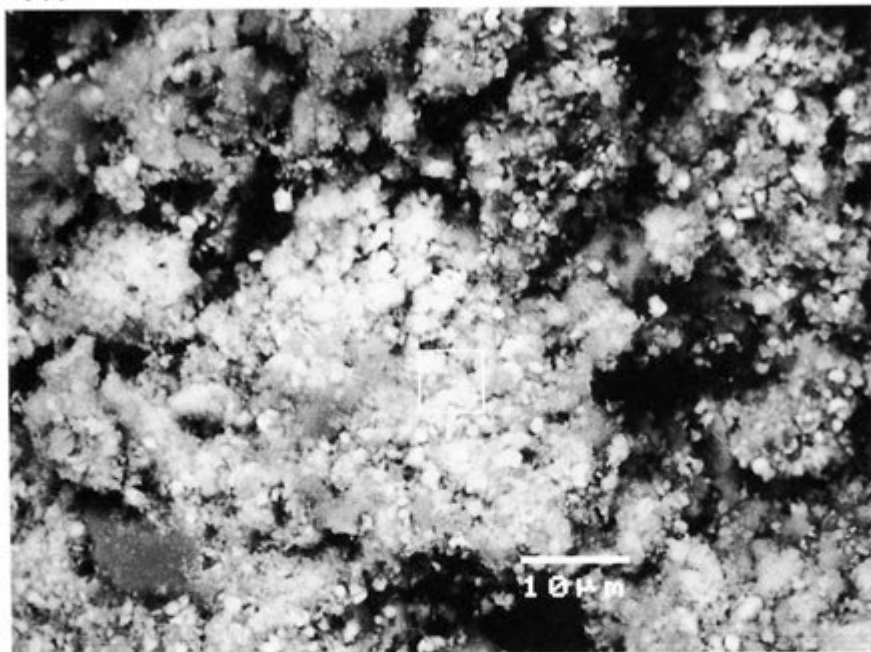
SEM写真

写真1



試料1-2のSEM像

写真2



試料2のSEM像

SEMによる観察像

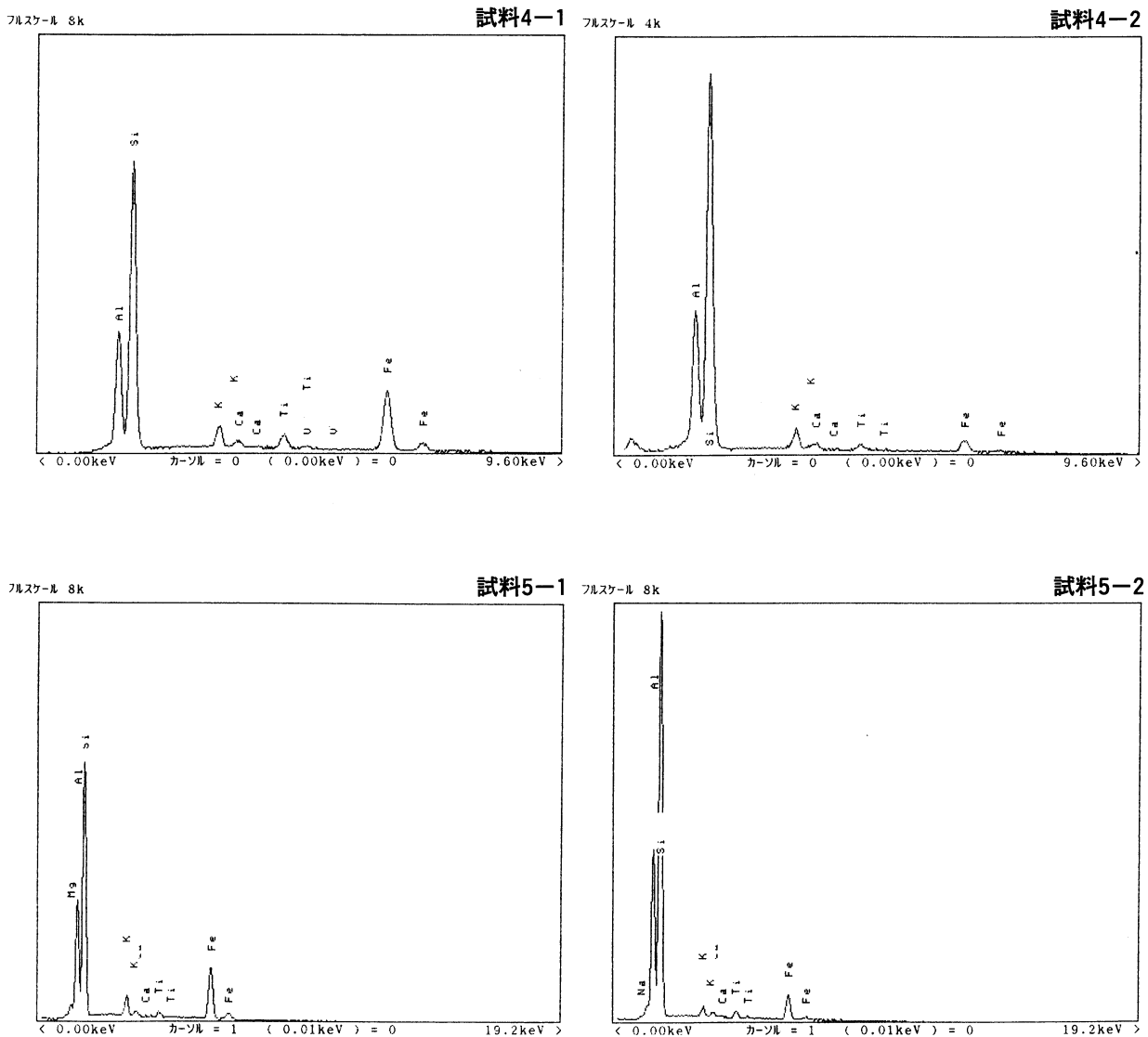
**資料3 (第90図)** これは古墳時代の壺形土器の胴部片でと考えられる資料である。外面に比較的明るい赤色塗彩がみられた。SEM画像によると、細かで明瞭な粒子が集中している。X線分析によると、Feのピークがみられる。

**資料4 (第91図)** これは報告書掲載番号331・332と同一個体と考えられる須恵器の坏である。内外面が赤褐色を呈することから、分析を行った。資料4-1が外面、資料4-2が断面(灰褐色)のデータである。X線分析ではいずれもAlとSiのピークがみられる。

**資料5 (第91図)** これは報告書掲載番号399~402と同様に、高台部分のみ赤褐色を呈する黒色土器の椀である。資料5-1が高台部分、資料5-2が体部(黄褐色)のデータで、X線分析の結果、前者にMg・Al・Si、後者にAlとSiが多くみられた。

資料1~3については、塗彩行為の痕跡とみることができそうであるが、資料4は窯による焼成時の色調変化、資料5は素地の異なる粘土を用いた結果によるものと考えられる。

※分析は大久保浩二、文責は前迫亮一(ともに鹿児島県立埋蔵文化財センター)による。



第91図 X線分析によるスペクトル図(2)

## 5 高井田遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

### 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2 試料

試料は、古代～近世の礫敷遺構内から出土した樹木片1点である。

### 3 方法

カミソリを用いて木材の新鮮な基本的三断面（横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4 結果

分析の結果、クスノキ科のクスノキ *Cinnamomum camphora* Presl と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

横断面：中型から大型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

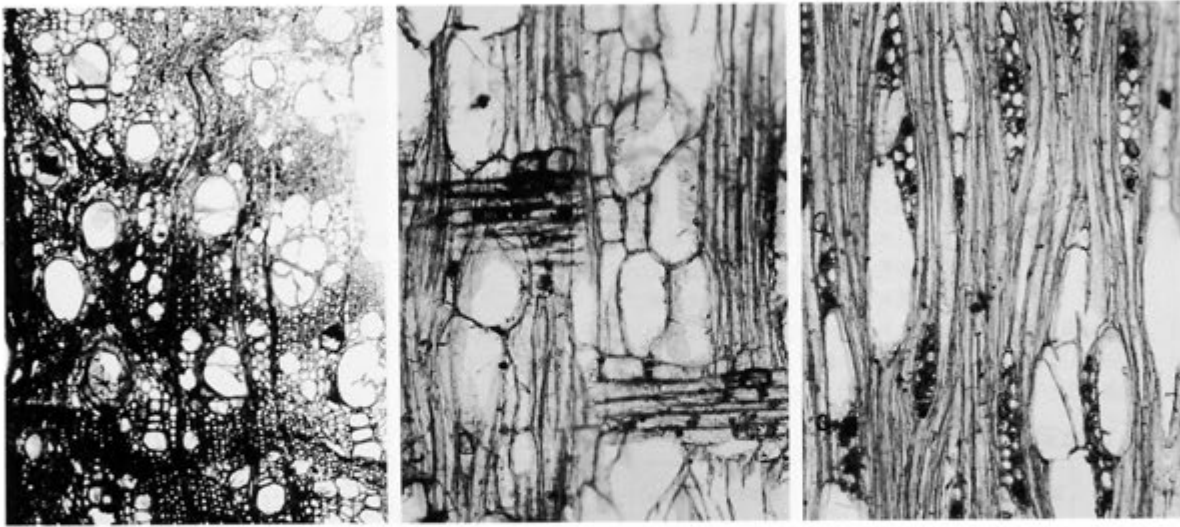
接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

### 5 所見

分析の結果、古代～近世の礫敷遺構内から出土した樹木片はクスノキと同定された。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、照葉樹林の主要構成要素である。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。現在は建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

#### 【 文献 】

- 佐伯 浩・原田 浩 1985 針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48。  
佐伯 浩・原田 浩 1985 広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100。  
島地 謙・伊東隆夫 1988 日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.



横断面図———：0.5mm

放射断面———：0.2mm

接続面図———：0.5mm

樹木片 クスノキ

木材の顕微鏡写真



高井田遺跡出土の木材

## 凡 例

- 1 層位の項目の「自然」は「自然流路」のことである。
- 2 色調についての表現は相対的なもので主観である
- 3 胎土の状態について示した用語については、大まかに以下の点を目安として使用している。  
 砂粒多～概ね長さ2mm程度の粒子を含む。  
 細粒多～概ね長さ1～2mm程度の粒子を含む。  
 密～概ね1mm以下の粒子で構成され、緻密である。
- 4 胎土の項目の「火W」と「火B」はそれぞれ以下のような「火山ガラス」のことを指している。  
 「火W」～無色透明あるいは白色透明の火山ガラス  
 「火B」～黒褐色や紫色をおびた火山ガラス
- 5 胎土の項目の「他」で見られる金は金雲母、白は白色の粒子、茶は茶色の粒子のことを指している。
- 6 遺物 No.399～402の胎土項目にある○は体部、●は高台部の状況を示している。
- 7 青磁および染付の色調項目には文様名を記入した例がある。

第2表 出土遺物観察表(1)

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		胎 土							焼成	備考	図版				
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他			
14	1	縄文土器	曾畑	深鉢	口縁部	2 T	Ⅲ	662	9.562	明茶褐色		密	○		○							良			
	2	〃	〃	〃	〃	A12	自然			淡黄褐色		砂粒多										滑石	〃		
	3	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	670	9.162	明茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○	○	○								滑石	〃	18
	4	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1160	8.697	明黄茶褐	〃	〃		○	○								黒曜石	〃	
	5	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	531	9.92	黒褐色	暗黄褐色	〃	○	○	○									〃	
	6	〃	〃	〃	胴部	2 T	Ⅲ	118	9.92	暗茶褐色		〃	○	○	○									〃	
	7	〃	春日	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	498	8.69	明茶褐色		〃		○	○									〃	
	8	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	833	10.652	暗黄褐色	暗茶褐色	砂粒多	○	○	○									〃	18
	9	〃	阿高	〃	胴部	2 T	Ⅲ	509	10.44	明黄褐色		〃											滑石	〃	
	10	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1	10.32	明茶褐色	暗茶褐色	細粒多		○	○									〃	
	11	〃	指宿	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	598	9.304	暗茶褐色		〃		○	○									〃	18
	12	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	690	9.052	明茶褐色	淡褐色	〃	○	○	○			?	?					〃	
	13	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	713	10.392	明黄茶褐色		砂粒多		○	○									〃	
	14	〃	〃	〃	胴部	A12	自然			明茶褐色		〃	○	○		○								〃	
	15	〃	市来	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	1083	9.117	暗褐色	明茶褐色	細粒多		○			○	○						〃	
	16	〃	〃	〃	〃	D12	Ⅲ	2686	8.074	明茶褐色		〃		○	○		○							〃	
	17	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1106	8.667	暗褐色		密		○			○	○						〃	
	18	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	844	10.142	暗茶褐色		砂粒多	○	○			○	○						〃	
	19	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	659	8.49	淡黄褐色	明黄茶褐	細粒多		○	○	○								〃	18
	20	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1167	8.657	暗黄茶褐	暗茶褐色	砂粒多		○			○	○						〃	
15	21	〃	〃	〃	〃	6 T	Ⅲ	1313	7.693	淡褐色	淡明茶褐	〃	○	○		○	○						〃		
	22	〃	〃	〃	〃	5 T	Ⅲ	923	11.942	淡茶褐色		細粒多	○	○	○		○	○					〃		
	23	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	513	10.44	明茶褐色		砂粒多	○	○	○	○							〃		
	24	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	706	9.852	黒茶褐色		細粒多		○	○		○	○					〃		
	25	〃	〃	〃	〃	1 T	Ⅲ	205	9.122	明黄茶褐	明茶褐色	〃	○										〃	18	
	26	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1101	9.117	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多		○			○	○						〃	
	27	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	158	9.692	明茶褐色		〃		○	○	○	○	○						〃	
	28	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	196・1136	10.172	〃		細粒多	○	○		○	○						〃		
	29	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	237	9.406	明黄茶褐	暗茶褐色	砂粒多		○			○	○					普		
	30	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1096	9.007	明茶褐色		〃											金白茶	〃	
	31	〃	〃	〃	〃	3 T	6	358	11.271	淡茶褐色		〃	○	○		○	○						良	18	
	32	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	490	8.63	暗茶褐色		砂粒多		○		○	○	○					普		
	33	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1072	8.977	明茶褐色		細粒多	○	○		○		○					良		
16	34	〃	〃	〃	〃	1 T	Ⅲ	209	9.802	暗茶褐色		砂粒多	○										〃	19	
	35	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1058	8.967	淡茶褐色		〃	○	○		○							〃		
	36	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	594	9.364	淡黄褐色	淡褐色	細粒多	○	○		○							〃		
	37	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1157	8.637	明茶褐色		砂粒多		○	○		○	○						〃	
	38	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	817	10.442	〃		細粒多	○	○									〃		

第3表 出土遺物觀察表(2)

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		胎 土								焼成	備考	図版				
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B	他							
16	39	縄文土器	市来	深鉢	口縁部					明茶褐色		砂粒多	○	○		○						良		19		
	40	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	55	9.735	〃		細粒多		○		○						〃				
	41	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	583	9.604	黒褐色	暗茶褐色	砂粒多		○		○		○	白粒金			〃				
	42	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	505	8.77	明茶褐色		細粒多	○	○		○	○						〃			
	43	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1125	8.807	明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○		○		○					〃			
	44	〃	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	3546	9.224	淡明茶褐色		〃		○	○	○							〃			
17	45	〃	〃	台付皿	脚台	2 T	Ⅲ	229	9.286	明茶褐色		砂粒多	○	○	○							黒曜石	〃		19	
	46	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	576	9.604	〃		〃	○	○								黒曜石	〃			
	47	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1060	9.247	〃		〃	○									黒曜石	〃			
	48	〃	〃	〃	〃	B12	Ⅳ	3578	10.004	〃		細粒多		○			○	○					〃			
	49	〃	〃	〃	〃	C10	Ⅳ下	4702	93846	淡褐色	明茶褐色	〃		○		○	○	○					〃			
	50	〃	〃	〃	台部	2 T	Ⅲ	669	9.172	明茶褐色		〃	○	○									黒曜石	〃		
	51	〃	草野	深鉢	口縁部	2 T	Ⅲ	265	9.076	明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○									黒曜石	〃		
	52	〃	丸尾	〃	〃	2 T	Ⅲ	1147	8.647	〃	暗褐色	〃	○	○									〃			
	53	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	838	10.252	明茶褐色		砂粒多	○	○	○								金雲母	〃		
	54	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	654	8.55	〃		細粒多	○	○									〃			
18	55	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1074	8.997	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多		○									金雲母	〃	20	
	56	〃	〃	〃	胴部	2 T	Ⅲ	588	9.534	暗黄褐色	暗褐色	細粒多	○	○									〃			
	57	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1119	8.927	暗茶褐色		砂粒多		○									金雲母	〃	20	
	58	〃	〃	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	1086	9.267	明茶褐色		〃		○									白粒金	〃		
	59	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	691	9.092	明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○									〃			
19	60	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	692	9.202	暗茶褐色	明茶褐色	〃		○									金雲母	〃		
	61	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	603	9.244	黒褐色	暗茶褐色	〃		○									金雲母	〃		
	62	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	667	9.252	明茶褐色	暗茶褐色	〃		○									白粒金	〃		
	63	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	673	9.272	黒褐色		密	○										〃			
	64	〃	後期	〃	底部	1 T	Ⅲ			淡明褐色		細粒多	○		○								〃			
	65	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1139	8.697	黒褐色	明茶褐色	砂粒多		○	○	○	○	○					〃			
	66	〃	〃	〃	〃	1 T	Ⅲ	142	9.96	〃		〃	○	○	○								〃			
	67	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	843	10.252	淡褐色		細粒多	○	○	○									普		
	68	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	243	9.146	暗茶褐色		〃	○				○	○					良			
	69	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	656	8.51	淡茶褐色		〃	○	○	○								〃			
	70	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1076	9.117	黒褐色	暗茶褐色	〃		○			○	○					〃			
	71	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1130	9.057	明茶褐色		砂粒多	○	○			○	○					〃			
	20	72	〃	鐘崎	鉢	口縁部	2 T	Ⅲ	72	10.035	淡褐色		密											Mn付着		20
73		〃	〃	〃	胴部	2 T	Ⅲ	238	8.916	淡黄褐色		砂粒多	○	○	○								〃			
74		〃	北久根山	〃	〃	2 T	Ⅲ	1091	9.037	明黄褐色	暗茶褐色	細粒多	○		○								〃			
75		〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	803	11.357	淡黄褐色	淡黄茶褐	密	○	○									黒粒	〃		
76		〃	〃	〃	底部	2 T	Ⅲ	255	8.936	暗茶褐色	淡褐色	細粒多	○	○										Mn, Fe付		
77		〃	〃	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	236	9.346	暗褐色		〃	○										〃			
78		〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	696	9.132	暗茶褐色		〃	○										黒曜石	〃		
79		〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	186	10.272	淡褐色	淡黄茶褐	〃		○		○							茶粒	〃		
80		〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1151	8.547	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多		○		○							〃			
81		〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1064	8.827	淡灰褐色	淡褐色	〃		○	○	○							〃			
82		〃	納曾	深鉢	〃	2 T	Ⅲ	858	10.372	明茶褐色		密					○	○					〃		20	
83		〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	128	9.84	黒褐色	明茶褐色	細粒多					○	○					〃			
84		〃	辛川	〃	〃	2 T	Ⅲ	1128	8.697	淡黄褐色	暗茶褐色	〃	○	○		○							〃		20	

第4表 出土遺物観察表(3)

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		状態	胎 土						焼成	備考	図版			
										内面	外面		石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他		
19	85	縄文土器	辛川	深鉢	口縁部	2 T	Ⅲ			淡黄茶褐色	暗茶褐色	細粒多		○	○	○					良			
	86	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	653	8.79	暗茶褐色	明茶褐色	〃	○	○			○	○			〃			
20	87	〃	西平	〃	〃	2 T	Ⅲ	233	9.226	〃		砂粒多		○							普		20	
	88	〃	〃	〃	〃	B12	自然			暗褐色	暗茶褐色	細粒多	○	○	○	○					良			
	89	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	77	9.98	暗灰褐色	暗褐色	〃		○	○	○	○	○			〃			
	90	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	227	9.276	暗茶褐色		密					○				〃			
	91	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1057	9.087	〃		細粒多		○		○					〃			
	92	〃	〃	〃	〃	1 T	Ⅲ	98	10.305	淡褐色		密	○		○						黒曜石	〃		
	93	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	133	9.83	暗褐色		細粒多					○	○			金雲母	〃		20
	94	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1149	8.477	淡褐色	明茶褐色	砂粒多	○	○		○					〃			
	95	〃	〃	〃	胴部	2 T	Ⅲ	666	9.212	暗褐色	明黄茶褐色	細粒多		○		○					〃			
	96	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	674	9.182	明茶褐色		〃		○							〃			
	97	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	578	9.884	暗褐色	明茶褐色	細粒多		○		○					茶粒	〃		20
	98	〃	〃	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	6	10.475	淡黄茶褐色		砂粒多		○	○	○	○				〃			
	99	〃	〃	〃	底部	2 T	Ⅲ	69	10.22	暗褐色	明茶褐色	細粒多		○		○	○	○			〃			
	100	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1138	8.617	淡黄茶褐色		砂粒多	○	○		○		○			〃			
101	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	47	10.455	淡褐色	暗茶褐色	〃		○	○						〃				
21	102	〃	〃	〃	口縁部	2 T	Ⅲ	645	9.33	明茶褐色		密		○			○				〃			
	103	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	1141	8.707	淡茶褐色		〃		○		○	○	○			〃			
	104	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	597+600	9.334	暗褐色	暗茶褐色	細粒多	○	○		○					〃			
	105	〃	〃	〃	〃	B16	Ⅱ	2589	8.083	暗茶褐色		砂粒多	○	○	○	○					〃			
	106	〃	入佐	〃	〃	1 T	Ⅲ	213	9.712	明茶褐色	暗茶褐色	密	○								〃			
	107	〃	〃	〃	〃	1 T	Ⅲ	87	10.27	淡茶褐色		〃	○	○							黒曜石	〃		
	108	〃	黒川	〃	〃	B13	Ⅳ	3888	7.75	暗茶褐色		細粒多	○	○	○						〃			
	109	〃	〃	〃	〃	A14	Ⅳ	2907	8.03	〃		〃		○	○	○					〃			
	110	〃	〃	〃	〃	B13	Ⅲ	3187	8.1	暗茶褐色	黒褐色	〃	○	○	○						〃			
	111	〃	入佐?	浅鉢	〃	2 T	Ⅲ	21	10.56	淡褐色		密	○		○						〃			
	112	〃	黒川	〃	胴部	B13	Ⅳ	2797	7.944	明茶褐色		細粒多		○	○	○					〃			
	113	〃	晩期	深鉢	〃	B13	Ⅳ下	3940	7.873	黒褐色		砂粒多	○	○	○						〃			
	114	〃	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	2471	8.098	明茶褐色	暗茶褐色	〃		○	○						〃			
	115	〃	〃	〃	口縁部	B11	Ⅳ	4937	10.196	暗茶褐色		砂粒多		○			○	○			〃			
	116	〃	上加世田	浅鉢	〃	1 T	Ⅲ	112	9.835	淡褐色	明黄茶褐色	〃	○	○							〃			
	117	〃	入佐	〃	〃	1 T	Ⅲ	212	9.632	黒褐色	暗茶褐色	砂粒多	○								黒曜石	〃		
	118	〃	〃	〃	〃	B 8	Ⅴ	4742	9.585	淡褐色		細粒多		○			○	○			〃			
119	〃	〃	〃	〃	A12	自然			暗茶褐色		〃	○	○	○						〃				
120	〃	黒川	〃	〃	1 T	Ⅲ	105	10.41	淡褐色		密	○								黒曜石	〃			
121	〃	〃	〃	〃	2 T	Ⅲ	724	10.492	明茶褐色		〃	○		○						〃				
122	〃	土製加工品		胴部	2 T	Ⅲ	702	9.942	暗茶褐色		細粒多	○	○							〃				
123	〃	〃	〃	底部	2 T	Ⅲ	815	10.342	明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○	○						金雲母	〃			



第5表 出土遺物觀察表(4)

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		胎 土								焼成	備考	図版		
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B	他					
32	171	弥生土器	中期	壺	口縁部	B13	Ⅳ	3808	7.841	明茶褐色	砂粒多		○							金白	良			
	172	〃	〃	〃	肩部	B13	Ⅳ	3338	7.933	淡黄白色	密		○		○	○	○				〃			
	173	〃	〃	〃	〃	B9	表層			暗茶褐色	砂粒多		○		○					金雲母	〃			
	174	〃	〃	〃	〃	B13	Ⅲ	2063	8.168	暗黄茶褐色	〃									金白	〃		23	
	175	〃	〃	〃	底部	5T	Ⅱ	953	11.742	暗茶褐色	淡黄白色	細粒多	○	○	○	○	○	○				〃		
	176	〃	〃	〃	口縁部	B13	Ⅳ	3690	7.813	明茶褐色		〃	○	○								〃		
	177	〃	〃	蓋	〃	A14	Ⅲ	3035	8.125	淡茶褐色	暗茶褐色	砂粒多		○								〃		23
	178	〃	〃	〃	〃	9T	5下	1332	7.303	暗黄茶褐色		細粒多	○		○	○	○					〃		
	179	〃	〃	〃	底部	C13	Ⅳ	4452	10.181	淡黄白色		〃		○	○	○						〃		
	180	〃	〃	〃	〃	C10	Ⅴ	4879	9.307	明茶白色	明茶褐色	砂粒多		○								〃	赤色塗彩	
	181	〃	〃	〃	〃		表採			淡褐色	淡黄白色	細粒多	○	○	○	○						〃		
	182	〃	〃	〃	胴部	C10	Ⅴ	4913	9.537	淡黄白色	暗赤茶褐	密		○		○						〃	赤色塗彩	23
33	183	成川式土器		〃	口縁部	C8	Ⅴ	4823	9.465	暗褐色		砂粒多		○						白粒	〃			
	184	〃		〃	〃					明茶褐色		〃	○	○	○	○						〃		23
	185	〃		〃	肩部	C10	Ⅳ			〃		〃		○		○					〃			
	186	〃		〃	〃	9T	5下	1331	7.333	淡黄白色		〃		○			○	○				〃		
	187	〃		〃	胴部	C10	Ⅳ	4227	10.276	淡黄白色	淡褐色	細粒多										〃		23
	188	〃		〃	〃					淡黑褐色	淡褐色	〃										〃		
	189	〃		〃	底部	5T	Ⅱ	915	8.275	黑褐色	明茶褐色	砂粒多	○	○			○	○		白粒	〃			
	190	〃		〃	口縁部	A14	Ⅳ	2930	8.18	淡黄白色		〃		○		○	○	○				〃		23
	191	〃		〃	〃	C11	Ⅳ下	4616	9.991	暗茶褐色		細粒多	○	○		○						〃		
	192	〃		〃	〃	9T	5下	1334	7.393	淡褐色		〃		○		○	○	○				〃		
	193	〃		〃	底部	A14	Ⅳ	3286	7.993	暗黄白色		〃	○	○		○	○	○				〃		
	194	〃		〃	〃	A12	Ⅳ	4086	9.996	黑褐色	明茶褐色	〃		○			○	○				〃		
	195	〃		〃	〃	B13	Ⅱ	2428	8.107	淡黄茶褐色		〃		○		○	○	○				〃		
	196	〃		〃	脚部	B14	Ⅱ	2600	8.228	明黄白色		〃		○			○	○		茶粒	〃			23
	197	〃		浅鉢	〃	C10	段落	4253	10.016	黑褐色	明黄茶白	〃		○			○	○		茶粒	〃	赤色塗彩		
	198	〃		〃	脚台部	C10	4下	4643	10.071	明黄白色		密					○			茶粒	普			

第6表 出土遺物觀察表(5)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土							焼成	備考	図版			
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他		
44	199	須恵器	蓋		C 10		5181	9.65			淡黄白色	淡灰褐色	細粒多								茶粒	普	土坑		
	200	弥生土器	甕	底部	A 9		5185			8	明黄白色		砂粒多		○		○		○			良	礫敷溝		
	201	須恵器	蓋		C 8		5189				淡灰褐色		〃									〃	〃		
	202	〃	甕	肩部	A 9		5186				灰褐色	淡灰褐色	細粒多										白粒	〃	〃
	203	〃	〃	胴部	B 9		5143	10.096			淡灰褐色		密										白粒	〃	〃
	204	〃	〃	肩部	B 9		5191				淡灰褐色	灰褐色	〃										〃	〃	
	205	〃	〃	〃	B 9		5184	9.95			〃		〃										〃	〃	
206	〃	〃	胴部	B 9		5187・4176・2681					淡灰褐色		〃									白粒	〃	〃	
48	207	〃	〃	口縁部	B15	IV	3505・3280・3127		19		〃		〃									黒粒	〃	接合片多	
	208	〃	〃	肩部	B14	IV	4532・1502				〃		〃										黒粒	〃	
	209	〃	〃	〃	C15	III	2512	8.154			〃		〃										〃		
	210	〃	〃	〃	B14	IV	4729・3529・3068				〃		〃										〃		
	211	〃	〃	〃	B14	III	2546・2294・2186・2175・2025				〃		〃											〃	接合片多
	212	〃	〃	〃	B13	IV	3313・3026・2900・2189				〃		〃										〃		
	213	〃	〃	〃	B14	IV	4542	7.943			〃		〃										黒粒	〃	
	214	〃	〃	口縁部	A12	自然					淡灰茶褐色		細粒多											〃	
215	〃	〃	〃	A13	IV	4059・3191				〃		〃										〃			
216	〃	〃	頸部	C11	IV下	4435	10.231			暗灰褐色	淡灰褐色	〃											〃		
217	〃	〃	〃	C10	IV下	4405	10.231			〃		〃											〃		
49	218	〃	〃	肩部	5T	II	871				淡灰褐色		〃											28	
	219	〃	〃	〃	A9	IV	3993	10.251			暗灰褐色	淡灰褐色	密											〃	
	220	〃	〃	〃	B14	IV下	3975	7.873			暗灰褐色		細粒多											〃	28
	221	〃	〃	〃	A13	IV	4100	9.956			淡灰褐色		密											〃	
	222	〃	〃	〃	C13	IV	3099・2651				〃		細粒多										黒粒	〃	28
	223	〃	〃	〃	3T	8	1197	9.407			〃		密											〃	
	224	〃	〃	〃	B14	II	2201	8.156			暗灰褐色	淡灰褐色	〃											〃	
	225	〃	〃	〃	A15	IV	3484・3483・3046				淡茶褐色	〃	砂粒多											〃	
	226	〃	〃	〃	C13	II	2384	8.158			淡灰褐色	淡灰茶褐	密											〃	27
	227	〃	〃	〃	A13	IV	3202	9.886			淡灰褐色		〃											〃	
	228	〃	〃	〃	A13	IV	3194	9.846			淡灰褐色	淡灰茶褐	〃											〃	27
	229	〃	〃	〃	B12	自然					淡灰褐色		〃											〃	
	230	〃	〃	〃	A14	III	2126	8.148			〃		〃											〃	
231	〃	〃	〃	A12	IV	3226	9.846			暗灰褐色	淡灰褐色	〃	○										〃		
50	232	〃	〃	〃	A14	III	2961	8.025			暗灰褐色		細粒多											〃	27
	233	〃	〃	〃	A12	IV	3200	9.896			暗灰褐色	淡灰褐色	〃											〃	
	234	〃	〃	〃	B10	IV下	4663	10.116			〃		〃										〃		
	235	〃	〃	胴部	C10	IV下	4641・2836				〃		〃											〃	27
	236	〃	〃	肩部	B13	IV	3417	8.743			〃		〃											〃	
	237	〃	〃	〃	A12	自然					淡灰褐色	淡灰茶褐	密											〃	27
	238	〃	〃	胴部	C11	IV	4160・3689				暗灰褐色		細粒多											〃	
	239	〃	〃	肩部	A12	自然					淡灰褐色	淡灰茶褐	密											〃	
	240	〃	〃	〃	B12	自然					青灰褐色	淡灰褐色	〃											〃	
	241	〃	〃	胴部	C13	III	2758・2754・2749				淡灰褐色		〃											〃	
	242	〃	〃	肩部	B13	III	2390	8.188			淡灰茶褐	淡灰褐色	〃											〃	
	243	〃	〃	胴部	A13	IV	3194	9.846			〃	明灰茶褐	〃											〃	
	244	〃	〃	肩部	C14	IV	2494	8.194			淡灰褐色		細粒多											〃	27

第7表 出土遺物觀察表(6)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土							焼成	備考	図版			
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他		
50	245	須恵器	甕	肩部	C11	IV	4150	10.346			暗灰褐色		密										良		
	246	〃	〃	〃	A12	IV	4027	10.171			淡灰茶褐色		細粒多		○									〃	
51	247	〃	〃	〃	A12	IV	4052	10.171			〃		密											〃	28
	248	〃	〃	〃	D13	IV	2794	7.824			淡灰褐色	淡灰茶褐色	細粒多											〃	
	249	〃	〃	〃	A12	IV	3255	10.006			〃	暗灰褐色	密											〃	
	250	〃	〃	〃	B14	IV	4551	8.023			淡灰茶褐色		〃											〃	
	251	〃	〃	〃	5 T	II	920	8.275			淡灰褐色		細粒多											〃	
	252	〃	〃	〃	D13	IV	3424	7.968			淡灰褐色	淡灰茶褐	〃											〃	26
	253	〃	〃	〃	A12	IV	4022	10.231			淡灰茶褐色		〃											〃	
	254	〃	〃	〃	B15	III	2855	8.081			淡黄灰褐色		〃	○			○							普	
	255	〃	〃	〃	C13	III	2764	8.014			淡灰茶褐色		〃											良	
	256	〃	〃	〃	C11	IV下	4985	9.926			淡黄灰褐色		〃				○							普	
	257	〃	〃	胸部	B12	IV	4088	9.956			淡灰褐色	淡黄灰褐	〃	○										〃	
	258	〃	〃	〃	B12	IV	3602	9.724			淡灰褐色		〃	○										〃	
	259	〃	〃	〃	B15	III	2870	8.091			〃		〃	○									白粒	〃	
	260	〃	〃	〃	A12	自然					〃		〃											〃	
52	261	〃	〃	肩部	C13	IV	3782	7.881			淡灰茶褐色		〃										良	26	
	262	〃	〃	〃	B13	IV上	3935	7.923			〃		〃										〃		
	263	〃	〃	〃	C13	IV	3085	8.03			淡灰茶褐	淡灰褐色	〃										〃		
	264	〃	〃	胸部	A 9	IV	3998	10.311			〃	暗灰茶褐	〃	○	○									〃	
	265	〃	〃	肩部	C13	IV	3833・3088				〃	暗褐色	〃											〃	
	266	〃	〃	〃	C14	III	2497	8.154			〃	淡灰褐色	〃											〃	26
	267	〃	〃	胸部	A14	IV	4568	7.973			淡灰茶褐色		〃											〃	
	268	〃	〃	〃	D13	III	2796	7.894			淡灰褐色	暗灰茶褐	密											〃	
	269	〃	〃	〃	C10	IV	4222・1274				淡灰茶褐色		細粒多											〃	
	270	〃	〃	〃	A12	自然					〃		〃											〃	26
	271	〃	〃	〃	B12	自然					〃		〃											〃	
272	〃	〃	〃	A12	自然					〃		密											〃		
53	273	〃	〃	肩部	B14	IV	3608・3180・3179・3141・1532・1528				〃		〃										〃	接合片多	
	274	〃	〃	〃	B13	III	2084・3304				暗灰褐色	淡紫茶褐	〃											〃	
	275	〃	〃	〃	B13	IV	3155	8.01			淡灰褐色		〃										〃		
	276	〃	〃	〃	B13	IV下	3950	7.823			淡灰褐色	淡紫茶褐	細粒多										白粒	〃	
	277	〃	〃	〃	B13	IV	3318	7.943			〃	紫明茶褐	密											〃	
	278	〃	〃	〃	C13	IV	3850	7.831			淡青灰色	淡紫茶褐	砂粒多											〃	
	279	〃	〃	〃	A12	自然					暗灰褐色		〃	○	○									〃	
	280	〃	〃	胸部	A12	IV	3266・4017				淡灰褐色	明灰茶褐	密											〃	
54	281	〃	〃	肩部	B14	III	2629	8.028			淡灰褐色		細粒多	○	○									〃	
	282	〃	〃	胸部	B14	III	2521	8.124			淡灰褐色	暗灰褐色	〃	○										普	
	283	〃	〃	〃	10 T	IV	1408	7.685			暗灰褐色		密											良	
	284	〃	〃	〃	B13	IV	3143・3144				淡灰褐色		〃											〃	
	285	〃	〃	〃	B14	III	2233・1378				〃		〃											〃	
	286	〃	〃	〃	B14	II	3540	8.184			〃		〃	○										〃	27
	287	〃	〃	〃	B12	IV					淡灰褐色	淡灰茶褐	細粒多	○										〃	
	288	〃	〃	〃	B14	IV	4507・3963・3743				〃	暗褐色	密											〃	転用硯可
	289	〃	〃	〃	A12	自然					淡黄白色		細粒多											普	
	290	〃	〃	〃	3 T	8	1264	9.381			淡灰茶褐色		密											良	

第8表 出土遺物觀察表(7)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土								焼成	備考	図版			
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B	他						
54	291	須恵器	甕	胴部	B 12	Ⅳ	4933	8.656			淡青灰色	淡灰茶褐	密											良	26	
	292	〃	〃	〃	A 12	自然					淡灰茶褐色	〃												〃		
	293	〃	〃	〃	A 13	Ⅳ	3197	9.886			〃	〃	〃											〃		
	294	〃	〃	〃	3 T	8	772	10.712			淡灰褐色	淡灰茶褐	〃											〃		
55	295	〃	〃	〃	A 14	Ⅱ	2971	8.195			淡灰茶褐	淡灰褐色	〃											〃	27	
	296	〃	〃	〃	C 11	Ⅳ下	4427	10.211			暗灰茶褐	暗灰褐色	細粒多											〃		3枚付着
	297	〃	〃	〃	B 15	Ⅲ	2867	8.101			淡灰褐色	〃	密											〃		
	298	〃	〃	〃	3 T	6	291	11.326			暗褐色	暗青灰褐	〃											〃		
	299	〃	〃	〃	B 14	Ⅱ	2281	8.204			淡灰褐色	〃	〃											〃		
	300	〃	〃	〃	A 13	Ⅳ	3204	9.826			〃	〃	〃											〃		
	301	〃	〃	〃	A 12	Ⅱ		9.595			〃	〃	〃											〃		
	302	〃	〃	〃	A 8	V	4740	9.896			淡灰褐色	暗灰褐色	〃											〃		
	303	〃	〃	〃	A 13	Ⅳ	3200	8.175			淡灰茶褐	淡灰褐色	〃											〃		
	304	〃	〃	〃	A 14	Ⅱ	2985	7.863			淡灰褐色	〃	〃											〃		
	305	〃	〃	〃	B 13	Ⅳ	3646	10.131			淡灰褐色	暗灰褐色	〃											〃		
	306	〃	〃	〃	A 13	Ⅳ	4056				淡灰褐色	〃	〃											〃		
56	307	〃	壺	〃	D 12	Ⅲ	2808·2755·2750				淡青灰色	淡灰褐色	細粒多											〃	胴15cm	
	308	〃	〃	口縁部	C 13	Ⅲ	2662·2648·2743		14.2		淡灰茶褐色	〃	密											〃	接合片多	
	309	〃	〃	肩部	C 11	Ⅳ下	4609·4423·2214				淡明茶褐	淡灰褐色	〃											〃		
	310	〃	〃	〃	1 T	Ⅲ	94	10.445			淡灰褐色	〃	〃											〃		
	311	〃	〃	胴部	C 13	Ⅳ	3774	7.911			明黄茶褐色	〃	〃											〃		
	312	〃	〃	胴~底	D 13	Ⅳ	2795·2863·2712			12.2	明黄茶褐	淡黄灰褐	〃											〃		
	313	〃	〃	底部	C 13	Ⅳ	3380	7.923			明淡茶褐色	淡黄白色	〃											〃		
	314	〃	小壺	胴部	C 14	Ⅳ	2504	8.224			淡灰褐色	〃	〃											〃		
	315	〃	〃	〃	B 15	Ⅲ	2869	8.071			〃	〃	〃											〃		
	316	〃	〃	底部	B 13	Ⅳ	3170	7.98			〃	〃	〃											〃	29	
	317	〃	〃	口縁部	B 13	Ⅱ	2019	8.228		4	〃	〃	〃											〃		
57	318	〃	蓋	天井部	C 13	Ⅳ	3084	8			明黄茶褐色	〃	細粒多	○	○				○	茶粒	普			〃		
	319	〃	〃	〃	A 14	Ⅱ	2959	8.065			淡灰褐色	〃	〃	○										〃		
	320	〃	〃	〃	A 14	Ⅳ	4590·2846·2220		14.4		明灰茶褐	淡灰褐色	密											良		
	321	〃	〃	〃	A 8	V	4847	9.635			淡灰褐色	〃	〃											〃	29	
	322	〃	〃	〃	C 14	Ⅳ	4473·3618·3334·2020				〃	〃	〃											〃		
	323	〃	〃	〃	C 9	Ⅳ下	4370	9.731			〃	〃	〃											〃		
	324	〃	〃	つまみ	C 10	Ⅳ	4215	10.236			淡褐色	〃	〃											〃	29	
	325	〃	〃	天井部	B 13	Ⅳ	3169·3147·2757				淡青灰色	〃	細粒多											白粒	〃	
	326	〃	〃	つまみ	B 13	Ⅳ	2828	8.091			淡灰白色	〃	密											普		
	327	〃	〃	〃	B 14	Ⅳ	4517	7.983			淡黄白色	〃	細粒多	○										茶粒	〃	
	328	〃	〃	天井部	C 11	Ⅳ下	4612	9.961			淡青灰色	〃	〃											良		
	329	〃	〃	〃	D 12	Ⅲ	3057·4235				淡灰褐色	〃	密											〃	29	
	330	〃	〃	〃	C 11	Ⅳ下	4374	10.261			〃	〃	〃											普		
	331	〃	〃	坏	口縁部	A 14	Ⅱ	2135	8.208			明赤茶褐色	〃	細粒多											良	
	332	〃	〃	胴部	C 11	Ⅳ下	4439	10.331			〃	〃	〃											〃	29	
333	〃	〃	胴~底	A 14	Ⅳ	4574·2130			8.8	淡赤茶褐色	〃	密											〃	高台付き		
334	〃	〃	〃	C 10	Ⅳ				12.8	淡黄白色	〃	細粒多											〃	高台付き		
335	〃	〃	底部	B 13	Ⅳ	4489·3938			10	淡黄白色	淡黄茶褐	密		○									茶粒	〃	高台付き	
336	〃	〃	胴~底	B 12	自然				9	淡灰褐色	〃	〃											〃	高台付き		

第9表 出土遺物観察表(8)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土								焼成	備考	図版			
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B	他						
57	337	須恵器	坏	底部	C10	IV下	4388	10.171		10.1	淡茶白色	淡灰褐色	密									普	高台付き			
	338	〃	〃	〃	C10	IV下	4695	9.756		12.4	明茶白色	明黄白色	細粒多		○	○						〃	高台付き			
	339	〃	〃	〃	C13	IV	4443	10.271		9.2	淡灰褐色		密									良	高台付き	29		
	340	〃	〃	〃	A11	IV				8.4	淡青灰褐色		〃									〃	高台付き			
	341	〃	〃	〃	C10	IV下	4957	9.956		10.1	淡黄白色		細粒多		○	○						普	高台付き			
	342	〃	〃	胴~底	D13	II	3420・2687			9.1	淡灰褐色		密										良	高台付き	29	
	343	〃	〃	〃	D12	IV	2803	7.904		6.4	〃		細粒多									白粒	〃			
	344	〃	〃	底部	C10	段落	4254	10.056		6.4	淡茶白色		〃									白粒	〃			
58	345	〃	鉢	口~胴	B12	自然			12.2	淡灰褐色		〃										白粒	〃			
	346	〃	〃	完形	C11	IV	4949・4682・4618		29.6	18.9	明黄褐色		〃	○	○	○	○						〃			
60	347	土師器	甕	口縁部	A14	IV	2904	8.1			明茶褐色		砂粒多	○	○	○	○						〃			
	348	〃	〃	〃	B14	IV	4726・4543				明茶褐色	淡明茶褐	〃	○	○	○	○						普			
	349	〃	〃	〃	B13	IV	3292	8.083			明茶褐色		〃	○	○	○	○						〃			
	350	〃	〃	〃	C13	IV	3875・3164				〃		〃	○	○	○	○						〃			
	351	〃	〃	〃	C13	IV	3872	7.76			〃		〃	○	○	○							良			
	352	〃	〃	〃	B13	IV	2479	8.169			〃		〃		○	○	○						〃			
	353	〃	〃	〃	B13	IV	3661・3624				〃		〃		○		○						普			
	354	〃	〃	口~胴	B13	IV	3292	8.083			〃		〃		○	○	○						〃			
	355	〃	〃	口縁部	C14	IV	2894・2893				明茶褐色	淡茶褐色	〃	○	○	○	○							〃		
	356	〃	〃	把手	B15	IV	2861	8.101			明茶褐色	〃	〃	○	○	○	○						〃			
61	357	〃	碗	口~胴	10T	IV	1438	7.735	16.2		淡明黄白色		密					○				良				
	358	〃	〃	〃	C11	IV下	4680	9.986	16.2		淡明茶白色		細粒多		○							茶粒	〃			
	359	〃	〃	底部	C13	II	2693・2336			7.1	淡黄茶白色		〃		○			○	○			茶粒	普	高台付き		
	360	〃	〃	〃	A12	自然				7.2	淡明灰色		〃		○		○	○	○				良	高台付き		
	361	〃	〃	〃	B13	IV	3678・3677			7	〃		密						○				〃	高台付き		
	362	〃	〃	〃	B14	II	2269	8.224		8.2	淡黄白色		〃		○			○	○				〃	高台付き		
	363	〃	〃	〃	B15	IV	3295	8.173		6.5	〃		砂粒多		○			○				茶粒	普	高台付き		
	364	〃	〃	〃	C14	IV	3453	7.998		8	淡茶白色		細粒多					○	○				良	高台付き		
	365	〃	〃	〃	D12	III	2688	8.004		6.4	明茶褐色		〃		○			○	○			茶粒	〃	高台付き		
	366	〃	〃	〃	C13	II	2362	8.218		8.8	明黄白色		密					○					〃	充実高台		
	367	〃	〃	〃	C11	IV下	4371	10.321		6.8	明茶褐色		細粒多		○		○	○	○				〃	充実高台		
	368	〃	〃	〃	10T	IV	1356	7.735		8	淡明黄白色		密					○	○				〃	高台付き		
	369	〃	〃	胴~底	B13	IV	3357	7.963		10.8	淡黄白色		〃					○				茶粒	〃	高台付き		
	370	〃	坏	完形	A15	IV	3510	7.958	15.2	6.7	淡明茶褐色		細粒多									茶粒	普			
	371	〃	〃	〃	B14	IV	4540・4535			12.4	7	明茶褐色		密	○				○				良		25	
	372	〃	〃	〃	A14	IV	2902・2111			13	6.6	明茶白色		細粒多	○	○			○				茶粒	普		
	373	〃	〃	〃	A14	IV	2906	8.15	12.4	6.6	淡黄白色		密	○				○					良		25	
	374	〃	〃	〃	A15	IV	3486	8.018	12.5	7	明黄白色		細粒多		○							茶粒	〃			
	375	〃	〃	〃	C13	III	3096	8.05	13	6.8	淡茶褐色		〃					○	○	○			〃			
	376	〃	〃	〃	A12	自然			12.5	5.7	明茶褐色		〃					○	○				茶粒	〃	墨書「之」	25
	377	〃	〃	〃	A14	IV	4580	7.993	13	6.8	〃		〃									茶粒	〃			
	378	〃	〃	〃	B11	I			9.8	7.1	〃		〃						○				〃			
	379	〃	〃	胴~底	C10	IV				8.8	淡黄白色		砂粒多	○									茶粒	普		
	380	〃	〃	底部	A14	II	2139	8.188		9.2	明黄白色		細粒多		○			○					良			
	381	〃	〃	〃	B14	IV	4502・3927・3920			6.4	明茶褐色	暗褐色	密					○	○	○			〃			
	382	〃	〃	胴~底	C13	III	2781	8.034		6.5	明茶褐色		細粒多	○									〃			

第10表 出土遺物觀察表(9)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土							焼成	備考	図版		
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他	
61	383	土師器	坏	底部	A14	Ⅲ	2101	8.158		6.2	明黄白色		密		○			○				良		
	384	〃	皿	完形	C11	I			10.5	8.5	暗黄灰褐	暗灰褐色	〃		○			○				普		
	385	〃	椀?	底部	10T	Ⅲ	1352	7.85		6.5	明黄茶白色		細粒多		○			○	○		茶粒	〃		
62	386	黑色土器	坏	完形	A14	Ⅳ	2905・2151		15.2	7.2	黑色	明黄白色	〃	○	○			○	○			良		
	387	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	2483	8.138	14.6	7.2	〃		密								茶粒	〃		
	388	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	3370	7.943	14.1	7.2	〃		細粒多		○		○					〃		
	389	〃	〃	〃	C14	Ⅳ	4468	10.731	15.2	7.3	黑色	明黄茶白	〃					○			茶粒	〃	25	
	390	〃	〃	〃	B15	Ⅳ	4716・3523		14.4		〃		〃		○			○	○			〃		
	391	〃	〃	底部	B13	Ⅳ	2840	8.051		7.4	〃	明黄白色	密		○		○	○				〃		
	392	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	2057	8.188		6.6	〃	淡明黄白	細粒多					○			茶粒	普		
	393	〃	椀	完形	B13	Ⅳ	2813	8.071	14.4	7.1	〃	明黄茶褐	〃					○	○			良		
	394	〃	〃	底部	B13	Ⅱ	2398	8.158		6.8	〃	明黄白色	〃		○			○				〃		
	395	〃	〃	〃	B13	Ⅱ	2090	8.208		8	〃		〃					○	○			〃		
	396	〃	〃	胴~底	B13	Ⅱ	2001	8.208		6.2	黑色	淡明黄白	密					○	○		茶粒	〃		
	397	〃	〃	〃	C13	Ⅳ	3854・3825		15.2	6.6	〃	明黄白色	細粒多					○	○			〃	25	
	398	〃	皿	完形	B13	Ⅲ	2253・2024		7.4		〃		〃					○			茶粒	〃		
	399	〃	坏	底部	C13	Ⅲ	3060	8.07		6.5	黑色	淡黄白色	密	●				○●○●				〃	赤色高白	
	400	〃	〃	〃	B13	Ⅳ				7.1	〃		〃					○	○●			〃	〃	
	401	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	3649・3178			7.2	〃		〃					●	○			〃	〃	
	402	〃	〃	〃	B13	Ⅳ	3281	8.123		7.1	〃		細粒多	●				○●●				〃	〃	
	403	〃	燒塩壺	胴部	B14	Ⅱ					淡黄茶褐色		〃	○	○			○	○			〃	内面布痕	
	404	土師器	鉢	口縁部	B10	Ⅳ	4964	9.926			明黄茶褐色		砂粒多		○		○				白粒	普		
	405	土製品	紡錘車	完形	C11	Ⅳ下	4973	9.496	直径6.5cm		〃		細粒多								白粒	〃		
406	鉄製品	雁股鐵	先端部	B14	Ⅲ	2668	8.118	長さ6.6+αcm		明茶褐色												錆多		
65	407	土師器	坏	完形	A12	P3			9.2	9.9	明茶白色		密					○			良	掘立6内	25	
69	411	須恵器	甕	胴部	B9	碟②	5040・4090・3549				淡青灰色		〃								〃	碟集1内		
	412	〃	〃	〃	A8	碟					暗灰褐色		細粒多		○						〃	〃		
	413	〃	〃	肩部	B9	碟②	S-11				淡灰褐色		〃								〃	〃		
	414	〃	〃	〃	B9	碟					明赤茶褐色		密	○			○					〃	〃	
	415	〃	〃	肩部	3T	碟	1486	10.151			淡灰褐色		〃	○								〃	〃	
	416	土製品	土馬	胴部	B9	碟②	5039	10.216			明黄白色		〃		○		○					〃	〃	
	417	土師器	坏	完形	B9	碟②	5136	10.206	12.6	9.4	淡黄白色		〃				○				〃	〃		
	418	土器	壺	底部	C10	碟②	5157	8.9			〃		砂粒多	○	○	○			○		普	碟集2内		
	419	〃	〃	胴部	C11	碟②	5159	9.07			淡黄褐色		〃	○	○			○			良	〃		
	421	須恵器	甕	肩部	C11	碟②	5156	8.97			淡茶褐色		密									〃	〃	
	422	〃	〃	胴部	C12	碟	4930	9.346			〃		〃									〃	〃	
70	423	白磁	碗	口縁部	A9	碟②	5015	10.336			淡灰白色		〃								〃	碟集1内		
	424	〃	〃	底部	B9	碟②	S19			7.5	〃		〃								〃	〃		
	425	〃	〃	〃	B9	碟②	S12			7.6	〃		〃								〃	〃		
	426	青磁	〃	口~胴	B9	碟①	S30				淡綠色		〃								小黑粒	〃	〃	
	427	〃	〃	完形	C11	碟②	5163	8.92			〃		〃								小黑粒	〃	碟集2内 30	
	428	常滑焼	甕	口縁部	B9	碟②	S2				暗茶褐色	暗灰褐色	細粒多									〃	碟集1内	
	429	〃	〃	〃	B9	碟①	S4				〃 淡綠色		〃									〃	〃	
	430	染付	碗	底部	A8	碟					〃		密									小黑粒	〃	30
	431	陶器	〃	口~胴	B9	碟②	5037	10.296	11.2		淡黄白色		〃									〃	〃	
	432	〃	〃	〃	A8	碟①	4996	10.296	10		〃		〃									〃	〃	

第11表 出土遺物観察表(10)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土							焼成	備考	図版		
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他	
70	433	陶器	碗	口~胴	A 8	礫①	4999	10.346	8.2		暗赤茶褐色	密										良	礫集1内	
	434	〃	〃	胴~底	B 9	礫②	5152	10.06		6.7	淡灰褐色	〃										〃	〃	
	435	〃	〃	底部	B 9	礫				3.5	淡茶褐色	〃										〃	〃	
	436	〃	〃	〃	B 9	礫②	5149	10.17		5	暗緑茶褐色	〃										〃	〃	
	437	〃	皿	完形	A 8	礫			10.6	5.2	暗褐色	〃										〃	〃	
	438	〃	刃釜	〃	B 9	礫①	5032・5018・5021		11.2	5	暗茶褐色	細粒多	○	○								〃	〃	25
	439	〃	埴塼	胴部	B 9	礫②	5041	10.126			淡灰褐色	淡赤茶褐	密									〃	〃	
76	450	土師器	坏	完形	B12	自然			13.7	11	淡黄白色	細粒多					○	○	茶粒	〃				
	451	〃	〃	底部	B11	IV	4103	10.346		8.2	明黄茶褐	暗茶褐色	密					○		茶粒	〃			
	452	〃	〃	〃	4 T	6	10.36	11.17			明黄茶褐色	細粒多								〃				
	453	〃	〃	〃	A13	IV	4061	9.941			暗褐色	〃					○	○		〃				
	454	〃	皿	完形	B12	自然			9.2	8	淡黄白色	密					○	○	○	茶粒	〃			
	455	〃	〃	〃	A12	III	4016	10.331	8	7.2	明黄茶褐色	〃								普				
	456	滑石製石鍋	胴部	4 T	6	1040	11.13				淡褐色	黒褐色	〃							滑石	良	穿孔あり		
77	457	青磁	碗	口縁部	3 T	6	322	11.266			劃花文	〃								〃	龍泉窯			
	458	〃	〃	〃	B 9	一括					蓮弁文	〃								〃	〃			
	459	〃	〃	〃							蓮弁文	〃								〃	〃	30		
	460	〃	皿	底部							櫛描文	〃								〃				
	461	〃	碗	〃							草花文	〃								〃				
	462	〃	〃	〃							草花文	〃								〃				
	463	〃	〃	口縁部							蓮弁文	〃								〃				
78	464	〃	〃	完形	4 T	6	368	11.22	11.6	6.2	淡緑色	密								良				
	465	染付	〃	底部	5 T	II	946	11.872		5.6		〃	○	○					小黒粒	〃	30			
	466	〃	皿	〃	3 T	6	352	11.331		2.4	芭蕉文	〃							小黒粒	〃				
	467	〃	〃	〃	5 T	I				6.8	花文	〃								〃		25		
	468	〃	碗	口縁部	B13	II						唐草文	〃							〃				
	469	〃	皿	底部	A10					5		〃								小黒粒	〃			
	470	〃	碗	胴~底	A10					3.1	十字花文	アラベスク	〃							〃				
79	471	〃	〃	口縁部	6 T	II	1010	7.866				〃							〃	重ね焼き	30			
	472	〃	〃	胴部	6 T	II	975	7.756				小花文	〃							〃	景德鎮			
	473	〃	〃	口縁部	B 9				9.8			唐草?	〃							〃				
	474	〃	〃	底部	3 T	6	638	10.96		4		〃								〃				
	475	〃	〃	〃	D13					4.2	五弁花文	〃								〃				
	476	〃	皿	〃	C13	II	2383	8.248		9.2	花唐草文	〃								〃		30		
	477	〃	猪口	胴~底	B 9					5		竹文	〃							〃				
79	478	〃	碗	口~胴	A12				12.8		斜格子文	唐草文	〃							〃	肥前			
	479	〃	皿	口縁部	7 T	II	898	11.282			幾何学文	〃							〃	〃				
	480	〃	碗	〃	B 9						〃	〃							〃	在地				
	481	〃	〃	完形	B 9				9.4	3.6		山水図?	〃							〃				
	482	陶器	〃	口縁部	3 T	6	622	10.87				〃								〃	天目			
	483	〃	〃	底部	5 T	II	924	11.852		4.6		〃								〃	竜門司			
	484	〃	〃	〃	B 8					4.6		〃								〃	〃			
	485	〃	〃	〃						4.6		〃								〃	〃			
	486	〃	〃	〃						4.4		〃								〃	〃	31		
	487	〃	〃	〃	A10					4.3		〃								〃	元立院			
	488	〃	皿	〃	B 8					4		〃								〃	〃			

第12表 出土遺物観察表(11)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物No	標高(m)	口径(cm)	底径(cm)	色調		胎土							焼成	備考	図版		
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	輝石	火W	火B				他	
79	489	陶器	皿	底部	B 8					4.4			密								良	元立院	31	
	490	〃	〃	〃	A 14	I				4			〃								〃	山元		
	491	〃	〃	胴~底	B 8	採集				2.7			〃								〃			
	492	〃	小壺	口縁部						5.2			〃									〃	竜門司	31
	493	〃	〃	胴~底						4.8			〃									〃		
	494	〃	〃	〃	A 14	I				4.8			〃									〃		
	495	〃	花器	胴部	B 8	IV							〃									〃	元立院	31
	496	〃	〃	把手	A 10								〃	○	○							〃		
	497	〃	蓋	鐫部	5 T	I				8.8			〃	○	○	○						〃	竜門司	
	498	〃	〃	天井部	6 T	II	970	7.786	4.3				〃									〃		
	499	〃	〃	完形	A 14	I				5.2			〃									〃		
	500	〃	〃	〃						6.6			〃									〃	竜門司	31
	501	〃	〃	天井部	B 8	IV				6.8			〃									〃		
	502	〃	茶家	注口	A 10								〃									〃	3孔	
	503	〃	〃	〃									〃	○	○							〃	3孔	31
80	504	〃	播鉢	底部	A 10				10			〃									〃			
	505	〃	〃	胴~底	3 T	6	641	10.97				〃									〃			
	506	〃	〃	胴部	A 8	II	5104	10.696				〃									〃			
	507	〃	〃	〃	4 T	6	389	11.23				〃									〃			
	508	〃	〃	〃	9 T	I						〃									〃			
	509	〃	〃	底部	4 T	6	405	11.265				〃									〃			
	510	〃	〃	〃	B 8							〃									〃			
	511	埴埴		口縁部	B 11	IV	4129	10.376				〃									〃			
	512	土製品	狛犬	頭部	B 13	IV	3958	8.223				〃									〃	帖佐人形		
	513	青銅製品	古銭	完形						直径2.1cm				劣化が激しくもろい							〃	寛永通宝		



第13表 出土遺物観察表(12)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石 材	備 考	図版
23	124	石器	打製石鏃	先端欠	2 T	Ⅲ	811	11.032	2.4	1.45	0.6	珪質頁岩	凹墓式	21
	125	〃	〃	先脚欠	A13	I			1.6	2.4	0.35	チャート	凹墓式	
	126	〃	〃	完形	A14	Ⅱ	2967	8.095	1.85	1.75	0.3	頁岩	凹墓式	
	127	〃	〃	両脚欠	B 9	Ⅳ	5144	10.076	2.4	1.3	0.45	頁岩		
	128	〃	〃	片脚欠	A12	Ⅳ	4034	10.191	2.3	1.85	0.65	チャート		
	129	〃	〃	先脚欠	A12	自然			1.65	2	0.55	メノウ	凹墓式	
	130	〃	〃	両脚欠	A13	Ⅳ	3192	9.876	2.1	1.4	0.5	チャート		
	131	〃	〃	両脚欠	B13	Ⅳ	4063	9.481	1.3	1.3	0.25	頁岩	凹墓式	
	132	〃	〃	側辺欠	A12	Ⅳ	4053	10.011	1.2	1	0.35	黒曜石 (腰岳?)		
	133	〃	〃	先脚欠	B12	Ⅳ	4087	9.956	1.4	1.75	0.45	チャート	凹墓式	
	134	〃	〃	先脚欠	C10	段落	4250	10.096	1.65	1.75	0.55	頁岩		
	135	〃	〃	両脚欠	A12	Ⅳ	3241	9.966	2.2	1.55	0.45	黒曜石 (腰岳?)		
	136	〃	〃	先端欠	B13	Ⅳ	3347	7.943	2.15	1.05	0.45	チャート		
	137	〃	石匙	完形	A14	Ⅱ	2142	8.218	1.9	2.5	0.4	鉄石英	横型	21
	138	〃	〃	先端欠	A12	自然			5.35	2.9	1.15	チャート	縦型	
	139	〃	石錘	完形	5 T	Ⅱ	919	11.842	2.2	1.4	0.75	黒曜石		
	140	〃	スクレイパー	半欠	B17	Ⅱ	2558	8.088	2.55	2	0.6	黒曜石 (県内)		
	141	〃	〃	完形?	C11	Ⅳ			2.9	2.4	1.15	黒曜石 (腰岳?)		
	142	〃	〃	半欠	C14	Ⅳ			2.8	1.9	1.6	珪質頁岩		
	143	〃	〃	完形?	D13	Ⅱ			2.8	1.95	1.2	珪質頁岩		
	144	〃	〃	半欠	3 T	6	745	10.732	2.6	2.3	1.25	玉髄		
	145	〃	〃	半欠	C13				2.7	1.4	0.8	黒曜石 (腰岳?)		
	146	〃	〃	半欠	A12	Ⅱ			2.6	1.65	0.6	珪質頁岩		
24	147	〃	〃	完形?	C13	Ⅱ	2329	8.178	2.45	1.3	0.6	チャート		21
	148	〃	〃	完形?	C11	I			2.35	1.65	0.7	黒曜石 (三船?)		
	149	〃	〃	完形?	C13	Ⅳ	3064	7.57	4.35	2.15	1	黒曜石 (三船?)		
	150	〃	〃	完形?	D13	Ⅱ	2786	7.954	7.6	5.8	2.2	珪質頁岩		
	151	〃	〃	完形?	C13	Ⅳ	3064	7.57	4.35	2.15	0.95	黒曜石		
	152	〃	〃	完形?	A14	礫層	4713	10.866	3.95	3.6	1.45	珪質頁岩		
	153	〃	使用痕のある剥片	半欠	B13	Ⅳ	2823	8.011	2.25	2.15	0.6	黒曜石 (腰岳)		
	154	〃	〃	半欠	5 T	Ⅲ	1547	7.906	3.2	1.9	0.95	黒曜石 (三船)		
	155	〃	〃	完形?	B14				3.15	1.3	0.4	黒曜石 (腰岳?)		
	156	〃	磨製石器	半欠	3T	8	1278	9.471	7.9	4.85	0.55	粘板岩		
25	157	〃	磨製石斧	基部欠	B12	自然			9.6	5.25	2.05	頁岩		22
	158	〃	〃	側辺欠	B 8	V	5087	9.656	14.7	2.95	2.05	頁岩		
	159	〃	打製石斧	刃部欠	C10	Ⅳ	4213	10.226	8.3	4.15	0.85	粘板岩		
26	160	〃	〃	基部欠	C10	Ⅳ下	4709	9.776	6.05	8.55	1.45	ホルンフェルス		22
	161	〃	〃	完形	B12	自然			18.4	8.7	2.3	粘板岩	Fe分付着	
27	162	〃	剥片石器	半欠	2 T	Ⅲ			9.4	7.85	1.65	安山岩		22
	163	〃	〃	半欠	2 T		1103	9.817	7.3	8.2	1.25	安山岩		
	164	〃	石錘	完形	A12	自然			6.8	5.9	2.2	安山岩		
	165	〃	〃	〃	10T	Ⅲ	1345	7.81	7.55	5.9	0.85	安山岩		
28	166	〃	磨製石器	完形?	6 T	Ⅲ	1583	7.476	14.6	9.8	3	安山岩		22
	167	〃	砥石	完形	6 T	Ⅲ			17.4	5	3.8	安山岩		
29	168	〃	石皿	完形?					15.8	15.8	7.6	安山岩		22
	169	〃	磨石	完形	8 T	I			10.6	8.19	4.8	砂岩		
	170	〃	磨製石鏃	先脚欠	C10	Ⅳ下	4958	9.966	3.3	2.3	0.45	頁岩	弥生時代	

第14表 出土遺物観察表(13)

挿図	番号	種類	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石 材	備 考	図版
69	408	石器	砥石	半欠	B 9	礫①	5019	10.346	11.8	8.7	3.1	安山岩	礫集中遺構1	
	409	〃	磨石	一部欠	A 8	礫①	5000	10.566	9.6	5.9	3.4	安山岩	〃	
	410	石製品	線刻礫	完形	C 9	礫②	5198	9.82	4.9	5.9	2.4	安山岩	〃	
	420	石器	敲石	〃	C 11	礫②	5164	9.27	7.9	7.7	3.9	安山岩	礫集中遺構2	
71	440	石製品	軽石製品	〃	B 9	礫②	S-73		5.85	3.1	1.5	軽石	礫集中遺構1	
	441	〃	〃	〃	A 8	礫①	4997	10.316	7.8	5.85	4.35	軽石	〃	
	442	〃	〃	〃	B 9	礫②	S-41		9.3	8.7	6.45	軽石	〃	
	443	〃	〃	一部欠	A 8	礫①	4994	10.496	9.4	7.75	4.25	軽石	〃	
72	444	〃	〃	〃	B 9	礫②	S-55		10.65	8.25	5.25	軽石	〃	
	445	〃	〃	〃	B 9	礫①	4997	10.316	8.95	6.85	2.9	軽石	〃	
	446	〃	〃	〃	B 9	礫②	S-50		11.35	7.3	5.05	軽石	〃	
73	447	〃	〃	〃	B 9	礫①	5029	10.496	15	10	4.6	軽石	〃	
74	448	〃	〃	〃	B 9	礫②	S-58		13.3	16.4	8.4	軽石	〃	
75	449	〃	〃	〃	B 9	礫②	S-44		13	9	8.3	軽石	〃	
81	514	〃	墓石塔身	〃	C 11	擾乱			59.5	24	21	溶結凝灰岩	「新納仲右衛門」銘あり	32

## 第V章 発掘調査のまとめ

高井田遺跡の発掘調査では、古代から中・近世を中心として多くの資料を得ることができた。加治木町内で最古の創建と伝えられる春日神社が隣接していたり、かつて真福寺という寺があったという言い伝えもあり、当初から寺社関係の情報が得られるのではとの期待があった。

本章では、高井田遺跡の地で繰り広げられた歴史の数々を取り上げ、発掘調査の成果およびそこから導き出される問題点・課題を整理してまとめとしたい。

### 第1節 縄文～古墳時代

かつて、本遺跡の近接地域で埋蔵文化財の発掘調査が行われたことが2回あった。最近の例では1992(平成4)年の山元窯跡の調査<sup>1)</sup>で、詳細は第II章第2節で述べた。もう1例は、1971(昭和46)年に九州縦貫自動車道の建設に伴って調査された建馬場遺跡<sup>2)</sup>である。いずれも網掛川を挟んで高井田遺跡と向かい合う小台地上に立地する遺跡である。

建馬場遺跡の報告によると、「台地周縁部に位置する遺跡は、洪水により、殆ど破壊されていて、ただ僅かに、第III地区において、その痕跡をとどめているにすぎない」とし、本調査の必要性を否定している。ただし、遺物については弥生土器や平安時代の土師器等が出土したと記録されている。

このような結果を意識しながらの確認調査であったが、本遺跡地においても台地のベースとなる層は、流堆積によるものであることが判明した。ただし、この流堆積層からは縄文時代の遺物が多く出土した。当然ローリングを受けたものが多く、図化できない資料も多かったが、前期の曾畑式土器から晩期の入佐式や黒川式土器など、各時期の土器が出土した。

特に多く出土したのが後期中葉の土器であった。中でも注目されるのが鐘崎式、北久根山式、辛川式、西平式土器のいわゆる磨消縄文系土器である。在地の市来式土器とともに出土するこの状況は、同じ町内で約1.3km離れたところに位置する干迫遺跡<sup>3)</sup>を髣髴とさせるもので、当時のこの一帯の様子を知る上で貴重な資料となった。辛川式土器などは県内でも出土例は多くない。河川2本を挟んだ両遺跡から出土するこの状況をどう捉えたらいいのか?かなり広範囲にわたる遺跡の在り方を想定する必要があるだろう。

石器も比較的多種の資料が出土したが、当然ローリングを激しく受けたものが多かった。石鏃やスクレイパーには佐賀県の腰岳産では?と考えられる良質の黒曜石もあった。石錘などの出土は、河川に挟まれ、海岸部にも近いという遺跡の立地を考えると興味深い資料である。

弥生時代中期や古墳時代の遺物も少量ではあるが出土している。多くは古代の包含層中からの出土であることから、遺跡の北側に本来の位置を想定できよう。

### 第2節 古代

本遺跡の調査で最も充実した情報を提供したのが古代に関する調査成果であった。つまり、5棟の掘立柱建物跡や礫敷溝状遺構等と須恵器・土師器等の発見である。いくつか取り上げて整理してみたい。

## (1) 掘立柱建物跡

古代の掘立柱建物跡は5棟検出できた。建物の向きがおおむね東西南北の軸に沿った状態で検出された。本文中（P47）でも述べたが、本遺構の検出に関しては、ある種のショックを感じざるを得ない状況であった。

遺跡が立地している台地は、流堆積がベースとなっていることは前述のとおりである。つまり、ほぼ砂層と礫層が絡んだ層によって形成されていた。今回、建物跡が検出された区域も砂層がベースとなっていた。普段乾燥しているときは、ほとんど白色を呈している砂層であるが、ひとたび湿り気を帯びると黄茶褐色に変色するというその性質が遺構の発見につながった。具体的にいうと、短時間のいわゆるスコール的な雨の後、夏特有の強い日差しを浴び、再び乾燥するほんの数十分の間に起こる色調の変化を把握することで遺構の存在が確認できたのである。砂地を調査する際の教訓として今後生かしていかなければならない事例であった。危うくすべての建物を見逃すところであったということを見ると遺構検出の難しさを改めて痛感した。

建物は2間×3間、1間×2間、1間×1間がベースとなって構成されている。それぞれ2, 2, 1棟検出されたが、1号と2号、3号と4号は近接していることから時間差があるものと考えられる。また、6号のみ若干建物の軸が異なっている。中世～近世のものと考えられる礫集中遺構1を取り除いた跡に検出されたことも関係あるかもしれないが、ピット内に礫が入っているものもあった。根石的な役割があるかどうかについては、礫が床から浮いた状態のものが多いため不明である。

溝状遺構や土坑も含めた遺構全体の有機的関係について詳細は語れないが、遺跡本体は北側に大きく広がっている可能性が高い。つまり、今回の調査域は遺跡全体から見ると南端のほんの一部である可能性が高いのである。そのような視点からの解釈が必要であろう。

## (2) 礫敷溝状遺構

本遺跡の成果で注目されるものに、古代の礫敷溝状遺構がある。この遺構は中世～近世のものと考えられる礫集中遺構1の下位にあること、埋土内や底面で9世紀代と考えられる須恵器が出土することから、古代のものと推定した。もちろん遺構内に中世以降の遺物は含まれていない。遺構の詳細については、第Ⅲ章第3節4-④に述べたが、A10区からD8区にかけて検出され、全長約24.5m、幅1～2mを測る遺構である。同時代の同様な遺構は県内にも例がなく、その性格が注目される場所である。いくつかの可能性について整理してみたい。

溝内の埋土からは明瞭な砂層や粘土層は検出されなかった。しかし、周辺より窪められた状況であることや傾斜がみられることから、最低雨天時には水が流れたものと考えられる。そこで考えられるのが①礫敷の通路、②単なる排水溝、③遣り水的溝などがあげられる。通路や排水溝とした場合、これほどまでに礫を敷く必要があるのかという疑問が出てくる。途中で2か所ほど幅に変化がある点で、溜め枘的な機能も想定でき、水に関する施設である可能性が高いと考えられるのである。

また、1か所段差を持つ部分がある。しかも周囲より大きな礫（人頭大）を数個組み合わせたもので、丁寧なつくりで仕上げている。これらのことを考慮すると遣り水的な機能をもった溝である可能性も出てくると考えられる。

時代が平安ということもあり、「曲水の宴」を催したのでは？との見方もある。今回の調査でそれを確実に裏付けるような資料はない。第Ⅳ章にこの遺構の性格についても検討していただい

た永山修一氏と松尾千歳氏の論考を掲載した。本来この遺構は北側へ延びていたものと考えられることから、遺跡の立地する台地の中央部付近に謎を解く鍵が残されている可能性が高い。

ところで、B9区の遺構近くで、クスノキと同定された木材が出土した（第45図、第IV章5参照）。これは中世～近世期のものと考えられる礫集中遺構1を除去した後に発見したものであるが、詳細な時期については不明である。クスノキという樹種を考えると、神社との関係も考えられよう。

### (3) 遺物について

古代の遺物として9世紀半ばごろから後半を中心とした時期の土師器・須恵器が多く出土した。土師器の中のいわゆる黒色土器も抽出して作成したのが第47図（須恵器）、第59図（土師器）、第62図（黒色土器）の出土分布図である。これらを見ると概ね同様な分布を示しているが、場所によって出土量が多少異なっていることがわかる。

まず共通していえることは、いずれもC13、B13、B14、A14区に集中して出土したということである。この集中域の東側は約2mの段差を持つ小台地となっている。しかも、出土遺物は少ない。これは古代の包含層が削平されているためで、包含層が若干残るB～C-10～11区付近には須恵器・土師器がやや集中して出土しているのである。先に述べた集中域の遺物はローリングも受けた状態であることや、A～B-12～13区には自然流路の跡も検出されている。この流路の行く末がまさにその遺物集中域であることから、多くの遺物が小台地上からの流れ込みと考えられるのである。

注目されるのは、少ないながらも小台地上で出土する土師器・須恵器に対し、黒色土器の小台地上での出土は極めて少ないという状況である。今回調査した小台地上には遺構が集中して検出されたことを考慮すると、遺構群と黒色土器との関係を検討する上で興味深い事実といえよう。

今回は1点のみであるが、「之」と書かれた墨書土器も出土した。自然流路内からの出土であることから、調査地北東側からの流れ込みと考えられる。

ところで、黒色土器の中に特色ある一群が目についた。第63図に示した399～402の椀である。これは「異なる素地を組み合わせた」<sup>4)</sup>もので、高台部分のみ赤茶褐色の色調を呈する黒色土器である。4点図示したが、個体としてはあと小片で4点出土している。偶然の産物ではない。高台断面も同色を呈していることから、当初から色調の違いを意識した器であることは間違いない。しかも外面は黄白色、内面は黒色である。つまり、「三色土師器」ということになる。どのような使われ方をしたものなのか注目される資料である<sup>5)</sup>。

## 第3節 中世～近世について

この時期のものとしては、中世の掘立柱建物跡1棟、中世～近世の所産と考えられる2か所の礫集中遺構と、多くの陶磁器類をはじめとする遺物が発見された。いくつか紹介したい。

### (1) 掘立柱建物跡

中世の掘立柱建物跡がA12区で1棟検出された。1間×2間を基本とする建物跡であるが、西側の桁中央の柱穴は検出できなかった。つまり西側に「コ」字状に開く柱配置を示す建物として検出された。ちなみに東側の桁中央柱穴内からは、糸切り底の土師器坏が出土した。しかも、この坏は口縁部がキャリパー状に大きく内湾するという特色を持ち、出土状況とともに注目される事例である（第IV章に上床真氏の関係論考あり）。規模の小ささや神社に隣接した土地であると

ということから祠的な建物である可能性もあろう。

## (2) 礫集中遺構

拳大の礫を多量に集めて置かれた遺構が2か所検出された。これらはいずれも後世の削平を受けており、一部のみの検出であった。1号としたものはB9区を中心として検出されたもので、略三角形に確認された。北側のコーナーを考えると、本来方形を基調とした遺構であった可能性もある。遺構とした理由は本文中（P86）に譲るとして、ここでは遺構の性格について少し触れておきたい。

この特異な遺構を理解する鍵として2つのポイントをあげることができる。1つはこの遺構が神社に隣接した土地にあるということである。後述するように寺の存在を伝える情報もある。とにかくこの一帯が宗教的空間あるいはその隣接地であったことは間違いない。もう1つは、遺構内から軽石加工品や土馬（破片）が出土するということである。これらのことを考慮すると、宗教的・祭祀的意味合いの強い遺構である可能性が高いといえよう。賽の河原的な場所として何らかの儀式を行った場所の可能性もある。今後の類例を待ちたい。

## (3) 真福寺と墓石

今回の調査では、19世紀半ばに編纂された『三国名勝図会』<sup>6)</sup>に描きそして書かれている「真福寺」の存在について、何らかの情報が得られればという期待を持っていた（第92図）。何度も述べるように、遺跡に隣接して春日神社が現存する。『三国名勝図会』では「カスガノヤシロ」として紹介され、それを描いた鳥瞰図に「真福寺」の文字が記されているのである。しかし、このとき既に寺は存在しない。いわゆる廃仏毀釈時の廃止ではないのである。

『加治木郷土誌』<sup>7)</sup>によると、真福寺は「元来、真言宗大乘院の末寺で、萩原にあったが、その後、高井田若宮神社の東脇に移転し、文化年間破壊したので、日本山の蘭桂庵寺跡へ移された。そして文化十二年十二月、改宗して寿国寺の末寺となった」とされている。つまり寺は春日神社境内にある若宮神社の東脇にあったが、19世紀初頭に日本山へ移設されたということになる。今回の調査で寺の存在を想定できそうな痕跡は検出できなかった。しかし、廃棄された墓石（塔身のみ）が発見されたことで、寺の実在を示す有力な情報を得ることとなった。しかも幸いにも墓石には、系図も残る「新納仲右衛門」「藤原時淳」なる人物（1675年生）の銘が刻まれていた<sup>8)</sup>。加治木の有力武家であった「新納家」は代々「藤原」姓を名乗っていた。春日神社は藤原氏の氏神である。これらの関係は偶然ではあるまい。

現在の「新納家」墓地は、同じ加治木町内にある長年寺墓地にある。ところが、多くの墓石がある中で、17世紀まで遡れる墓石はないのである。確認できるのは文政年間（1818—1830）のものが最古である。そこで考えられるのが、「新納家」墓地は真福寺から長年寺墓地へある時期に移動したのではないかという推測である。その「ある時期」というのが寺の移設期とされる19世紀初頭なのかは確定できないが、なんらかの要因で真福寺が廃止され、併設していた墓地も同時に消滅し、たまたま廃棄された墓石の一つが今回の調査で出土したというシナリオである。ただし、廃寺となった要因は何なのか？なぜ1点だけ出土したのか？他の墓石はどこにあるのか？等々疑問点も多く残る。墓石塔身正面の銘は削り取られていた。魂を抜かれたこの状況は、単に墓地を移動した際のものなのか？何らかの抗争によるものなのか？詳細は明らかでない。今のと

ころ後者を積極的に支持する要素は確認できていない。「水」とのかかわりが多い土地柄であることから、自然災害に遭遇したか、それを避けるために廃寺となった可能性もあろう。

とにかく、1点の遺物が多くの情報をもたらしてくれる例として、また歴史的事象の確認を考古学的に検証できるという例としても極めて貴重な発見となった。合わせて、廃仏毀釈で徹底的に破壊されつくした鹿児島県の寺院であるが、考古学的調査によってまだまだ多くの情報を得ることができるということを改めて痛感した。表面上は破壊されていても埋蔵文化財として残っているのである。

ところで、この墓石には落書きと考えられる「春」の刻字があった(第81,82図)。春日神社の「春」であろうか?この暗紫色の凝灰岩は、町内の桃木野集落周辺で切り出されたいわゆる「桃木野石」と呼ばれるもので、比較的安易に刻むことのできる石である。ほかにもみられるいくつかの文字とともに興味深い例である。

#### 第4節 胎土中みられる鉱物について

本報告を作成するにあたり、土器の胎土について実体顕微鏡による鉱物観察を行った。遺物観察表(P130~140)をみればわかるように、石英・長石・角閃石等に加え、火山ガラスのチェックを行った。その結果、多くの土器の中に火山ガラスが含まれていることがわかった<sup>9)</sup>。大きく無色透明から白色半透明のものと黒褐色や紫色を帯びたものの2種類に分けることができた。観察表ではそれぞれ「火W」「火B」として項目を設けた。

特に縄文土器の市来式土器、西平式土器、古墳時代の成川式土器、土師器の椀や坏類にみられた。多くは電球の破片のように湾曲した形の「バブルウォール型」の「火W」が多かったが、「火B」も少なくなかった。シラスは「火W」、アカホヤは「火W」に若干「火B」が含まれる、阿蘇山起源のものは「火B」が多い、といった要素を考慮すると、胎土に含まれる鉱物をチェックすることが、土器そのものの出自を検討する際の有効な手段の一つとなり得る可能性があり、今後前向きに追究していきたい課題である。ただし、肉眼観察では不可能であることを付け加えておきたい。

#### 【註・文献】

- 1 加治木町教育委員会 1995 「山元古窯跡」『加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
- 2 鹿児島県教育委員会 1972 『九州高速道路鹿児島線埋蔵文化財調査概要』
- 3 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997 「干迫」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(22)
- 4 本田道輝 2000 「異なる素地を組み合わせで作られた土器」『大河』第7号 大河同人
- 5 同様な例として計志加里遺跡(鹿児島県川内市)の黒色土器の椀、小倉畑遺跡(同県始良町)の土師器椀がある。宮田栄二氏、寺原徹氏のご教示による。
- 6 南日本出版文化協会 1966 復刻『三国名勝図会』
- 7 加治木郷土誌編纂委員会 1992 改訂版『加治木郷土誌』
- 8 鹿児島県歴史資料センター黎明館 1989 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺諸氏系譜1』
- 9 野尻湖火山灰グループ 1989 「火山灰の手引き」地学団体研究会  
成尾英仁氏、宮田栄二氏に多くのご教示を得た。



帖佐人形（狛犬）

（下鶴 弘氏提供）



第92図 「三国名勝図会」にみる春日神社



## Summary of Archaeological Research in Takaida site

Takaida site at Kida in Kajiki town of Aira district in Kagoshima prefecture was excavated by Kagoshima prefectural Archaeological center before a construction of Kajiki bypass in national road No.10. After a test excavation done in 2000, a regular excavation of Takaida site was done from May to July in 2001. The results of this excavation are in next.

### Jomon era

Relics excavated from the sands and pebbles layer which is a basic layer of terrace on which this site is are dates from First period to Final period in Jomon era. Most of them are of Late period in Jomon era, and the main ones are Ichiki-type potteries, which occupy about 80% of all potteries. But, it is supposed that these relics flowed from above, when the sands and pebbles flowed and were laid. They were removed from Northern place where they belonged originally. Because, many of relics were rubbed through rolling.

### Yayoi era-Kofun era

There are only articles like potteries, are no structural remain of Jomon era, Yayoi era, and Kofun era excavated in this site. Also relics of Yayoi era and Kofun era were rubbed through rolling. Most of ones were excavated from a layer of Ancient times. This situation shows that these relics were removed far from the place where they belonged originally.

### Ancient times

The main relics which are the most informative of all researched this time belong to Ancient times (8th-9th century). Besides many Hazi potteries and Sue potteries, 3 pits, one ditch covered with pebbles, and 4 ditches. Particularly, a ditch covered with pebbles of which width 1-2.5m and length 25m is so characteristic for us to give attention about what it is. It is elaborate, bow shaped, and possible to extend to north from an area excavated, and has a step in its part and contrast between a wide part and a narrow part.

### Middle ages-Edo era

Beside many ceramics, there are some structural remains excavated. Pillars' pits of one house were excavated to be identified to belong to Middle ages, because a bowl cut its bottom with a string was found at the bottom of a pit. We found 2

accumulations of pebbles supposed to belong to the times from Middle ages to Edo era. In one of them, artefacts made of pumice and a pebble carved a line were found, and this one is so noticeable.

Many of ceramics are Satsumayaki produced in home kilens, for example Yamamoto kilen, Ryumonji kilen, and Genryuin kilen.

Last we mention the relationship between this site and Kasuga-shrine adjacent to the south side of this site. It has been handed down by tradition that Kasuga-shrine was established in the beginning of 11th century. It is Known to be the earliest shrine in Kajiki town. In Sangokumeisyouzue drawn in Edo era, Kasuga-shrine are drawn in a bird' s eye view. It is noticeable that Shinpuku-temple on the north of Kasuga-shrine is documented in Sangokumeisyouzue. The era excavated this time is just on the north of Kasuga-shrine, so we researched this site, assuming that relics relating with Shinpuku-temple would be found.

Through this research, we couldn' t recognize the structural remain to indicate the existence of Shinpuku-temple, but the tomb stone carved the name of Niiro Nakaemon (Fujiwarano Tokiatsu) who lived in 17th century was excavated. This fact raises the possibility of the existence of Shinpuku-temple. We need to reconsider pebbles' accumulations and houses' pits which aren' t identified as something relating with Kasuga-shrine.

写真図版  
(PLATE)



礫集中遺構 1



礫敷溝状遺構



高井田遺跡遠景  
(東南から)



遺跡周辺遠景 1



遺跡周辺遠景 2



赤色高台をもつ土師器



磔敷溝状遺構近景



土坑 1 (古代)



磔集中遺構 2 (中世)



土師器出土状況  
(掘立柱建物跡6のP4)



確認調査風景 (2トレンチ)



本調査風景 (B14区付近)



蔵王岳、加治木城跡をのぞむ



高井田遺跡遠景  
(中央の森は春日神社)



加治木五山、吉野台地をのぞむ

高井田遺跡遠景 (さえずりの森展望所から)





2 トレンチ



3 トレンチ

3 トレンチ



3 トレンチ



確認調査風景 (2, 3 トレンチ)



西から



南から



東から

確認調査風景：礫集中遺構 1 検出状況（3 トレンチ）



2 トレンチ



4 トレンチ

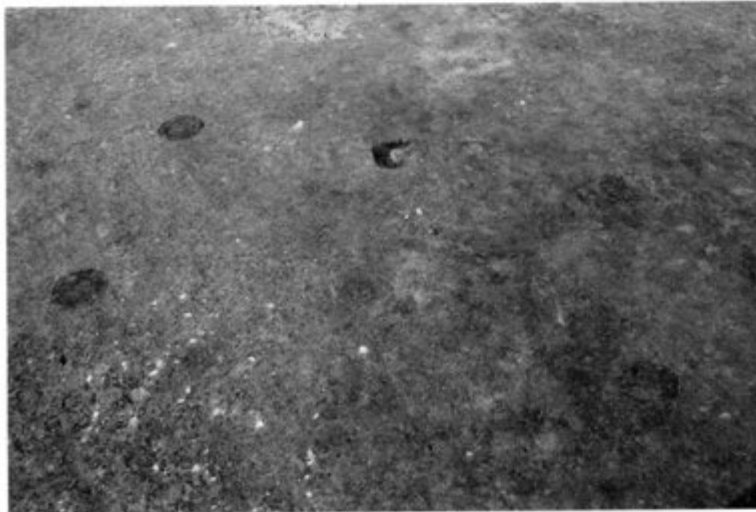


7 トレンチ

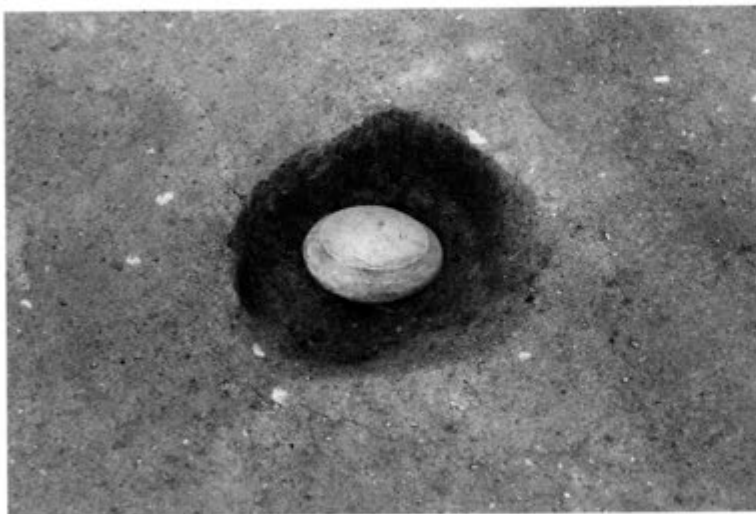
確認調査風景 (2, 4, 7 トレンチ)



掘立柱建物跡 3

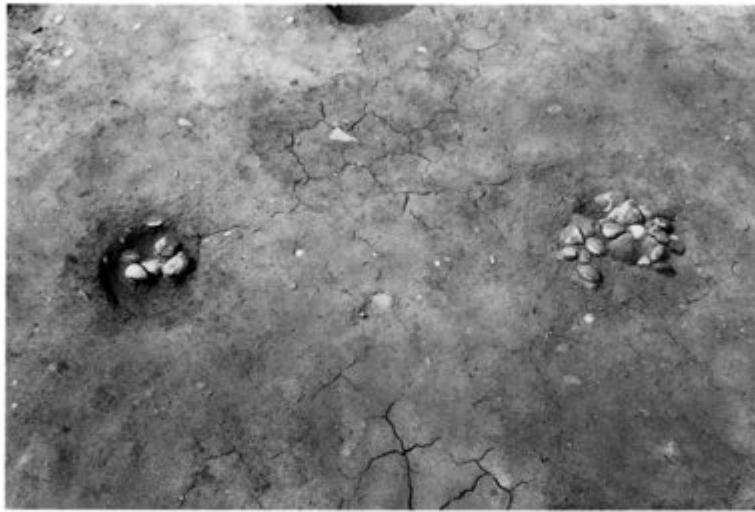


掘立柱建物跡 6

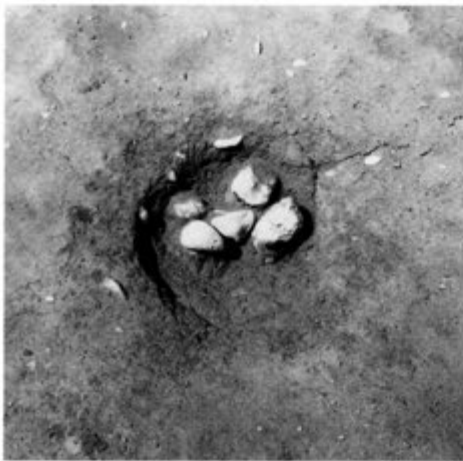


掘立柱建物跡 6  
柱穴内出土の土師器

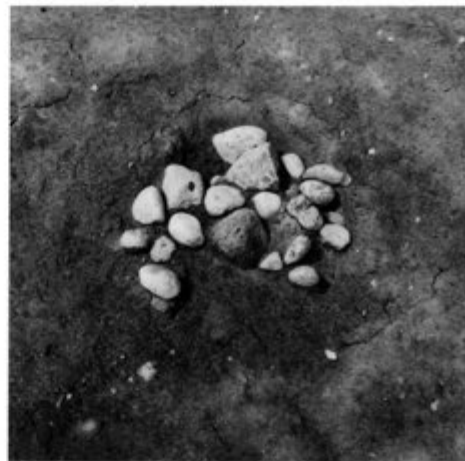
掘立柱建物跡検出状況



掘立柱建物跡5の柱穴 (P5とP6)



P5



P6



土坑1 (埋土に焼土を含む)

掘立柱建物跡検出状況ほか



北から



北東から

北から



北から（最大幅部分）



礫敷溝状遺構検出状況 1



埋土状況 (B 9区)



検出状況 (B 9区)



検出状況 (B 9区)

礫敷溝状遺構検出状況 2



礫敷溝状遺構と礫集中遺構 1 の検出状況



礫敷溝状遺構完掘状況



礫集中遺構 2 の上段部 (左) と下段部 (右)





北東から



東から



南東から

礫集中遺構 1 検出状況



社殿



若宮大明神



天明6(1786)年銘のある  
手水場

春日神社境内の様子



春日神社境内から  
表参道をのぞむ



墓石塔身出土状況  
新納仲右衛門銘あり



長年寺墓地内にある  
新納家の古石塔群

長年寺墓地の古石塔群ほか



実測委託業務風景



礫集中遺構実測風景



見学者への説明

礫集中遺構実測風景ほか



2



3



4



9



11



8



13



19

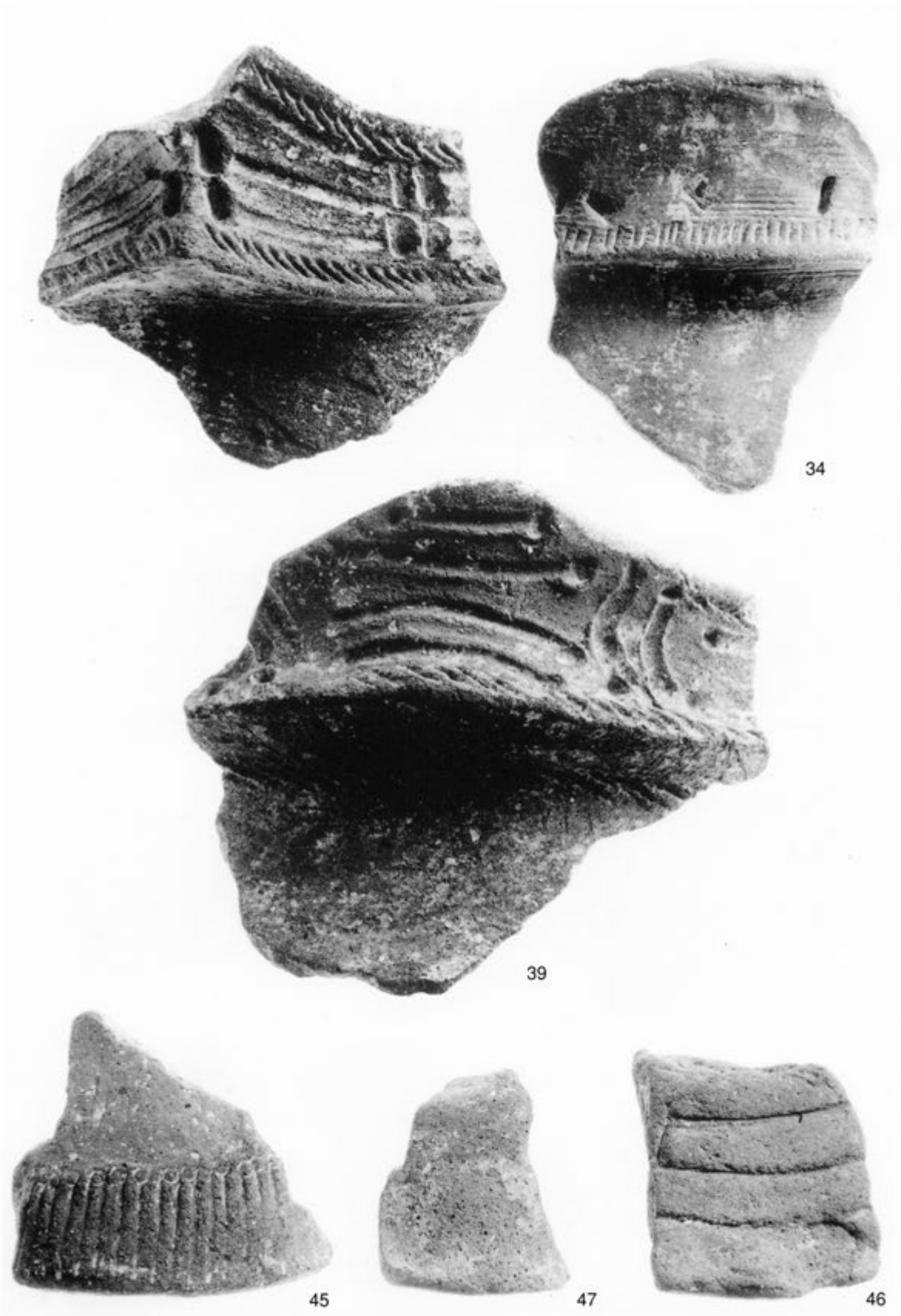


25

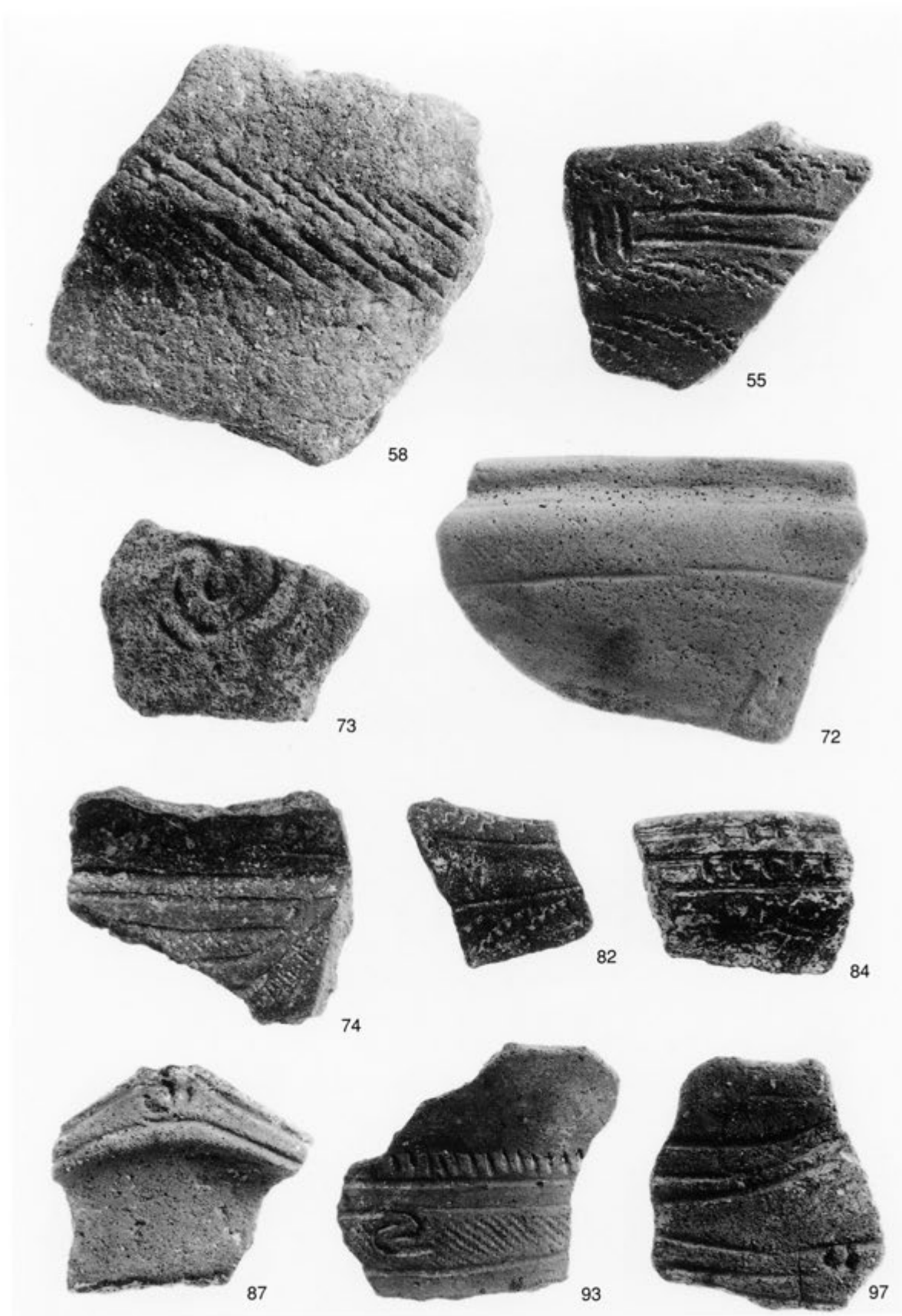


31

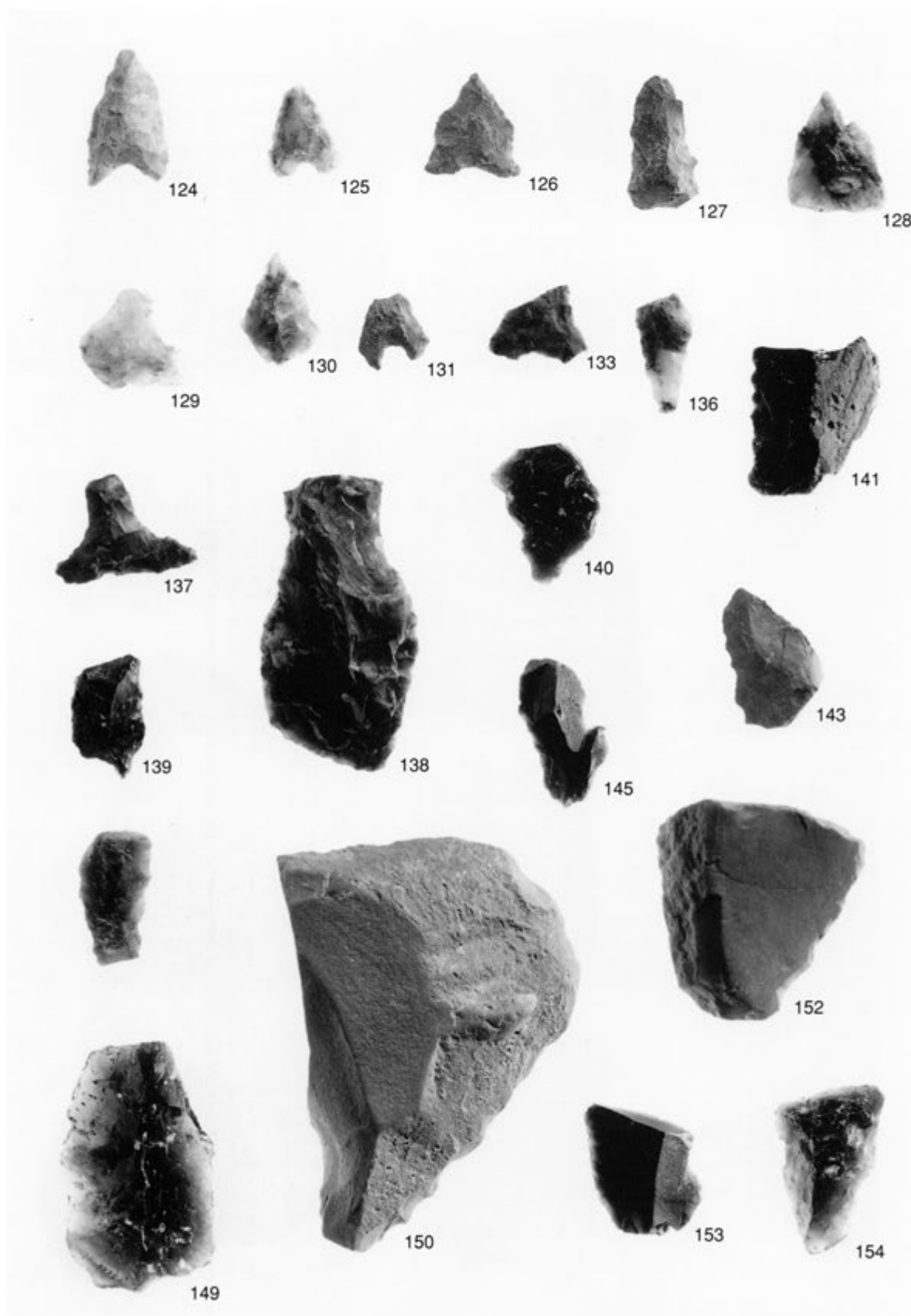
繩文土器 1



繩文土器 2

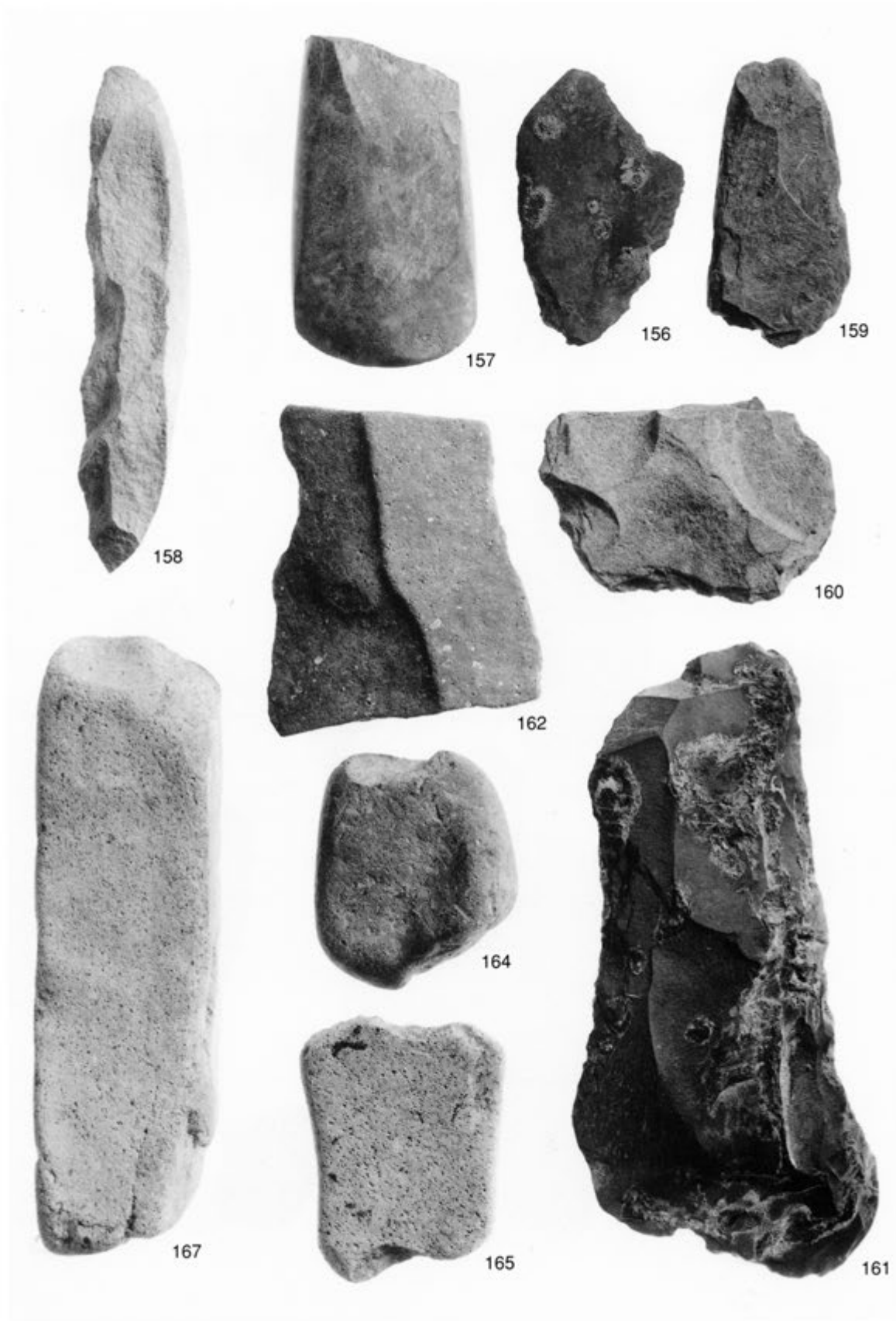


縄文土器 3

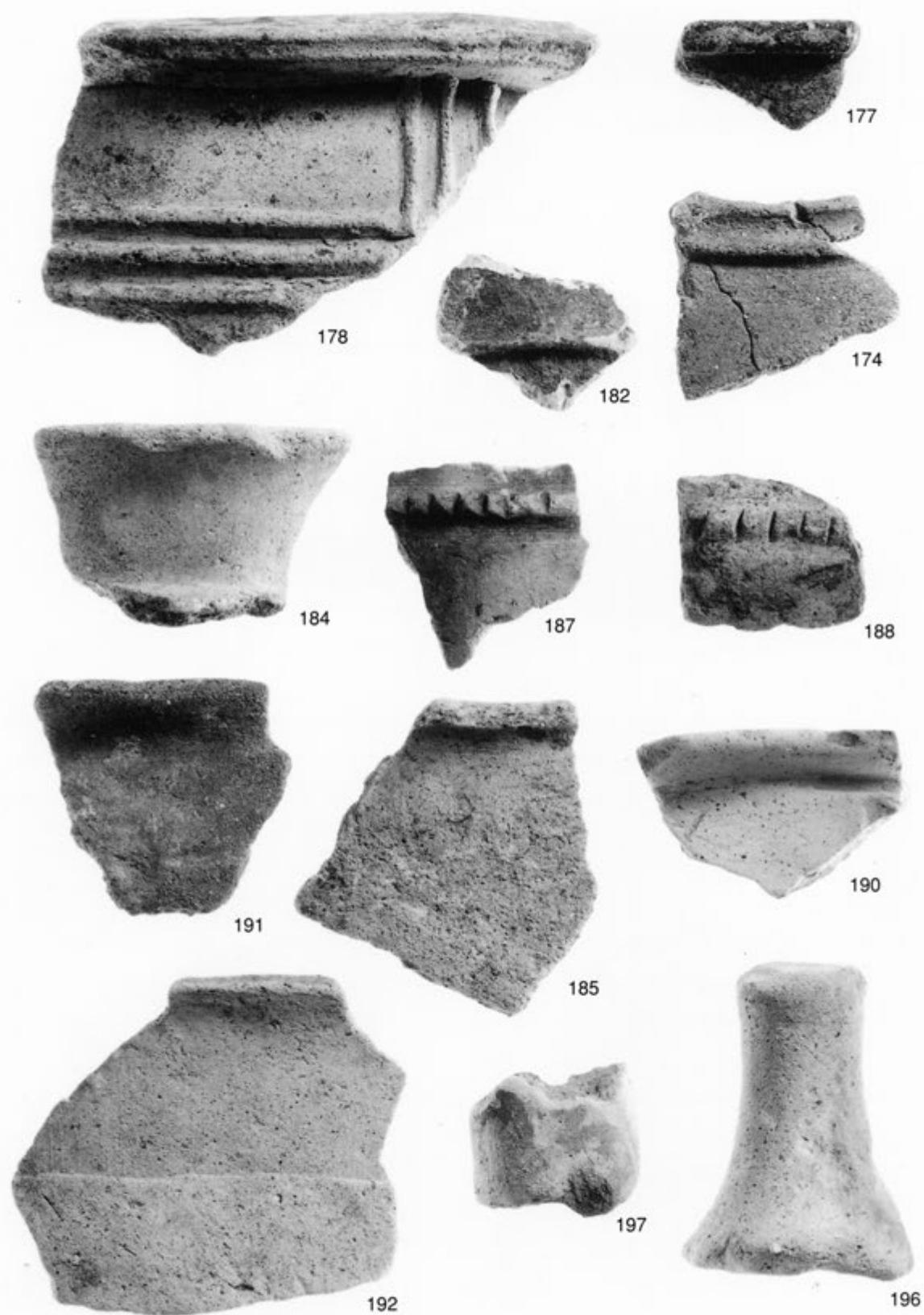


石器 1





石器 2



弥生土器・成川式土器



442



443

礫集中遺構 1 内出土遺物：軽石加工品



371



373



398



397



389



376

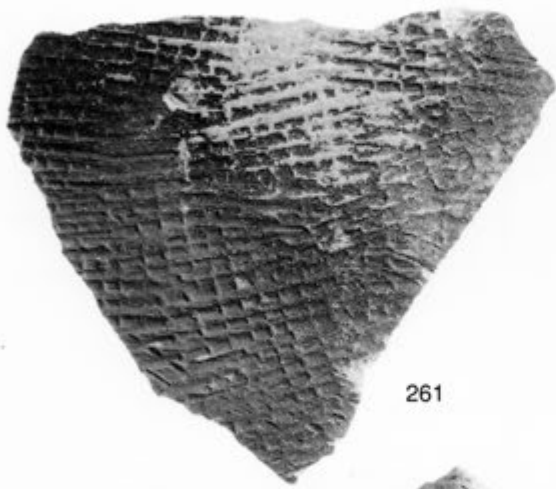


407



438

土師器・黒色土器・陶器



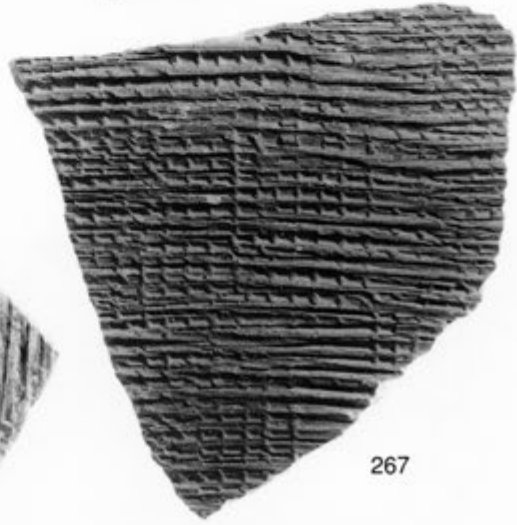
261



291



252



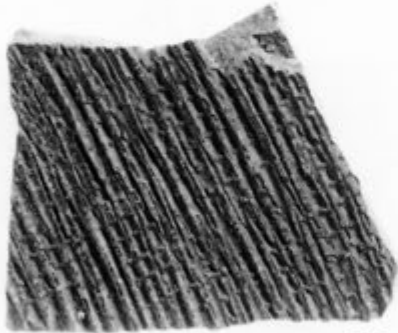
267



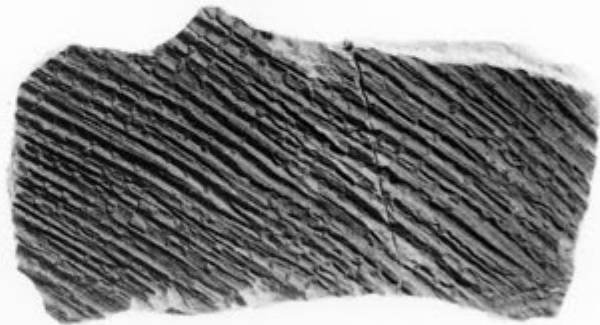
270



265

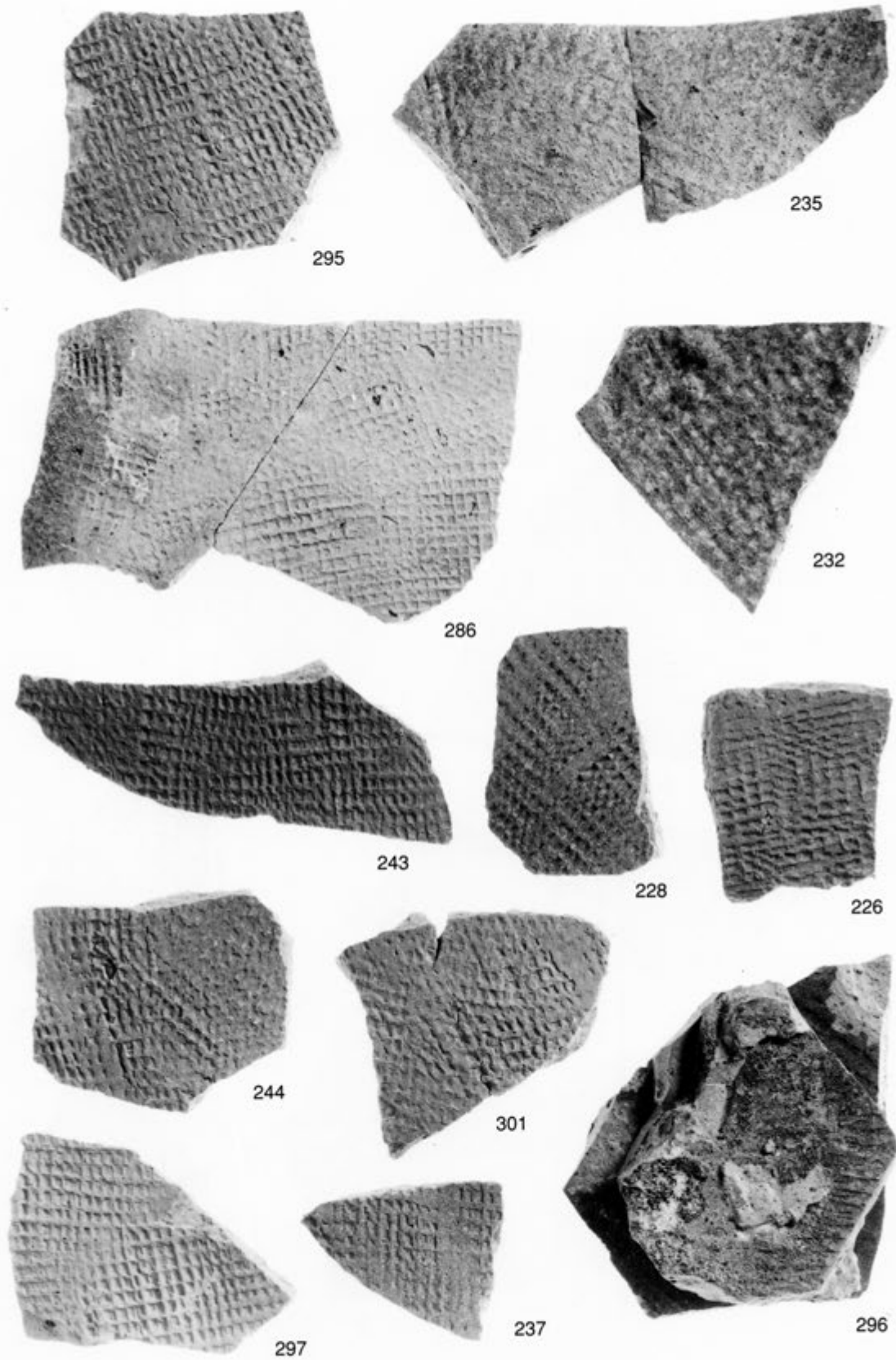


292

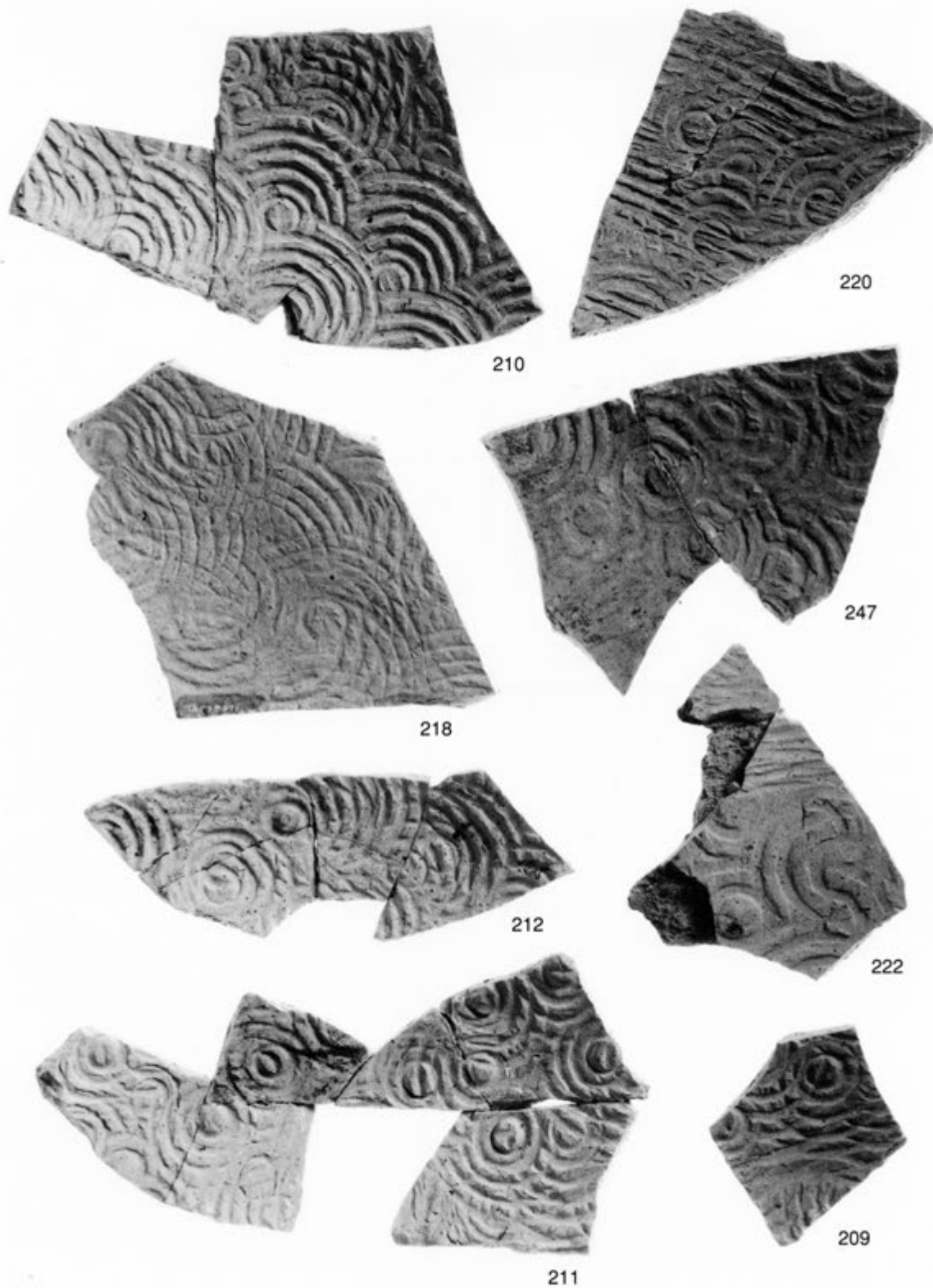


266

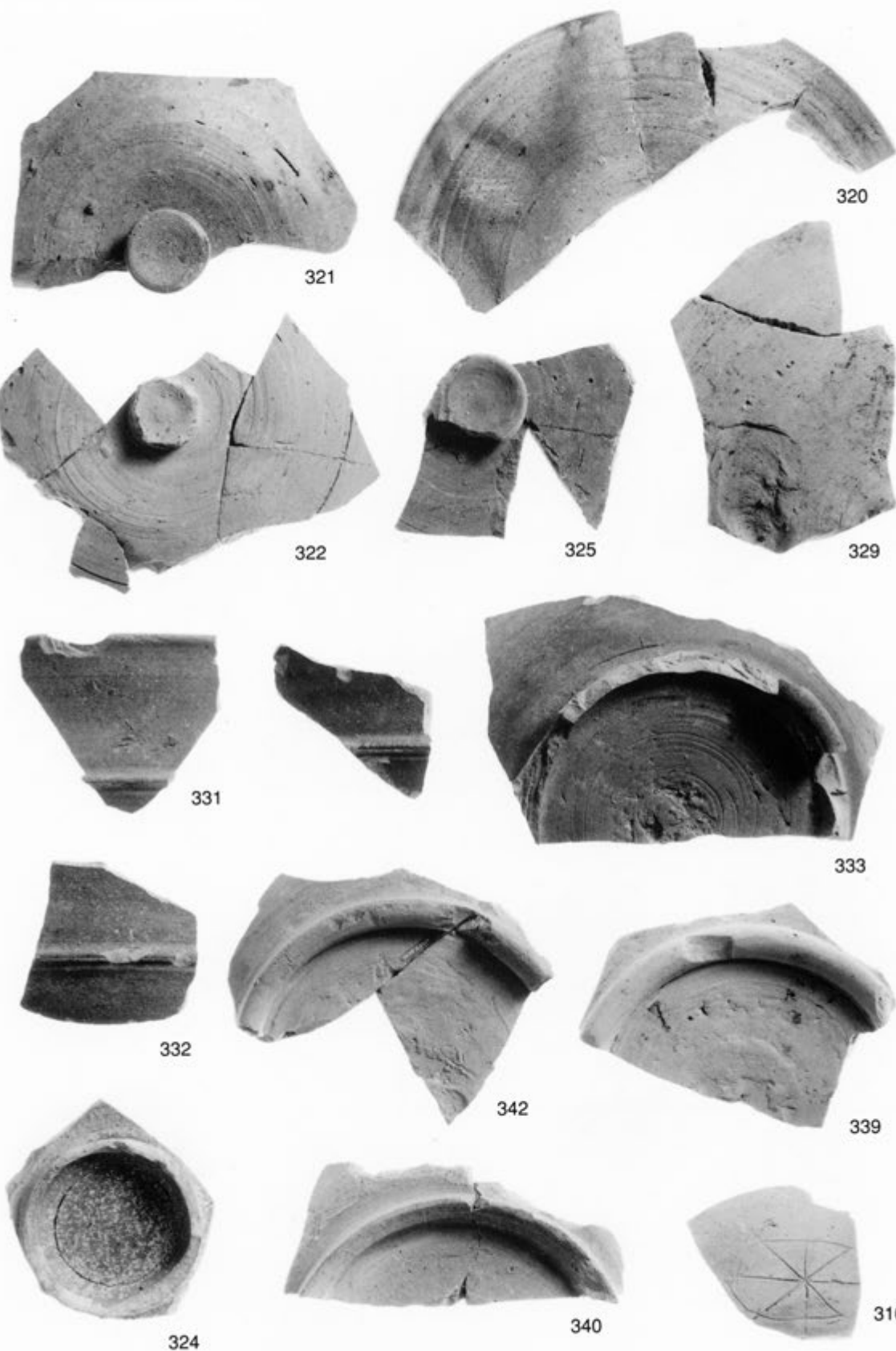
須惠器 1



須恵器 2

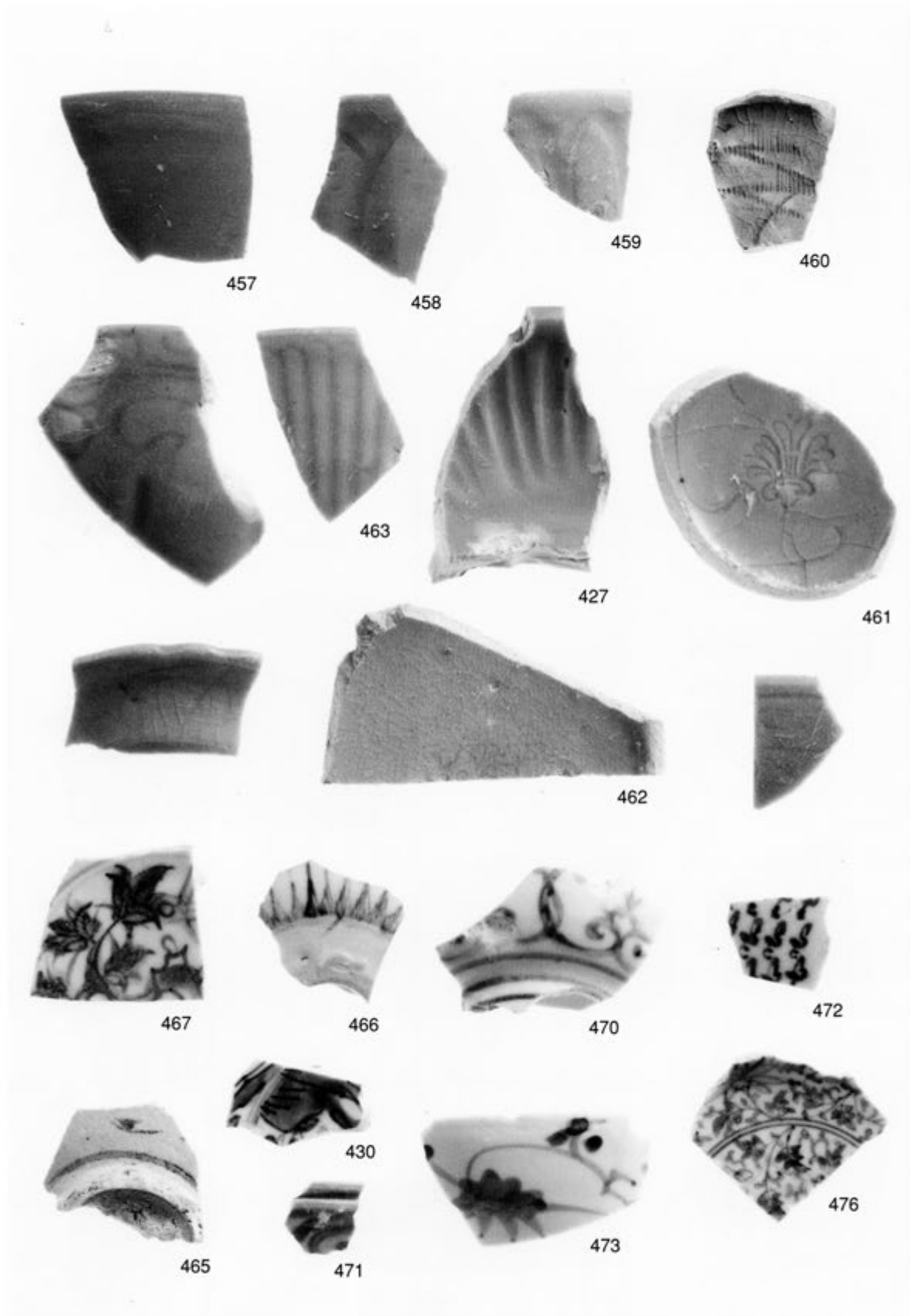


須惠器 3

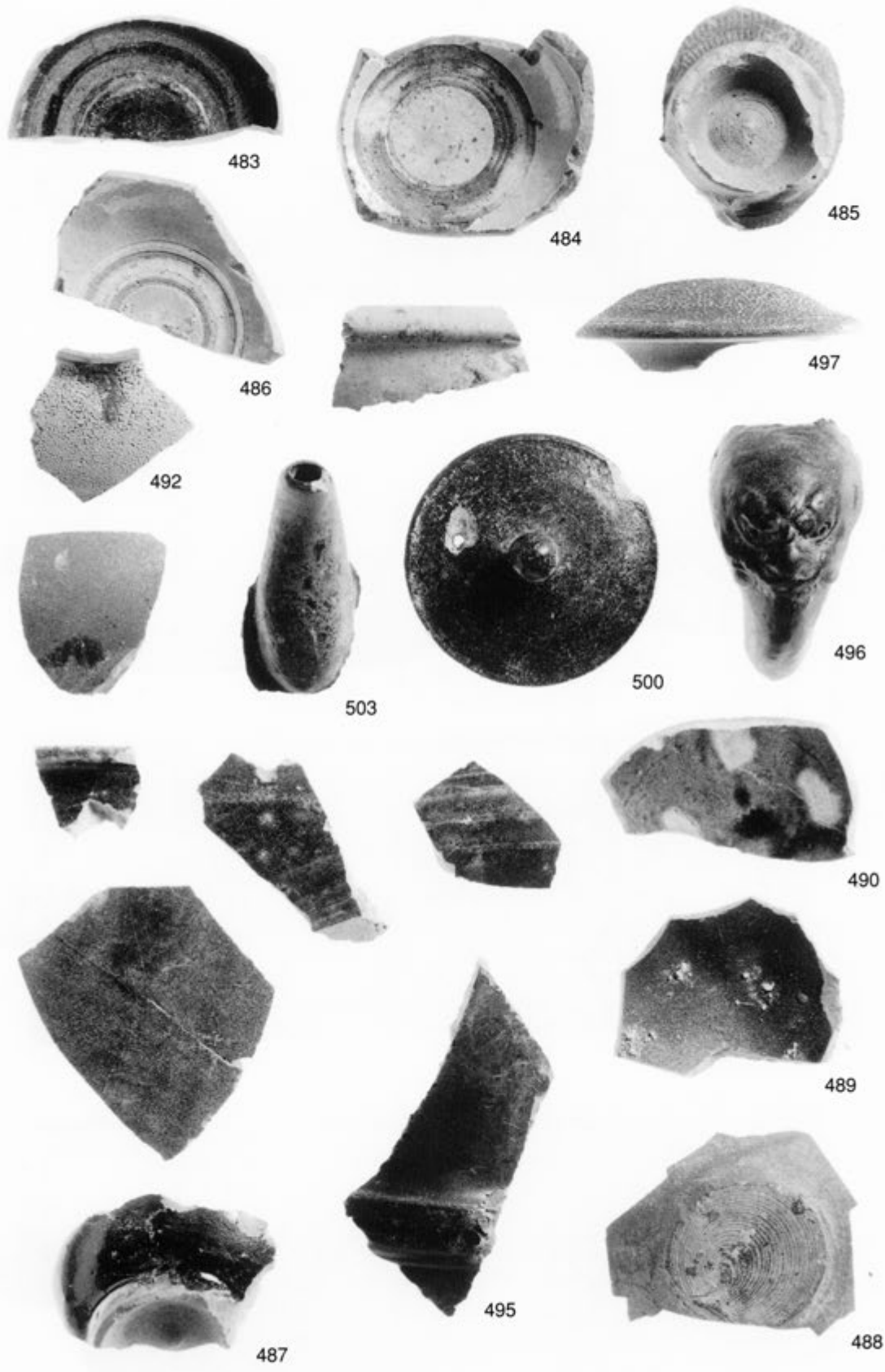


須恵器 4





青磁・染付



薩摩焼



墓石塔身：「新納仲衛門」銘



本調査現地スタッフ

## あ と が き

土地にはそれぞれ履歴がある。高井田の地にもまた幾重にも歴史が刻まれてきたということが明らかとなった。人の手によるもの、自然の力によるもの、様々である。土地は現在生きている人びとだけのものではない。これまで生きてきた人びとのものでもあったし、これから生きていく人びとの舞台でもあるのだ。新しい道路としてスタートした高井田の地が、人びとにとってポジティブな存在となることを祈念したい。

最後に、高井田遺跡発掘調査及び報告書作成にかかわった全ての方々に感謝します。

---

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (35)  
国道10号加治木バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

TAKA I DA SITE  
高 井 田 遺 跡

発行年月 2002(平成14)年3月  
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地  
☎0995-65-8787  
印 刷 株式会社 朝日印刷  
〒890-0055 鹿児島市上荒田町854-1  
☎099-251-2191

---

